
空からの贈り物

ライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空からの贈り物

【Nコード】

N5024L

【作者名】

ライト

【あらすじ】

評価・感想よろしく願います。——もし、一つだけなんでも願いが叶うとしたら、その願いは誰に使いますか？自分？それとも、あなたの一番大切な人？そして、それはどんな願いですか？小さな島に住んでいる高校生の誠は、皆一生に一度だけどんな願いでも一つだけ叶えることができる不思議な力『スカイ』で、あらゆる願望と過去、そして想いを知っていく。スカイの意味とは何か……。そして、誠が叶えた願いとは……。全五章感動の現代ファンタジー恋愛小説。

プロローグ

もし、一つだけなんでも願いが叶うとしたら、その願いは誰に使いますか？

自分？ それとも、あなたの一番大切な人？

そして、それはどんな願いですか？

遙か遠く、海に囲まれ浮かんでいる、ある一つの小さな島があった。

島の名は、あおぞらとう青空島。

その島で生まれた人たちは、皆一生に一度だけ願いを叶えることができる。

それが、たとえどんなに幸福なことでも。そして、どんなに過酷で苦しいことでも。

しかし、その願いも一つだけ叶えることができないことがあった。

それは、死者を甦えさせること。

一度死んでしまった者は、もう二度と生き返ることはできない。

そして、一度叶った願いは、二度と元には戻らない。

人々は、それは空からの贈り物と称し、『スカイ』と名付けた。

あれは、とても寒い日の夜だった。

この日はクリスマス。

街や商店街は、綺麗に飾り付けられ、広場の真ん中には大きなクリスマスツリーが立っていた。

どの店もクリスマスバージョンという限定商品ばかり販売しており、店の注目を少しでも上げようとしているのが分かる。

路上では、サンタの衣装に着替えたバイトであろうという女性が、チラシの束を持って行き交う人に一枚一枚丁寧に配っていた。

小さな子供は、両親と手を繋いで楽しそうに笑っていた。

他にも、熱々のカップルは、一つのマフラーを二人で巻いてくつきながら歩いていた。

どの人たちも、今が幸せ、今が楽しい、そんな思いをしているのだろうと感じられた。

すると、空から小さな白いものが降ってきた。

雪だ。

綺麗な柔らかい塊がみんなの頭に落ちてくる。

最初はそんなに降っていなかったが、少しずつ本格的になってきた。

この勢いなら、明日は一面銀世界になってそうだ。

みな、この雪を見て嬉しそうな顔をしていた。

しかし、一人だけ違う者がいた。

商店街から少し離れた住宅街は、どこからも楽しそうな声が聞こえた。

全ての家から中からの電気が外に漏れ、外灯がいらなほど歩道は明るかった。

お金に余裕があるものは、外にまでイルミネーションを飾り付けているところもあった。

そんな中、一つだけ電気も付けず、静まり返っている家があった。二階建ての洋風で、小さな庭のある家。そこだけ別空間のようだった。

この家は、誰も住んでいないのだろうか。いや、ちゃんと住んでいる。

その証拠に、郵便受けには一つの新聞が入っている。

それに、車庫の前には雪が少し積もった自転車が置かれている。

そこには、一人の少年がいた。

一人暗い中、誠は部屋まごこの真ん中で体育座りをして床に座っていた。

暖房器具を一切付けず、服装も薄着だった。

テーブルにはたくさんの料理やケーキが並べてあり、部屋の端には小さなクリスマスツリーがあった。

誠は何度拭っても溢れ出てくる涙を流していた。

部屋からはすすり泣く声しか聞こえない。

苦しくて、悲しくて、歯を力いっぱい噛み締めていた。

頭の中では、ある一つの真実が何度も繰り返されていた。

受け入れたくないが、受け入れるしかない真実。認めざるを得ない事実。

誠は拳に力を込めた。

どうして自分がこんな想いをしなければならぬのだろうか。なにか悪いことをしたのだろうか。

誠はわけがわからず、混乱状態に陥った。

心も体を冷え切っている感じがした。すべてが悲しみと寂しさに包まれていた。

この気持ちを鎮めたい。この気持ちを癒されたい。そればかり考えていた。

そのとき、ある人物の言葉を思い出した。

『お前の望みはなんだ？ お前の叶えたい願いはなんだ？』

「……俺の、望み」

誠は小さく呟くと、潤んだ瞳をそっと閉じた。そして……。

全ての始まり

ピピピピピピ

目覚まし時計が朝の7時を示している。

すでに陽は昇っており、眩しい陽射しがカーテンの隙間から部屋いっぱいに入ってきた。

その陽射しが誠の顔に直接当たる。

誠はその眩しさから逃れるために、顔を横に向け毛布を被った。

しかし、さっきから鳴り響いている目覚まし時計が眠りを妨げる。

「うるさいな……」

誠は布団の中から手を伸ばし、手探りで布団の上に置いてあった目覚し時計のスイッチを切った。

音が止まり、辺りは静寂になった。

これで眠りを妨げるものはなくなった。

心地よい暖かさで再び眠りにおちていく。眠りがだんだん深くなる。

それと一緒に、幸せも深くなる。

……そのはずだった。

「兄さん！早く起きないと遅刻するよ！」

制服にエプロンを着け、髪の毛に小さなリボンを着けた誠の妹である湊がみなとノックもせず勢いよく部屋に入ってきた。

誠は依然として布団に潜り込んだままである。

「兄さん、起きて。朝だよ」

湊は誠の体を揺すって起こした。

誠は行けるところまで行けた眠りがだんだんと覚めていく。

「……も、もう少し寝かせてくれ」

「だめ。遅刻しちゃうでしょ。私も初日から遅刻したくないもの」

今日は始業式と入学式がある。

湊は今日から高校生。誠は二年生へと進学するのだ。

「なんか頭痛い。今日は休む」

「なに言ってるの。妹の大事な日だっていうのに。ほら、早く起きなさい！」

そういうと、湊は無理矢理誠の掛け布団を剥いだ。

そのせいで、冷たい空気が容赦なく誠の体に襲い掛かってくる。

誠は体を震わせながら体を起こした。

「やっと起きた。早く起きないと朝ごはん冷めちゃうよ」

「でもまだ眠い」

誠は目を擦りながら大きく欠伸をした。

それを見た湊はあきれて一つため息を吐いた。

「夜遅くまでゲームなんかするからでしょ。早くごはん食べよ。本当に遅刻しちゃうよ」

そう言つと、湊は部屋から出ていった。

誠はくしゃくしゃになった頭をかき、しぶしぶベッドから降りると学校へ行く支度を始めた。

学校への準備が整い、鞆を持って誠は部屋を出た。

もちろん鞆の中には何も入っていない。

昨日夜遅くまでゲームをしていたせいか、体が重く感じる。

ついついやりすぎてしまった。夢中になると、なかなかやめられない。

気づいたとき、ベッドの中に入ったのは午前5時だった。

背伸びをすると、体の節々が痛む。

誠は洗面所に向かうと顔を洗い、眠気を吹っ飛ばした。

寝癖のついた髪を櫛で丁寧に梳かし、目元まで伸びた長い前髪を軽く手で整え居間に足を向けた。

「おはよう、兄さん」

「おはよう」

居間に入ると湊は朝食の準備をしていた。

一人台所に立ち、フライパンでタマゴを焼いていた。

誠はテーブルの上に置いてあったリモコンに手を伸ばすと、テレビのスイッチを入れた。

ちょうど知りたかった天気予報が映し出された。

今日は一日中快晴であり、心地良い温かさが続くようだ。

このところ晴れが続いていたので地面は濡れていない。

誠はそっと笑みを浮かべた。

「兄さん、ごはんできたよ」

テーブルには熱々の目玉焼きとハム、こんがり焼けたトースト一枚が並べてあった。

誠はテーブルの前に座り、湊と一緒に朝食を始めた。

「今日から私も高校生だね。また兄さんと学校に通えて嬉しいな」

「いつも一緒に通っているだろ。手前で別れるだけだし」

「でも、寂しかったな。違う校舎と思うだけですごく離れてる気がしたし」

湊は本当に嬉しそうで、ずっとにこにここと笑っていた。

「俺はちょっと迷惑だけどな……」

誠は湊に聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「いつてきまゝす」

「いつてきます」

誰もいない家に向かって言うと玄関を出た。

玄関の前には瞳が立っていた。

「おはよ、湊」

「おはよ、瞳」

麻生瞳^{あそうひとみ}は湊の親友だ。

中等部のころから仲良くなり、長い髪を一つに結んだポニーテールが特徴。

背が150センチと小さいが、足だけは速かった。中学から部活は陸上をしていて学校一速いのだ。

「ついでにお兄さんも、おはようございます」

「俺はついでか。おはよ、瞳」

「湊は毎朝大変ね。こんな出来損ないの兄が兄妹で」

その発言で、誠はむっとなった。

「悪かったな、出来損ないで」

誠は低い瞳の頭にポンと手を置いた。

「それより、早くしないと遅刻しちゃうよ」

湊のその一言で、誠たちは学校へ向かった。

誠たちが通う桜楼学園^{おうろうがくえん}は小さな山の麓にある。

そこまでは誠の自宅から一本の坂道で着く。

最初は面倒だったこの坂道も、毎日のように登れば平気になってくる。おまけに体力もつく。

ここは高等部と中等部が一緒になっており、敷地内に二つの校舎がある。

中等部のときに試験を受けて合格すれば高等部には試験を受けず進学できるのだ。

しかし、ここの偏差値は意外に高く合格するのはなかなか難しい。

だが、誠は運良く受かった。

湊も同じが良いといい試験を受けた。

湊の成績なら余裕で合格できた。

十分くらい歩いて校舎が少しずつ見えてきた。

回りは桜の並木道に囲まれ、桜が舞う中を歩くといかにも入学という感じがする。

誠たち以外の新入生らしき者たちは皆保護者と同伴だった。

「瞳、お前の親は今日来ないのか？」

「うん。今日も仕事が忙しいって」

瞳はいつものことだからというように元気に振舞っている。

心の中では寂しい気持ちでいっぱいだろう。しかし、それを隠している。

瞳はいつもそうだった。人の顔色を伺い、自分はすぐに後回し。

遠慮がこいつの悪いところだ。

瞳の親は二人とも共働きで家に帰ってくるのはいつも遅い。

ときどき、誠の家に泊まりに来ることもあった。

それからは、誠は湊と瞳の後ろを着いていき、二人は学校生活に夢を含ませ楽しそうに話をしているのを聞いていた。

そして、ついに校門が見えてきた。学校まであと少しである。

すると、誠は突然大声を上げた。

「あつ！　しまった……。忘れ物した！」

「なにもしてません」

湊と瞳が声を揃えて返してきた。

誠はため息を吐くと、観念して交渉に入ることにした。

「今回くらいいいだろ？　どうせ今日は始業式だけなんだから」

誠が中学生のころはよく学校を休んでいたのだ。

湊と瞳は嘘だとすぐに見破ってしまった。

「兄さんは中学のころからいつもそうやって休んでいましたからね。私が進学した以上、毎日ちゃんと学校に行ってもらいます。それに、かわいい妹の大事な入学式があるんですよ」

誠は我慢できなくなり、後ろを振り向くと思いつき走り走っていった。

「あつ！ 兄さん！」

「悪い、湊。今日の昼飯おごるから」

そういうと、誠は学校と反対方向に走っていき、だんだん見えなくなっていくた。

「もう、留年しても知らないんだから」

「湊も大変ね」

瞳は二人のやり取りを見て、くすくすと笑った。

すると、湊は悲しげな表情になった。

「兄さん、私のこと嫌いなのかな……」

それを見た瞳は一つため息を吐き、湊の顔を引っ張った。

「い、痛い、痛い。なにするの」

「湊は笑ったほうがいいの。そんな顔しない」

「……うん」

瞳の励ましにより、湊は元気を取り戻した。

「それに、湊がいなくなったら、あのバカ兄は泣いて探すわよ」

「そうかもね」

二人は笑いながら新しい校舎に向けて足を運んでいった。

そのころ、誠は一人ある場所に向かって足を運んでいた。

このいつもの日常から、自分の運命が変わることを知らずに……。

誠の最高の一年は、全てここからが始まった。

第一章 part 1：記憶

誠は学校とは反対側の小さな山に向かっていた。

名も無いその山は、頂上には薄い緑のさらさらな芝生と透き通ったような綺麗な泉、まだ新しい木造のベンチ、周りには真っ直ぐに伸びて育っている雑木林がある。

ここは誠のお気に入りの場所なのだ。

誠は空を眺めるのが好きで、一番良く眺めることができる。

空を眺めると自由な気持ちになる。

誠はそれが好きなのだ。

しょうじき言つと、留年する確立はどちらかというと高い。

しかし、今がよければいいのだ。

いつも後悔しないほうを選んできた。

今回も後悔しないほうを選んだつもりだ。

誠は頂上に着くと、鞆をそこら辺に放り投げ、さっそくさらさらな芝生に大の字になって寝転んだ。

少し走ってきたから汗をかいてしまった。

涼しい風が足元から流れてきて、みるみるうちに汗がひいていくのがわかる。

空は薄い青の中にふわふわの白い雲が左から右にゆっくりと動いてきた。

朝の天気予報のいうとおりとてもいい天気だ。

のどかで居心地よく最高の時間だ。

このまま睡眠不足を解消しようとしてそっと目を閉じた。

そのとき、どこからか足音が聞こえた。

「ん？ 誰だ？」

誠は体を起こして辺りを見回したが誰もいなかった。

気のせいだと思い、両手を頭の後ろに回し再び寝転がろうとした。

ポチャ

次は水の音がした。誠は泉のほうに目を向けた。

そのとき、ようやくその正体がわかった。

そこに一人の少女がいたのだ。

彼女は泉をじっと見ていた。

膝を着いて泉に映る自分の顔を覗いているのだが、その表情は楽しそうでもなく悲しそうでもなかった。簡単にいうと無表情に近い。

彼女は髪が長く腰まであり、可愛い顔立ちをして綺麗な瞳をしていた。

ここらでは見ない美少女だった。

しかも、彼女は桜楼学園の制服を着ていた。

誠はちょっと興味本位でじっとその彼女を見ていた。

彼女は泉から視線を反らすと、すっと立ち上がり近くのベンチに座った。

誠は仲間がいるとは思えない、立ち上がると制服に着いた草を払い除け、彼女のもとに歩み寄った。

彼女は依然として座ったまま前を見ていた。

というよりも、何か考え事をしているようだ。

誠は声をかけてみた。

「ねえ、君も学校を休んだの？」

しかし、彼女は何も反応せず前を向いたままである。

「あゝ、なんでここにいるの？」

それでも、彼女は誠の問いかけに答えようとはしなかった。

「ねえ、君の名前は？」

そこで彼女は反応を示してくれた。

彼女はゆっくりと誠のほうに振り向くと、小さな口を開いた。

「私は……誰？」

「……え？」

誠は自分の耳を疑った。

自分が誰だかわからない？ からかっているのだろうか。

「ねえ、名前は何て言うの？」

すると、彼女は空を見上げて答えた。

「私は……自分が誰なのか……わからない」

誠は苦笑いを浮かべながら頭をかき彼女の隣に座った。

これはテレビでよくある記憶喪失というものだろうか。

あれって本当だったのか？ しかも、実際にそれに関わっている人が自分の目の前にいる。

どうしたらいいのだろうか。

「……あなたは？」

「えっ？」

誠は彼女に向き直った。

彼女はじつと誠を見てきた。

「あなたは……誰？」

そつえば、まだこちらは名乗っていなかった。

相手に聞いておいて自分は名乗らないというのはさすがに失礼だ。

誠は納得すると自己紹介をした。

「俺の名前は清水誠。あそこにある桜楼学園の生徒だ」

誠は腕を上げ、隣の山の麓にある学校を指すと彼女もその方角を見た。

「君もあそこの生徒だろ？」

問い掛けてみたが、彼女は何も反応することなく元の前に向き直った。

「君はよくここに来るの？」

すると、彼女はゆっくりと腕を上げ、奥の雑木林の中を指した。

誠の頭の中ではそこには何もないはず。

しかし、よく見るとそこには小さな小屋があった。

見るからにぼろぼろで今にも崩れそうな小屋だった。

「あの小屋がどうかしたの？」

彼女はまたもや何も反応しない。

誠は頭の中で一瞬だけよぎったことを聞いてみた。

「もしかして……あそこに住んでるの？」

彼女はすっと立ち上がるとこくつとうなずいた。

そして、ゆっくりと小屋に向かって歩き出した。

誠は彼女のあとについて行くことにした。

小屋の前に着くと、彼女はドアを開け誠に向き直った。

どうやら中に入れてくれるそうだ。誠は、

「お邪魔します……」

といい、恐る恐る中に入っていた。

中も見えた目と同じようにぼろぼろだった。

どこから持ってきたのか、古びた冷蔵庫やテレビまであり、腐った木のテーブルやぼろぼろになり染みのついた毛布が一枚あった。

窓はガラスが半分割れており、天井にはいくつもの蜘蛛の巣が張ってあった。

床も埃だらけで汚そうである。

もちろん、電気のスイッチを入れてみたが点くはずはなかった。

「本当にここに住んでいるんだな。ちょっと信じられないけど……。食事とかはどうしてるの？」

誠は彼女に向き直ると、彼女はお腹に手をやり首を横に振った。

「もしかして、何も食べてないの？」

すると、彼女はコクツと首を縦に振ってうなずいた。

誠はそれはいくらなんでもかわいそうだと思い、何か買いに行くことにした。

「何か買ってくるから、ここで待ってるよ」

誠は彼女の返事も聞かずに、小屋を飛び出した。

山を降り街に行くと、すぐさま近くのコンビニの中に入った。

入り口の前にある籠を取ると、パンやお菓子、飲み物などを片っ端から入れた。

店員が少し驚いているが気にしなかった。

そこであることを思い出した。

「あつ、そういえば湊の昼食おごることにしてたな。ついでにこいで買っていくか」

誠は湊の昼食を籠に入れると、レジに持っていき、お金を払うとすぐに彼女のもとにむかった。

小屋に着くと、彼女は汚いテーブルを前にして行儀よく正座をして待っていた。

誠は買ってきたものを全てビニール袋から取り出すと彼女のもとにやった。

「ほら、全部食っていいぞ」

しかし、彼女はなかなか手に取ろうとはしなかった。

お腹は空いているはずなのに、あきらかに遠慮していた。

誠は時間を確認すると、すでに11時を回っていることに気づいた。

そろそろ入学式が終える時間だ。

誠は湊の分の朝食を取り、鞆の中に入れると立ち上がった。

「これ、全部食っていいからな。また来るからな」

そういうと、誠は急いで小屋から飛び出して学校にむかった。

彼女は誠がいなくなると、そつと一つのパンを取りゆつくりと口に入れた。

そのとき、彼女の目から一筋の涙がこぼれた。

学校に着くと、湊と瞳は校門の前で待っていた。

周りは保護者と一緒に帰る新入生や帰宅部の生徒、グラウンドでは各自それぞれ部活を始めていた。

誠は走りながら二人に軽く手を振った。

「遅いよ、兄さん！ 何してたの！」

機嫌の悪い湊は誠を見た途端怒鳴ってきた。

「ごめん、湊。ちょっと寝すぎてしまったんだ」

「まあ、いいじゃない。さっそくお昼にしましょう」

瞳の言葉でなんとか助かり、誠たちは以前のように校舎の屋上にむかった。

誠が中等部ときは、三人で一緒に屋上で食べていたのだ。

大抵は湊がお弁当を作るのだが、なにかあつた場合や時間が無いときなどは誠がおごることにしている。

「ほら、湊」

「ありがとう、兄さん」

湊は誠から昼食を受け取った。

それはタマゴサンドとお茶だった。

湊はタマゴサンドが大好物なのだ。

さっきまで機嫌の悪かった湊はにこにこしながらタマゴサンドを自分のもとに置いた。

そこで湊はあることに気づいた。

「あれ？ 兄さんの分は？」

「ああ、俺はいいんだ。あまり食欲なくて」

実は、あの子の分のためにお金を使いすぎて自分の分が買えなかったのだ。

おかげで財布はずいぶん軽くなった。

「それじゃあ、食べましょう。いただきます」

「待つて、瞳。まだ食べちゃダメ」

瞳が自分のお弁当を持ち上げ食べようとしたとき、湊が無理に止めた。

「えー、なんで？ 早く食べようよ」

若干涙目になって瞳が湊に訴えた。

「ごめん、瞳。ちょっと待つて」

すると、湊は真剣な表情になって誠に向き直った。

誠は何か悪いことしたかなと慌てて考えた。

「兄さん、私たちに何か言うことない？」

「え？ 言うこと？」

誠は一瞬あの彼女のことかと思った。でも、それは関係ないはず。

もしかして……。

「ああ、ごめん。二人が食べるはずだった冷蔵庫にあるプリン、我慢できずに食べてしまった。本当にごめん！」

誠は丁寧な頭を下げた。

それを見た湊と瞳は呆然とした表情で誠を見ていた。

「うそ！ あのプリン食べたの兄さんだったの！」

「人の物を勝手に食べるなんて最低です！」

「え？ このことじゃないの？」

「違います！ その件は、あとでみっちりと説教します。それより、他に言うことあるでしょう？」

どうやら違っていたようだ。自分で自分の首を締めてしまった。

では、他になにがあるだろうか。

そこでようやく湊の考えていることがわかった。だてにいつも一緒にいるわけではない。

誠は一つ咳払いをすると、二人に向き直り言った。

「入学おめでとう。湊、瞳」

すると、湊は満面の笑顔になった。どうやら当たったようだ。

「ありがとう、兄さん」

「お兄さんも、進学おめでとうございます」

「ありがとう」

ようやく昼食が始まった。

誠はその間にクラス分けを見に行った。

誠のクラスはA組みで、何人が知り合いもいたので少し安心した。

席は嬉しいことに窓際が一番後ろだった。

すぐにくじ引きをして席を決めたらしい。残り物には福があるとはこのことだ。

そのあと再び屋上に戻り、湊たちの話を聞いた。

二人は一緒のクラスになれたらしく湊は喜んでいた。

そして、誠は二人にある質問をした。

「なあ、二人は学校に来なくなった女子生徒知ってる？ 辞めたやつとか」

「え？ 兄さん、学校辞めちゃうの？」

湊が驚いて誠を見た。

「え？ ち、違う違う！ 俺は辞めないよ！」

それを聞いた湊は安堵の息を吐いた。

誠は彼女についてなにかわかんと思って聞いてみたのだ。

もしかしたら何か手がかりがつかめるかもしれない。

「それなら知ってますよ」

「ほ、本当か？」

「はい」

瞳はお弁当と箸を置くと話し始めた。

「三年前の話です。ある女子生徒が、中学からこの桜楼学園に合格し入学したのです。彼女はとても可愛く、みんなから人気がありました。しかし、ある噂が広がり彼女の周りからは少しずつ友達が減り、いつしかいじめられるようになりました。しかし、彼女は一日も学校を休むことなく通い続けました。そして、高校に進学しようというときに、忽然と姿を消したのです。みんなは自殺したんだと言っていました」

「それ、私も聞いたことがある」

湊もどうやら知っているようだ。

「彼女はなんでいじめられたんだ？それに、その噂って？」

瞳は顎に指をやり考えながら話した。

「詳しいことはわかりませんが、お父さんが何か犯罪をして刑務所に捕まったという噂が流れて、いじめられるようになったと言って

いたような気がします」

誠はなるほどというふうにうなずいた。

「彼女はいつ高校に上がるはずだったの？」

「それは今年です。私たちと同じ歳ですから。詳しい話もさっき聞きましたし」

「じゃあ、その子の名前は？」

「それはわかりません。同じクラスになったこともありませんし……」

「私も知らないよ」

誠は腕を組むと、今聞いたことをふまえて彼女のことを考えてみた。

まだ確信はないが、そのいじめられた生徒はあの彼女のような気がする。

辻褄はなんとなくあいそうだし。

それにしても、誰であっても親のせいでいじめられるのはかわいそうである。

親も子供のことをよく考えて欲しいものだ。

誠は立ち上がると、自分のお気に入り場所に足を進めることに

した。

第一章 part 2：秘密

誠は屋上で二人と別れると、またあの小屋にむかった。

ドアをノックすると、彼女がゆっくりと開けてきた。

最初は不安そうな顔をしていたが、誠だとわかると少し安心したような表情になった。

中に入ると、誠が買ってきた食べ物はすべてたらいらげていたことに気づいた。

やはりお腹は空いていたのだろう。どれも一つ残らず綺麗に食べていた。

食べてくれたので、若干安心感が生まれた。

誠は学校から勝手に持ってきた箒を使い、少し小屋を掃除した。

彼女も手伝い、小屋は多少綺麗になった。

掃除が終わり、誠と彼女は向かい合って床に座った。

「今からする質問に答えてね。まず、君の本当の家はどこなの？」

彼女は俯いたまま首を横に振った。

「じゃあ、次の質問。いつからここに住んでるの？」

彼女は少し戸惑いながらも掌を上げ、重い口をそつと開いた。

「……二日前……」

どうやら春休みからここにいらっしゃるらしい。ならば春休み中になにかあったはずだ。

「次の質問。自分のことが分からなくなったのはいつから？」

この質問には彼女はしばらく考えたが、覚えてないらしく首を振った。

誠は大きくため息を吐いた。

どうやら彼女を知るには親に会いにいったほうがいいのかもしいい。

しかし、家がどこにあるのか分からない。

ならば、彼女をいじめていたやつらに聞く。それなら少しの手がかりは掴めるかも知れない。

しかし、もし彼女がここにいたことがばれたらまたいじめられてしまうだろう。

それはなにがなんでもかわいそうだ。

誠は他にいい案はないか必死に考えた。

「あ、あの……」

今度は彼女のほうから話し掛けてきた。

「ん？ なに？」

「あ、あの……あなたは、私のことで何か知っているのですか？ 私と、どういう関係なのですか？」

「え？ 関係って……別になににもないよ。今日初めて会ったし」

「そうですか……」

それだけ聞くと、彼女は口を閉ざしてしまった。

たしかに見ず知らずの人を助けるようなことは普通しない。

でも、誠はそんなことはできなかった。

人一倍孤独と言う苦しさを知っているから。

時刻は6時を過ぎた。

そろそろ帰らないと湊が心配する。

誠は彼女を家に連れて行こうとしたが、彼女はここから頑として離れなかった。

誠はまた明日ここに来ると約束して小屋から出て行った。

外はすでに暗くなっていた。

空には星が無数に輝き月は満月だった。

数個ある電灯を頼りに泉の脇を通ると誰かが立っていることに気づいた

。その人は誠に手招きをしている。

誠は疑問に思いながらもその人のもとに近寄った。

近くで見ると、その人は老人だった。

頭にニット帽を被り、きりつとした眉毛に目、白い髭を生やし茶色のジャンパーを着ていた。

「……ついてきなさい」

老人は懐中電灯を手に小屋の反対側の雑木林の中に向かって歩き出した。

誠は言われるままに老人の後について行った。

老人と誠は暗い雑木林の中、無言で奥へと歩いていった。

枝にふくろうが止まっており、数匹のこうもりが宙を待っていた。

しばらく歩いて、懐中電灯の先に十字に結ばれた木の枝が土の上に立っているのが見えてきた。

月の光が十字の木を照らしているように見える。

老人はその前で立ち止まると誠も立ち止まった。

「これになにか分かるか？」

老人の質問に、誠は一度ありえないと思ったが正直に答えてみた。

「……お墓？」

老人はゆっくりとうなずいた。

「この墓は、あの小屋に住んでいる子の母親の墓じゃ」

「えっ？」

誠は老人を見た。

老人は近くの木の下に腰を下ろすと語り始めた。

誠はその場に立ったままじっと老人を見た。

「三日前じゃ。わしは、この山の電灯の明かりを確認しに来たのじや。すると、ある親子が夜遅くにここに來て星を眺めておった。二人は手を繋ぎながらいつまでも眺めておった。しばらくして、母親は子供に向かって語りかけた」

『私はもう疲れた。夫のせいでずいぶん苦勞した。こんな人生は嫌

だ。もう終わりにしたい』

母親は泣いていた。そして子供に向き直り、その場にしゃがむと問い掛けた。

『叶えて欲しい願いはなに？』

子供はうつむきながらも答えた。

『記憶を消したい。今までの思い出を消したい』

母親は首を縦に振ると子供に向かって願いごとを唱えた。

『この子の思い出を消して欲しい』

すると、子供の体が青白く光始め、光が治まるとその場に倒れた。

母親は子供を抱えベンチに寝かした。

そして、暗い雑木林の中、あの場所に足を進めた。

老人はゆっくりと気づかれないうちに後を追った。

母親はある場所に着くと、自分で穴を掘り、木を十字に結ぶと土の上にさして穴の中に入った。

足から腰まで土を被せると、懷からナイフを取り出し自分の胸を躊躇することなく指した。

その光景を見ていた老人はしばらくして、母親に土を被せてやつ

た。

そして、子供のほうへ歩み寄った。

子供は女の子だった。

彼女はとてもかわいらしく静かに眠っておった。

老人はどうすることもできず、その場から去ってしまった。

「まさか、あの小屋に住み着くとは思わなかったがな」

老人は深く息を吐くと語り終えた。

誠は確信した。

その女の子とは彼女のことだ。

といことは、彼女の父親は捕まり、母親は子供を残して死んでしまったことになる。

身よりも友達もおらず、自分が誰なのかもわからない。

こんな不幸なことがあっていいのだろうか。

誠はそつと口を開いた。

「母親は……スカイを……使ったんですね。それで、彼女の記憶を

……」

「……そうじゃ」

誠は墓の前に膝を着くと目を閉じそつと手を合わせた。

老人は立ち上がり誠の横に立った。

「わしは、あの子を児童施設に預けようと思っておった。このままじゃと、いつか死んでしまっただろう」

老人は一息吐き、誠にそつと問い掛けた。

「……あの子を、お前に救えるか？」

誠はそつと目を開いた。

「救ってみせます」

「簡単なことではないぞ。高校生のお前になにができる」

誠はその場に立ち上がり老人に向き直った。

「彼女の笑顔を作つてやる。そして、少しでも生きてよかったと思わせてやる。二度と記憶を消したいなどと思わせないために。人生がどんなに楽しいか分からせてやる」

誠は彼女を心の底から助けたいと思った。

孤独が、一人がどんなに悲しいことなのか。

それは自分も知っている。

その孤独感を、彼女に味合わせたくない。もっと楽しい人生を送って欲しい。

自分の力で、彼女を幸せにしたい。

老人はじつと誠の目を見た。

誠の目は真剣そのものだった。

老人は誠の誠意を見届けふつと笑うと背を向けた。

「あの小屋は自由に使ってよい。母親のことと時期話すがよろう。彼女を救ってやりなさい」

「……はいっ」

そこで誠はある疑問を抱いた。

「あなたはいつ……」

「わしは、この近くに住んでおるものじゃ。この山の持ち主でもある。お前のことも知っておるぞ。よく学校をサボってはここに来る」

誠は顔が少し赤くなり頭を掻いた。

「わしはこの先に住んでおる。なにかあったら訪ねなさい」

老人は来た道をたどり、闇の中へ消えていった。

誠はその姿を最後まで見送った。

見えなくなると、誠はそつと夜空を見上げた。

「あの孤独を味わうのは、俺一人で十分だ……」

誠は拳を強く握り締めると固く誓った。彼女を救ってやる。

誠と彼女の物語が今、始まった。

第一章 part 3：小屋

誠は朝から学校をサボってあの小屋に向かった。

湊にいろいろ言われたが、なんとかまくことができた。

ビニール袋を片手に息を切らしながら走っていく。

着いてすぐにドアをノックした。しかし、ドアが開く気配がない。

誠はそつとドアを開けてみた。

中で彼女は気持ち良さそうに毛布を被り眠っていた。

「なんだ、まだ寝ていたのか」

本当に気持ち良さそうに眠っており、起こすのはかわいそうなのでそつとすることにした。

誠はビニール袋をテーブルの上に置き彼女のそばに座った。

彼女はまだ母親が死んだことを知らない。いや、誰なのかわからないことが唯一の救いだ。

知らせるのはずっと後でいいだろう。これからどうしようか。

ここを好きに使っていいと言ったが火さえ使えないのでは料理もできない。

だが今はいいやと思い、一番肝心なことを考えることにした。

それは彼女の名前だ。

いつまでも君とかお前などと代名詞を使うのも失礼だ。

誠はいい名前がないか考えた。

すると、すぐにパツと思い浮かんだ。

これはいい名前だと思い早く教えてやりたく、ずっと笑みを浮かべていた。

誠が来てから小一時間くらいして、ようやく彼女は目を覚ました。

「おはよ
」

誠が声をかけると、彼女は朦朧とする頭でじつと誠を見た。

一瞬誰か分からなかったらしく、しきりに首をかしげていた。

しかし、その正体が誠だとわかると安心した表情になった。

「ほら、朝飯持ってきたから食べようぜ」

誠は彼女にパンと飲み物を渡した。

彼女はお腹が空いていたのかあつという間にたいらげてしまった。

一段落して、誠はこれからどうするかを彼女に説明した。

とりあえず、この小屋の改造をすることにした。

やはり、このままで暮らすには難しいだろう。

誠は銀行から親が残したお金を少しおろしてきた。

親はなにをしていたのか、通帳の中には一生遊べるのではないかというくらいにお金がたくさんあった。

誠は必要な物を紙に書き、彼女と一緒に街へ向かうことを伝えた。

「今日はこれだけ買おう。よし、さっそく行くぞ、泉^{いずみ}」

彼女は突然泉と呼ばれ戸惑っていた。

誠は想像どおりだったので、ついにやけてしまった。

「君の名前だよ。名前がないと困るだろ？」

泉という名は外にある綺麗な泉を見て思いついたのだ。

彼女は嫌がることなくコクリと首を縦に振った。

「よし。行くぞ、泉！」

誠は泉の手を引っ張り外に出た。

泉は手を引つ張られながらも、そつと口元を緩めた。

二人は街で一番大きいデパートに向かった。

ここならなんでも揃っているのだからわざわざ専門店に行く必要はない。

二人はまず洋服コーナーに向かった。

制服だけでは出かけたりできないからである。泉もおしゃれをしたはずだ。

洋服コーナーに着くと、さまざまな洋服があつて何を買ったらいいのかわからなかった。

誠は彼女などつくったことないので、女の子がどんな服を着るのかなど知るよしもなかった。

泉はいろいろ見ているが首をかしげている。

仕方なく、近くにいた若い女性店員に声をかけ、今の流行や似合っている物を選んでもらった。

なにを思つてか、店員は途中で、

「これはどうですか？」

と泉に着させ、誠の感想を聞いてきた。

確かにおしゃれをした泉はかわいかったが、どう言えばいいのかわからず、

「かわいいですね」

と答えた。

それを聞いた店員はクスクスと笑っていた。

いろいろな服を試着したりして一時間かった。

何着かは泉が気に入った物を買った。選び終わって会計をすると、店員は未だににこにこしていた。

どうやら恋人だと思っているようだ。

商品を受け取った泉は、笑うような嬉しさの表現をしなかったが満足そうだった。

次は生活用品を見に行った。

最初買ったものはガスコンロである。これで少なくともお湯くらいは沸かすことができるだろう。

他にも、やかんや鍋などの料理道具。電気の変わりにろうそくとマッチ、懐中電灯。

そして、食べ物や飲み物。その他必要なものを買い、今日の買い物は終わった。

小屋に戻ると、二人は始めに大掃除をすることにした。

張り付いたクモの巣や埃を落とし、割れたガラスも全部外して代わりにダンボールを入れてガムテープで固定。床も雑巾で拭いた。

途中ゴキブリやムカデ、トカゲや見たことのない昆虫を見たときはびっくりした。

特に泉は驚いて山の麓まで降りて行っただので大変だった。

二時間して見違えるくらいに綺麗になった。

掃除が終わると、誠は泉に料理の本を使って簡単なものを教え一緒にご飯を食べた。

都合よく、それなりに言葉と字など基本的に生活に訴訟を起こすようなことは覚えていたので苦労することはなかった。

陽が沈み、辺りが暗くなると、二人は近くの温泉にむかった。

しばらく風呂に入っていないから、泉の綺麗な髪はべたべたになっていた。

誠はお金を払い、泉は中に入っていた。

その隙に、誠はもう一度デパートに向かった。

泉の布団を買うためだ。

あの毛布一枚では、春だからといっても風邪をひいてしまっただろう。手ごろなものを買つと、大きかったがなんとか持ち運んだ。

店から出る途中、文房具コーナーが目に入った。

誠はいいことを思いつき、文房具コーナーであるものを買った。

温泉の前にはすでに泉が立っていた。

髪も肌を綺麗になっており、体から石鹸の香りが漂ってきた。

泉は誠を見るとすぐに駆け寄ってきた。どうやら心配していたみたいだ。

まるで犬のようだったので少し笑ってしまった。

小屋に戻るとさっそく新しい布団を敷いた。

泉は嬉しそうに布団の上に座った。

その間に誠は袋の中からさっき文房具コーナーで買ったものを取り出し、テーブルの上に置いた。

「泉。ちょっとこっちに来てくれ」

すでに横になって寝ていた泉は布団から離れ誠の隣に座った。

誠は泉の前に文房具コーナーで買ったノートとペンを置いた。

「いいか、今日から毎日日記をつけるんだ。その日にあったことや思ったことをなんでもいいから書くんだ。さっそく、今日あったことを書いてみな」

楽しいことをノートに書いておけば、忘れても見直して思い出すことができる。

それに泉も退屈しなくてすむと思ったのだ。

泉は誠からペンを受け取ると、日記を書き進めた。

誠はいくらなんでも見てはいけないと思い、今日はこれで帰ることにした。

自宅に戻ると、湊は閑々になって怒っていた。

「こんな時間までなにしてたの？」

時刻は夜１０時を過ぎていた。

誠はへらへらと笑いながら頭をかいた。

「ごめん。ちょっと……」

「ちょっとなに？」

湊はどうやっても問い詰めるようだ。

湊の目はするどく誠を見ていた。本当に怖い。

誠は泉のことを言ってもいいのか迷った。

言えば湊のことだから協力はしてくれるだろう。しかし、迷惑はかけたくなかった。

それに、もしあの小屋に泉が住んでいることがばれたりでもしたら、いじめていたやつが来て住めなくなるかもしれない。

それに、家に泊めても今度は湊もいじめの標的になるかもしれない。それだけは嫌だった。

やはり泉のことは黙っておくことにした。

「ちょっと、昔の知り合いに会っていたんだ。懐かしくなつてつい話し込んでしまったんだ。夕飯も済ませてきたし」

それを聞いた湊は一つため息を吐き、なんとか許してくれた。

「そう、わかったわ。そういうことにしとく。けど、連絡くらいはちゃんとしてね」

湊は本当に心配していたようだ。誠は申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「ごめんな。これからは連絡するから」

「うん」

湊の機嫌も良くなり誠は安堵の息を吐いた。

すでに沸かしてあった風呂に入り、その後すぐにベッドに倒れ泉のことを考えた。

「そういえば、泉の笑った顔まだ見てなかったな。喜んでいるのはわかるけど、できれば笑ってほしいな」

誠は泉が笑うところを想像してみた。

やはりあの可愛い顔で笑ったらもっと可愛くみえるだろう。

それに、笑うということは楽しいということだ。

つまり、自分がやっていることは間違いではないことがわかる。

それに、泉の笑顔を早くみたい。

「よし、絶対笑わせてやる。心から楽しい気分させてやるんだ」

誠はそう決意し、目を瞑ると、疲れたのかすぐに眠りについた。

第一章 part 4：感謝

今日は休むことなく真面目に学校にきた。

もちろん授業はまったく聞いていない。

「うーん。やっぱりあのいじめられたやつが泉なのかな」

友達やクラスの人たちに来なくなった女子生徒のことを聞いてみたが、何を聞いても泉のことのように思える。

「じゃあ泉の父さんは犯罪者なのか。それもかわいそうだな」

授業はまったく聞かず、あれこれ考えたら時間はすぐに過ぎていった。

放課後になると、誠はめずらしく図書室に向かった。

意外に広い桜楼学園の図書室は昔の新聞記事も保管しているのだ。

これで泉の父親について調べようと思ったのだ。まだ泉のお父さんだと確信はないが。

泉は三年前からいじめられたから、三年以降の事件を調べればいい。まだいじめられていたという確信はないが。

小さいことなら載ってないかもしれないが可能性はある。

誠はそのうちの一つを取り出し、椅子に座って読んでみた。

中は綺麗に日付順に並べてあり、一つのファイルに一週間分収められていた。

誠は大きいため息を吐いて天井を見上げた。

一つで一週間分ならどれだけのファイルを調べなければならないのだろうか。先が思いやられる。

しぶしぶファイルを開くと、誠は一つ一つ見落としないようにページを一枚一枚捲っていった。

今日はなにも収穫がなく終わってしまった。

仕方なく、明日も図書室に通うことにした。

これから泉のもとに向かうことにした。

泉は小屋の中で本を片手に料理をしていた。

今日は肉じゃがを作っていた。米とお味噌汁はすでに出来上がっており、茶碗についでいた。

泉は誠に気づくと、そつと口を開いた。

「……お、おかえり……なさい……」

泉が初めて誠に挨拶をした。誠は嬉しくなり笑顔で返事をした。

「ただいま、泉」

夕食は泉と一緒に食べた。

ちゃんと湊には連絡した。ちょっと残念そうな声だったが。

泉の作った肉じゃがはおいしかった。野菜も柔らかく、汁も辛すぎず甘すぎず丁度よかった。

ご飯も味噌汁もよくできていた。

泉は少しずつ誠に話すようになっていた。

これなら、泉はすぐに元気に明るくなるだろう。

誠は安心して夕食を食べていった。

誠はこれで帰ることにした。

湊がまた心配してしまうだろう。

泉に別れを告げ小屋を後にした。

家に着くと誠はすぐに眠りについた。

今日も図書館で事件調べをした。

昨日と同じように、収穫は無し。

今日も諦めて泉のもとに向かった。

泉は布団の上に正座をして待っていた。

「……おかえり、なさい……」

「ただいま」

まるで夫婦のようだった。

誠は恥ずかしくなり頬を染めながらにやついてしまった。

今回、夕飯は一緒に食べなかった。

たまには妹の手料理も食べなくてはかわいそうだ。

泉の夕飯が終わるまで誠は携帯をいじっていた。

その携帯を泉は物珍しそうな顔で見ていた。

連絡手段で泉の携帯を買ったほうがいいのかもしれない。明日は土曜日で学校は休みだ。

誠は泉とまた買い物に行くことにした。

泉が今日の日記を書いているときに誠は家に戻った。

お腹が空いてきて夕飯が食べたくなくなってしまった。

誠はすぐに帰って夕飯を食べた。

わざわざ湊も誠が帰って来るのを待っていたそうだ。

久しぶりの家族での夕飯はいいものだった。

やはり家族は温かく、安心できる。

泉にもそれを分かって欲しかった。

土曜日は約束どおり泉と街へ出かけた。

まずは携帯ショップで泉の携帯を買うことにした。

せっかくだから、最新機種でワンセグが使えるものを買った。

いろいろな手続きは誠の住所や電話番号、名義も誠の名前を書いた。

泉はすでに携帯に目を輝かせていた。

店から出るとさっそく誠の携帯番号とメールアドレスを登録した。

それから簡単な操作とテレビの見方の説明をした。

あの小屋は電気が通っていないので、充電池をもう一つ買い、一つ

は誠の家で受電して次の日に交代で変えることにした。

泉は丁寧に礼を言った。

しかし、泉は笑うことはなかった。

嬉しいことはわかる。だが、心から言える満面の笑顔を見せることはなかった。

次は必要なものをまたあのデパートで買い、テーブルや本棚も買った。

いつかお金が減っていることを湊が気づくのではないかと心配になってきた。

小屋に着くと、新しいテーブルと本棚を置いて誠は布団の上に倒れた。

ここまで運ぶのはさすがに堪えた。肩や腕は筋肉痛でこつていた。

すると、泉はそつと誠の肩を揉んだ。それなりに感謝はしているようだ。

「ありがと、泉」

泉は頬を赤らめながら首を縦に振った。

「なあ、泉。今日の買い物でいろいろ思ったんだけど、今から自分について困らないことは今決めよう」

泉は誠が言っていることが理解できず、首をかしげていた。

「例えば、誕生日とかだな。自分のプロフィールを考えるんだ」

泉はようやく誠が言っていることを理解し首を縦に振った。

「そっだな、泉の誕生日は……四月九日でいいんじゃないか？ 俺と泉が出会った日だ」

泉は素直にうなずいた。

「あとは……歳は十六。特技は料理。長所は優しいところだな。趣味は何かな？」

「……日記？」

「日記は趣味に入るのかな？ まあ、いいか」

それから、泉のことを考えいろいろと決めていった。

今日は泉と一緒に夕飯を作った。

誠の大好きなカレーだ。

泉は起用に野菜の皮を剥き、適当な大きさに切っていた。

誠は肉を炒めたり、米を炊いたりした。

完成したカレーはすごくおいしかった。

時刻は夜の9時を回っていた。

泉は依然と携帯でテレビを見ていた。

誠は眠くなり、そろそろ帰ることにした。

「じゃあな、泉。そろそろ俺は帰るよ」

小屋を出ようとドアに手をかけた。

「……ま、待ってっ」

突然泉が声を上げ、誠は泉のほうを振り向いた。泉はじっと誠を見ていた。

「今日は……ここに……いて……」

泉の顔は真っ赤になっていた。

しかし、泉はいつものように俯くことなく顔を上げて誠をじっと見つめていた。

泉が自分の要望を口に出すことは今までなかった。

誠は泉の誠意が伝わり、微笑むと快く承諾した。

「わかったよ。今日はここにいます」

泉はコクツと首を縦に振った。

「……………あ、ありがとう……………」

誠はさっそく湊に連絡し、友達の家泊まると伝えた。

やることがないので泉の日記をすることにした。

泉は黙々と書いていた。

一度見せて欲しいと言ったが泉は首を振り、頑として見せようとはしなかった。

時刻が11時を回った。眠くなったので今日はもう寝ることにした。

泉はいつものように布団で、誠は以前泉が使っていた毛布に身をまとった。

そっぴいば女の子と一緒に寝るなんていつ以来だろうか。

何回かは幼いときに湊と寝たことがある。

しかし、もう当分そんなことはなかった。

そう思うと少し緊張してきた。

泉も同じなのだろうか、さっきから誠に背を向けたままだった。

なにも話さない静寂な時が刻一刻と過ぎていく。

しかし、なかなか寝付けない。

興奮しているのだろうか、目が覚めたようにサッパリしている。

子供が明日は遠足だからわくわくしているという感じだ。別に明日はなにもないのだが。

せつかなので、なにか話そうと思い話題を考えてみた。

「えっと……なあ泉、まだ起きてる？」

「……うん……」

泉も眠れないようだ。なにか話さなければ。

「この小屋も最初と比べたらずいぶん良くなったよな。十分暮らせるぞ」

「うん……」

会話が途切れてしまった。次の話題を考えなければ。

「心配したときや寂しくなったら、いつでも気軽に俺の携帯に連絡していいからな。すぐに飛んで来るから」

「うん……」

また途切れた。次は何を話したらいいんだ。考えれば考えようとするほど思いつかない。

すると、次は泉のほうから話し掛けてきた。

「……誠……くん」

誠は驚いた。

泉が始めて名前を呼んだのだ。

今まで一度もなかったのに。

誠は嬉しくなり、元気よく返事をした。

「なんだよ泉、なんでも話してごらん」

誠は肩肘を立て、その上に頭を乗せ待った。

泉は少し小さな声で話した。

「……ありがとう……」

「え？」

「ありがとう。これまでよくしてくれて。いろいろなものを買ってくれて、食事もお風呂もお金を払ってくれて。……本当にありがとう……」

泉は泣いているようだ。肩が小刻みに震え、何度も鼻をすすっていた。

「私……自分のこともよく知らないのに……。でも、優しくしてくれて、すごく温かくて。家族がいるって、こういうことなのかなって思えて……。誠くんがいるだけで、安心できて……。……でも、迷惑だよ。お金もなくなってしまうのに、一人のためにこんなに使ってしまった。正直……。いないほうがいいよね……。」

「そんなことない！」

誠は突然叫んだ。

泉の体が一瞬びくついたのでわかった。

しかし、おかまいなしに続けた。

「俺、迷惑だなんて思ったことないぞ。泉と一緒にいるとすごく楽しいし、おもしろいし。助け合うのは当たり前だろ。お金のことは気にしないでいいんだ。泉は俺のそばにいていいんだよ」

「……うん。……うん」

その夜、泉のすすりなく声は一晩中続いていた。

第一章 part 5：宝物

朝になると、眩しい太陽が小屋や近くにある泉など辺り一面を照らした。

その光が反射して泉はきらきりと輝いていた。

誠は泉で顔を洗った。

冷たい水が一瞬にして眠気を吹っ飛ばした。

昨日は本当に驚いてしまった。

泉からあんなふうに思われているとは知らなかった。

でも、自分の気持ちを出してくれたのは嬉しかった。

誠のことを認めているという証拠だ。

もう、あんなこと言わせてやらないためにも頑張らないと。

泉はまだ寝ているようなので、一先ず朝食の買出しに行った。

コンビニで適当にパンやおにぎり、飲み物を買って小屋に帰った。

戻ると、泉はすでに起きていた。

なにもすることがなかったからか、携帯でテレビを見ていた。

丁度朝の星座占いが始まるうとしていた。

そばによると、泉は誠に気がついた。

「占いか。ちょっと見てみようぜ。泉は四月だから牡羊座だな」

占いが始まった。さまざまな景色が映し出され、それを背景にラ
ンキング一位から紹介された。

今日の一位は見事に牡羊座だった。

「やったな。一位だぞ」

内容は、一日中良いことがあり、思い出に残る楽しい一日になる
でしょう。

ラッキーカラーは茶色、ラッキーアイテムはぬいぐるみだそうです。

「よかったな。今日はいいことあるぞ」

「うん」

泉は気まずそうにだが、嬉しそうにうなずいた。

昨日のことはすでに気にしておらずいつもどおりのようだ。

「さて、俺の天秤座はなにかな」

誠の誕生日は十月十日なので天秤座だ。

いまかいまかと待っていたが結果は残念ながら最下位。

お金をつかう一日になるでしょう。気にせず出しておくのが吉。

ラッキーカラーは白、ラッキーアイテムはハンカチだそうだ。

「この占い当たるって評判なんだよな。今日はお金を使いそうだ」

そのあとは、二人で朝食を食べ、一日何をするかを考えた。

明日から誠はまた学校が始まるから一緒にいる時間が減ってしまう。

メールをすれば授業中でも会話はできるが、実際にそばにいると
いないのでは違う。

ということで、今日はどこかに遊びに行くことにした。

楽しそうなところといえばあそこしかない。

二人は準備をすると早速その場所に向かった。

山を降り、バスに乗ってゆられること1時間。

目的のバス亭で降り二十分歩いてようやく辿り着いた。

その場所とはこの街一番大きい遊園地のことだ。

この遊園地は、さまざまな乗り物とアトラクションやゲームセンタ

ー、ちょっとしたお店やレストランもある。

二人はお金を払いフリーパスを買って中に入ってしまった。

時刻は１１時だからか大勢の人たちが来ていた。

子供のはしゃぐ声や楽しそうに話すカップルの声、ジェットコースターの轟音で耳が痛くなりそうだ。

泉も少し方耳を抑えていた。

すぐになれると思うので気にせず、まずは定番ものを一通り乗ってみることにした。

コーヒークップやメリーゴーランド、ゴーカーなどを乗り楽しい一時を過ごした。

「そろそろ飯にするか。あそこのレストランで食べよう」

二人は適当に見て選んだレストランの中に入り、誠はラーメン、泉はカレーライスを注文した。

「楽しかったな。次は何に乗ろうか」

二人は次のことを考え、注文したものをすぐにたいてしまった。

食べている途中、誠は隣の店の窓際に並んでいるものが目に入った。誠は良いことを思いつき多少のお金を残しておこうと財布から少し

取り出し、別のポケットに収めた。

レストランから出て、まだまだたくさんある乗り物に乗っていた。

「次、あれにしようぜ」

誠が選んだものはお化け屋敷だった。

黒い小屋の前には骸骨の人形や壁にドラキュラの絵が書かれており、赤い字でホラーハウスと書かれていた。

誠は気軽な気持ちで中に入っていた。

泉はちょっと困ったような表情をしていた。

中は冷房が効いているのか涼しいが少し寒すぎていた。

並んで奥に進んでいくといきなり白い着物を着た女性の幽霊が井戸から出てきた。

それを見た泉は小さな叫び声を上げ誠の腕にしがみついていた。

誠は腕が熱くあり、涼しかった体が熱をおびた。

「だ、大丈夫だって。さ、行こう」

泉は誠にしがみついたままさらに奥のほうへ進んでいった。

次は火の玉が上から出てきたり、お墓からゾンビや手が出てきたり、

本物のこうもりが紐で体を結ばれたままばたと羽ばたいていた。誠はおもしろく笑っていたが、泉はさっきからずっと目を固くつぶり、誠の腕にうずくまっていた。

ようやく出口が見えてきて外に出た。誠は大きく背伸びをした。

「けっこうおもしろかったな。泉はどうだった？」

「……こ、怖かった」

泉は半泣きだった。泉のような人が入れば脅かす人も満足するだろうな。

そう思うと、誠はずっと泉を慰め、変わりにソフトクリームをおごった。

食べ終わり、他になにがあるか見渡すと、泉が誠の肩を叩いた。

「あれ」

泉が腕を上げて指を立てた。指したのは誠が苦手な絶叫系のジェットコースターだった。

このジェットコースターは、高さが三百メートルもあり、時速八十キロと大人気だった。

「あれに乗りたいの？」

「うん」

昔から絶叫系が嫌いな誠は意地でも乗りたくはなかった。

だが、泉はどうしても乗ってみたいようだった。今始まった人たちを見て、目を輝かせていた。

それに、泉が今日初めて自分から要望したのだ。裏切りたくはない。

「よし、じゃあ乗ってみるか。あんなの楽勝だぜ」

内心そんなこと言えるはずないと思いながら、すでにがくがく震える足を引きずって列に並んだ。

泉はとても楽しそうだからいいのだが、誠は故障でもしろと密かに祈っていた

。だが、その祈りは実らず、二十分して自分達に回ってきた。

しかも、一番前だった。最悪だ。

泉は席に座ると珍しそうにあちこち見ていた。

誠は神に祈って生きて帰れますようにと願った。

女性の係員が安全ベルトの着用を確認すると、ブザーを鳴らしてもっとも怖い乗り物は少しずつ進んでいった。

ゆっくりと坂を登って行く。まるで天国に行くようだった。

下を見ると人が蟻のようだった。たくさんの方がこっちを見ている。

誠は破裂しそうな心臓を必死になっておさえた。

そして、とうとう一番高いところに着いた。

これで十分楽しめたからもう降ろして欲しかった。それを無視した機体は少しずつ下に傾いてきた。

やばい。もうすぐ来る。

次の瞬間、ものすごい勢いをつけて機体は下に下っていった。

風が顔にあたり、目を開けることができなかった。耳も轟音や後ろからの叫び声ばかりが聞こえた。

チラッと横を見ると泉は固く目をつぶっていたが叫び声は上げなかった。

怖くないのだろうか。誠は十分に怖かった。

さっきのお化け屋敷での泉の恐怖もこんな感じだったのだろうか。

泉を怖がらした神様の罰のようだった。

誠は必死に謝りながらこの恐怖が終わるのを待った。

ごめんなさい、神様。

機体はすぐにもとの位置に戻った。

一緒に乗っていた人たちは楽しかった、怖かったなど感想を述べ、小さな子供は泣いていた。

自分もできれば泣きたい。

誠は目にしたくない機体から降りるとふらふらと歩いた。

泉は上機嫌だった。

これには一生乗らないと心から誓った。

最初は誠が引っ張っていたが、いつのまにか泉が誠を引っ張るようになっていた。

乗りたいものを瞬時に見つけ、誠の意見は聞かず次々に乗っていた。

だが、楽しい時間はすぐに過ぎ、あたりはだんだんと暗くなり客も最初と比べたら随分と減った。

「そろそろ帰るか」

誠が泉に聞くと、泉は顔を上げなにかを見つめていた。

それは観覧車だった。

一つ一つ乗るところが光、真ん中ではいろいろな形で輝いていた。

綺麗だなと思い、誠も見ていると泉が突然口を開いた。

「あれ……なんだか懐かしい感じがする」

「えっ、懐かしいって？」

「よくわからない。今まで見たことないし、乗ったこともない。けど、懐かしい感じがする……」

もしかして、記憶は消えても、心や体は覚えているということだろうか。

いや、きっとそうだ。

誠は泉の手を掴んだ。

「最後にあれに乗ろうぜ」

「うん……」

泉も賛成して、観覧車に向かった。

運良く観覧車にはすぐに乗れた。

二人は向かい合って座り外を眺めた。少しずつ高くなり、見えなかった街も見えてきた。

「わああ」

街は綺麗に輝いていた。いろいろな色が光、住宅やお店の電気ですばいだった。

「綺麗だな」

「うん。とても懐かしい。前にもこんなふうにして見ていたみたい」

誠は泉をそつと見た。

「泉……」

泉の目は涙で溢れ、一滴一滴頬を伝って落ちていった。

「おい、泉。どうしたんだ？」

「わからない。涙が止まらない」

誠はポケットから白いハンカチを渡した。

泉はハンカチで目を拭くと、誠に向き直った。

「せつかく来たからには、楽しまないとね」

そついうと泉は再び外を眺めた。

だが、誠は泉の涙が気になり外よりも泉のほうを見ていた。

出口に向かう前に、誠はあることを思い出した。

「悪い、泉。ちょっとここで待っていてくれ」

誠は走ってあの店に向かった。

お店は今閉めようとしているところできりぎり間に合った。

望んでいるものをレジに持っていき、すぐに泉のもとに戻った。

帰りに温泉とコンビニで夕飯を買い小屋に戻った。

ろうそくに火を着け、遅くなった夕飯を食べ、一段落したときだった。

「泉。今日は楽しかったな」

「うん」

泉は満足そうな顔をしていた。

誠はさっきお店で買ったものを袋から取り出し泉に渡した。

「はい、プレゼント」

「え？」

泉はそつとそのプレゼントを貰った。

プレゼントとは熊のぬいぐるみだ。

茶色で大きさは70センチもあり、ふわふわした毛が特徴でけっこう高かった。

「これで俺がいなくても寂しくないだろ」

「うん、ありがとう」

泉はぎゅっと熊のぬいぐるみを抱きしめた。

それを見た誠は立ち上がり、家に帰った。

泉は熊の手を掴んで一緒に手を振った。

家に着くと、湊はまたもや閑々になって怒った。

どうやら、誠がいなくて寂しかったようだ。

だが、遊園地でぬいぐるみのついでに買った安物の小さなぬいぐるみを渡すすぐに機嫌が良くなった。

誠は疲れたので、すぐに自室に行きベッドに倒れた。

今日も泉の笑顔を見ることができなかった。

楽しそうではあるが、笑うことはなかった。

だんだんと本当に誠がしていることは楽しいのだろうかと不安になってきた。

それにあの涙はなんだろうか。

記憶はないから何かを覚えているはずはない。では、なぜ涙を流し

たのだろうか。

「ごちゃごちゃ考えるといつのまにか眠っており、気づいたときは朝になっていた。」

第一章 part 6：搜索

遊園地に行ってから一ヶ月が過ぎた。

肌寒さはもうなくなり、ぽかぽかする陽気な日が続いた。

授業中は泉とメールをして、平日の放課後は図書室で新聞を見て、それから小屋に向かうというのが一日の流れになっていた。

なかなか泉のお父さんのことについての記事は見つけることがなかった。

それはそうである。名前も詳しい内容も分からないので地名で探していた。

ここは桜楼町なので、桜楼という字を手がかりに探していた。

ここは平和だから桜楼の桜すら見つからない。

しかし、誠は諦めず探すことにした。

今日は午後から雨だと聞いていたので傘を持ってきた。

久々の雨で土砂降りだった。

大きな雫が音をたてて水溜りとぶつかって跳ねる。霧で前が見えづらかった。

傘もあまり意味をたたず足元が濡れているが誠は今日も小屋に向かった。

誠はノックしようとしたがその手を止めた。

なにか音が聞こえた。やかんや鍋が音をたてている。

まさか！

誠はノックもせず中に入った。

ぬいぐるみを抱いていた泉が一瞬驚いたが、すぐに胸をなでおろした。

誠の予想は的中だった。

あれは雨漏りの音だった。無理もない。このぼろ小屋も雨漏りくらいはするだろう。

窓はダンボールが少し湿っているが大丈夫だった。

雨漏りは三箇所。その下に、やかん、鍋、バケツが置かれていた。

誠は鞆を置くとすぐに出かけた。

少しして帰って来ると手には金槌、釘、何枚かの布、そして板を持っていた。

近くの木に攀じ登り屋根に飛び移った。雨漏りしているところはすぐに分かった。

誠は下に布を敷き、その上に板を置いて釘を打ちつけた。

しょうじき、これで修繕するのか分からなかった。

やったことも聞いたこともなかったので考えられるものを適当に買ったのだ。

雨は容赦なく誠の体に襲いかかり、冷たい風が吹き凍えそうに寒かった。

それを三回繰り返して雨漏りはなんとか止まった。

誠はびしょ濡れになり、泉に別れを告げすぐに家に帰った。

家に着くと、びしょびしょに濡れている誠を見て湊は驚いた。

「どうしたの？　なんでそんなに濡れてるの？」

「いや、傘が壊れてしまっただけ。こんなになってしまったんだ」

「もういいから、早くシャワー浴びないと」

「わかった」

誠はその場で軽くタオルで拭くと浴場でシャワーを浴びた。

そのあと、湊が温かいスープを作ってくれて一緒に夕飯を食べた。

「ねえ、兄さん。最近帰りが遅いけどなにをしているの？ 夕飯も一緒に食べる回数も減っているし」

湊は寂しそうな顔をしていた。やはりちょっと心配をかけすぎていたようだ。

だが、泉のことは言えない。

誠はなんとかいい訳を考えた。

「本当にごめんな。ちょっといろいろ調べものとかあつて、それを気遣ってくれる友達がよく夕飯に誘ってくれるんだよ」

「私も兄さんと一緒にご飯食べたい……」

湊はうつむいてしまった。こんなにも兄想いの妹を悲しませるとは。

「じゃ、週に三日は一緒にご飯食べよう。それならいいだろ」

「本当？ 約束だよ」

「ああ、約束する」

湊が指を出してきたので誠も指を出して指きりをした。

湊も明るさを取り戻してくれた。

次の日、誠は体の異変に気づいた。

体が重く頭も痛い。寒気もするし鼻水も出る。

もしやと思い、体温計で熱を測ってみた。予想どおり、熱は38度を超えている。

完全に風邪だ。

頭がふらふらして誠はベッドに倒れた。

これでは学校は無理だ。

そのことを湊に言うと、自分も学校を休むと言い出した。

それはさすがに恥ずかしいからなんとか断った。

帰りに飲み物を買ってくると言い湊は学校へ行った。

玄関で瞳が、

「バカでも風邪引くんだ！」

と心底驚いている声が聞こえたが怒る元気もなかった。

二人が玄関から出て行くのを確認すると、携帯を取り出し泉に電話をかけた。

泉はすぐに出てきた。

「もしもし」

「あ、泉。俺、昨日雨で濡れたせいで風邪引いたみたいなんだ。悪いけど今日そちに行けそうにない。ごめんな」

「ううん、いいよ。無理しないで。家に誰がいるの？」

「いや、いないよ」

「じゃあ……私が看病してあげる」

「は？ ちょっと待て。お前俺の家知っているのか？」

「……知らない」

「だったら来れないだろ。いいよ、そんなに気を使わなくて。こつちは大丈夫だから」

「……でも」

「いいからいいから。明日はちゃんと来るから。じゃあまたな」

「あっ……」

誠は電話を切った。

泉は何かいいたそうだったが気にすることなくおとなしく寝ること

にした。

湊の持ってきた風邪薬を飲んだからかよく眠れた。

壁にかけてある時計を見ると時刻は十一時を回っている。

携帯を見ると着信があった。

驚いたのはその回数だ。すでに百件を超えていた。

しかも、着信相手は全て泉だ。

嫌な予感がする。誠はすぐに電話をかけた。

「泉」

「誠くん、ここどこ？」

「ここどこって、お前小屋から出たのか？」

「……うん、お見舞いに行こうと思って」

嫌な予感の中。

「いいか、そこを一步も動くなよ」

誠はベッドから飛び上がると、急いで着替え玄関を飛び出した。

誠は走りながら電話をかけた。

「周りになんが見える？」

「ええと、近くに公園がある」

この街に公園はたくさんある。それだけでは検討がつかない。

「その他は？」

「えと、えと、公園の中に噴水がある」

噴水のある公園は三つ。それなら全部回ればいい。

「わかった。その公園にずっといろよ」

「うん」

誠は携帯を切り、ここから一番近い公園に向かって走り出した。

自分が風邪ということのを忘れ全速力で走った。

空は雲一つなく太陽は容赦なく照らしてくる。どんどん誠の体力は奪われていた。

一つ目の公園に着いたらすぐに中に入った。

「泉！ 泉！」

しかし、そこに泉の姿は見えなかった。

ここではなかった。

誠は次の場所に向かった。

しかし、そこにも泉はいなかった。

いるのは散歩している犬と飼い主だけだった。

ならばあそこしかない。

誠は最後の場所に向かった。

そこはここから一番遠いところだった。

だが、誠は休みことなく走った。

そのときだった。

「あっ」

足に急に力が入らなくなり、勢いよくその場に倒れた。

ようやく自分が風邪を引いていたことに気づいた。

やむをえないが少し休むことにした。その場に倒れたまま息を整えようとした。

目の前がぼやけてきて、意識が朦朧としてくる。

誠は首を振って意識を取り戻した。

足に力を入れ、ゆつくりと立ち上がった。

「泉……」

誠はゆつくりと前に進んだ。

体が火のように熱い。頭もぼーとする。

だが、足を止めることはなかった。

一つの目的地を目指して、必死に体を動かした。

この角を曲がれば公園が見える。

誠は壁に手をつきながら歩いた。

角を曲がると公園が見えた。三十分かけてようやく辿り着いた

。少し安心すると、その場に倒れてしまった。

熱が上がったようだ。汗が出て脱水症状になりそうだ。

足にも力が入らない。がくがくと震える。

「くそ……泉。……泉」

誠は腕に力を入れ、コンクリートの地面をはいずりながら公園を目指した。

手が届きそうに届かない。目もはつきりせず、すべてがぼやけて見

える。

そのとき膝から痛みが走った。どうやら膝が擦れて血が出たようだ。だが、お構いなしに前に進んだ。公園まで残り数メートル。

あと少し、あと少し。

誠は最後の力を振り絞り、その場に立ち上がった。

公園の中に入ると泉がいた。ベンチに腰かけ、携帯とぬいぐるみを抱きしめていた。

よかった。見つけた。

誠はふらふらと泉に近づいた。

「泉……」

すると泉はそつと顔を上げた。

今にも泣き出しそうな顔をしていた。目が少し潤っており、手で目じりを拭いた。

「誠……くん」

泉はすぐに近寄ってきた。

その顔を見ると誠は怒声を上げた。

「バカヤロー！ お前なにしてんだよ！ なにかあったらどうするんだ！」

泉は誠の顔を見て驚くとすぐにうつむいてしまった。

「こんなことして、なにかあつてからじゃ遅いんだぞ！ 小屋にいろって言つたろ！」

「……ご、ごめんなさい。だって……私も……力になりたかった。誠くんの力になりたかったから。……いつも、いつも、私ばかりいい思いして、誠くんに嫌われたくなかったから。……ごめんなさい」

泉は深く頭を下げた。

泣いているのか、地面にはポタポタと雫が落ちており、黒い点がいくつもできていた。

「泉……」

誠は泉に顔を上げさせそつと抱きしめた。

見つかつてよかった。どんなに心配したか。

泉になにかあつたと思うだけで胸が張り裂けそうな思いがした。

「もう……心配かけんなよ」

「……うん」

「こっちは頭痛くて倒れそうなんだ。ちょっと肩かしてくれ」

「うん」

泉は誠の腕を掴み、肩をかした。一歩ずつゆっくりと公園を出る。誠はそつと口を開いた。

「泉……俺お前のことを嫌いだなんて、一度も思ったことないぞ」
泉は顔を赤く染めながらもコクツと首を縦に振り歩いていった。

第一章 part 7：看病

家に着くと、誠は膝の消毒をし、汗だらけになった服を着替え、ベッドに横になった。

試しに熱を測ると39度までに上がっていた。

誠は大きく息を吐き、体の力を抜いた。

いつも以上に体がだるく感じる。頭も痛い。

泉はタオルを水で濡らし、誠の頭にそつと置いた。

「ありがとう、泉。ちょっと寝る」

「うん」

泉はベッドの横に正座をするとじつと誠を見ていた。

誠は気になってなかなか寝付けなかった。

「泉、そんなに見なくていいぞ。こっちも眠れない」

「うん」

しかし、泉は心配なのかなかなか目を反らそうとはしなかった。

誠は時計が目に入り、時刻が一時を過ぎていることに気づいた。

「もうこんな時間か。泉も昼飯はまだだろ。俺は作る元気ないから代わりに作ってくれないか？ お粥でいいから」

泉は首を縦に振ると、部屋から出て行った。

誠はこれで寝むれると思いそつと目を瞑った。

三十分くらいしてドアがノックされ、泉がお粥を持ってきた。

誠は体を起こすとお粥を受け取った。

湯気だったお粥はおいしく多少の元気を出すことができた。

湊と引けを取らないくらいにおいしかった。

もしかしたら、泉は料理に才能があるのかもしれない。

誠は食べ終わると、空になった器を泉に返し、再びベッドに横になった。

泉は器を持って部屋から出た。

もう一眠りしようとしたとき、突然携帯の着信が鳴った。

湊からだった。

「もしもし」

「あつ、兄さん？ やっぱり心配だったからもう今日は早退したの。今元気が出るもの買って家に向かっているから」

心臓が跳ね上がりそうになった。誠は勢いよく飛び起きた。

「は？ ちょ、ちょっと待て。別に大丈夫だから帰ってこなくていいぞ。もう平気だし」

「だめよ。風邪は油断したらすぐにぶり返すんだから。着いたらお粥でも作ってあげるからね」

「い、いや。もう食べた……」

「えっ？ なにか食べたの？ でも、栄養がつくもの食べないと。あつ、もうすぐ着くから、ちゃんとおとなしく待っててね」

そついうと湊は電話を切った。

誠は部屋を飛び出しすぐに泉のもとに向かった。

泉は台所でお皿を洗っていた。

泉は誠に気づくとお皿を洗うのを止めた。

「あ、あの、風邪は……」

「ちょっとこっち来い」

誠は泉の手を引っ張り自室に連れてきた。

部屋を見渡したが隠せそうな場所が見つからない。焦れば焦るほどいい案も思い浮かばない。

そのとき、玄関からドアが開かれた音が聞こえた。

「ただいま。兄さん、ちゃんと寝てる？」

湊が帰ってきてしまった。誠は一か八かに賭けた。

「兄さん？」

湊がドアを開けて入ってきた。

中には誠がベッドに横になっているだけで、泉の姿は見えなかった。

「お、おう、おかえり。別によかったのに」

「やっぱり心配だったからね。それより、熱は下がった？」

湊は誠のおでこに手を触れた。湊の手は冷たかった。

「まだ熱はあるわね。お粥でも作ってあげるから」

そついうと湊は部屋から出て行った。

誠は安堵の息を吐くと体を起こした。

実は、泉は布団の中に隠しておいたのだ。大きなベッドのおかげでばれずにすんだ。

泉は小さく丸まって息をひそんでいた。

「大丈夫か？ 泉」

「う、うん」

泉はそつと布団から顔を出した。

「兄さん。水分補給はちゃんとした？ 水持ってきたよ。……何してるの？」

誠はすばやく泉に布団を被せ、自分も入ろうとしたせいで布団はめっちゃめっちゃだった。

今思えば自分に入る必要はなかったかもしれない。

それよりも、泉がさつきよりも近くにいます。

自分の真横だ。そう考えるだけでちよつと緊張してしまう。

「だ、大丈夫。ちゃんと飲んだから」

「そつ。じゃあ、今からご飯作るからちよつと待っててね」

そこであることに気づいた。

そついえば、お皿を泉が洗ってそのままだった。

誠はベッドから出ると台所へむかった。

湊は隣の部屋で洗濯物を取り込んでいた。

誠はその隙に台所に向かいお皿を片付けようとした。

「兄さん？　ここにいるの？」

ちょうど湊が来てしまった。早すぎるだろ。

誠はお皿をすぐに流しに戻した。

「兄さん、何してるの？」

「いや、喉が渴いてな。飲み物を飲みに来たんだ」

誠は冷蔵庫から麦茶を取り出しコップに注いだ。

湊はそのとき流しにあるお皿に気づいた。

「あれ？　本当になにか食べたの？」

「ああ、お粥を食べたんだ」

湊はあごに指をやり考えた。

「あれ？　兄さんってお粥作れたの？」

「そ、そりゃ、お粥くらい俺だって作れるぞ」

「ふーん、そう。でも、なんで二つあるの？」

流しにはお皿が二つあった。おそらく、もう一つは泉の分だ。

「これは……二杯食べたんだ。お腹空いちやって」

「食欲はあるんだ。でも、食器は一つでいいんじゃない？」

「なんかお皿変えたくて。悪いな、俺がちゃんと洗うから」

そのときあるものが目に入ってきた。

誠の心臓が一瞬激しく動揺した。

泉の熊のぬいぐるみがソファの上に置いてある。一緒に隠すのを忘れていた。

どうにかして気づかれないように持って行かなければ。

今湊は買ってきたものを冷蔵庫に入れている。今のうちに……。

誠がソファにそっと近寄ったときだった。

「兄さん、プリンあるけど食べる？ ……何してるの？」

誠はいきおいよくソファに倒れぬいぐるみを覆い隠した。

熱があるのにいつも以上に運動している気がする。

「いや、なんか体がきつくて倒れてしまった。プリンだろ。食べる食べる。ありがと」

湊がプリンを取り出そうとしているときにぬいぐるみをソファの後ろに置いた。

なんとかばれなかったようだ。

湊はプリンとスプーンを渡すと向かい側に座った。

誠はこれからどうするか黙々と食べながら考えていた。

そのとき、湊が口を開いた。

「あれ？ 膝どうしたの？ 怪我したみたいだけど」

体が暑かったので半ズボンを履いてしまい膝が丸見えだった。隠すのを忘れていた。

「ちょっと、擦りむいてしまっとな。まあ、大丈夫だけど」

「そう」

湊は深くは追求しなかった。

誠は胸をなでおろすと、どうにか湊をここから追い出す口実を考えた。

プリンを食べ終わりテーブルに置いた。

「そろそろ寝なきゃね。安静にしないと熱が上がっちゃうよ。さ、行こ。今日はずっと看病してあげるから安心して寝ていいからね」

そんなことをしたら泉のことがばれる。それに、ソファの後ろにあるぬいぐるみも見られてしまう。

頭をフルに回転させなにか思いつかないか考えた。

しかし、風邪で熱がある頭ではなにも追いつかない。万事休すとはこのことだ。

「ほら、肩貸してあげるから」

湊が誠の手を掴んだ。やばい。

そのときだった。

突然家の電話が鳴り響いた。

「誰かな？」

湊は誠の手を離し電話を取りに行った。

チャンスだ。

誠はぬいぐるみを掴むと、ばれないようにそそくさと居間から出て行き自室に向かった。

話し声からすると電話は瞳からのようだ。

この時だけは瞳に感謝した。この時だけ。

自室に戻るとベッドの布団を剥いだ。中で泉はおとなしくしてい

た。

「お前偉いな。ちゃんとおとなしくしてたんだな」

誠は頭を軽く撫でると持ってきたぬいぐるみを渡した。

それを泉は大切に抱きしめた。

誠は湊がまだいるからしばらく押入れに隠れるように言った。

最初から押入れに入ればよかったかも。

もしものために、連絡は携帯にするように言い、泉の携帯はマナーモードにセットした。

それから、暗いから海中電灯や暇つぶしに部屋にあるゲームやマンガを渡して襖を閉めた。

「兄さん？ もう寝たの？」

誠は間一髪ベッドにもぐり込むのに成功した。

なんかだんだんと疲れてきた。精神的にも疲れている。

「今から寝るとこ。看病はいいから一人にさせてくれ」

「ダメよ。そうやって一人になったらすぐにゲームをするんだから。ちゃんと寝るまでここにいます。寝付いたら出て行くけどね」

そういつて湊はベッドの横に椅子を持ってきて座った。

泉のことが気になって寝ることなどできるはずない。

それに湊もじっとこっちを見ていて落ち着かない。

「湊、眠れない」

「そう？　じゃあ、本でも読んであげようか？」

「俺は子供じゃないぞ」

「じゃあ、子守唄？」

「同じことだ」

「じゃあどうしたらいいの？」

誠は一息吐くと、湊に向き直った。

「簡単なことだ。湊がここから出て行ってくればいい」

湊はしかめ面をした。

「なんでそうなるの？　せつかく心配してあげているのに」

誠は仕方なく一演技することにした。

「実は……俺も湊のことが心配なんだよ。俺の風邪が移って次は湊が風邪を引いたりしたら……」

誠はいかにも心配しているという顔をした。

すると湊はすぐに承諾して部屋から出て行った。

作戦成功。湊には追い出しているようで悪いが仕方ない。

いつかお礼をする心で誓った。

しかし、風邪は本当に悪くなってきた。頭が痛い。

誠は泉にしばらく寝ることを伝え、安らかに目を閉じた。

「じゃあ兄さん、私も寝るね」

夜になって湊が一言告げてきた。

「ああ、おやすみ」

誠が手を振ると、湊も振り返してドアを閉めた。

誠は起き上がり、襖を開けて中から泉を出した。

「大丈夫だったか？」

「うん」

泉は大きく背伸びをした。それからは、湊が完璧に寝入るまで待った。

小一時間して、誠と泉は玄関を出て小屋に向かった。

空は星で輝いていた。夜道を歩いているとき泉が口を開いた。

「今日は……ごめんなさい」

泉はぬいぐるみを抱きしめながら謝った。それなりに落ち込んで反省しているようだ。

「いいよ。嬉しかったぜ。泉がこんなにも俺を心配してくれて」

「……うん」

それからしばらくは沈黙が流れそのまま小屋にむかった。

小屋に着くと泉に一言告げ誠はすぐに帰った。さすがに早く帰って寝たかった。

その帰り道、泉からメールが届いた。

『早く治してね、おやすみ』

と書かれていた。

今では絵文字も取り入れるようになり、完璧に使いこなしていた。

誠は

『ありがとう。明日学校の帰りに会いに行くから。おやすみ』

と返事をして、夜空を見上げながら上機嫌に帰っていった。

第一章 part 8：冒険

泉は小屋の中で大きなため息を吐いた。

誠は今学校に行っている。小屋に来るのはいつも五時ごろ。

泉はいつもそのときまでの時間潰しに困っている。

ずっと小屋の中においても退屈でつまらない。日記も夜にしか書けない。

「はあ、誠くん……」

今の時刻は午前九時を回ったところ。まだまだ時間はある。

そこで泉は決心した。

「……どこかに行こう」

泉は立ち上がると出かける準備をした。

今、泉の冒険が始まった。

小屋に出ると、山を下り、まずはあそこに向かった。

それは誠の家だ。

すでに道は覚えた。来てみてはいいものの誰もいないから寂しい。

泉は他の場所にむかった。

行き先は決まっていなかったので、適当にぶらぶら歩いた。

平日だからか、子供はもちろん人は少なかった。ほとんどいない。

周りは自分一人である。そう考えるとちょっと怖い。

誠くんは変な人が出るかもしれないから気を付けろと言っていた。

自分のことを心配してくれるのは嬉しかった。

泉は誰とも出くわさず歩いていくと、噴水のある公園に着いた。

ここは迷子になって誠くんが助けに来てくれた場所。

「怖かったけど、その反面嬉しかったな」

あんなにぼろぼろになっても、風邪で熱があっても、必死になつて探してくれた。

誠くんがどんなに自分のことを大切にしてくれているかが伝わった。

泉はそつと目を閉じた。

風の音が聞こえる。噴水の音。木々がざわめく音。小鳥が鳴いてい

る。

耳を研ぎ澄ますだけでいろんな音が聞こえる。

泉は笑みを浮かべると公園を後にした。

次に到着したのは桜楼学園である。

なぜかこの制服を持っていると誠くんは言っていた。理由は教えてくれない。

今誠くんはここにいて授業を受けているのだろうか。

「私も、一緒に勉強したいな……」

校庭では楽しそうにサッカーをしている生徒がいる。

ちらほらと生徒が校庭でスケッチをしている姿もあった。

「入ってみようかな」

泉は恐る恐る中に入ってしまった。

授業中だからか、廊下には誰もいない。静かな雰囲気の流れていた。

「誠くん、どこかな……」

泉は適当に歩いて奥へと進んでいく。

階段を登り、上にむかって歩く。

ドアを開けた。するといきなり突風が流れてきた。

泉は目を瞑った。

風が治まり、そつと目を開けると、そこには綺麗な青空が広がっていた。

街全体が見渡せる。泉は屋上に來たのだ。

「すごい。綺麗なところ」

泉は両手を広げるとくるくると回った。

楽しくて、気持ちよくて、高まっている感情が抑えきれなかった。

泉は回り疲れるとその場に仰向けになって倒れた。

目の前で雲が流れていく。さっきとは違う、ゆったりとした風が髪をなびかせていた。

「この空、誠くんにも見せてあげたいな」

そのときだった。

誰かの足音が聞こえた。どんどんこっちに近づいてくる。

泉はいそいで隠れた。運がよく隠れそうな場所があった。そこに泉は隠れた。

すると、屋上のドアが開いて一人の生徒が入ってきた。

「ああ、授業だり。ここで寝るか」

その正体は誠だった。泉は時間を確認すると今は休み時間だと気づいた。

前に誠に学園の時間割りを教えてくれたことがあったのだ。

「誠くん、何してるのかな？」

泉はそこから動かずじつと誠を見ていた。

「いや、いい天気だな。この青空を泉にも見せてあげたいな」

誠はそう言つと仰向けに寝転がった。

泉はクスクスと笑った。

「誠くん、私と同じこと言ってる」

すると、またもやドアが開かれもう一人の生徒が入ってきた。

「兄さん！ こんなところで何してるの。もうすぐ授業始まるよ」

入ってきたのは湊だった。

「湊？　なんでお前が来るんだよ。……せつかくサボろうと思ったのに……」

「なんか言った？」

表情は笑っていても目が笑っていない。

「いや、なんでもないです……。それより、なんでここがわかったんだ？」

「兄さんの教室に行ったらいなかったの。兄さんが行くところはこしかなないもん。ほら、さっそと行くよ」

「面倒なのに」

誠は湊に手を引っ張られながら屋上から出て行った。

泉はその光景を見ておかしそうに小さく笑った。

「誠くん、あんなことしてるんだ。……さっきの可愛い子、誠くんの彼女かな？　仲良さそうだったし」

泉はまたばれないように屋上から出ると校門へむかった。

泉は上機嫌だった。

誠に会えたのもそうだが、意外な一面も見ることができたからである。

「日記のネタに使えるそうだな」

次は商店街に着いた。

もうすぐお昼だから、大勢のお客で賑わっていた。

「ここで誠くんは買い物してるのかな？ 私も買い物したいな」

泉はいろいろな店に回っていった。

始めに目に付いたのはぬいぐるみだった。かわいいぬいぐるみがたくさんあった。

「かわいいな」

泉はためきのぬいぐるみを抱きかかえると頭を優しく撫でた。

本当にかわいく、もって帰りたかった。

誠からいくらかお小遣いを貰っているが値段が高く変えそうになかった。

「残念だけど、ごめんね」

泉は名残惜しそうにぬいぐるみを見ると、手を振って店を後にした。

次は本屋に寄った。泉は一冊の料理の本を手にした。

おいしそうな料理の写真が載っており、作り方も丁寧に書いてあった。

「誠くんにつけてあげたいな」

泉はさっそく料理の本を持って他の本も見えていった。

マンガコーナーではいろいろなものがあつた。

「誠くんはマンガ読むのかな？ あ、そういえば前に貸してくれたな」

泉はマンガにはあまり興味なかったので次にむかった。

泉は次のコーナーに向かった。

一冊の本を手にして中を開くとすぐに閉じて元に戻した。

その本の中は女の人の水着姿があつたのだ。

泉は顔を赤くして心を落ち着かせた。そして、恐る恐るもう一度手にとって開いてみた。

しかし、十秒くらいですぐに元に戻した。

「……誠くん、こんなの興味あるのかな。買ったら喜ぶかな？」

泉は首を振った。

「やっぱりやめよう……」

泉は料理の本を買った、一目あの本の方を見て本屋から出て行った。

時刻は十二時を回った。

泉は目に入ったレストランに中に入っていった。

「ご注文はなんですか？」

ウェイトレスにそう聞かれ、泉は少々戸惑っていた。

こんなところに入ったのは初めてである。何を頼んだらいいのかもわからない。

「え、えと……肉じゃがで……」

そんなこと言われたウェイトレスは困っていた。

「も、もうしわけありません。肉じゃがは当店にはおいてありません」

「あ、そ、そうですか」

「メニューからお選びください」

ウェイトレスはメニューを渡してきた。

「あ、ありがとうございます。じゃあ……、このフルーツパフェで」

「かしこまりました。少々おまちください」

少しして、注文のフルーツパフェが登場した。

「おいしいな。誠くんにも食べさせてあげたいな。……誠くんは何を食べているのかな？」

そのころ誠も昼食時間だった。

誠は湊から渡されたお弁当を食べていた。

「お兄さんはいつも湊のお弁当食べて幸せですね」

瞳はあやしい目つきで言ってきた。

「なんだよその目。別に俺と湊には何にもないぞ」

「でも恋人同士に見えなくもありませんね。せつかくですし、付き合ってみたらどうですか？」

「は？ バカか！ 俺と湊は兄妹だぞ。ふざけんなよ」

誠は立ち上がるとその弾みでお弁当が倒れてしまった。

「あつ！ 兄さん何してるのー！」

「わ、悪い湊。……でも、もう食えないな」

「もうないんだよ。どうするの？」

「うっ……がまんするしかないか」

瞳はおかしくてクスクス笑っていた。

「きつとおいしいものを食べているんだろうな」

泉は食べ終わるとレストランを後にして、また歩き出した。

「次はどこに行こうかな」

泉は歩いていくと、一つの家の前に着いた。

「……懐かしい。けど、怖い……」

一つのごく普通の一軒家。

二階建ての家は誰もいないのか静かだった。人が住んでいるという気配はない。

表札には伊藤と書かれてあった。

「伊藤さんっていうのかな？ 伊藤……懐かしい響きがある」

泉はそつと玄関のノブに触れた。引っ張ると錆付いているような音が耳をつらぬいた。

「……開いてる？」

泉は恐る恐る中に入っていった。

中は蛻の殻というわけではなかった。家具も食器もテレビなどもあった。

しかし、どれも埃被っていた。床もべたべたしている。

「誰か住んでいたのかな？ でも、なんか体が覚えている」

泉はどんどん奥のほうへ進んでいった。

自然とどこがどこなのかわかった。

ここが風呂場、ここがトイレ、この角が二階への階段。

階段？

泉は階段を登っていった。そして自然とある部屋の前に立った。

他の部屋には目もくれずここの部屋に来てしまった。

「ここ、誰の部屋なのかな？」

泉はノブに手をかけるとそっと入っていった。

中は女の子の部屋のようなだった。しかし、やはり埃被ってしまっている。

泉は窓を開けた。そよ風が部屋に入っていく。

ピンクのカーテン、机、ベッド、そしてたくさんのぬいぐるみがあった。

「この人も、ぬいぐるみが好きなのかな？」

一つのぬいぐるみを手に取った。黒くかわいらしい熊のぬいぐるみ。これも頭に埃がついていた。

泉は優しく埃を叩いてあげた。

「かわいい」

泉は熊のぬいぐるみに向かって微笑んだ。

そして元に戻すと机に目が入った。

そこに一冊のノートが置いてあったことに気づいた。

泉はノートを手に取ると中を捲っていった。

そこには、日記が書かれてあった。

「この人も日記を書いてるのかな？」

一枚一枚捲っていくとある一つのページに目が入った。

「あっ……」

泉はそっとノートを閉じると机の上に置いた。

仲間がいたような感じがしてちょっと嬉しくなった。

自分と同じように日記を書いてる人がいる。

泉は大きく背伸びをすると、部屋を後にし、家から出て行った。

そのとき、風が吹いて日記のページが捲れた。そこには、

『辛いことがあっても、一人になっても、楽しいことを書いて思い出して』

と書かれてあった。

夕方になると、ようやく誠が来た。一緒に夕食を食べた。

「なあ、泉。今日はなんかご機嫌だな。なんかあったか？」

「ん？ なにもないよ」

「ふん」

「ふふ」

泉は小さく笑みを浮かべながら今日あったことを自分の日記に書いていった。

第一章 part 9：決意

「……あつた」

とうとう誠は、この桜楼町内で起きた事件に着いて書かれてある記事を見つけた。

今から五年前の六月十八日、桜楼町内に住む伊藤純一は、大量の麻薬や覚せい剤を所持し、それを高額のお金で売買をしていたことが発覚。

そればかりではなく、仕事などのストレスにより、本人も使用していることがわかった。

今では、柊警察病院で治療中。

そのあとは、柊刑務所に連行されるとのことだ。

仕事も無断欠席が多く、ギャンブルとお酒に明け暮れ、家庭内でも妻や子供に当たり暴力を振るっていたことも分かった。

近所では、毎日悲鳴や子供の泣き声が聞こえ、茶碗やガラスが割れる音が響き、それが当たり前になっていようだ。

誠はこれを読んでひどい話しだと思った。

察に捕まり、家族に手を出すなんて、人間として最低だ。

子供もかわいそうである。

これが泉でないことを誠は願った。

そして、この男が泉の父親でないことを願った。

しかし、他に事件はなさそうだった。

近くに伊藤純一の写真があったので、ばれないようにはさみで切り取ると、拝借して図書室を後にした。

そのあとは、いつもどおり泉のもとにむかった。

ポケットには伊藤純一の写真が入っている。これを泉に見せるか迷った。

まだ確信は持てない。だが、時期は合っている。

五年前に事件が起き、それが噂になって広がり、中学からいじめられるようになった。

近所の評判も悪ければ仕方ないかもしれない。

おそらく、母親も父親の暴力でこの世が嫌になったのだろう。

このように考えると、すべて辻褃が合ってしまう。

誠は不意に立ち止まった。

こんなことを調べてどうしようっていうんだ。

泉の父親に合わせるのか。

警察病院の名前をメモしてパソコンなどで調べればすぐに分かるだろう。

いや、あんな最低な父親に合わせる必要はないのではないか。

それがいいに決まっている。これ以上泉を苦しませることはない。

このまま、このままがいいんだ。

このまま幸せに……。

誠はしばらく考えたが、その場を振り返ると急いで学校へ引き返した。

小屋に着くと泉は夕飯を作っていた。

フライパンを使ってオムライスを作っていた。

誠は中に入り床に座った。

泉が誠の分の作ろうかと聞いてきたが断った。

今日は湊の料理を食べなければならない。それに、今は食欲がない。泉が夕飯を食べているときも誠は一人考え事をして、あまり会話をせずその日は帰った。

家に帰って約束どおり湊と食事をしていても、何度も箸が止まり、湊が話し掛けても誠は相槌をうつだけで内容はまったく頭に入らなかった。

それからも、誠はぼーとすることが多くなった。

ずっと悩んだ。悩みに悩んだ。

しかし、結論はなかなかでなかった。

どうしたら泉は喜ぶだろうか。

今のままがいいのだろうか。

それとも……。

誠はそつと携帯を開くと、中に入っている湊の写真を出した。

湊が中学のころ、吹奏楽の大会で最優秀賞を取ったときの写真だ。

誠はその写真を大事にとってあるのだ。

誠はまた考えた。

今の俺には湊という家族がいる。

家族がどれだけ大切かを自分は知っている。

しかし、泉には家族がない。

記憶も無くなり、家族のありがたみを知らない。

誠は携帯を閉じると小さく息を吐いた。

誠は午前中、休み時間に学校を抜け出した。

頭をすっきりさせたかった。この悩みを吹き飛ばしたかった。

誠はお気に入りの場所に向かった。

太陽に反射した泉に涼しい風が芝生を揺らす。最高の場所だった。

誠は鞆を放り投げすぐに芝生に寝転がった。

空が綺麗だった。薄いブルーが延々と続いている。その中にいくつもの白がある。

考えていたことがだんだんとちっぽけに思えてくる。

ここに来たのは正解だった。

今回も自分の思ったことが当たりだ。

誠は目を瞑り、軽やかな風を感じた。

すると、足音が聞こえた。

そつと目を開けると、太陽が逆光してよく見えない。

「……なにしてるの？」

そこにいたのは泉だった。

誠がここにいることを不思議そうな顔で見ている。

誠はそつと笑って体を起こした。

「空を見てるんだよ。泉も座れよ」

「うん……」

泉は誠の隣に座り空を見上げた。

誠も再び空を見上げた。

「ここが俺の一番のお気に入りの場所なんだ。お前と会う前も、ここでこうしてたんだ」

誠は目を瞑り、昔を思い出しながら語った。

「俺の両親は、交通事故で死んだんだ。二人は同じ会社に勤めていて、そこで出会って、結婚して俺を産んだ。二人とも仕事が大好きで、楽しそうにするんだよ。だから、ちつともかまってくれなかった。けど、その日だけ早く帰ってくるって約束して、その帰り道、居眠り運転をしていたトラックと正面衝突をした。だからかな、家族というものが、どれだけ大切かをだんだんと分かってきた。お互いに笑ったり、励ましたり、時にはケンカをしたり、でも、最後に

は仲直りをする。一人のために一生懸命に考え、その人が悩めば一緒に悩んで悩む。怪我をすれば心配するし、困ったことが助け合う。それが家族だ」

泉はじつと誠の話を聞いていた。

空を見ながら耳をかたむけていた。

そのとき、すすりなく声が耳に入ってきた。

泉は誠を見た。

誠の目から一粒の滴がこぼれた。

誠は目を瞑ると大きく背伸びをして倒れた。

「いやー、昨日寝ていないから眠い。あくびが出るぜ」

嘘だとわかるのにごまかしていた。

泉はそういうことにしようと思った。

しかし、泉は一つの言葉が脳裏に焼きついた。

家族。

家族とはどういうものなのかを知りたくなった。

私の家族は誰だろう。

家族に会いたい。

それが頭の中で響いていた。

泉は誠に聞いてみた。

「誠くん、私の家族って……誰？」

とつとつ結論を出すときが来た。

誠は体を起こしそつと目を閉じた。

大丈夫だ。

今回もあっているはずだ。

いつもそうだったように。

誠は目を開けると、立ち上がり、泉にむかつて手を伸ばした。

「ついてきな」

誠は泉の手を握ると、小屋の反対側の雑木林の奥へと進んでいった。

誠の手は震えていた。

しょうじき言つと、これでいいのか迷っている。

だが、もう引き返せない。

雑木林の中を誠が泉の手を握って導く。

泉は何も言わず、ただ引つ張られているだけだった。

あのようなように、目的の場所に歩いて行く。

もうすぐ見えてくる。もうすぐ……。

誠はある場所で立ち止まった。

泉のお母さんのお墓の前で。

とうとう着いてしまった。

二人の前には、十字に作られた木の枝が土に刺さっていた。

泉はわけがわからず誠を見ていた。

誠は少し声を震わせながら口を開いた。

「……この墓は、泉、……お前のお母さんの墓だ」

「えっ？」

泉は目を見開き驚くと、お墓に向き直った。

「この下に、泉のお母さんは眠っているんだ」

誠は目を閉じた。

これでいいんだ。これで……。

泉は墓の前で膝を着いた。

掌を土に触れそつと撫でた。手の甲に水滴が落ちていく。

「……お母さん」

記憶をなくしても、やはり心と体は覚えている。

無意識に涙が出るようだ。

わかっていなくても、体だけが覚えているのが救いなのかもしれない。

誠は泉の隣に座り肩にそつと手を乗せた。

「泉は、スカイって知ってるか？」

泉は首を横に振った。

誠はうなずくと全てを説明した。

「この島の住人は、みな一つだけ願いを叶えることができる。そのことを、みんな空からの贈り物と称してスカイと呼んでいるんだ。泉は自分の幼いころのこと、覚えてる？」

泉は首を横に振る。

「泉の記憶は、泉のお母さんが消したんだ。スカイを使って。そして、そのあとに自分の胸を指して死んだ」

泉はじつと十字架を見た。

思い出しているのだろうか。いや、覚えているはずがない。

泉の思い出はあの時から始まったのだ。

しかし、泉はまるで思い出しているように目を閉じて、そっと手を合わせた。

誠は立ち上がると、重たい口を開き泉に言った。

「お父さんに……会いたい？」

すると、泉はすぐに誠に振り返った。

できれば言いたくなかった。だが、言うしかなかった。

家族を求めている泉を裏切ることとはできなかった。

泉にも家族を知って欲しかった。

泉は立ち上がり、首を縦に振った。

「会いたい」

誠は視線を落として、ためらったが決意した。

「土曜日に会わせてあげる。約束する」

泉はそつと指を出してきた。誠も指をだし、固く結んだ。

第一章 part 10：再会

明日はとうとう泉が伊藤純一に会う日だ。

しかし、伊藤純一が泉の父親だという保障はない。

もし、会って違っていたら泉がかわいそうである。

そこで考えた末、一つだけある方法を思いついた。

しかし、その方法にはある人物が必要だ。

誠は放課後、その人物に会いに行った。

「お前か。なんのようだ？ なにかあったか？」

「ちょっと聞きたいことがあるのですが」

「よからう。中に入れ」

ある人物とはあの老人である。

何度も家を間違え、人に訪ねたりしてようやく導き出したのだ。

おかげで一時間以上もかった。

老人の家は和風の家で、敷地内には二つの家と広い庭。鯉が泳いでいる池まであった。あきらかにお金持ちの家である。

誠は奥に案内され、畳のある客間に連れてこられた。

書道に詳しくはないが、おそらくうまいのであろうと思える掛け軸が飾られており、その下に盆栽が置かれていた。

「それで、なんの用じゃ」

老人はお茶を二つテーブルに置くと、誠の正面に座った。

誠はまずあのことから話そうと思った。

「話しました。すべて……」

それを聞いた老人は、少し戸惑ったがゆっくりとうなずいた。

「そうか……。あの子はどうじゃった？」

「やはり、覚えていませんので……。でも、体と心は覚えているようでした。彼女は、泉は、墓の前で泣いていました」

「そうか……。いずれは話さなければならぬ。お前はようやった。本当にな」

老人はお茶をすするとため息をついた。

「他に、話すことはあるかな」

ここからが本題である。誠は知りたかったことを尋ねた。

「あなたはあの時の夜、親子を見たんですよね？」

「ああ、その通りじゃ」

誠は少し不安があつたが、一か八か賭けてみた。

「母親の顔を見ましたか？」

老人はその質問に多少の疑問を抱いたが、すぐに答えてくれた。

「ああ、見たとも。あれは満月だったからのう。はつきり覚えておる」

誠は安心して少し笑みが浮かびでた。

「その母親の顔の特徴を教えてくださいませんか？」

「よからう」

老人は見たことを詳しく誠に教えてくれた。

母親の特徴は絶対に必要なもので、誠は一つも聞き逃さず老人の言葉に耳を傾けた。

聞き終わると、誠は目的を果たしたので泉のもとに向かうことにし、腰を上げた。

「しかし、そんなこと聞いてどうする？」

老人は意味がわからず、誠に聞いてきた。普通ならこんなこと聞けば疑問に思うだろう。

誠は老人に正直に話した。この人も知る権利はある。

「彼女の父親に合わせるんです」

「それは、彼女は望んでおるのか？」

「……はい」

「ならば、会わせるがよい」

誠は丁寧に頭を下げた。

「ありがとうございました」

客間から出ようと襖に手を伸ばしたとき、ある疑問を抱いた。

そういえば、まだ知らないことがあった。

誠は老人に向き直る。

「あの、失礼ですが、あなたの名前は？　僕の名前は清水誠と申します」

「ああ、そうか。まだ名のつておらんかったの」

老人は笑いながら答えた。

「わしの名は、かしわばしげはる柏葉茂治じゃ」

「柏葉茂治さんですね。今日はありがとうございました。それでは」
誠は柏葉さんにお礼を言い、家を出た。

土曜日の午前。

二人はバスで隣町の柊町へ向かった。

バスに十分くらい揺られ、降りると柊警察病院へ向かった。

そこは普通の病院と変わらなかった。

違うのは、高い塀が回りに張り巡らされその上に針金があることだった。

二人は門の前で立ち止まった。

とうとう泉とお父さんが再会する。見てどう思うだろうか。

泉は壁につけられた札を見た。

「柊警察病院……」

泉は疑問を抱きながら誠を見た。

無理も無い話である。こんなところに自分の父親がいるとは思わないだろう。

だが、誠は、

「行こう」

といい、中に入っていた。

中に入ると、病院のように大勢の患者はおらず、いるのは受付の係員だけだった。

誠は一人の受付に話し掛けた。

「すみません、伊藤純一さんはどこの部屋にいますか？」

「その前に、身分証明書をお見せくださいませんか？」

誠は桜楼学園の生徒手帳を見せた。受付の人は確認すると、パソコンを使って探し出した。

「申し訳ありません。伊藤純一さんは、すでに退院しております。今では、刑務所に入っております」

「どこの刑務所かわかりますか？」

「この近くの柊刑務所です」

あの新聞どおりだった。誠は礼を言うと次に柊刑務所に向かった。

泉はなにも言わず、誠のそばについて行った。

柊警察病院から歩いて五分、とうとう柊刑務所についた。

ここに泉のお父さんがいる。親子が対面する。

だが、まだ伊藤純一が泉のお父さんとは限らない。

泉をこれ以上悲しませたくない。

ならば、まずは自分が相手を確認しなければならない。

誠は前もって考えていたことを実行しようと思った。

泉はぼーと見上げていた。

「いいか、泉。まずは俺が入る。その後、お前が入ってくるんだ。いいな」

泉はよく誠の言っていることがわからなかったが、素直にうなずいた。

「……うん」

誠は泉の肩を掴むとはつきりと言った。

「絶対会わせてやるから」

二人は中に入っていた。

誠は警察に対面をしたいと言い、中に入っていた。

病院と同じように生徒手帳を見せ、伊藤純一を指名した。

対面場所に案内され、外で泉を待たせた。

しばらくして、部屋を二つに分ける分厚いガラスの奥からお目当ての伊藤純一が出てきた。

写真で確認すると、髭や髪が伸びているが間違いなく本人だった。

口を開いたのは伊藤純一からだった。

「俺はお前のことなんぞ知らないぞ。何のようだ？」

囚人だから少し威圧感があり、退けそうになる。

しかし、誠は動じず時間は限られているのですぐに話をすすめた。

「その前に質問があります。あなたの奥さんの特徴を教えてください？」

伊藤はふんと鼻を鳴らすと他所を向いた。

「知らねーな。あいつのことなんて」

「真面目に答えて下さい！」

誠が突然大声を出すと、伊藤純一も警察官も驚いた。

伊藤純一はしぶしぶ答えた。

「髪が長くて、背は160センチくらい。鼻の横にほくろがある」

誠はそれを聞いて少し嬉しかったが悲しくもあった。

どうやら本物のようだ。柏葉さんが教えてくれた情報と同じだった。

誠は息を吐くと、真剣な目をした。

「あなたの娘さんが会いたがっています」

「えっ？」

伊藤はあまりに唐突で驚いていた。

自分の娘が会いに来るとは思わなかったのだろう。なんせ、あんなひどいことをしたのだから。

しかし、それでも約束したから会わせてやりたい。

誠は話を続けた。

「彼女は今記憶を無くしています。あなたの奥さんがスカイを使用しました。いいですか？ 決して彼女を悲しませないでください。僕は彼女を喜ばせるためにここに連れてきたんです。約束してください」

「……ああ、分かった」

誠はそれを聞くと、椅子から立ち上がり、交代に泉を入れた。とうとう出会った。離れ離れになった親子がとうとう再会した。

誠は泉を椅子に座らせると部屋から出て行った。

外で待っていると、複雑な気持ちになった。

再会した泉はどう思うだろうか。家族が囚人とは思えなかったろうし。

これからどうなるのだろうか。

泉の気持ちが気になった。誠はそっと空を見上げた。

今回は、失敗だったかもしれない。

十分くらいして中から泉が出てきた。

「泉。……ど、どうだった？」

しかし、泉は何も返事をせず、誠のそばに来て俯いたままだった。

小屋に戻っても、泉はずっと黙ったままだった。

すでに陽は暮れてしまい、夜になっても夕飯を作ろうとはせず、ただじっと座ったままだった。

大好きな熊のぬいぐるみを抱こうともしない。

誠は代わりになにか作ろうかと問い掛けたが、

「いない……」

といい、静寂な時間が続いた。

誠は後悔した。

やはり合わせなければよかった。

自分の父親が刑務所に入っているとは思わなかっただろう。

こんな泉を見るなら最初から調べなければ良かった。

泉は悲しげな顔でうつむいている。

いったい、どんな話をしたのだろうか。

そればかりが気になる。

「泉、お父さんと何を話したんだ？」

泉はそつと誠を見た。

しかし、その表情は言いたくないようだ。

誠はやはり遠慮することにし、その日はこれで帰ることにした。

第一章 part 11：月夜

朝になると、誠はすぐに小屋にむかった。

泉のことが気になり、いてもたってもいられなかった。

伊藤純一と再会し何かあったはずだ。泉のあんな表情は初めて見た。

誠は休むことなく走り続けた。

中に入ると、泉はすでに起きており朝食の準備をしていた。

「……おはよう」

泉は元気がないが、いつものように挨拶をしてくれた。

誠の分も作っており、一緒に食べることにした。

食事中も、どちらも一言も話さず、静かに朝食を消費するだけだった。

朝食が終わっても、泉はなににもせずに考え事をしているようだった。

大好きなぬいぐるみを抱き、布団の上で黙っていた。

誠はずっと泉のそばにいた。

本当に心配だった。これからずっとこのままなのだろうか。

誠は首を振って考えを否定した。

いつか元に戻るはず。そして、これからも泉は自分のそばに
いるはず。

二人はなにもせず、ただ一緒の空間にいただけを過ごした。

とうとう日が暮れてしまった。

外の景色がだんだんと暗くなる。月が見え始め、星が瞬き始めた。

誠はとうとう我慢しきれず、泉に問い掛けた。

「なあ、泉。 なにかあったんじゃないか？ いったいどうしたんだ？」

泉はそつと誠を見た。悲しげな目を誠にむける。

すると、泉は降参したのかようやく口を開いた。

「来て……」

そついうと泉は立ち上がり、小屋から出て行った。

誠は言われるままに後ろをついて行った。

空は満月だった。雲もなく星がよく見える。

二人は黙ったまま、暗い中歩いていった。

泉はある場所で立ち止まった。

そこは泉のお母さんが泉にスカイを使った場所だった。ただの偶然だろうか。

泉は誠に背を向けたまま、そつと口を開いた。

「ねえ、誠くん」

この言葉が、二人の終幕を告げる始めの言葉であり、そのカウントダウンが始まったことを、誠は思いもしなかった。

「私たち、ここで出会ったんだよね。そして、私のお母さんがスカイを使った場所」

誠は素直にうなずいた。

「ああ、泉との時間はここから始まったのかもしれない」

「私、誠くんとここで出会って……本当によかった」

泉は誠に向き直った。満月なのでよく顔が見えた。

誠はじつと泉が口を開くのを待った。

すると、泉は突然頭を下げてきた。

「ありがとう。本当にありがとう。私を助けてくれて。誠くんと一緒にいれたときはすごく楽しかった。毎日私に会いに来てくれて、

いろんなものを買ってくれて、両親にも会わせてくれて。私、こんなに幸せな気持ちになったの、初めてだった」

誠は意味が分からずただ呆然と聞いていた。

泉の語り方はまるでもうすぐ別れるようだった。

泉は顔を上げると思い出しながら語った。

「風邪を引いたときはごめんね。どうしても看病したくて。お世話になってるんだから、そのときくらい恩返ししなくちゃって思ってたんだ。昔からけっこう料理は得意だったんだよ。お粥くらい簡単に作れるしね。逆に迷惑かけちゃったけど。でも、あのときちょっと嬉しかった。誠くんは、本当に私のことを心配してくれているんだって」

そのとき、誠は一つの仮説をたてた。もしかして……。

「泉、まさか、記憶が……」

泉は小さくうなずいた。

「やっぱり遊園地に行ったときが一番楽しかった。誠くんジェットコースター嫌いなんだね。ごめんね。それに、あの観覧車も楽しかった。昔ね、お父さんとお母さんと一緒に乗ったことがあるんだ。すごく楽しくて、あの景色を思い出せてよかったよ」

「ちょっと待て。泉、どうやって記憶が……」

泉は夜空を見上げながら語った。

「お父さんがスカイを使っただの。私の記憶を甦らせてって。刑務所ではスカイを使っちゃいけないんだね。お父さん、使ったら近くにいた警察官にすぐに奥に連れて行かれた。それで……、殺されちゃったみたい……」

伊藤純一が殺された？ 伊藤純一はスカイを使ったら殺されると知っていたのだろうか。

もし知っていたのなら、最後に父親らしいことはしている。

しかし、これで泉の家族は完全にこの世から消えたことになった。

それよりも、気になることがある。

誠はそつと息を吐いて俯いた。

「そつか……、記憶が戻ったか……。やっぱり行かないほうがよかったよな。嫌な記憶が甦って」

記憶が甦ることは、泉がいじめられていたときのこと思い出す。

それが気がかりだった。

しかし、泉は首を振った。

「そんなことない。確かに苦い記憶も甦った。思い出したくない記憶も。けど、楽しいことも思い出した。本当にありがとう。……誠……くん」

そのとき、泉の目から涙が流れた。

泉は溢れてくる涙を何度も拭いていた。

少しずつその量も増え、嗚咽も聞こえてきた。

「本当に……楽しかった。誠くんと出会えて……本当に良かった。あんなお父さんだけど……会わせてくれた。……私……私、絶対忘れないから……。誠くんとの思い出は、絶対……記憶が消えるようなことがあっても……忘れないから」

「泉……」

誠は泉に近寄るとそつと抱きしめた。

「泉、お前なに言ってるんだよ。これからだって、俺たちずっと一緒だろ？ もっとたくさん思い出作ろうぜ」

泉は顔を誠の胸の中にうずめた。

「誠くん。私……お父さんとお母さんに会いたい。また……あのときみたいに三人で……」

「でも、泉の両親は死んでしまった。これからは俺が家族だ。それでいいだろ？」

「誠くんは知ってるでしょ？ 家族がどれだけ大切で、温かくて、楽しいものか。私がいじめられていたとき、慰めてくれたのはお母さん。酷いときもあったけど、楽しいときを作ってくれたし、記憶を甦らせてくれたのはお父さんだった。あの二人はかけがえのない

たった一つの大事な存在。私は、もう一度会いたい」

「でも、どうやって会ったよ。スカイは死人を蘇ることはできない。それに、俺と一緒に嫌なのか？」

その質問に、泉は大きく首を振って否定した。

「私だって、誠くんとずっと一緒にいたいよ。離れたくない。ずっと……ずっと、一緒にいて、たくさんの思い出を作りたい。……でもね、これ以上迷惑かけられないよ。私は十分に助けられた。本当によかった。私を助けてくれたのが誠くん」

すると、泉はそつと目を閉じると顔を近づけてきた。

そして、誠の唇と自分の唇をそつと重なり合わせた。

泉の体温が伝わる。

少ししてそつと離れた。

泉の顔は赤く頬が染まっていた。

「これが、今できる精一杯の感謝のしるし」

そして、泉は誠から数歩離れると、自分の胸の前で手を組みそつと目を閉じた。

「泉、まさか……」

「お願い……」

「やめろ、泉！」

「私を、両親のもとに連れて行って」

願った瞬間、泉の体が光り始めた。

青白い光がだんだんと大きくなっていき、泉の体を包んでいく。

誠は泉の肩を掴むと強く握り締めた。

「待ってくれよ！ 頼むから待ってくれ！ 行かないでくれ！ 俺を一人にしないでくれ！ 泉！」

「誠くん……」

「迷惑かけていい。これから一緒にいていいから！ 俺が泉を守るから！」

泉は小さく首を横に振った。

「毎日楽しくする！ 泉の思い通りにするから！ もう怒ったりしないから！」

泉は流れる涙を抑え、首を振った。

「たくさんぬいぐるみ買ってあげるから！ なんでも好きなもの買ってあげるから！」

泉は涙を拭くと、目を開けて必死に誠の顔を見た。

「……泉！……泉！」

誠は止まらない涙を流しながら必死に泉の体にしがみ付いた。

泉との過ごしてきた時間が頭の中で繰り返されていた。

楽しいときが、幸せだった日々が終わりに近づく。

泉の体がどんどん冷たくなっていくのがわかる。

誠はがむしゃらにどうにかしようとした。

泉は目を瞑るとそつと口を開いた。

「誠くん、……ありがとう。私、楽しかった。本当に幸せだった」

そのとき、泉は誠を見て口元を緩ませた。

誠は泉の顔に釘付けになった。

笑った。

泉が笑った。

最後に笑ってくれた。

見せることのなかった。

見ることができなかった笑顔を。

泉は最後に見せてくれた。

すると、泉ははっきりと言った。

「私の本当の名前はね……みやこ京」

「京……」

泉は笑顔を浮かべながらそつとうなずいた。

青白い光はどんどん収まっていき、最後には消えてしまい、泉はその場に倒れた。

「泉！ 泉！」

誠は泉を抱きかかえると、泉の顔を見た。

その顔は今でも幸せそうに笑っていた。

体は死人同様に冷たく、どんなに呼んでも泉は目を開けなかった。

「泉——！」

第一章 part 12：日記

泉が死んだ。

誠の頭の中では毎日そればかりが響いていた。

認めたくなくても、認めざるおえない真実。誠は放心状態に陥っていた。

学校もサボって街をぶらついている。

湊も怒るところか心配していたが、誠は何も言わずそっとしてほし
いと伝えた。

誠はいつもの場所に向かい、そして、仰向けに倒れた。

空は何事も無いかのように青く、気持ちのいい風が吹いていた。

誠はそっと目を閉じて考えた。

会わさなければよかったのだろうか。

しかし、泉は喜んでくれた。

もしかすると、あれは嘘で笑ったのかもしれない。

自分に気を使って……。

でも、あの笑顔は本物のように感じた。

間違いなく心から笑ってくれた笑顔だった。

誠は不思議とそうだと分かった。

あの笑顔は、本物だった。

すると、誠の目すじから一粒の滴が流れた。

今の自分の心を癒してくれる者、満たしてくれる者は誰もいない。

心の奥底に底の無い大きな穴が空いたような気持ちだ。

この穴を元どおりにする人物は、今の自分には一人しか思い浮かばない。

「泉……」

あの後、誠は泉を母親の隣に穴を掘り、その中に埋めてあげた。

土を被せるたびに涙が落ちて、視界が滲んで泉の顔がよく見えなかった。

最後に顔に被せるときは、胸が締め付けられるくらいに苦しかった。

綺麗な顔をしていた。

そして、何も思い残すことがないかのような顔をしていて、死んで

はおらずただ眠っているだけのようだった。

「……さようなら、泉。俺も楽しかったぜ」

最後にそう別れを告げ、そっと土を被せた。

それから誠は、しばらくその場に座り込みじっと二つの墓を見ていた。

とうとう夜が訪れた。一日が経つのは早い。

暗闇の中、後ろから足音が近づいてくるのが分かった。

誠は振り返らず、立ち止まるのを待った。

「終わったようじゃな」

柏葉は墓の前に膝を着き、そっと手を合わせると目を閉じた。

誠はさっと立ち上がって頭を下げた。

「すいませんでした！ 俺、俺、彼女を……救ってやれませんでした。……俺、泉を……泉を……喜ばせることができなかった……」

渴ききっていたと思っていた誠の目から再び涙がこぼれた。

誠は膝が折れ、地面に手をつくとうずくまった。

柏葉は目を開けると、そっと口を開いた。

「おぬしはよくやった。彼女のためによくやってくれた。きっと喜んでゐるはずじゃ。彼女が死ぬまぎは、何と言つとつた？」

誠は涙を袖で無理に拭うと答えた。

「……ありがとう……幸せだったって……」

老人はそつとうなずいた。

「ならば、十分じやろう。ほれ、いつまでも悲しんでおらんで、最後くらい笑つてやれ」

誠は腕で涙を拭き、顔を上げると無理矢理笑顔を作った。

「泉、俺忘れないからな。お前と過ごした時間は決して忘れない」

誠は頭を下げると墓に背を向け行つてしまった。

帰る途中、泉の小屋が目に入った。

あの小屋にも泉との思い出がたくさん詰まっている。

最後に見ておこうと思い、ドアを開け中に入った。

ろつそくに火を点け、あらためて中を見渡した。

一つ一つが泉との過ごしてきた時間を思い出させてくれる。

家具も必要品もすべて買ってあげた。十分に住める環境になった。

誠は熊のぬいぐるみを抱いて布団の上に座った。

誠はぬいぐるみを抱きながら数々の場所を見て泉を思い出した。

料理をしている泉。

誠は料理道具を見ると、自分の口にそつと触れた。

「泉の料理はおいしかったな。また、食べたいな……」

携帯でテレビを見ている泉。誠は携帯を手にとった。

「あの占い本当に当たったからな。でも、最高の思い出を作ってくれた……」

布団で気持ち良さそうに寝ている泉。

誠は布団に触れるとそつと擦った。

「一度一緒に寝たことがあったな。すごく緊張したな。でも、初めて泉の気持ちがあったのは、このときだったな……」

ぬいぐるみを抱いている泉。

誠はぬいぐるみを自分の目の前に持ち上げた。

「お前は幸せもんだな。あんな優しいやつが主人で。未だに新品同様綺麗だな。……あいつの一番に宝ものなんだからな、絶対壊れん

なよ」

そして、日記を書いている泉。

そこで誠は日記の存在を思いだした。

「日記……」

誠は立ち上がると日記を探し始めた。

「ない！ ない！ くそ！ どこにあるんだ！」

あっちこっち探し回ると、日記は布団の下に隠されていた。

表紙にはちゃんと名前も書いてある。

誠はテーブルの上に置くとそつとページを捲った。

四月八日。

誠くんが助けてくれた。他人の私を助けてくれた。誠くんはとても優しく接してくれた。いろいろなものを買ってくれて喜ばせてくれた。すごく嬉しかった。

四月十一日。

誠くんが初めて小屋に泊まった。誠くんが自分を大切にしていると言ってくれた。とても嬉しかった。誠くんは、ただ一人の家族のように感じた。

四月十二日。

遊園地に行った。誠くんは楽しそうにしていた。いろいろな乗り物に乗り、誠くんはジェットコースターに乗ったら怖がっていた。最後に熊のぬいぐるみをプレゼントしてくれた。私の一番の宝物。

四月十九日。

誠くんが眠かったのか、なかなか起きなかった。学校を遅刻した。寝顔を見られてちよつとラッキーだった。

五月十三日。

小屋が雨漏りで大変だった。けど、誠くんがすぐに治してくれた。誠くんは雨でびしょ濡れになっていた。誠くんはなんでもできてすごいと思った。

五月十四日。

誠くんが風邪を引いた。なんとか誠くんの看病をしようと誠くんの家に向かった。途中で道に迷ってしまった。でも、すぐに誠くんが迎えに来てくれた。すごく嬉しかった。誠くんは怒ったけど、心配してくれていた。そのとき、私はこんなにも大事にされていると思えた。誠くんは優しい。

五月十六日。

誠くんの家で写真を撮った。誠くんは楽しそうに笑っていた。その写真を見て、誠くんはいつも自分のそばにいてくれた。すごく安心できた。

六月六日。

誠くんがお母さんに会わせてくれた。誠くんはお父さんに会わせてくれると約束してくれた。誠くんは涙を流していた。悲しいことがあったからだと思う。慰めてあげたかった。でも、自分にはできなかった。だから、悔しかった。

六月七日。

誠くんがお父さんに合わせてくれた。そして、私の記憶が甦った。昔のことをいろいろ思い出した。誠くんはずっと心配してくれた。私は、覚悟した。

そこで日記は終わった。

他にも毎日日記は書かれてあった。

誠の手は震えていた。

日記の上には何粒もの小さな丸が落ちて染みになった。

「……あのバカ……自分のことじゃなく、俺のことばかり書きやがって……」

誠は日記を握り締めた。

くしゃくしゃになろうと構わなかった。

力強く握り締めた。

「……泉、……泉」

すると、日記から一枚の紙が出てきた。

1ページを半分に折り曲げてあった。

誠はそれに気づくと手を伸ばし広げて読んでみた。

そこにはこう書かれてあった。

『誠くん、これと呼んでいるって言うことは私の日記見たんだね。絶対見ちゃダメって言ったのに。でも、見られるのは覚悟してた。だから、この手紙を書きました。』

本当にありがとう。言いたくても言い切れないほど感謝しています。何か恩返ししたいけど、今の私にはなにもできません。ごめんなさい。でも、誠くんと過ごした日々は忘れない。なにがあっても絶対に。あんなに楽しかったのは久しぶりだった。本当に幸せだった。両親にも会えたし。とても嬉しかった。

最後に誠くんに伝えることがあります。誠くんはこれだけは忘れないで欲しい。この先なにがあっても。

私は、誠くんのことが好きです。

こんなに人を好きになったのは初めてです。もつと一緒にいたかった。この想いを直接伝えたかった。たくさんの思い出を一緒に作っていたかった。

でも、言えば覚悟が無くなると思ったから手紙に書きました。覚え
てくれたら、きっと安らかに眠れます。本当にありがとうございます』

手紙には、ところどころ染みになっていた。

泉は泣きながら書いたようだ。

この時点で、死ぬ覚悟をしていたようだ。

「泉……」

誠は手紙を強く握りしめた。

ぶるぶると震えていた。

泣いた。声を上げ、おもいつきり泣いた。

声が枯れようと、涙が涸れようと泣き続けた。

こんなに悲しいのはあの時いらいだった。

その泣き声は、一晩中小屋から響き続いた。

朝になって小屋を出ると、誠は大きく息を吐き、透き通ったよう
な綺麗な空を見上げた。

「お前の分まで生きるからな。泉」

誠は小屋を一目見ると、ゆっくりと山を降りていった。

第二章 part 1：読心

誠は今日もあの小屋に向かった。

日課というものはなかなか改善することができない。ついつい足を運んでしまう。

朝から湊に怒られながらも、誠は途中で行き先を変え山に登った。

頂上に着くといつものように綺麗な透き通った泉があり、その近くにベンチがある。そして、緑一色の芝生。

誠はそつと空を眺めた。

今日もいい天気だった。

太陽が眩しく雲一つない。

なにも変わらない日常と風景。

誠は大きく背伸びをした。

やっぱりここは落ち着く。最高の場所だ。

そして、そつと小屋のほうを振り向いた。

「泉……」

泉がいなくなっても小屋の中はそのままにしておいた。

柏葉さんも快く承諾してくれた。

誠は小屋の中に入った。

今にも泉がいそうで、料理をしていたり、宝物である熊のぬいぐるみを抱いてそうで。

だが、中には誰もいなかった。

誠はため息をついた。

毎日のように通い、何度も中に入って確かめてはがっかりする。

その繰り返し。

なかなか克服できない。いつまでも諦めることができない。

この先これが続けるのだろうか。

誠は、テーブルに置いてある日記、携帯、ぬいぐるみ、そして写真を見た。

小さな写真立てに入れてある写真を掴むと泉を思い出す。

誠は目を閉じた。

泉の笑顔が頭に浮かぶ。

優しいような、そして嬉しそうな笑顔。

いろんなことが思い出される。

始まりから終わりまで、すべてが甦る。

すると、誠の頬に一滴の滴が流れた。

ああ、まただ。

今日も出てきてしまった。

誠は写真を置き、手で無理矢理拭うと小屋を後にした。

午後からは授業を受けた。

しかし、内容はさっぱり頭の中に入らない。

ぼーと過ごして刻が経つのを待つだけだった。

誠は携帯を開いた。

受信ボックスを開け、泉からのメールを見た。

他愛もない雑談が続いている。

一つ一つ見ていると泉の顔が出てくる。

毎日誠が学校に行っているときはメールしてきて返信が大変だった。

ボックスの中は泉のメールで溢れている。

誠は携帯を閉じ、そっと空を見上げるとため息を吐いた。

放課後。

誠は屋上に来た。

自分でもわかっていた。

泉のことはそろそろ振り切らなければならない。

忘れるつもりはないが、いつまでも落ち込んでいるわけにはいかない。

今日で振り切るんだ。

誠は大きく息を吐き、気持ちを入れ替えようとした。

そのとき、後ろから声が聞こえた。

「あんた、まだ振り切ってないわね」

誠は声がした方向に振り向いた。

そこには一人の女子生徒がいた。

髪が長く、ぱつちりとした瞳、可愛らしい顔をしている。

どこかで見た覚えがあった。

「お前、誰だ？」

「私は朝倉香。あさくらかおり あんと同じクラスよ。清水誠くん」

だからか。同じクラスなら一度くらい見たことがあるだろう。しかし、話すのは初めてだった。

「振り切ってないってどういうことだ？」

香はにやにやと笑みを浮かべながら誠の隣にきた。

「まだ彼女のことを振り切ってないってことよ。そのようだ、あと一年はだめね」

誠は腹がたってきた。

いきなり話し掛けてきては失礼なことを言う。

すると、

「そんなに怒んでもいいでしょ。本当のことなんだから。嘘だ
と思うなら自分の心に聞いてみなさい」

確かに少しは振り切っていないかもしれない。

そこで、誠はあることに気づいた。

「お前、どうしてさつき俺が怒っているってわかったんだ？ それに、彼女って言ったよな」

香はまた笑みを浮かべると出口に向かって歩き出した。

「その答えは自分で考えなさい。じゃあね、また会いましょう」

そういうと、香は扉を開け屋上から出て行った。

誠は試しに考えてみた。

しかし、さっぱり答えがわからなかった。

それからも誠は、毎日のように屋上に来ては泉のことを振り切ろうとした。

悔しいがあの香が言ったとおりまだ完全には振り切っていないようだ。

なかなか振り切れない。

それほど泉と過ごした時間は大切だということだろう。

すると、またもや朝倉香が来た。

「やっぱり、まだ振り切っていないみたいね」

香はにやつきながら誠に近づいた。

誠は香のことは無視することにした。

「無視するなんてひどいわね。せっかく手伝ってあげようと思ったのに」

「よけいなお世話だ。それで、ここには何しにきたんだ？」

「決まっているじゃない。空を眺めにきたの。いい天気よね」

香は空を見上げ大きく伸びをした。

「ねえ、その彼女のお墓はどこにあるのか教えてよ」

「は？　なんでお前に教えないといけないんだよ」

すると、香はなにかわかったのか突然悪そうな笑みを浮かべた。

「ふ〜ん。なるほど、あの山の小屋の反対側ね」

誠は驚いた。

どうして香は今自分が考えたことがわかったのだ。

まるで、心を読まれたようだ。

香は誠に手を振ると屋上から出て行った。

まさか！

悪い予感がした誠は屋上を飛び出した。

誠は急いで香を追いかけた。

しかし、校庭に出たときには、すでに香の姿は見当たらず、どこにもいなかった。

「くそ！」

誠は泉の墓に向かった。

もう絶対に行かないと誓ったが行くしかなかった。

一度も休むことなく走り続け息が苦しかった。

汗をかきながら走っていくと、墓のしるしである十字の枝が見えた。

それと一緒に人影も見えた。

その正体は香だった。

どうしてここだとわかったのだろうか。

すると、香は手を伸ばし十字に触ろうとしていた。

「やめろ！」

しかし、香は触ってしまった。

誠が墓の前に着いたときにはすでに離していた。

誠に気づいた香はそつと振り返った。

「てめえ……なにしやがった！ 泉の墓になにしたんだ！」

香は口を閉じたまま、再び泉の墓を見た。

「おい、答える！」

「……あんた、すごく感謝されてるんだね」

「……え？」

「京、いや、泉は、誠がいつまでもへこたれているから怒っているよ。さつさと元気出して、真面目に授業受けろってさ。泉はそう言ってる」

誠は香が言っていることがわからず、呆然と聞いていた。

「お前……いつたい」

「私、心が読めるんだ」

「心？」

「じゃ、私は行くね。もちろん、この墓のことは誰にも言わないよ。泉のこととも小屋のことともね。私、けっこう口堅いほうだから」

そう言っ て香は来た道に戻って行ってしまった。

本当に泉がそんなことを言っ たかは分からなかった。

しかし、そのとおりの感じはする。

泉が今も生きているならそういっ たらう。

誠は泉の墓を見た。

そこには、泉の笑っ た顔が映し出されたかのように見えた。

「ありがとう、泉」

誠は十字の枝に触れて礼を言っ と来た道を引き返した。

第二章 part 2：友達

今日も誠は屋上にいた。

すでに泉のことは振り切ったつもりだ。もう気持ちは入れ替えている。

今回はある人物が来るのを待っているのだ。

そのとき、後ろから扉が開く音が聞こえた。

どうやら、お目当ての人物がきたようだ。

「あれ？ もう完璧に振り切っているようね。でも、なんでここに
いるの？」

お目当ての人物とは香のことだ。

誠は空を眺めるのを辞め、香に向き直った。

「お礼を言おうと思ってね。ありがとな」

「どういたしまして。用はそれだけ？」

「あと、お前スカイを使ったのか？」

誠がそう言うと、香は笑みを浮かべ、空を見上げながら口を開いた。

「ええ、そうよ。私は全てのものの心が読めるようになりたいって願ったの。まさか、まだ知らない人がいるとは思わなかったけど」

そこで、誠は香の言葉に違和感を覚えた。

「他にも、お前が心を読めるってことを知っているやつがいるのか？」

「その通り。用はこれで終わり？」

「なにかお礼がしたい」

「お礼？」

「泉のことで振り切ることができたのはお前のおかげだ。なにかお礼をさせてくれ」

香はしばらく考えると、にやつきながら誠に近づいてきた。

「それなら……私と友達になってよ」

「友達？ そんなことでいいのか？」

「そう。絶対に裏切らず、いつでも私の味方でいること。これでいいわ」

誠は少し戸惑ってしまったが、香がそういうのなら断る理由もない。

「わかった。いいぜ」

そう言つと、香はにこつと笑い、嬉しそうに校庭を眺めた。

「ふふ、ありがとう。これからが楽しみだな」

誠は香が喜んでくれて少しは満足した。

これが、ある事件に巻き込まれることも知らずに……。

香と友達になってから、誠は精神的に疲れてきた。

泉との約束どおり、ちゃんと学校に行つて授業を受けている。

そのかわり香とも会うことになる。

そして、午前最後の授業を終えるチャイムが鳴った。

「誠……！」

またである。

「ほら、昼休みだよ。お弁当食べよ」

授業が終わつた瞬間、香は自分の席からすぐに誠の席に来た。

誠は机につつぶせになりながら香の声を聞いていた。

「なあ、朝倉」

「香だよ」

誠はしぶしぶ了解した。

「香、そうやってすぐに俺のところに来て、昼食に誘うのは辞めてくれないか？」

「どうして？ 別にいいじゃない」

「だったら俺の心を読んでみる」

すると、香は誠の心を読み始めた。そして、すぐに納得した表情になった。

「なるほど、そういうことが」

「わかったら少しは考えてくれよ」

「つまり、恋人同士になったらいいんだよね」

「なんでそうなるんだよ……」

誠が考えていたのはこうだ。

そんな大声で誘ったら、みんなの注目を浴びることになるし、俺たちが付き合っていると誤解されてしまう。

それをまるでわかっていない。

しかも、最初に会ったときと比べて、性格が少し変わったような気がする。

「そんなことより、早く屋上行こう」

香に手を引っ張られ、誠はいつものように屋上に向かった。

すでに、屋上には湊と瞳がいた。

「遅いですよ。二人とも何してたんですか？」

瞳が笑いながらからかってくる。いつものことだから気にしなくなっただ。

「それより早く食べましょう。お腹空いたよ」

湊の一言で、コンクリートの床にブルーシートを敷き、みなその上に座った。

香のことは、湊たちは知っていた。

以前、誠がなかなか屋上に来ないので、湊たちは様子を見に教室に来たのだ。

そのとき、香が誠に持ってきた弁当を無理矢理食べさせていたのだ。嫌がる誠を無視して香は箸を突きつける。

その場面を湊たちは見ていた。

それから誤解を解こうと誠はいい訳をして、最後には一緒に食べる
ことになったのだ。

「はい、兄さん」

湊が誠に弁当を渡してきた。誠はそれを受け取った。

「ありがとう、湊」

すると、香も弁当を差し出してきた。

「はい。こっちも食べて」

あれから香も弁当を作ってくるようになった。

嬉しいことだが、そんなに食べられない。

「なあ、やっぱり交代制にしてくれないか？」

「だめ。毎日作ってあげたいの」

香はすぐに否定した。

「じゃあ、湊……」

「私も毎日作りたい」

どうやらこれからも二つの弁当を食べなければならないようだ。
太ってしまったらどうしようか。

「ところで」

瞳が突然口を開き、全員が瞳に注目した。

「二人は付き合っているんですか？」

その言葉で誠は咽てしまった。湊からお茶を貰い落ち着かせた。

「いきなりなに言ってたんだよ！ そんなわけないだろ」

「でも、仲良いですよね？」

「そりゃ……友達だからだよ。そんなの普通だろ」

「普通には見えませんが」

すると、香はじつと誠を見ていた。

「な、なんだよ」

「いや、誠が私のことどう思っているのかなって」

「ちょ、ちょっと待て！ お前、勝手に俺の心読んだりすんなよ！」

「どうしようかな」

冗談ではない。人にはプライバシーというものがある。

というか、自分の秘密がばれてしまう。

「俺の心読んだら絶交だからな」

「じゃあ、誠くんの心呼んで何か秘密をしゃべってもいいんだね？」

それを聞いて、誠は抵抗できなくなった。

「……でも、勝手に読むのはやめてくれ」

「わかってるよ。できるだけ努力する。止めることはできないからね」

それから、四人は楽しい時間を過ごした。

昼食が終わり、教室に戻ろうとした。

途中で湊たちと別れ、自分の教室に向かう。

「ああ、腹が窮屈だ」

「男の子だったらもっと食べなさい」

「俺太りやすいんだ」

「問答無用。二人のかわいい女の子の手作りが食べられると思うだけで感謝しなさい」

「はいはい」

すると、突然香はその場に立ち止まり、蒼白な顔をしていた。

少し先を歩いていた誠は振り返った。

「おい、どうしたんだ？」

誠が声をかけると、香はすぐに明るさを取り戻し、笑顔になった。

「ううん。なんでもない」

そう言って、香りは誠よりも先に進んでいった。

「どうかしたのか？　おい、待てよ」

誠は香を追いかけた。

周りには、一人の生徒がじっと二人を見ていた。

そして、周りにいる生徒もこっそりと見ていた。

第二章 part 3：動物

香の様子がおかしいと思った日から数日が経った。

香はすでに元に戻っており、元氣良く話し掛けてくるので、そんなに気にすることもなかった。

放課後。一緒に帰っているときに、香は口を開いた。

「ねえ、誠。明日なんか用事ある？」

「明日？ いや、特にないな。午前中はずっと寝ていようと思ったけど」

「だったらさ、動物園行こうよ」

「はあ？ なんで動物園なんかに行くんだよ。しかもお前と」

「いいじゃん。一緒に行こう」

「それじゃあ本当に恋人同士じゃねーか。他の友達と行けよ」

すると、香は一瞬悲しげな表情になった。しかし、すぐに笑顔を取り戻した。

「私は誠と行きたいの。ね？ お願い」

香は誠に向かって手を合わせてお願いした。

誠は一息吐くとしぶしぶ了承した。

「わかったよ。そのかわり、ちゃんと弁当作れよ」

「うん」

そして、約束の日。

誠はベッドの上で寝ていた。

すると、上の方から声が聞こえた。

「起きて……。起きなさい……。起きないといたずらするよ」

誠は重たい瞼をそつと開けた。

ぼやけた視界が少しずつ見えてくる。

元に戻ったとき、誠の心臓は一瞬跳ね上がりそうになり、勢い良く飛び起きた。

目の前に香がいたのだ。

「おはよう。お目覚めはどうか？」

「な、なんでお前がいるんだよ！ それよりも、何で俺の家知ってるんだ？」

「前に心読んでしまったの。うつかり覚えちゃった。それより、早く準備して行こうよ」

誠は眠たい目を擦り、しゅしゅベッドから降りると、出掛ける準備をした。

二人は電車に乗り、揺られること十分くらいで目的地に着いた。

「ああ、なんか疲れた。もう帰るか」

「今来たばかりでしょ。ほら、もうすぐ動物たちに会えるよ」

「でもよ、なんでそんなに動物園に行きたいんだ？」

「だって、動物ってかわいいじゃん。それに……動物は裏切らないから……」

「え？ なに？」

「うっん。なんでもない。ほら、早く入ろう」

香は誠の手を引っ張ると中に入っていた。

「見てみて。かわいいよ」

香は大きな庭で木に生えている葉を食べているキリンを指差して言った。

「ねえ、知ってる？ キリンの角って四本あるんだよ」

香は誠に問い掛けた。

「四本？ 寝ぼけているんじゃないのか？ どう見たって二本だろ」

「わかってないな。その二本の後ろにもう二本あるんだよ」

「マジかよ！ でも、見えないな」

「ここからじゃわかんないね。次あっちに行こう」

次は岩山に群がっているサルを見た。有名なニホンザルだ。

「かわいいね。たくさんいるよ。飼ってみたいな」

「サルのどこがいいんだ？ それにしても、あいかわらずどういつもこいつもお尻が赤いな」

「おサルさんのお尻が赤いのはね、そこだけ皮膚が薄いからだよ。つまり、あれは血液が見えてるんだ」

「そうなのか？ じゃあ、サルの弱点はあそこだな」

誠はいかにもいじわるそうな笑みを浮かべた。

「い、いじめないようにね……」

それからいろいろな動物を見ていった。

香はよく動物のことを知っている。見るたびにいろいろと教えてくれた。

動物に触れる体験コーナーで、誠がウサギの耳を持って持ち上げたときは、香は怒鳴り声を上げた。

ウサギの耳はとてもデリケートで、よくアニメなどで持ち上げるシーンがあるが、ウサギはとても痛がっているらしい。

香は誠の代わりにウサギに謝りながら優しく撫でていた。

正午を回ったところで、近くのベンチに座り昼食にした。

「今日も腕によりをかけたんだからね。味わって食べてよ」

香はお弁当箱を広げると、紙皿とお箸を誠に渡した。

「ありがとう。うまそうだな」

誠が箸で玉子を掴もうとすると、香が小さな声を上げた。

「あつ、いいこと思いついた。私が食べさせてあげようか？」

「は？ いいよ。自分で食べる」

「そんな遠慮なくていいのに。こんなチャンスいつ来るかわかんないよ」

「だからいいって」

「ほら、アーン」

香は玉子を箸で掴むと誠の口元に持ってきた。

誠はしばらく戸惑ったが、最後は口を開けた。

「アーン」

すると、香は玉子を誠の口に入れずに自分の口に入れた。

「本当に思った？ 誠おもしろい」

どうやら騙されたようだ。

腹が立った誠は香に背を向けると黙々と一人で食べた。

「あ、あれ？ ちょ、ちょっと、誠。ごめん。謝るから機嫌治してよ」

「だったらこれを食べ」

誠は玉子を一つ持ち上げて、香の口元に持ってきた。

「ほら、口開けろよ。アーン」

「うつ……。こ、これで許してよ。……アーン」

香は口を開けた。

すると、誠はさっきと同じように香の口に入れずに自分の口に入れた。

「なにお前もひっかかっているんだよ。ははは」

香は呆然としていた。

誠はそれがおもしろくクスクスと笑った。

香は騙されたことに気づくと、誠に背を向けて一人で食べ始めた。

誠は香をなだめるのに苦労してしまった。

「ねえ、次はコアラ見に行こう」

香の要望で、次はコアラを見に行った。

コアラは広いガラスケースの中に入り、いくつかあるユーカリの木の一つに捕まっていた。

「眠たそうな顔してるね。かわいい。誠みたい」

「余計なお世話だ。それにしても、本当に眠っているな」

「コアラはね、ユーカリの葉を主食にしているんだけど、その葉はそんなに栄養分がないの。だから、一日二十時間くらい寝て、少ない栄養分で保っているんだよ」

「へえ」

すると、香は突然悲しそうな表情になった。

「おい、香。どうかしたのか？」

「え、あ、いや、なんでもない。次行こう」

香は無理に笑顔を作ると次に向かった。

次はライオンである。大きな体をしてのしと歩き回っていた。

「おーおー、怖い顔してるな」

「そうかな？　かわいい顔してるよ」

「お前はなにを見てもかわいって言っているな」

「だって本当だもん」

すると、香はまたあの悲しそうな表情になった。

そして、そつと呟いた。

「……かわいいそう……」

「え？」

「かわいそうだね。こんな狭い檻に入れられて。知らない人たちに、毎日のようにじろじろ見られて。本当に……かわいいそう」

「まあ、仕方ないんじゃないか？　ここで働いている人たちも、ちゃんと面倒は見ているだろうし」

「でも、こんなところにいたくないはずだよ」

すると、香は檻に手を触れた。そして、そつと口を開いた。

「このライオン、帰りたがっている」

「帰りたがっている？」

「このライオンね、前はアフリカの大草原に住んでたんだって。そこで自由に走りまわっていたの。でもね、いきなり体に何か当たって眠ってしまい、気がついたら自分は知らない場所にいたって」

「そうなのか……」

香はこのライオンの心を読んだのだろう。

確かに、このライオンは走りたくてうずうずしているようだった。

「ねえ、誠。このライオン逃がすことできないかな？ 故郷に返すことはできないのかな？」

香は涙目になって誠に訴えてきた。

誠は小さく首を横に振った。

「……無理だろ。ここに入れられた以上、ずっとここにいろしかない。一度人間に飼われた動物は、自分一人で狩りをしたりして生きていくのは難しいからな」

「……そうだよね」

香はうつむきながら、とぼとぼと歩くとその場を後にした。

香はベンチに座ると肩を落としてうつむいた。

「ほら」

誠は香に飲み物を渡した。

「ありがとう……」

香は飲み物を受け取った。誠が隣に座ると香はそつと口を開いた。

「……今日一日中歩き回ったけどさ、どの動物もストレス溜まってたよ。見るたびにその動物の心が読めて、私に訴えてくるかのように伝わってきてさ。私動物好きだから、なんとかしてあげたいっていつも思うの。でも、なんにもできない。私にはそんな力ない。どうしたらいいのかな……」

誠はじつと香の話を聞いていた。

何も言えなかった。香みたいに自分には動物の心を読むことはできない。

誠にはどうすることもできなかった。

「私ね、将来獣医になろうって思っているんだ。獣医になっっている動物を助けてあげたい」

誠はそつとうなずいた。

「いい夢だと思うぜ。香ならきつとなれるよ。俺も応援するぜ」

「うん。ありがとう」

日が暮れだし、二人は再び電車に乗って帰った。

電車を降りると、誠は大きく伸びをした。

「今日は楽しかったな。動物園も悪くないな」

香は未だにうつむいていた。

「……誠。今日はごめんね。変なこと言っちゃって……」

「ん？ ああ、別に気にしてないよ。それよりも、香がああ言っ
て俺もそう思ってきたし」

すると、香は顔を上げ笑顔を作った。

「今日はありがとう。じゃあ、またね」

「おう。またな」

香は誠に手を振って家に帰っていった。

誠も香を見届けると家に帰っていった。

そのやりとりを、影から一人の人物がこっそりと見ていた。

第二章 part 4：救出

動物園に行つてからは、香は動物の話ばかりしてくる。

本当に動物が好きだということが伝わってきた。

自分の家でも、ラッキーという犬を飼っているそうだ。

しかし、誠に対しては眠たくなるような話である。

聞いていると瞼が重たくなる。

寝そうになつたら香が叩き起こしてくる。

それほど香は、動物について聞かせたいらしい。

「ねえ、誠。今日一緒にラッキーと散歩しようよ。ラッキーも喜ぶよ」

「えゝ、嫌だよ。朝は眠たい」

「大丈夫。散歩は夕方でもいいから。ね、お願い」

香はいつものように手を合わせてお願いしてきた。

別に誠は部活もしていないし、用事があるわけでもない。

「しょうがないな。じゃあ、今日の夕方学校に集合な」

「うん。ありがとう」

香は元気よく返事をする、満面の笑顔を浮かべた。

約束の時間になると、誠は学校に向かっていった。

着いたときには、すでに香は校門の前に立っていた。ちゃんと犬も連れている。

「あ、来てくれたんだ」

香は誠に向かって軽く手を振った。

「約束は守る主義だからな」

「そっか」

香は嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「こいつがお前の犬か」

誠はその場にしゃがみ込むと、香が飼っているラッキーの頭を撫でた。

ラッキーは大きなゴールデンレトリバーだった。

綺麗な薄茶色の毛並みをしており、ブラッシングを怠らずにやっているようにサラサラとしていた。

ラッキーは元気よく誠に向かって吠えていた。

「ラッキー。この人がいつも話している誠だよ。挨拶して」

すると、ラッキーは一つワンと吠えた。本当に挨拶したようだった。

「こいついい子だな」

「えへへ、すっかりしつけはしてあるからね。今も、ちゃんとこんにちはって言ったんだよ」

「そうかそうか。お前の主人はさぞ厳しいのだろう。困ったら俺のところにもいつでも来ていいぞ」

「そんなわけないでしょ。ラッキーは私のことが大好きだもん。ねっ、ラッキー」

ラッキーは一つ吠えると、誠から離れ香のそばに寄った。

「ラッキーは誠より私がいいって」

香は嬉しそうにラッキーの頭を撫でた。

「ふん。じゃあ、これをラッキーに食べさせるかな」

誠はポケットからあるものを出してきた。

「何それ？」

「ふふふ。犬の大嫌いな玉ねぎだ。本当に犬にとって毒なのかなって思ってる」

「や、止めてよ！ 本当に死んだら一生怨むからね！」

香は本当に嫌そうで、ラッキーをかばうように抱きついていた。

「実験したかったのに……」

誠の無茶な実験は行わず、一同はさっそく散歩を始めた。

「ラッキー、気分はどう？」

ラッキーは元気よく吠えた。

「最高の気分だって」

「こういうときは、心を読めるって便利だな。犬の気持ちが分かれば苦労しないし」

「うん。私とラッキーは何でも話せるもんね」

そして、少し歩くこと数分で大きな広場に到着した。

香はラッキーの首からリードを外した。

「さ、ラッキー。思う存分走り回っていいよ」

その一言で、ラッキーは広場を走り回り出した。

「すごく速く走るな」

「うん。今日もラッキーは元気だね」

ラッキーが走っている間、二人はベンチに腰掛けた。

広場には二人以外にも犬を連れた人もいれば、友達と遊んでいる子供もいた。

日が少しずつ傾き、周りは茜色に染まっていた。

二人はその様子を見ていた。

そのとき、香はそつと口を開いた。

「ねえ、誠。……誠は誰かに裏切られたことある？」

「裏切られたこと？ ……いや、思い浮かばないな」

「私思うんだ。信じていた人に突然裏切られたらすごく苦しいだろうなって。でもね、動物はそんなことないでしょ。だから私、動物大好きなんだ。いつでも私を癒してくれる。嫌なことがあっても、辛いことがあっても、私を慰めてくれる。動物って不思議な力を持っているよね」

香はそつと、誠のほうに顔を向けた。

誠も香の方を向く。

「誠はさ……私と友達だよね？」

香は少し心配している表情をしていた。誠の返答を恐る恐る待っている。

誠は迷うことなく、笑みを浮かべて答えた。

「当たり前だろ。俺とお前は友達だ。裏切らないって約束したしな」

「うん」

香は安心したように笑顔になった。

「……ありがとう……」

「ん？ 何か言ったか？」

「ううん。なんでもない。ラッキー！ 帰るよ！」

香は大声で、未だに走り回っているラッキーを呼んだ。

ラッキーが香のもとに戻ると、香は嬉しそうに頭を撫でた。

その帰り道、歩いていると突然ラッキーが吠え出した。

「ラッキー、どうしたの？」

香はしゃがみ込むとラッキーを撫でた。

すると、香はすぐに立ち上がって走り出した。

「お、おい。香？」

誠は香を追いかけた。

香は目の前の木の下でしゃがみ込んだ。

「おい、香。どうした……」

誠は途中で言葉を止めた。

香の掌の上で、一羽の小鳥が倒れていた。

「この小鳥、巣から落ちたみたいなの」

誠は目の前にある木を見上げた。

たしかに枝の根元に巣らしきものがあつた。何羽かの小鳥が鳴いていた。

「ねえ、この小鳥死にそうだよ。どうしたらいいの？」

香は必死になって誠に問い掛けた。

香の手はぶるぶる震えている。

「まずは落ち着け。こういふときこそお前の出番だ。まずその小鳥は何て言っているんだ？」

「え、えと、い、痛いって。体が痛いって。すごく弱ってるよ」

香の目は少し潤んでいた。

それでもどうにかしようと思て慌てふためいている。

「まず病院に連れて行かないと。近くに動物病院はないのか？」

「あ、あそこにある。私知ってるよ」

「よし、すぐにそこに行くぞ」

「うん」

香はすぐに走り出した。

病院に着くまで、香は小鳥にずっと話し掛けていた。

「大丈夫だよ。すぐに良くなるからね。もう少し我慢してね」

小鳥はそれに答えるかのように小さく弱々しい声で鳴いた。

誠は香の後ろを着いていきながらその様子を見てそつと笑みを浮かべた。

動物病院に着くと、香はすぐに獣医に小鳥を渡した。

獣医は快く引き受けてくれて、香は安堵の息を吐いた。

そして、小鳥のどこが怪我しているのか、どこが苦しいのかなどの確に伝えた。

二人はその小鳥の治療が終わるまで待つことにした。

ラッキーは外で大人しく待っている。

香は椅子に座りながらしきりに時計を見ていた。

「大丈夫かな。……大丈夫だね。誠」

香はさつきから何度も誠に問い掛けてくる。本当に心配しているようだった。

「大丈夫だって。香はよくやった。あとは先生に任せよう」

「……うん」

すると、治療室のドアが開き先生が出てきた。

香は立ち上がると先生のもとに走った。

「せ、先生。あの小鳥は……」

先生は優しくそんな笑みを浮かべた。

「もう大丈夫だよ。二、三日したら元どおりになるだろう」

「よ、よかった……」

香はさっきまで我慢していた涙が溢れ、手で顔を覆った。

誠はそつと香の頭を撫でてあげた。

病院を出たときは、すでに日が落ちて夜になっていた。

誠は香を連れ、家まで送っていくことにした。

「あの小鳥本当に良かったな。どれもこれも香のおかげだな」

「うん。私は何もしてないよ。先生が助けたもん」

「でも、小鳥を病院まで運んだのも、どこが悪いかを教えたのも香だろ。お前は動物の命を救ったんだぜ」

「そ、そう思っているのかな……？」

「ああ。お前は動物を救うことができたんだ。誇りに思え」

「うん」

少しして香の家に着いた。

香の家はなかなか立派な家だった。

学校からもそんなに遠くないところにある。

「じゃあな。今日は楽しかったぜ」

「うん。散歩付き合ってくれてありがとう。またね」

香は満面の笑顔を見せて手を振った。

ラッキーも一つ吠えた。

「じゃあな」

誠は手を振り返すと、夜の街を歩いて行っ

た。二人とも、この楽しい時間がこれからずっと続くと思っていた。

二人の絆は少しずつ離れていっていたことを知らずに。

第二章 part 5：噂話

今日も変わりようのない一日を過ごした。

香と無駄話をして、一緒に昼食を食べて、聞いても耳に入らない授業は寝る。

そして放課後、さっさと帰ろうとするが香の姿が見えなかった。

いつもならまつさきに来るのだが今日は来ない。

鞆はまだ机の上にあるから帰ったわけではないようだ。

誠は何もすることがないので、香が来るのを待つことにした。

すると、数人の女子生徒が誠のところに来た。

「ねえ、清水くん。ちょっと聞きたいことがあるんだけどいい？」

どの女子生徒も知らない人だった。いや、同じクラスの人もあるが話したことはない。

「なに？　なんか用？」

「清水君って、朝倉さんと仲良いの？」

「仲良いっていつか、友達ではあるな。それがどうかした？」

「清水くんは、あの噂知らないの？」

「噂？　噂ってなんだよ」

「うん、それはね……」

すると、突然大きな声が聞こえた。

「誠！　一緒に帰ろう！」

香は誠にむかって大きく手を振っていた。

香の存在に気づいた女子生徒たちはそそくさとどこかに行ってしまった。

「どうしたの？　何話してたの？」

誠も首をかしげて答えた。

「いや、わかんない」

「もしかして、告白されてたとか？」

「そ、そんなわけないだろ！」

二人は一緒に笑いながら帰っていった。

しかし、香はすでに誠の心を読んでいた。

次の日の朝。

下駄箱を開けると中に手紙が入っていた。

誠は見た瞬間もしかしてと思った。

「俺にもようやく春が来たか」

誠はさっそく中を開けて読んでみた。

そこには、

『今日の放課後、屋上に来て』

と書かれてあり、差出人の名前は書いてなかった。

誠は気にすることなく、放課後になるのを楽しみに待った。

そして、放課後。

香に一言告げ、誠はさっそく屋上にむかった。

屋上にはすでに女子生徒が来ていた。

それも三人も。

しかし、そこにいた女子生徒は以前誠に話しかけて来た生徒だった。

「来てくれたのね」

「ああ、呼ばれたからな。でも、言わなくても分かってるぞ」

「え？ もう内容分かってるの？」

「まあ、俺もバカではない。まずお互いのことを知るのが先じゃないかな？ まだよく知らない同士だし。最初は友達から」

「あのー、何の話？」

「だから、俺とお前らの誰かが付き合う話だろ？ この手紙ラブレターじゃないのか？」

「……バカだ」

「違うわよ。話しはあの朝倉さんのことよ」

それを聞いた誠は心底がっかりした。

「なんだよ、告白じゃなかったのか。ドキドキして損した」

「勝手に間違えるのが悪いんでしょ。まあ、お互いのことを知らないのは当たってるけど。まずは自己紹介ね。私は一河岬^{いちかわみさき}。」

一河岬は香と同じくらい髪が長いのが特徴だった。

「私は皐^{さつき}。同じクラスだよ」

皐は三人の中で一番背が低く、髪もショートヘアだ。

「私は南^{みなみ}。私も同じクラス。よろしくね」

南もショートヘアで、しっかりとした真面目そうな生徒だった。お互いの自己紹介が終わり、コンクリートの上に座りこむと本題に入った。

「それで、話ってなんだよ。香のことか？」

最初に口を開いたのは岬だった。

「話していうか、ちょっとした助言かな。清水くん、何も知らなさそうだし」

「助言？ 何を助けるんだよ」

「朝倉さんが、人の心を読めるって知ってる？」

皋が言った。

「それくらい知ってるよ。まあ、知ったのは最近だけど」

「え？ それでも一緒にいるの？」

3人は驚いた表情になった。

「あ、ああ、まあな。でも、人の心を読めるっていつでも、別に悪くないだろ？」

「でも、勝手に読まれるって嫌じゃない？ 知られたくない秘密が知られちゃうんだよ」

南はいかにも嫌そうな顔をしていた。

「それに、あいつが黙っているなんて保障ないし」

岬は心底香を信じていないようだ。

「でも、あいつけっこう口堅いと思うぞ。一緒にいる間、誰かの秘密とか話したことないし、聞いたこともない」

「清水くんは、あの噂知ってるの？」

皐は恐る恐る誠に聞いた。

「あつ、そういえば、前もそんなこと言ってたな。その噂ってなんだよ」

それを岬が教えてくれた。

「うん。あの、朝倉さんね……中学のころ人の心を勝手に読んで、いろんな人に話していたらしいの」

誠はぼつぜんと聞いていた。

人の心を勝手に読んで話した？

今の香を見てそんな感じにはとつてい見えない。

「嘘だろ？」

それを岬が強く否定した。

「いいえ、嘘じゃないわ。それに、知りたい情報があれば、お金を払えば簡単に教えてくれるっていうのもあるわ。それほど汚れた人なのよ」

誠はバカらしくなって手を上げた。

「おいおい、ちょっと待てよ。そんなのたかが噂話だろ。誰かが勝手に流したんだよ。香がそんなことするはずないぜ」

「それだけじゃないわ。朝倉さん平気で人を騙すでしょ。それで友達いないみたい」

南は多少怒っているような話し方だった。

「……確かに、俺はあいつが俺以外のやつと話しているところを見たことがない。でも、あいつはいいやつだぜ。俺は香に助けられたんだ」

「確かに、少しは良いところもあるみたい。前に傷ついた友達を助けたって聞いたことがある」

皐は二人とは違って良いことを言った。

「もしかして、それ俺のことかもな」

誠は笑みを浮かべながら喜んだ。

しかし、岬はまだ続けた。

「でもね、一番やばいのはあれよね」

「ま、まだあるのか？」

「うん。朝倉さんね、前に一人の男子生徒に近づいて仲良くなったんだけど……その男子生徒は、数週間してノイローゼ状態になったみたい」

誠はその話を聞いて生唾を飲んだ。

ノイローゼ？

精神がおかしくなったのか？

それほど何かあったのか？

今の香を見てそんなこと、少しも思えない。

「私たちからは以上よ。ただこれだけを伝えたかっただけ。清水くんがそれでも朝倉さんと仲良くするのなら別に止めるつもりはないわ。でもね、嫌な目に合いたくないなら、離れたほうがいいよ」

岬はそういうと、皋、南と共に屋上から出て行った。

誠はその場に座り込んだまま動かなかった。

さっきの話しが頭の中で繰り返していく。

人の心を勝手に読む。

それでお金をもらう。

人を平気で騙す。

そして、ノイローゼ状態に持っていく。

誠は怖くなってきた。

香はいつたい何者なのだろうか。

今の噂話は本当なのだろうか。

香の過去になにがあったのだろうか。

「香……」

誠が座っている姿を、香は屋上の入り口で静かに見ていた。

第二章 part 6：亀裂

あの噂話を聞いて、誠は香とあまり話さなくなった。

一緒に昼食を食べたりはするが、休み時間はあまり話さないし、放課後は一人でさっさと帰るようになった。

別に避けているわけでも、噂話をうのみにしているわけでもない。

ただ気持ちの整理がつかないだけだ。

香の過去をあの3人から聞いたが、それが本当だという証拠はない。

それに、今の香を見てそんな感じはしない。

それなら今までどおり振舞えばいいのではないか。

しかし、香は自分の心が分かるが、香の心はわからない。

あの噂が本当ならば、自分の秘密がみんなに知られるかもしれない。

知られることがこんなにも怖いものとは思わなかった。

誠はそつと自分の胸を抑えた。

もしこの奥底に沈めた秘密がばれたら、もうあそこにはいられなくなる。

これだけは……。

「ねえ、誠。今度の休み、一緒に映画でも見に行かない？」

香がいつものように話しかけてきた。

誠は平常心を保つように心がけた。

「ああ、いいぞ。何の映画なんだ？」

「感動のラブストーリーはどう？ 私好きなんだ」

「いいね。じゃあ、映画館の前に集合な」

「うん」

香は笑顔で返事をする、自分の席に着いた。

誠はぎゅっと拳を握った。

香に全てを聞く。あの噂話が本当かどうか。

そして、自分の気持ちもはっきりしてやる。

日曜日。

誠は映画館の前に着いた。

「誠！」

すでに香は到着していた。

「遅いよ。女性を待たせるなんてマナー違反だよ」

「悪いわるい。ちょっと寝坊して」

「本当かな」

「おいおい、俺の心読むなよ！ プライバシーの侵害だぜ」

「大丈夫だよ。もし読んでしまっても口にしないから。ほら、もうすぐ始まるよ。中に入ろう」

二人は中に入ると、チケットを買い、席に着いた。

映画は二時間くらい上映され、こてこてのよくありそうなラブストーリーだった。

男性が女性にむかって真実を問いかける話で最後はハッピーエンド。いまいち、おもしろみがかけていた。

「うーん、良い話だったね。感動した」

香は目じりをハンカチで拭いていた。

「そ、そんなによかったか？ 俺はあんまりいいとは思わなかったけど」

「誠はわかってないな。それより、これからどうする？」

時刻を確認すると、ちょうど午後3時を回ったところだった。

「まだ時間あるし、少しぶらぶらするか？」

「うん」

二人はいろいろな店を回り、楽しい一時を過ごした。

時刻は午後6時を回った。

太陽が傾き、青かった空は茜色に変わり始めた。

「もうすぐ夜だね。そろそろ帰る？」

香は誠に問い掛けた。

誠は意を決し、香に言った。

「香、ちょっと話があるんだ。いいか？」

それを聞いた香は、誠に背を向けるとうなずいた。

「うん。いいよ。私も、誠に話があるし」

二人は歩き出した。

どちらも口を開かず、ただ目的地目指して歩くだけだった。

誠の後ろを香が着いてくる。

誠は後ろを気にしながら歩いていた。

香は今何を考えているだろうか。

もしかして、今の自分の心を読んでいるのだろうか。

怖い。香が怖く見える。

誠はできるだけ何も考えず、目的地に向かって足を進めた。

ようやく目的地に着いた。

それは学校の屋上である。

街全体が見渡せる屋上に二人はきた。

校舎が太陽の光で茜色に染まっていた。

誠は屋上の真ん中で止まると香に振り返った。

香とは数歩の距離があった。

「それで、話って何？」

香は真剣な眼差しで誠を見ていた。

すでに心を読んだのだろうか。

いや、そんなの関係ない。自分の口で言うんだ。

「俺は前に、ここで3人の女子生徒と話をした。香も前に見たやつだ」

香はそつとうなずいた。

「覚えているよ。あの3人ね。皋、南、そして、……一河岬」

すでに名前を知っているようだ。誠の心を読んだのだろうか。

「その3人から、お前の過去の話聞いた」

そのとき、香の眉がピクツと動いた。

すると、うつむきながら口元を緩ませ笑みを浮かべた。

「そつか……。誠も聞いたんだ。あの噂」

「ああ。香、しょうじきに答えてくれ。あの噂は本当なのか？人の心を勝手に読んだり、お金をもらって教えたり、人を平気で騙したり、そして」

「一人の男子生徒をノイローゼに陥った。でしょ？」

香は顔をうつむきながら低い声で答えた。

誠は生唾を飲み込みながらうなずいた。

「……あ、ああ」

誠は拳を握ると香にむかつて叫んだ。

「香！ あんなの嘘だろ？ あんなのでたらめだろ？ ただの誰かが作ったしょうもない噂なんだろ？ そうなんだろ？ 香！」

香はうつむいたまま答えなかった。

茜色に服が染まり、風が長い髪をなびかせていた。

誠は焦った。

これが本当なら、これから自分はどうしようか。

誠が考えている最中に、香はそっと口を開いた。

「その前に、……誠に聞くことがある」

「な、なんだよ」

「……友達って、何？」

「え？」

香はうつむいていた顔を上げるとはつきりとした口調で言った。

「友達って、いったい何なの？ その答を教えて」

香は真剣な眼差しを誠に贈っていた。

誠は意味がわからなかったが、今考えられることを言った。

「友達は、その人自身を信じ、決して裏切らない。何かあったときは助ける、困ったときは助けられる。一緒に笑って、一緒に楽しむ。それが友達だ」

その答に、香はそっと笑みを浮かべた。

「そう。それが誠の友達の意味ね。それじゃあ……」

香は顔下げながら誠にゆっくりと近づいてきた。

誠はじっと香を見ていた。

香が近づいてくるにつれて、自分の鼓動が激しく脈打つのがわかった。

香は誠との距離が数十センチになると、そっと顔を上げて誠を見つめた。

「誠は、私の噂を信じる？」

「え？」

香の目は悲しげな目をしていた。瞳にはうつすらと涙が浮かんでいる。

綺麗な瞳は、一直線に誠を捉えていた。

だが、その奥では恐れがまじっているのがわかった。

誠の返答を怖がっている。

「ねえ、誠……」

誠は香からそつと視線を外すと答えた。

「……わからない」

「……え？」

誠は拳に力を入れ、目を固く瞑るとはつきりと答えた。

「わからないんだ。俺はお前を信じたい。信じてやりたい。でも、あの噂話が本当かどうかもわからない。俺はどうしたらいいのかわからない。だから、……わからないんだ」

誠は香から顔をそむけた。

その答を聞いた香はうつむいてしまった。

「どうやら、本当みたいね……」

香はその答が本当かどうか、誠の心を読んだようだ。

すると、香の足元に小さな黒い点ができていた。

少しずつその量も増え、嗚咽も聞こえてきた。

「……信じてたのに……」

「……え？」

誠ははつとして香を見た。

香は必死に涙をこらえようと、拳を固く握り締めていた。体も小刻みに震えている。

「私、……信じてたのに。……誠は、あんな噂信じないって。すぐに否定して、私を信じてくれるって……。でも、迷うんだね。私は、誠にとってその程度の友達なんだね」

香は涙を抑えきれず、顔を手で覆った。

「か、香……」

誠はそつと香にむかって手を伸ばした。

すると、その手を香は叩いた。

「もういいよ！」

香は誠を睨みつけていた。

息を荒げ、涙を流しながらじつと誠を見ていた。

「香……。俺、俺……」

香は目じりを拭くと、出口に向かって走り出した。

「……ばいばい」

そう言って、香は出て行ってしまった。

「香！」

誠は香にむかって手を伸ばした。

しかし、その場に立ったまま動かなかった。

香の背中から来るなと訴えているかのように感じた。

いつのまにか日も暮れていた。

あたりは真っ暗になっていた。

それは、誠の心も同じだった。

第二章 part 7：調査

香と口を利かなくなつて数日経つた。

誠はずっと香のことを気にかけてながら学校に通っていた。

しかし、あれから香の姿を見ていない。

ずっと学校を休んでいるのだ。

先生は気分不良と聞いているらしい。

全て自分の責任だ。

それは分かっている。

しかし、今でも気持ちの整理はできていない。

あの噂が気になる。

香のことは信じたい。

でも、あの噂を少なからず信じている自分がいる。

謝ればすぐに解決するかもしれない。

だが、誠は香を裏切ってしまった。

約束したのに……。

誠はそつと香の席を見た。

どの生徒も何事もないかのようにしている。

一人のクラスメイトが何日も欠席しているのに、心配している素振りもない。

いなくても気にしないようだ。寂しいクラスである。

誠はそんなことはなかった。

あんなことがあっても心配はしている。

誠はため息を吐くと机にうつ伏せになった。

すると、岬が誠に近寄ってきた。

「どうやら、朝倉とは離れたようね」

誠は首を少し傾け、隣に立っている岬の顔を見た。

岬の表情は少し嬉しがっているように見えた。

「朝倉がいなくても、みんな何とも思っていないようね。ふふ、いい気味だわ」

その言葉に多少の腹が立った。

しかし、言い返すことはできなかった。

自分がそうさせたのだから。

誠は岬に問い掛けた。

「なあ、あの噂は本当のことなのか？ どう考えても今の香はそうは見えない」

「残念ながら本当よ。あの噂はみんな知ってるわ」

「じゃあ、その噂の首謀者は誰なんだ？ それに、証拠はあるのかよ」

その質問に、岬は考え込んでしまった。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「首謀者は私よ。私がああ噂を流したの。ちゃんと真実を話してるわ」

それを聞いた誠は驚いた表情で岬を見た。

首謀者がここにいるなら聞きたいことは山のようにある。

「だったら教えてくれ。なんであんな噂が流れているのか」

「……いいわよ。放課後、屋上に来て」

そう言って岬はクラスから出て行った。

誠は決心した。

今日で白黒はつきりしてやる。

放課後になり、誠は約束どおり屋上に向かった。

すでに岬は来ており外を眺めていた。

誠に気づいた岬は後ろを振り向いた。

「来たわね。それじゃあ話すわよ。でも、あまり時間がないから知りたいことだけを教えてあげる」

「わかった」

二人は校庭を眺めながら話した。

岬はさつそく知りたいことを話し始めた。

「前に言ったとおり、朝倉は中学のころ人の心を勝手に読んでいたの。それでいろんな生徒の秘密を握ったわ。だから、みんな朝倉には歯向かえることができなかった。そして、次は知りたい情報を教えるようになった。お金を払えばね。その情報を聞いた生徒たちは、その人の弱みを握りいろんな悪事を働いた。先生の弱みを握っているやつもいたわ」

「それを、今でもしているのか？」

「それはわからないわ。でも、言えるのはこの噂はずっと朝倉にまわりつく。これは言えるわ」

誠は考えた。

どうもおかしい感じがする。何か引っかかっていた。

「なあ。その噂が本当なら今はどうなんだ？ みんな香の言いなりになっているわけじゃないよな。それに、香がそんな噂を知っているなら、お前をどうにかするんじゃないのか？」

その質問に、岬は黙り込んでしまった。

考えごとをしているのか、思い出しているのか、岬はなかなか口を開こうとしない。

「おい、岬。質問に答えてくれよ」

岬は歯切れの悪そうに、しぶしぶ答えた。

「え、えと、朝倉は私には何もしないんだ。理由はわからないけど、そのおかげで、今は朝倉の言いなりにならずに済んでいるんだからいいんじゃないかな」

「そうなのか……」

何かおかしい。どこかおかしいところがある。

この噂には裏がありそうな感じがした。

「それじゃあ、最後の噂。一人の男子生徒がノイローゼになった話
は？」

その質問に、岬は蒼白な顔になった。腕が小刻みに震えている。

「お、おい、大丈夫か？」

「う、うん、ごめんね。大丈夫だよ。……その噂はね……」

すると、岬は時計を見て時間を確認すると、顔の前で手を合わせた。

「ごめん。もう行かなきゃ。またね」

そう言って岬は屋上を後にした。

誠はまだその場にいた。

気になった。どうしても気になった。

あの男子生徒がノイローゼになった理由。

そして、どうして岬には何も手を出さないのか。

全てを知るにはやはり本人に聞くしかない。

香に聞くしか……。

しかし、どの顔をして会いに行けばいいのだろうか。

自分は裏切った。

信じてやれなかった。

香に会う資格があるのだろうか。

誠は重いため息を吐いた。

「仕方ない。もう少し、自力で情報を集めよう」

ということで、次の日、同じクラスの皐と南に問い掛けた。

「二人はあの噂をどうやって知ったんだ？」

「うーん、私中学は桜楼学園だったから、自然と耳に入ってきたと思う。でも、あまり覚えてないな」

皐の答を聞くと、次は南に問い掛けた。

「私は岬から聞いた。高校から桜楼学園に通い出したからね。だから当時のことはよく知らない。噂を聞いたときはびっくりしたけどね。そんなことが会ったなんて」

南はよく知らないようだから、あまり期待できる情報は得られそうになかった。

「皐は香のことどう思う？」

「うーん、香ちゃんとはあまり関わりないけど、そんなに嫌な人には見えないな。第一印象は、明るくて元気のある生徒って感じ」

「南は？」

「私も香のことは普通の生徒に見えるわ。とてもそんな人には見えない。何かの間違いじゃないかな？」

二人とも香を悪く思っていないようだ。

少なからず、あの噂を全てうのみにしているわけではないようだ。それを聞けただけでも誠は安堵した。

昼休みになると、次は湊たちに聞いた。

「私その噂聞いたことないかも。違う学年だし。私けっこうそういうのは疎いから」

湊はあまり知らないようだ。

「瞳、お前はどうか？」

瞳はうなずいた。

「私は知ってますよ。その噂。二人が会う前から。言わないほうがいいと思って、口にはしませんでしたけど」

「そ、そうなのか？ さすが、情報力だけはある。だったら知っていること全て教えてくれ」

「あまり詳しくは知りませんがいいですよ」

瞳は真剣な表情になると話し始めた。

「私が聞いたのは、ほとんどお兄さんの聞いたことと同じです。ただ、一つだけ気になることがあるのです」

「なんだよ、それ？」

「その噂、つまり、朝倉先輩が心を勝手に読んでお金もらって教えていたというのは、実際に行われたのはお兄さんが中等部の三年生のときのことだそうです。私たちは二年生。そう聞いています。しかし、私とその噂を聞いたのは、その一年後の三年生のときです。なにかおかしいと思いませんか？」

「私、分かったかも」

湊は少しおかしいというような顔をしていた。

「……何が？」

誠はまるで分かっていなかった。

「お兄さん、頭悪いですね。いいですか。普通噂ってそのとき、または少しあとで聞きますよね。なのに、私が聞いたのは一年後。つまり、噂は何日もしたあとに流れたということです。それに、私が二年生のころ、朝倉先輩のことは聞いたことありませんでした。お兄さんもないんじゃないですか？」

「あっ！」

そこで誠は気づいた。

おかしいと思っていたところがわかった。

どうして岬から聞かされるまで自分は噂を耳にしなかったのだろうか。

いくら学校をサボっていたからと言っても、あんなことがあれば少しくらい香のことを耳にするはず。

しかし、高等部二年生になるまで香のことはまったく知らなかった。

それに、中等部で香が学校を仕切っていたならば、自分も香のことを嫌でも知り恐れるはずだ。

でも、そんな覚えはまったくいいほどない。

ならば、あの噂はでまかせとなる。

「いいですか。つまりこれは、誰かが後になって流したということですよ。朝倉先輩に怨みを持って」

誠は今自分が本当にバカだと思った。

なぜ香を信じてやれなかったのだろうか。

なんであんな噂話を少しでも信じたのだろうか。

「お兄さん、早く朝倉先輩と仲直りしてください」

「そつだよ、兄さん。朝倉さんとまた一緒にお弁当食べよう」

二人は真剣に誠を見て言った。誠は強くうなずいた。

「ああ」

誠は立ち上がった。

もう迷いはない。心の整理も着いた。

あとは、香に会いにいくだけだ。

誠は屋上を後にすると、香の家に向かった。

第二章 part 8：謝罪

誠は午後からの授業を抜け出し、急いで香の家に向かった。

早く会いたかった。

こんなに香に会いたいと思ったのは初めてだった。

早く会いたい。

そして、心から謝りたい。

もう裏切ったりしないと。

家は前に一度行ったから覚えている。だから大丈夫だ。

誠は目的地目指して、一度も立ち止まることなく走り続けた。

香は一人ベッドの中でうずくまっていた。

家には誰もいない。

静かな空気が流れていた。

外の雑音だけが耳に入ってくる。

「誠の……ばか」

少しずつ楽しくなってきた学校も、今では見たくもなくなった。

おもしろかったのは、誠が友達になってくれたから。

独りぼっちだった自分に、居場所を見つけることができたから。

誠のおかげで嫌だった学校も毎日が楽しみなった。

湊と瞳という後輩とも仲良くなった。

どれもこれも誠のおかげ。

でも、その誠に裏切られてしまった。

信じてもらえなかった。

「私って、その程度の友達だったのかな……」

香はため息を吐くとベッドから降りた。

香は居間から窓を開けると、スリッパを履いて小さな庭にいるラッキーを呼んだ。

しゃがみ込むと、そばに来たラッキーに優しく頭を撫でた。

「ラッキーはいいよね。心配事がなくて……」

ラッキーの頭を撫でながら、そっと笑みを浮かべた。

「ねえ、ラッキー。私って、そんなに信用できない人なのかな。私は信じてるのに。ずっと一緒にいたいって思う人は私から離れてく。友情運ないね、私」

無理に笑みを作る香を見て、ラッキーは悲しげな声をあげた。

「心配しないでラッキー。これで、決心がついたもん。あの話も、これで解決する。これで……よかったんだよ」

香はそつとラッキーに抱きついた。

「ほんとね、誠に会いたかった。もう一度会いたかった。……だつてね、誠は……」

すると、ラッキーが突然玄関に向かって吠え出した。

「どうしたの、ラッ……」

香は玄関を見てそこから釘付けになった。

心臓が跳ね上がりそうになった。

香はつい立ち上がってしまった。

「どうして……」

今想っていた人物、今考えていた人物、そして、会いたかった人物、誠がいた。

息を切らしながら、真っ直ぐとした視線はぶれることなく自分を見

ていた。

疲れていようと、汗をかいていようと、凜々しく立っているその姿は、今までに見たことなかった。

「香……」

誠はそつと敷地内に足を踏み入れた。

少しずつ近づいてくる。

香は信じられない気持ちでいっぱいだった。

今自分の目の前に誠がいる。

もう会えないと思っていた誠が確かにいる。

そう思うだけで体が動かなかった。

そして、誠は香の目の前に立った。

「誠……」

言いたいことはいくらでもある。

しかし、今はこれだけしか口から出なかった。

すると、誠が腕を上げ香の後ろに回した。

誠は香に抱きついたのだ。

香の体が誠によって包まれていた。

誠の体温を感じる。

それだけで自分の心臓はさっきまでよりも激しく鼓動していた。

誠は抱きついたまま、耳元にそっと囁いた。

「……ごめん」

「え？」

誠の体が小刻みに震えていた。

香はただぼうぜんとしたままその場に立っていた。

「……本当にごめん。お前は信じてやれなくて、約束破って、……ごめん。本当に……ごめん」

「……誠」

「俺、何であんな噂信じたんだろう。少し考えれば、でまかせだつてわかるのに。嘘だって、すぐ気づくのに。……ごめん、香。もう……裏切らないから。二度と香を傷つけたりしないから。だから……、だから……、もう一度俺を信じてくれ。こんな俺を許してくれるなら、もう一度信じてくれ。……香」

誠の締め付けがさっきまでよりも強くなった。

誠の顔は見えないけど、涙を流している顔が目には浮かぶ。

香はそつと笑みを浮かべた。

そして、下げていた手を上げ優しく抱き返した。

「香……」

「もういいよ、誠。それだけ反省していれば十分気持は伝わったよ。私……誠に会いたかった。もつと一緒にいたいと思ってた。ありがとう、誠。会いに来てくれて」

香はそつと誠を離すと、自分の前に立たせた。

誠の目からは未だに涙が流れていた。一滴ずつ頬を伝って落ちていく。

香はそつと手で誠の涙を拭くと、満面の笑みを浮かべた。

「泣かないで、誠。男の子が泣いちゃダメなんだよ」

誠は袖で無理に涙を拭くと笑顔を作った。

「何言っただよ。泣いてねーよ。お前こそ、泣いてるじゃねーか」

「え？」

香は自分の目じりにそつと触れた。

手には涙の滴がついていた。

自分でも気づいていないうちに、涙が勝手に出ていたようだ。

「だって……、私嬉しいもん。また、誠と一緒にいれるだけで、泣くほど嬉しいんだもん」

香は顔を手で覆い泣き出した。

そんな香を見て、誠は再び香に抱きついた。

「ごめんな。俺も、香に会いたかった。ここまで、授業サボって走ってきたんだぜ」

「ありがとう、誠」

香は顔を上げると、一番可愛いらしい笑みを浮かべた。

「これからよろしくね、誠」

その言葉を聞いて、誠は安心したような笑みを浮かべると強くなずいた。

「ああ。こちらこそ、よろしく」

二人は笑い合った。さっきまで泣いていたのが嘘のように。

第二章 part 9：真相

誠は香と仲直りして、香の家の中に入った。

居間に案内され、ふかふかのソファの上に座った。

香は向かい側にお茶を持ってきて座った。

「誠の顔見たの久しぶりだな。何か元気が出たよ」

香はいつもの表情に戻っていた。

以前と変わらない笑顔と元気を見せてくれる。

誠も笑みを返した。

「俺も香の顔見れて良かったよ。明日から学校に来いよ。湊たちも心配してたぞ」

「うん。ごめんね。心配かけちゃったね。……それより、あのことはもういいの？」

あのことは、香の噂のことだろう。

実はそのことも香に聞きたかった。

「その噂は全部でまかせだとわかった。香に聞きたいんだが、そんな噂を広げそうな人物に心当たりはないか？」

すると、香は少し黙り込むとうつむきながら答えた。

「……一人だけ心当たりがある」

それを聞いた誠は飛びついた。

「ほ、本当か？」

「うん。誠も知っている人だよ。少し考えればすぐに思いつくと思う」

誠は考えてみた。そしてすぐに一人の名前が頭に思い浮かんだ。

「も、もしかして……」

香はゆっくりとうなずいた。

「そう。誠に噂を教えた、一河岬」

「あ、あいつだったのか……」

それなら少なからず分かる気がする。

首謀者は自分だとも言っていた。

それに香をすごく嫌っているようにも見えた。

「香は岬とどういう関係なんだ？」

「……知りたい？」

誠ははつきりとうなずいた。

「ああ。知りたい」

「わかった。話してあげる。これを話すのは誠が初めてだよ。そのかわり、嫌いにならないでね」

「なるもんか。俺は香を信じるよ」

香はそつと笑みを浮かべると、話し始めた。

香が桜楼学園中等部に所属しているとき、一番仲がよかったのが一河岬だった。

いつも一緒にいて、何をしても同じだった。

二人は信頼し合っていた。

親友だと思っていた。

だが、事件は突然起きた。

ある日、岬が落ち込んでいる姿を香は見かけた。

「岬、どうしたの？」

しかし、岬は黙ったままで何も話さない。

どんなに話し掛けても答えてくれない。

いつしか学校まで来なくなつた。

心配になつた香は、岬の家まで行つて会いに行つた。

しかし、それでも岬は話そうとしなかった。

そこで香は決心した。

友達を助けたい。

自分が力になりたい。

香は意を決し、一回しか使えないスカイを使った。

心を読めるようになりたいと。

香はその力を使って岬の心を読んだ。

岬が思い悩んでいたことは、幼いころから飼っていた大好きな犬が死んでしまったことだった。

香は岬の犬の墓に行き、誠にしたようにペットの心を読み、それを岬に伝えた。

もちろん、自分がスカイで心を読んだことも話した。

そのおかげで、岬は以前のような元気を取り戻した。

香も安心して嬉しくなった。

しかし、これは過ちだった。

ある日、岬が香にお願いをしてきた。

「ねえ、香。ちょっとお願いがあるの。香の力で、敦くんあつしの好きな人は誰か教えてくれない？」

岬はずっと前から同じクラスの敦のことが好きだった。

スポーツ万能でかつこよく、みんなから人気があり信頼は厚かった。

「え？ でも、なんか悪い気がする。勝手に読まれたら、誰だって嫌でしょ？」

「大丈夫だよ。ね、一生のお願い。分かったら教えてね」

「う、うん……」

あまり岬の期待を裏切りたくない。

香は仕方なく了解して放課後聞きに行った。

「ねえ、敦くん。敦くんは好きな人いないの？」

「え？ す、好きな人？ ……い、いないよ」

そのとき、香は敦の心を読むことに成功した。

誰でもあんな質問をすれば、ついその人のことを考えてしまう。それを利用したのだ。

香は敦の好きな人を知ることができた。

だが、それは予想外の人だった。

「そ、そうなんだ。ありがとう。じゃあ、またね」

そう言って、香は敦から離れた。

信じられなかった。

敦の好きな人があの人なんて、岬にはとても言えなかった。

放課後。

岬と一緒に帰り、さっそく聞いてきた。

「それで、敦くんの好きな人は誰だったの？」

香は少し考え込むと、歯切れの悪そうに答えた。

「う、うん。よかったね、岬。敦くん、岬のことが好きだって」

「ほ、ほんと？ やったー。敦くんと両想いだったんだ」

香から聞いて、岬ははしゃぐように喜んだ。

それから二人は楽しそうに会話を弾ませ途中で別れた。

二人の絆は、この時点で完全に壊れてしまったのだった。

次の日の放課後、みんな口々にある話題の話をしていた。

香は知らなかったが、自然と心を勝手に読んでしまい知ることができた。

それは信じられない噂だった。

一河岬が敦に告白して断られたことだった。

すると、教室のドアが突然大きな音をたてた。

そこには剣幕な顔をしている岬がいた。

「岬……」

岬は香に近づいた。

そして、岬は腕を振り大きな音が教室中に木霊した。

岬が香の頬を叩いたのだ。

香はそっと叩かれた頬に触れた。

驚きと戸惑いの交じった表情で岬を見た。

クラスにいる生徒たちも二人の様子を黙って見ていた。

「最低ね、あんた。私を騙してそんなに楽しいの？」

岬の目は怒りに満ち溢れていた。

今までに見たことがない表情をしていた。

「ち、違う。私、そんなつもりじゃ……」

「じゃあ、なんでこんな嘔吐くのよ！ 敦くんの好きな人はあんたなんですよ！」

それを聞いて、香は反抗できなかった。

あるとき、敦はたしかに自分のことを思っていた。

自分の好きな人は香だと思っていた。

「で、でも……」

「あんたのせいでこんな噂までたった！ あんな恥もかいてしまった！」

岬は睨みつけるような目で香を見ると冷たい声で言った。

「あんたを一生許さない。あんたを苦しませてあげるわ」

そう言って、岬は教室から出て行った。

香はその場に立ったまま、静かに涙を流していた。

そして、中等部三年生るとき、あの噂が流れた。

香は人の心を勝手に読む。

それを何でも教えてくれる。

人を平気で騙す。

もちろん、そんなことはしない。

だが、その噂はみるみるうちに広まり、香はひとりぼっちになった。

誰からも相手されず、いじめまでおきた。

香は学校に来なくなった。いきたくなかった。

しかし、自分には獣医になりたいという夢がある。

だから、我慢して留年しない程度に学校に通った。

学校に通っている期間は地獄だった。

廊下を歩くだけで、いろんな生徒の心を勝手に読んでしまい、自分の悪口が聞こえる。

自分の能力を怨んだ。消したいと何度も思った。

しかし、一度叶った願いは元には戻らない。

だから、我慢し続けた。

「そ、そんなことがあったのか……」

「うん……。でも、仕方ないよ。悪いのは全部私だもん。しょうがないよ……」

香はうつむいてしまった。

誠はそんな香を見てそっと口を開いた。

「それで、あのノイローゼになった生徒のことも嘘なのか？」

すると、香はさっきよりも暗い顔になった。体がぶるぶると震えていた。

「その話しは……ほんと」

「え？」

学校に通っている間、唯一変わらず接してくれたのが敦だった。

敦は、一人だった香に何度も話しかけ、少しでも笑顔を作れるように努めた。

おかげで、香は敦と一緒にいるときだけは楽しく笑っていた。

だが、事件は突然起きた。

敦は少しずつ学校に来なくなった。

休むことなど、これまでにそうそうなかったのに。

心配になった香は敦に家に行った。

「敦くん、どうしたの？ 最近学校に来ないけど」

「香。俺、もう学校に行きたくない」

「え？ な、なんで？」

「行きたくないんだ！ もう俺のところにも来ないでくれ！」

「敦くん！」

それっきり、香は敦と一度も会うことはなかった。

敦は他の学校に転校してしまった。

精神がおかしくなり、たまに病院に通っているほどだ。

だが、香は敦の心を読んでいた。

敦がこんなことになってしまった理由。

それは、ある人物による精神的苦痛によるものだった。

その人物は、一河岬。

それから再び香は一人になった。

本当に孤独に陥った。

自分も転校したかった。

でも、自分にはやりたいことがある。

まだ、やり残したことが。

香はそれを成し遂げるまで、嫌でも学校に通い続けた。

話し終わり、誠は香に問い掛けた。

「香は、今でも岬に対して怒ったり、憎んだりしてる？」

その質問に、香ははっきりと首を横に振った。

「そんなこと思ったの、一度もない。私は……」

香は黙り込んでしまった。

「なんだよ。言ってみろよ」

「うん。私ね……」

香は今の自分の気持ちを誠に伝えた。

それを聞いた誠は笑みを浮かべた。

「香らしいな。でも、俺も協力するぜ」

「ありがとう、誠」

二人はこれからどうするかを考え、夜遅くに解散した。

第二章 part 10：和解

元気を取り戻した香は次の日から学校に来るようになった。

誠も香と前のように楽しく話すようになった。

湊と瞳も喜んでいた。

ついでに、誠は皐と南に香と友達になるように頼んだ。

二人は最初は少し困った表情をしていたが、誠が手助けしたり、一緒に時間を作ること、壁はすぐになくなった。

おかげで3人は仲良くなり今では毎日のように一緒にいる。

あの噂話もまだとわかりみんな香を悪く言わなくなった。

「香がこんなおもしろい人ならもっと早く友達になればよかった」

「本当。あの噂も嘘だもんね。ごめんね、香」

「うっん。いいよ。気にしてないから」

3人は楽しそうに会話を弾ませながら過ごした。

誠も安心して見守っていた。

その様子を岬はそっと見ていた。

怨みがこもった目で、ある人物をじつと睨みつけていた。

それから、誠のまわりに異変が起き始めた。

誠が朝教室に入って席に着こうとしたときだった。

「な、なんだよ、これ……」

誠の机は無残な姿になっていた。

机は赤いペンキがかけられており、中に置いてあった教科書などには落書きされたり刃物か何かで無残に切り裂かれていた。

誠の机の周りには、何人もの生徒たちが群がっていた。

「俺たちがきたときには、すでにこうなってたぜ」

「私、今日一番最初に教室に入ったけど、すでにこうなってた」

周りにいる生徒たちが誠に言うてくる。

しかし、そんなことは耳に入らず、自分の机を呆然として見ていた。

「ねえ、誠くん。誰かに心当たりはないの？」

隣にいた皐が問い掛けてきた。

「いや、まったくないな。でも、これは酷すぎるな」

すると、香はその場にしゃがみ込み、一冊の教科書にそっと手に触れた。

「香。何か分かったか？」

すると、香は驚きの表情になった。

「まさか……」

香は突然立ち上がると急いで教室から出て行った。

「お、おい！ 香！」

香はある場所にむかっていた。

それは隣のクラスにいるある人物の場所に。

香は教室のドアを勢いよく開け、外を眺めているある人物の前に立った。

「どの顔で私の前に現れたの？ プライバシーの侵害者さん」

ある人物とは岬のことだ。

香は今までに見たことがないくらいの怒りに満ちた顔で岬を見ていた。

「話があるの。ちょっと付き合いなさいよ」

「いいわよ。今日ではつきりしましょうか」

二人は教室から出て行くと、ある場所に向かった。

誠はめっちゃめっちゃになった自分の机を整理していた。

そして、ようやく片付け終わったときだった。

「ああ、授業前から疲れたぜ」

誠は大きく背伸びして言った。

「私たちも手伝ったんだから感謝しなさい」

皐と南の手伝いのおかげですぐに片付いたのだ。

「わかってるよ。ありがとう。昼休みにジュースでも奢ってやるよ」

「ほんと？　ありがとう」

皐は嬉しそうに笑みを浮かべた。

すると、一人の生徒が誠に話し掛けた。

「おい、清水。さっき朝倉がいたぞ」

「え？　どこにいたんだ？」

「どこにいったかわかんないけど、階段を登って行ってたな」

階段を登るならあそこしかない。

誠は教室から出ると、急いで目的地に走って行った。

香と岬はある場所に来ていた。

そこは屋上。

少し強い風が吹き、二人の制服と髪をなびかせていた。

香は真ん中で立ち止まると、後ろにいる岬に向き直った。

二人の姿は、誠と香のときみたいだった。

「それで、話って何？ 私も暇じゃないの」

冷たい目を向ける岬。

今考えれば、岬と話したのはあのとき以来。

久しぶりに声を聞いて懐かしく思えてしまった。

だが、今はそんな場合ではない。

岬に言いたいことはいくらでもある。

「誠にいたずらをしたのはあなたね」

それを聞いた岬は鼻でふつと笑った。

「その証拠はどこにあるの？」

「証拠なんていらないわ。私は何でも心が読める。今の岬の心は自分がしたって言うてるよ」

岬は観念したのか、あっさりと認めた。

「ええ、そうよ。やったのは私。でも、それを誰が信じるのかな？」

「信じてくれるよ。少なくとも、一人は」

「誰よ。そんなバカは」

香は自信に満ち溢れたかのような表情でその人物の名前を言った。

「誠。私の一番の友達の清水誠。誠なら、私のことを信じてくれるだって、約束したもん。絶対に裏切らない。私のこと信じてくれるって」

それを聞いた岬は、大きな声で笑った。

「そいつが信じたから何だって言うの？ 別にいいわよ、そんなこと。それで、あんたの目的はなに？」

香は拳に力を込めるとはつきりと言った。

「岬。もう誠にいやがらせをするのは止めて。私にするのはかまわ

ない。でも、誠にだけは止めて。もう、私の大切な人を傷つけるのはやめて」

「それは無理ね」

岬はすぐに否定した。

香は恐る恐る問い返した。

「……ど、どうして？」

すると、香は鬼のような形相な顔つきで香を睨みつけた。

「どうしてなんてこっちが聞きたいわね。……なんであんたばかり幸せになるの？ どうしてあんたばかり信頼されるの？ どうして私は信頼されないの？」

「……岬」

「なんで敦くんはあんたなんかを選んだのよ！ 私を選んでおけば、転校するはずなかった。全部あんたのせいよ！ あんたが私を騙したから！ あんたがそんな力を得てしまったからこうなったのよ！」

岬の怒声を香はじつと聞いていた。

確かに、こうなってしまったのは自分の力のせいかもしれない。

でも、それはこんなことのために願った力ではない。

自分の親友を助けるために願った力だ。

「岬。あのときは本当にごめん。私だって、あんな嘔吐きたくなかった。でも、真実は言えなかった。だって、言えば岬は……」

「そんなことはどうでもいいの！」

岬はさっきよりも大きな声で叫んだ。

香はその威勢に身をたじろぐと黙り込んだ。

「……そんなことはどうでもいいの。そんなことは……。あなたはそれで私を傷つけないようにしたつもりなの？ それであんたは満足なの！」

「み、岬……」

「……あんた、まだわからないの？」

「え？」

「いい加減私の心を読みなさいよ！」

香は岬が言ったとおり心を読んだ。

そして今分かった。

岬の本当の気持ち。本当の苦しみ。

岬は敦のことなんてどうでもよかった。

それよりも重要なことがあったのだ。

「み、岬……。ごめん。ごめんなさい。……本当に、ごめんなさい」

香は止まらない涙を流すと、その場に座り込んでしまった。

岬も、目じりからこぼれる涙を流し歯を食いしばりながらじっと香を見ていた。

すると、突然屋上のドアが開き、誠が姿を表した。

二人は誠の存在に気づいた。

「ま、誠……」

「誠くん……」

誠は無言のまま足を進めた。

そして香の前に立つと、しゃがみ込んで肩に手を置いた。

「全部聞いてたよ。お前らのこと。……香、今の岬の気持ちわかったろ？ お前は岬のことを誰よりも信じてた。でも、お前は信じすぎていた。岬を傷つけないようにしようとしてた。それが、裏目に出てしまった」

それを聞いて、香はコクツとうなずいた。

「香、岬を裏切ったのはお前だ。岬がお前を裏切ったわけじゃない。お前がしてしまったんだ。岬はお前を信じてた、全て正直に、真実

を話してくれるって。でも、お前は岬を騙してしまった。お前らは、ただ信じてただけなのに」

香は涙を流しながら何度もうなずいた。

自分の責任。

自分の過ち。

全てを受け止めた。

岬のせいでも、スカイのせいでもない。

全部自分自身のせいだったことを知った。

香はゆっくりと立ち上がると、岬のもとによった。

岬も涙を流しており、近づいた香をじつと見ていた。

「ごめん。岬。本当にごめん。……私が、岬を騙した。私が岬に嘘を吐いた。それが嫌だったんだよね。……岬は、敦くんが私のことを好きだったことよりも、私が嘘を吐いたことが嫌だったんだよね。……ごめん、岬」

香は岬に深く頭を下げた。

岬は香をじつと見ていた。

自分の心の整理がつかないのであろう。

誠は軽いため息を吐くと、岬に言った。

「岬。香はな、お前を憎んだことなんてないんだって」

「え？」

岬は少し驚いた顔になった。

誠はあのときの夜の話を話した。

「なんだよ、香。言ってみろよ」

「う、うん。私ね……岬とまた前みたいに仲良くなりたい。たしかに、岬はいろいろ苦しい目にあわせた。でもね、やっぱり……岬は大事な親友だもん。それは、今でも変わらない。……岬と仲良くなりたい、前みたいに一緒に帰ったり、楽しく話したい。だから、転校して逃げたりせず、その機会が来るのを待つて通い続けた。これが、私のあの学校でやり残したこと。私……岬に心から謝りたい。ごめんねって……」

「誰だってあんな噂が流れたり、ずっと一人ぼっちなら逃げたくなるよな。俺だってそうだ。でも、香は逃げなかった。誰よりも親友を大切にしている気持ちを持っているから。岬もそうだろう？ お前だつて香を信じてた。だったら、許してやれよ」

岬はそつと香に視線を向けた。

今でも香は動かずに頭を下げていた。

岬は小さく笑みを浮かべると、香に顔を上げさせ抱きついた。

「み、岬？」

「香、やっとわかってくれたね。私、信じてた。香が気づいてくれるのを、ずっと待ってたんだよ」

「うん……うん……」

「……私こそごめんね。香」

誠は二人の様子を暖かい眼差しで見ていた。

これで、二人の絆は再び元に戻ったはず。

ただ、信じすぎたせいで糸が空回りしてしまったただけだったようだ。

絡まった糸を解けば離れる。

だけど、離れればまた繋げればいい。

ただ、それだけのこと。

誠は空を眺めると、そつと笑みを浮かべた。

今の空は、二人の和解を祝福しているかのように、空からの贈り物ということで晴れ渡っていた。

第二章 part 11：恋人

無事香と岬は仲直りし、香のことは全て解決した。

今では昔みたいに二人は一緒にいる。

誠は安心した。

香は本当に嬉しそうにしていた。

今までよりもその笑顔は輝いていた。

だが、香との問題はまだ終わっていなかった。

月はどうとう7月に入った。

蒸し暑い日が続く。

制服も夏服に変わり、夏という季節を実感してきた。

放課後、一緒に帰っているときだった。

途中で岬と別れ、二人で帰っているとき、香は誠にあるお願いをしてきた。

「ねえ、誠。私のお願い聞いてくれない？」

「ん？　なんだよ。そんなあらたまって」

「うん。今度の日曜日、私とデートしてよ」

「なんだ、そんなことが。いいぜ。いつもデートみたいにどこかに
行ってるしな」

「それでね、ただのデートじゃないの」

「ふん。どんなデート？」

すると、香は立ち止まった。

誠も同じように立ち止まる。

通学路の桜並木の真ん中で二人は向かい合った。

今では緑の葉で包まれている。

香は少し頬を赤く染めながら、真剣な表情をしていた。

「わ、私と、恋人としてデートしてほしいの」

「え？」

誠は香が言っていることをよく理解できなかった。

「それって……。二人はお互いに好き同士ってこと？」

「そう。友達としてではなくて、恋人として。二人は付き合ってい

るということ。これは、私の一生のお願い。……ダメかな？」

香は視線を落として誠の返答を待っていた。

誠はそつと笑みを浮かべた。

「いいぜ」

それを聞いた香は嬉しそうな表情になった。

「ほ、ほんとに？」

「ああ。今度の日曜な。恋人同士みたいなデートしておもいきり楽しもうぜ」

「うん」

香は満面の笑顔を浮かべながら元気よく返事をした。

そして、約束の日曜日。

誠は商店街のある喫茶店の前にいた。

少しして、今日のお相手である香が来た。

「あれ？ 今日のは誠のほうが早かったね。珍しいこともあるんだ」

「まあ、女を待たせるのは男として失礼だからな。それくらい当た

り前だ」

「いつも私が待っているけどね」

二人は笑い合った。

そのとき、誠はあらためて香の姿を見た。

今までよりも可愛らしい姿だった。

服装も今までよりも大人っぽく、薄く化粧もしている。

一段と可愛く見えてつい見とれてしまった。

「どうしたの、誠？」

「え？ あ、いや、なんでもない」

「もしかして、見とれてた？」

「そ、そんなわけないだろ」

「でも、心はしょうじきだね」

「あつ、勝手に読んだな！」

「しょうがないじゃん。でも、可愛い彼女のほづがいいでしょ？」

「……まあ、そうだな」

すると、香は誠の隣に並んでくつつくかのようにして腕を組んだ。

「今日一日、私たちは友達ではなく恋人同士だからね。よろしくね、誠」

「ああ」

二人は歩きだした。

最高の一日の始まりだった。

二人はまず買い物をすることにした。

香のお気に入りの洋服屋に入り、いろいろな服を見て行った。

「わあ、これかわいい。ね、誠。これどうかな？」

香は手に持っている服を前に出して問い掛けた。

「うん。いいと思うぜ。よく似合ってるよ」

「ほんとに？　じゃあ、これ買おうかな」

それから香は気に入ったものを買って行った。

「うっ。重い……」

香が買ったものは全て誠が持っている。彼氏ということで荷物持ちになった。

「頑張れ、誠。それ家に置いたら何かご飯作るから」

二人は一度香の家に寄り、買ったものを置いた。

「ふう、疲れた」

「お疲れ様。今、何か作るね」

そう言って、香は台所に向かった。

この前言っていたのだが、香は自分の手料理を食べさせたいと言っていた。

ということで、昼食は香の家で食べることになったのだ。

数十分くらいして、誠の目の前に料理が現れた。

「はい。オムライスだよ。味わって食べてね」

綺麗に焼けた卵が食欲をすすった。

そして、そのおいしそうな匂いを嗅いで、涎がでそうだった。

「おー、うまそうだな。じゃあ、いただきます」

「ちょっと待って」

誠はスプーンを持ち上げて食べようとしたのを香が止めた。

「なんだよ。早く食べないと冷めちゃうぞ」

「うん。あのね、……私が食べさせてあげる」

「はあ？」

「だって、私たち恋人同士なんだよ？ それくらいしてあげなきゃ」

「いいよ。そんなこと普通しないって。自分で食べるよ」

「はい。口開けて。アーン」

香はスプーンにオムライスをつぐと、誠の口に持ってきた。

誠は仕方なく、口を開けて香からのオムライスを食べた。

「どう？ おいしい？」

「うん。すっごくおいしい。けっこううまいな」

「よかった。私オムライス得意なんだ。いつでも作るから言ってね」

それから、香が何度も誠に食べさせ、甘い時間は過ぎて行った。

午後からも、二人は商店街を回った。

「あつ、誠あれ撮ろうよ」

香が指したのはプリクラだった。

「恋人ならプリクラの一つや二つは持っていないとね。さっそく撮るっ」

香は誠の腕を引っ張ると、中に入って行った。

撮り終わると、香はプリクラを見て嬉しそうに笑みを浮かべた。

「そういえば、誠の写真とか一枚も持っていなかったね。これ、私の宝物にする。誠もなくさないでね」

「プリクラごときで宝物かよ。もっといいものあるだろ？」

「いいの。私すごく嬉しいよ。誠とずっと一緒に気持ちになれるもん」

香はプリクラを大事にしまった。

そして、二人の楽しい時間はあっという間に過ぎて行き、とうとう夕方になった。

「もう夜になるな」

誠は暮れそうな夕日に向かって言った。

「楽しい時間はあっという間に過ぎるね。もっと誠と一緒にいたかったな」

「仕方ねーよ。時間は止められない。そろそろ帰るか？」

誠は香のほうを見て問い掛けた。

「うん。……誠、最後にあそこに行こう」

「あそこ？」

二人はある場所に来た。

それは、二人の出合った場所。

屋上だった。

「やっぱりここは落ち着くね。屋上ってなんか好きなんだよね」

香は両手いっぱい広げて屋上に立った。

誠はその姿を見ていると思う出した。

思えば、すべてここだった。

香と出会ったのも、ケンカして決裂したのも、岬とのことも。

ここは、いつしか香との思い出が詰まった大切な場所になっていた。

「ねえ、誠」

入り口の前に立っている誠に背を向けながら、真ん中に立っている香が口を開いた。

「私の、最後のお願ひ聞いてくれない？」

「なんだよ。最後のお願いって」

誠は香の言い方に違和感を覚えていた。

一生のお願いや、最後のお願い。

まるで、もうお願いしないような言い方。

これからも香とは一緒にいるはず。

なら、そんな言い方するはずない。

「私ね、今日一日誠とデートできて楽しかったよ。本当に恋人同士みたいで。だからね、最後に恋人らしいことしたいの」

「なんだよ。恋人らしいことって」

「うん。それはね……」

香はそつと誠に振り返った。

夕陽によって茜色に染まった表情には、少し頬に赤みがあった。

「私と、キスして」

「え？」

突然そんなこと言われて戸惑ってしまった。

確かに、恋人同士ならキスの一つや二つするかもしれない。

しかし、自分たちは別に恋人ではない。

今日たまたまそういう設定にしているだけだ。

誠はそつと香の表情をうかがった。

香の表情は真剣そのものだった。

「ねえ、誠。私と、キスしてよ」

香はもう決心している。

誠はごく生唾を飲み込むと意を決し、香にむかってゆっくりと足を進めた。

香の顔がどんどん大きくなっていく。

恐れず、視線を反らすことなく、その場に堂々と立っていた。

そして、二人の距離は埋まった。十分キスできるくらいの距離まで。

誠は手を伸ばし、そつと香の顔に触れた。

すべすべした肌触りが手によって伝わる。綺麗な髪が風によってなびく。

「誠……」

香はそつと目を閉じた。

そして、顔を少し上げた。

もう準備はできていた。

「香……」

誠もそつと目を閉じた。

そして、自分の顔を香に近づける。

その距離は数センチ。

誠の心臓は激しく高鳴っていた。

緊張する。

だが、願いを叶えてあげたい。

止めることなく近づける。

もうすぐ唇が重なる。

もう少し……。

すると、突然香が誠に抱きついてきた。

「か、香？」

「ごめん、誠。やっぱりいいよ」

「え？　いいって」

「やっぱりキスは本当の恋人同士じゃないとね。ごめんね、無理言っちゃって」

そのとき、とうとう日が落ちて夜が現れた。

「わー、綺麗な月だね」

香はフェンスに手をつきながら、夜空に浮かぶ満月を見ていた。

誠はその後ろ姿を見ていた。

ほんとうによかったのだろうか。

香は最後の願いと言った。

できれば叶えたかった。

たとえ、恋人同士ではなくても。

誠がそんなことを考えている最中、香は月を見ながら静かに涙を流していた。

そして、そつと呟いた。

「……もう決心ついたよ。ばいばい、誠……」

誠に聞こえないくらいに小さな声で呟くと、無理に笑みを作った。

第二章 part 12：転校

香との恋人同士でのデートも終わり、今までのような学校生活を送っていた。

毎日一緒にいて、楽しく話して、湊たちと弁当食べて、放課後は一緒に帰って、暇なら遊びに行く。

その繰り返し。

この関係がずっと続くと思った。

この先ずっと……。

少しずつだが、香はあまり学校に来なくなった。

理由はわからない。

先生も詳しくは知らないようだ。

岬とはもう仲直りした。

みんなわかってくれて、今では香を悪く言うものはいなくなった。

それならなぜ？

放課後の帰り道で、誠は久しぶりに学校に来た香にさっそく問い

掛けた。

「なあ、香。最近学校に来ないことがあるけど何かあったのか？」

「え？ 別になにもないよ」

香はいつもどおりの表情をして答えた。

「じゃあ、なんで休んだりしてるんだ？」

「んー、ちょっと用事があってね。ごめんね、心配かけちゃって」

「いや、別にいいんだけど。まあ、無理すんなよ」

「うん。ありがとう」

気のせいだろうか。

最後だけ、香は少し元気がないように見えた。

いつもと比べれば口数も少ない。

今までは香のほうから積極的に話し掛けてきたが、今ではあまり話し掛けずに考えることをすることが多い。

「誠」

急に呼ばれて誠は香を見た。

「忘れないでね」

「え？」

「私が消えても、いなくなっても、絶対に忘れないでね」

香の目は真剣だった。冗談ではなく本当に忘れて欲しくないよう
だ。

「な、何言ってるんだよ。忘れるわけないだろ」

それを聞いた香は安心したかのように笑顔になった。

しかし、悲劇は突然訪れた。

朝になって、誠は机に屈服した。

今日も香は来ていない。机は寂しそうに置かれていた。

朝のホームルームが始まる時、担任の先生は信じられないこと
を言ってきた。

「このクラスの朝倉香さんは、残念ながら転校することになりました」

「はあ？」

誠は勢いよく立ち上がった。

そんな話、香から一言も聞いていない。

そのとき、あの言葉を思い出した。

『私が消えても、いなくなっても、絶対に忘れないでね』

あの言葉の意味は、この意味だったのだろうか。

「朝倉さんの要望で、今日まで黙って置くことにしました。朝倉さんの夢は獣医になることで、東京の学校で勉強するそうです。10時からの飛行機に乗って行くそうです」

それを聞いて誠は時計を確認した。

今の時刻は9時。空港まで50分くらいかかる。

まだ間に合う可能性はある。

誠は教室を飛び出した。

後ろから声が聞こえるが無視した。

今は体を動かすしかなかった。

誠は学校を後にすると、空港に向かって走り出した。

途中でタクシーを捉まえ、急ぐように伝えた。

「香……、何で言ってくれなかったんだよ」

香は空港にいた。

一人大きなキャリーバックを脇に挟み、あと30分くらいして出発する東京行きの飛行機を待っていた。

「もうすぐ、この島ともお別れか。……誠」

香は目を閉じた。

誠との思い出が頭の中で走馬灯のように甦り繰り返していく。

楽しい日々が懐かしく感じる。

しかし、あの時を過ごせることはもうない。

時刻は9時40分。もうそろそろ乗らないとならない。

香はそつと後ろを振り返った。

後ろには誰もいない。

香は悲しげな笑みを浮かべると、入り口に向き直った。

「もう会えないね。……最後に伝えたかったな」

「だったら伝えてくれよ」

「え？」

香はもう一度後ろを振り返った。

香は信じられない気持ちでいっぱいだった。

そこには息を切らして膝に手を着いている誠の姿があった。

「誠……どうして」

「どうしてって、友達が行っちゃうのに平気で授業受けるようなバカはいないだろ」

「でも、どうして……」

誠は一つ息を吐くと、顔を上げ香の頭にぽんと手を置いた。

「それはこっちの台詞だ。なんで一言もなしに行くんだよ。俺たち友達だろ」

それを聞いた香は、突然目から大粒の涙がこぼれだした。

香はうつむきながら震える声で口を開いた。

「だって、……言えるわけじゃない。離れたくないのに、別れたくないのに、ずっと一緒にいたいのに、私は……、私は……」

香が話している最中に、誠は突然香を抱きしめた。

「ま、誠……」

「もういい。もう言わなくていい。お前の気持ちはよくわかった」

「……うん、うん、ありがとう。……ごめん、誠」

誠はそつと香を離れた。

「でも、なんでわざわざ東京の学校に行くんだ？」

「うん。言っただでしょ。私は獣医になりたいって。東京の学校で勉強して、自分の夢を叶えたいの」

香は少し目を誠から外すと口を開いた。

「実はね、誠と最初に会ったあの日、転校するかどうか考えてたの。迷っているときは、屋上で風にでもあたってスッキリしたほうがいいからね。でも、すでに先客がいた。それが誠だった。……私、誠のせいで決心着けなかったんだよ」

「な、なんでだよ」

「誠のおかげだから」

「え？」

「誠のおかげで、学校も楽しくなったし、友達も増えた。岬とも仲直りした。だから、なかなか決心できなかった。誠と別れたくなかったから」

「香……」

誠は照れ笑いを浮かべた。

香がいとおしい。本気でそう思った。

「それで、最後に伝えたいことってなんだよ」

「あ、そ、それは……」

香は少し頬を赤く染めながらうつむき、口を閉ざしてしまった。

「なんだよ。最後なんだから話してくれよ」

「うん。あのね……」

香はなかなか言い出せないでいた。

すると、突然顔を上げた。

「私の心読んでみて」

「え？」

「次は誠が私の心を読む番だよ。ほら」

言われたとおり、誠は考えてみた。

香が今何を考えているのか。しかし、さっぱりわからなかった。

「ダメだ。まったくわからない」

「もう、しょうがないな」

すると、香は誠の顔に近づきそつと唇を重ね合わせてきた。

香りがキスをしてきたのだ。

誠は驚きの表情のまま、その場につっ立っていた。

そして、そつと放すと香は耳元で囁いた。

「……好きだよ。誠」

「え？」

「好きだよ。誠」

香は嬉しそうに誠に再び抱きついた。

「か、香？」

「大好きだよ。誠。一番愛してる。離れたくない。ずっと一緒にいたい。もっと楽しい時間を過ごしたい」

「香……」

「誠は私のことどう思ってる？」

「え、えと、それは……」

「もう、そこは普通『俺も好きだよ』とか言うでしょ」

「お、俺も好きだよ」

「もう遅い。タイムアップです」

香は誠から離れると、少し間隔を開けて見詰め合った。

「来てくれてありがとう。嬉しかったよ。最後に自分の気持ち伝えることができたし、思い残すことはないよ」

「そうか」

「それじゃあ、最後に教えて。誠の気持ちを」

誠はそつと笑みを浮かべた。

しょうじに言うしかない。

香に隠し事はできないから。

誠は目を瞑ると、胸に手を添えた。

そして、今の自分の気持ちを考えた。

香のことも、あの秘密も。

少しして香はそつと笑みを浮かべた。

もう誠の心を読んだようだ。

「誠の気持ちわかったよ。……ありがとう」

「香、いつでも戻って来いよ。待ってるからな」

「うん。またね」

そう言って香は東京へと通じる入り口をくぐった。

誠は笑顔で行きゆく香を見送った。

誠は空港の外に出た。

透き通った空と、白い雲が泳いでいる。

そこに、飛行機が通った。

おそらく香が乗っている飛行機だろう。

誠は大きく伸びをした。

「じゃあな、香。いつか戻ってくると、信じてるよ」

誠は笑みを浮かべると、来た道を帰っていった。

第三章 part 1：幼児

香が東京に行って数日が経ち、もうすぐ夏休みを迎えようとしていた。

みなそのことで頭がいっぱいのようだ。

逆に誠は、夏休みのことよりも香のこのほづで頭がいっぱいである。

東京に行って、今はどうなっているか心配だった。

ちよくちよく携帯で連絡をしているが、忙しいからあまり長く話すこともできないし、ちよくちよくと言っても週に一回くらい。

少しずつ、香のことは香自身に任せようと思うのだが……。

確かに、今はそんなことよりも大事なことがある。

それは、期末テストだ。

これで赤点をとればせつかくの夏休みはなくなってしまう。

誠はほぼ徹夜状態で勉強に励んだ。

「……眠い」

そして、結果テストではどれもぎりぎりで赤点をまぬがれ、ようやく待望の夏休みが訪れた。

といっても、別に予定はないので家でごろごろすることしかできない。

「はあ、おはよう」

誠はあくびをしながら、居間に足を踏み入れた。

「おはようじゃないよ、兄さん。今何時だと思ってるの？」

居間で制服姿の湊があきれながら言った。

「ええ」と…… 9時？」

「もう12時過ぎてるよ。その生活習慣どうにかしてよ。こっちは後片付けが大変なんだよ」

「どうせお前も暇だろ？」

誠は冷蔵庫を開けると、牛乳を取り出し残り少なかったのものでそのまま飲み干した。

「これから部活なの。悪いけど、ご飯は自分で作ってね」

湊は中学からやっている吹奏楽部に入ったのだ。誠はもちろん帰宅部。

「そりゃ大変だな。頑張っていつてらっしゃい」

「うん。いつてきます」

湊は準備を済ませると玄関を飛び出した。

家には誠一人取り残され、静かなときが流れた。

「ああ、暇だな」

誠は無意識にリモコンを取るとテレビのスイッチを入れた。

映し出されたのは、名前も知らないアイドルが出演している番組。

別にアイドルなんて興味ない。しかし、見たい番組はないので、仕方なく眺めることにした。

「それで、茜ちゃんは桜楼学園に在学中なんですね？」

テレビの司会者がアイドルに質問をした。

そこで誠は少し驚いた。

「こいつ、俺と一緒にの学園なのか？ 見たことも聞いたこともないが……」

「はい。でも、仕事が忙しくてあまり通うことはできませんけど」

アイドルは可愛らしいしぐさで受け答えしていた。

なら見るはずないか。

誠はソファに深く座った。

なんかだるい。

「それでは、次の質問に入ります。ずばり、自分の願いごとはなんですか？」

「ええ」とですね。私、もう一度子供になりたいんです。そうですね、小学生くらいに」

司会者はちよつとわざとらしい驚き方でアイドルを見ていた。

「子供になりたいですか。夢があつていいですね。茜ちゃんの子供のころは、それはかわいいのですね。それで、子供になったらもっとアイドル目指して一から修行したいと？」

その質問に、アイドルは少し歯切れの悪い受け答えをした。

「……そ、そうですね。もっと人から愛されるアイドルになりたいと思います」

「ありがとうございます。それでは以上、あきのあかね 秋野茜さんでした」

そう言つて番組は終わった。

最後にアイドルは満面の笑顔でカメラに向かって手を振っている。

誠はリモコンを握むとテレビを消した。

「ああ、なんか楽しいことないかな」

誠は家にも暇なので、どこかに出かけることにした。

家から出ても、どこもあてがないので、ただぶらぶらするだけである。

やはり夏だからか暑い。陽射しがうつとおしい。

少しは太陽も休みを取れと言いたくなる。

いや、取ったら困るか……。

誠はまだ昼食を取っていないことに気づき、どこかの店で食べることにした。

街まで暢気に歩いて行った。

子供が楽しそうに虫かごを持って友達とはしゃぐのが見える。

家族で出かけているものもいた。

誠はその家族を見て立ち止まった。

そういえば、夏休みは家族とどこかに行った記憶がないな。今度、湊とどこかに行くか。

誠はその家族が見えなくなると、振り返って歩き出そうとした。

そのときだった。

「きゃあ！」

「痛っ！」

前をよく見なかったから誰かと衝突してしまった。

誠は大丈夫だが、ぶつかった人はその場に倒れてしまった。

「ご、ごめん！ 大丈夫？」

そこで誠は気づいたのだが、ぶつかった人は小さな女の子だった。

大きな麦わら帽子に白いワンピースを着ている。いかにも夏スタイルだ。

「ごめんね。怪我はない？ ほら、捕まって」

誠は女の子にむかって手を差し伸べた。

女の子はそつと顔を上げた。

その顔を見た誠は驚いた。

その女の子はすごく可愛く、ちびっこアイドルのようだった。

女の子も呆然と誠を見ていた。

我に返った誠はもう一度問い掛けた。

「あ、大丈夫？ 立てる？」

誠は手を女の子に向けると、女の子はそつと手を握ろうとした。

すると、前から声が聞こえた。

「おい！ どこにいったんだ？」

「わからん。クソ！ どこに消えたんだ」

「早く見つけ出せ！」

そこには何人ものこの暑い日に黒いスーツを着た人達がいた。

すぐ目立っており、回りから痛々しい目で見られている。

そんなことはお構いなしに、その人たちは何かをしていた。

「あつ！」

女の子は誠の手を掴むと立ち上がり、そそくさと誠の後ろに隠れた。

そのとき、黒いスーツを着た人たちがこっちに近づいてきた。

「きみ、この人を見ていないかい？」

一人の男が誠に話し掛けてきて、一枚の写真を見せてきた。

それはアイドルの写真で見たことはなかった。いや、どこかで見たかも。

誠はそつと後ろに隠れている女の子を見た。

女の子は涙目になって誠を見ている。

写真の子はおそらく高校生だが、この女の子と似ているような気がした。

「いえ、見ていません」

「そうか、すまなかったな。おい、行くぞ」

そう言って、男たちはどこかに行ってしまった。

「なんだ、あいつら……」

誠は再び女の子のほうを見た。

女の子は安心したような表情になっていた。

誠は今の状況が理解できず、頭の中が混乱していた。

「ええと、ところで君は？」

すると、女の子は誠の後ろから出てきた。

「わ、私は……」

すると、女の子は少し考え込んでしまった。

「ねえ、君の名前は？」

誠は中腰になって女の子に問い掛けた。

すると、突然口を開いた。

「お腹空いた」

「はっ？」

「お腹空いたの。なにか食べさせて」

「いや、お腹空いたって言われても……」

「あれが食べたい」

彼女は近くにあったファミレスを指した。

そこでは、一組のカップルがおいしそうにパフェを食べていた。

「あれが食べたいの？」

誠は女の子に向き直ると、女の子は涙目になって訴えてきた。

誠はその目を見て戸惑ってしまった。

チワワみたいな可愛らしい目をしていた。

これは反則ものだ。そんな目をしていたら断るにも断れない。

ということで、結局ファミレスの中に入り、パフェを食べさせた。

誠もついでにコーヒーを頼んだ。

「それ、そんなにおいしいか？」

女の子は本当においしそうにパフェを食べていた。

すごい食欲であつという間に食べ終わった。

「ほら、クリームが着いてるぞ」

誠はテーブルに置いてあつた紙を取ると、女の子の頬に着いたクリームを拭き取ろうとした。

「いい、自分でする」

そう言つて自分でクリームを拭き取つた。

けっこうしつかりした子なのかもしれない。

一息着いて、誠は女の子に質問した。

「それで、君の名前は何て言つのか？」

女の子はまたもや口を閉ざしたままである。

誠は仕方なく別の質問をした。

「歳はいくつ？」

すると、

「十七歳」

「えっ？」

「あつ、いや、な、七歳」

誠は一瞬耳を疑ったが、いい間違いだと思い氣にとめなかった。

「お父さんやお母さんはどこにいるの？」

「……いない」

女の子は悲しげな表情になった。この子も親がいないのだろうか？

「ねえ」

今度は女の子のほうから口を開いた。

「あなたは誰？」

「ああ、俺は誠っていうんだ」

「誠……」

女の子は呟くと、椅子から降りた。

「一緒に来て」

女の子はそういうと店から出ようとした。

「え？　ちょ、ちょっと」

誠はいそいでお金を払うと女の子を追いかけた。

「ねえ、君のことは何て呼んだらいいの？」

女の子は誠に振り返ると答えた。

「私のことは、茜^{あかね}って呼んで」

「茜ちゃんね。それで、茜ちゃんはなんでここに来たの？」

すると、茜は突然走り出した。

「おい！　ちょっと待てよ！」

相手は小さいのですぐに追いつくことはできた。

「どこにいくの？」

茜は誠の言葉を無視して走っていく。

誠は仕方なく後ろを着いていった。

茜はいろいろなところに行った。

デパートやアクセサリー店、服や靴などを見ていった。

お金を持っていないのか、見るだけで買おうとはしなかった。

そして、ようやく公園で休憩できた。なんか振り回されて疲れた。

「あ、あのー、俺、もう帰ってもいい？」

すると、茜はまた涙目になって訴えてきた。

そんな目を向けなくて欲しい。

「じゃあ、俺は帰るね。バイバイ」

誠は彼女に手を振ると、ベンチから立ち上がり帰ろうとした。

しかし、何か引つ張られる感じがした。

後ろを振り向くと、茜が誠の服を掴んでいた。

「あ、あの、帰れないんだけど……」

茜はあの目になって首を振った。

帰らせてくれないようだ。しかし、誠もかまっている暇はない。いや、暇だが面倒だ。

誠は力強く前に進んだ。

しかし、茜はひきずられても離そうとしない。

「わ、悪いけど、離してくれない？」

しかし、茜は離そうとしない。

誠はため息を吐くとしぶしぶ茜に言った。

「俺の家に来るか？」

すると、茜は満面の笑顔で元気よくうなずいた。

この言葉が間違えだと、誠は気づかなかった。

第三章 part 2：試練

家に着くと、誠は茜を中に案内した。

湊はまだ部活で帰ってきていないようだ。

「おじゃまします」

茜は丁寧の中に入った。そして中を見渡した。

「小さい家……」

なにか呟いているが気にしないように努力した。

誠は茜を居間に案内し、ソファに座らせた。

「なにか飲むか？」

「はい」

誠は冷蔵庫からジュースを取り出すと、コップに注いで茜に渡した。

「ありがとう」

そう言って、茜は一口啜った。

「……安物」

また何か言っているが聞かなかったことにした。

「それで、これからどうする？」

誠は茜の向かい側に座ると問い掛けてみた。

「そうね、まずは感謝するわ。助けてくれて」

「え、ああ、どういたしまして」

「それと、お願いがあるの」

「ん？　なんだよ」

「……しばらくここに泊めて」

「はあ？」

「家事でも、掃除でもなんでもするから」

と言ってもこの子は七歳のはず。家事なんてできるのだろうか。

「でも、誰かが心配するだろ？　家に帰らなくていいのか？」

「……私は、帰る場所がないから」

茜は悲しげな表情になってしまった。何か訳があるようだ。

そこで誠はあるいい考えを思いついた。

「よし、じゃあテストしよう」

「テスト？」

「そうだ。今から三つの試練を出す。それを全てクリアしたらここにいてもいいぞ」

茜は素直にうなずいた。

「わかった」

「では、まず一つ目。……炊事だ」

「炊事？ ご飯を作ればいいの？」

「その通り。実は俺昼飯まだ食べていないんだ。なんでもいいからおいしいものを作ってくれ」

「わかった」

茜は立ち上がると台所にむかって料理をし始めた。

そして、数十分して誠の目の前には奇妙な物体が運び込まれた。

「……これ何？」

「オムライス」

ケチャップはわかる。しかし、卵は真っ黒だ。

「じゃあ、……いただきます」

「どうぞ」

端の方を一口持っていき口の中に入れた。

最悪だ。中のご飯までまだ芯があって固い。とても食えない。卵も焦げて味が苦い。

「判定は……」

すると、茜がまたあの涙目で訴えてきた。

卑怯だ。卑怯すぎる。こんなんじや判定なんかできない。不合格にしようができないではないか。

誠は仕方なく、

「ギリギリ合格」

と言った。

それを聞いた茜は喜んでいた。

そこで自分の弱点に気づいた。

涙目には弱いな。

そして、気を取り直して二つ目の試練。

「二つ目は掃除だ。この部屋を綺麗にしてくれ」

部屋といっても、誰も使わないし、滅多に使わない床の間。

あるのは、押入れだけである。

まあ、万が一茜がこの家に住むのならこの部屋に泊まることになる。

「じゃあ、この掃除機と雑巾をつかって綺麗にしてくれ」

「わかりました」

そして、数十分経った。

「茜ちゃん、掃除は終わ……」

終わるところか今から掃除しないといけないような状況だった。

掃除機は周りの障子を破き、水の入ったバケツは倒れて畳は水浸しだった。

「ど、どうでしょう……」

どうでしょうと言われても、一目で判定がつく。

誠は不合格と言おうとした。

すると、また茜が涙目になった。

ああ、見ちゃダメだ。あれを見たら終わりだ。

しかし、脳裏に焼きついて頭から離れない。

誠はしぶしぶ超ぎりぎり合格と言った。

弱い男だな、俺。

「さあ、次が最後の試練だ」

「はい」

茜は元気よく返事をした。

今考えれば七歳に家事や炊事は最初から無理ではないかと気がした。

「最後は洗濯だ。といっても洗う必要はない」

すでに洗濯は湊がしているのだ。

「茜ちゃんには干している洗濯ものを取り込んでもらう。そして、綺麗に畳むのだ」

これくらいならできるだろう。

「わかりました」

茜は気合を入れて、ベランダに出た。

誠は後ろからその様子を見ていた。

なにかあつたらすぐに止めるためだ。もう自分の仕事を増やしたくない。

だが、その願いは叶わなかった。

「ああ！」

香が洗濯ものを取ろうとしたら庭に落としてしまったのだ。

「……落ちちゃった」

と言われても困る。

誠は仕方なく下まで降りて取りに言った。

その目を離れたすきに、落ちている数が増えていた。

「う、ごめんなさい」

上ではこつちを見て謝っている茜の姿がいた。

「いいよ。もう……」

誠は試練を与えたのが間違いだと今気づいた。

二人は居間にもどり、ソファに向かい合って座った。

「茜ちゃん。悪いけど、このまま置いとくには……」

すると、またもやあの目。

しかし、誠も負けていられない。心を鬼にして口を開いた。

そのときだった。

「ただいま。兄さんいる？」

ちょうど湊が帰ってきた。

「おかえり、湊。ちょっとこっちに来てくれ」

「なに？」

湊は居間に入ると、茜を見て立ち止まった。

「こんにちは」

茜は行儀よく湊に頭を下げた。

「兄さん……」

「ん？」

「とうとう……犯罪に手を染めたのね」

「なんでそうなるんだよ……」

誠は湊に今までのことを全て話した。

「そうなんだ。別に少しくらい家に住んでもいいんじゃない?」

「でもな」

「お願いします。迷惑はかけません」

茜が丁寧をお願いしてくる。

すでに迷惑をかけているが。

湊も一緒になってお願いしてきた。

「しょうがない。しばらく泊めてやる」

「ほんとに? ありがとうございます」

茜は嬉しそうに微笑んだ。

「湊、風呂沸かしてあるから先に入れよ」

「ありがとう、兄さん。茜ちゃんも一緒に入る?」

「いえ、一人で入れます」

「え? でも……」

「大丈夫です」

「そう。じゃあ、お先にどうぞ」

「ありがとうございます」

茜は席を立つと、風呂場に足を進めた。

「しっかりとした子ね」

「うん。俺もそう思った。今どき、あんなしっかりした七歳はいないだろう」

「兄さん、可愛いからって襲ったりしないでよ」

「するわけないだろ……」

そのころ、茜は風呂の中でぶつぶつと呟いていた。

こうして誠の茜を加えた暑い夏が始まった。

第三章 part 3：買物

今日から新しく茜を迎えた生活が始まった。

これがいつまで続くかはわからない。

誠はすぐに出て行くことになるだろうという程度にしか考えていなかった。

誠は今日も変わることなく自分が寝たいだけ寝て、ようやく正午くらいに起きた。

階段を降り、無意識に進んでしまう居間に足を踏み入れた。

そこには部活に行く準備をしていた湊の姿があった。

「はあ、おはよ」

「兄さん、もうちょっと早く起きてよ。私もう行くね。茜ちゃんの面倒ちゃんと見ててよ」

「わかったわかった。いってらっしゃい」

「うん。いってきます」

そう言って湊は鞆を持つと行ってしまった。

誠は大きく背伸びをした。

「さて、あいつは何してんだろっな」

誠は茜が寝泊りしている部屋、床の間兼客間に足を進めた。

「茜ちゃん、入るよ」

誠はそつと扉を開けた。

そのときだった。

「おはよう!」

扉を開けた瞬間、茜がいきなり飛びついてきた。

誠は驚きながらも茜をなんとか捕まえた。

「ちょ、ちょっといきなりなんだよ」

「だって、元気なほうがいいでしょ? ……昨日いろいろ考えたんだし……」

最後に何か言っているが誠には聞こえなかった。

「まあ、元気はいいことだな」

昨日と性格が変わっているような気がするのには気のせいだろうか。

「ねえ、お腹空いた。ご飯食べたい」

「ご飯ね。何が食べたい？」

すると茜は険しい顔になって真剣に考え始めた。

そんなに悩むことだろうか？

「ええ」と、お子様ランチ」

「って言われても、何を作ればいいのかわからないな。しかも、めっちゃお子様だな」

「お子様の食べるものってこれじゃないの……」

またも茜は真剣に悩み始めた。

「じゃあ、外に食いに行くか」

「うん」

二人は外に出ると商店街に向かった。

そして目のついたレストランの中に入り昼食をとった。

「それで、本当にお子様ランチでいいの？」

誠は茜に問い掛けたが、茜はメニューを見て大いに悩んでいた。

最後にはハンバーグ定食を注文し食事を終えた。

二人はレストランから出ると、買い物をすることにした。

「家に住む間、服とかいろいろ買わないとな」

「うん。ありがとう」

すると、茜は誠の手を握ってきた。茜は当然のような顔をしている。

誠は小さく笑みを浮かべた。

まるで二人目の妹ができたみたいだった。

湊の幼いころもこんな感じだった。いつも誠の手を握っていた。

湊はよくお店やどこかに行くとき迷子になった。

湊はそれが怖く、いつも離れないように誠の手を掴んでいた。

誠は茜に笑みを浮かべながら言った。

「迷子にならないようにね」

「うん」

二人はいろんな店に寄った。

そこで気付いたのだが、茜は子供が行くような店には入らず、今どきの高校生などの若者が行くような店ばかりを見回っていた。

あいそうにない服やアクセサリ類、バッグやマニキュアなどを見

ていた。

とても小学生とは思えない。

「ねえ、誠お兄ちゃん」

いつしかお兄ちゃんをつけて呼ぶようになっていた。

「なんだ？ 欲しいものが見つかったか？」

「うん。誠お兄ちゃんは、湊お姉ちゃんと二人だけで住んでいるの？」

誠はちよつと迷ったが、茜の前にしゃがみ込むと話してあげた。

「俺のお父さんとお母さんは、ずっと前に死んだんだよ」

「え？」

それを聞いた茜は気まずそうな表情になった。

「ご、ごめんなさい……」

「いいよ。別に、もう気にしてはいない。今は俺には湊がいる。それだけで十分だよ。そして、今では茜ちゃんもね」

「うん……」

雰囲気が悪くなっている気がして、誠は笑顔を作ると茜の頭を撫でた。

「ほら、買いたいものがあつたら何でも言えよ。これから一緒に暮らすんだからな、遠慮なんかするなよ」

「うん」

茜は笑顔を取り戻し、買い物を再開した。

さまざまな店に寄って必要な物を買った。

荷物は全て誠が持っている。

茜は満足そうな顔をしていた。

その帰り道、誠は一つの店が目に入った。

そこはアクセサリー店だ。

新しくオープンしたお店らしい。今ならオープン記念で割引していると書かれてある。

茜もその店を覗いていた。

「入ってみるか？」

「うん」

茜は元気よく返事をする中に入っていた。

店の中はアクセサリー類でいっぱいだった。

安いものもあれば万を超える高いものもある。

「けっこいろいろあるんだな。茜ちゃんはこんなの興味あるの？」

「誠お兄ちゃんを着けないの？」

「俺はあまり着けないかな。ネックレスの一つくらいは持つてるけど」

「じゃあ、私なにかプレゼントする」

「え？ いや、いいよ。そんな悪いし」

すると、茜は財布を取り出した。

中にはたくさんのお札が入っていた。すごいお金持ちだ。

「住まわせてもらっているんだからこれくらいしないと。私が選んでもいい？」

「え、えと、……ああ、いいよ」

せっかくのご好意だから断るのも悪い。仕方なく了解した。

「じゃあ……、これ」

茜が取ったのは銀の十字架のネックレスだった。値段は一万近くある。

「こ、こんな高いのはいいよ。もっと安いので」

「安いのか？」

茜はまた探し出した。

自分のために感謝のしるしとして探してくれる。

ちょっと嬉しかった。感謝されるのは悪くない。

茜は何度も高そうなものを持ってきて、最後には千円くらいの十字架のネックレスを買ってくれた。

湊にも同じようなものを買った。

「私がつけてあげる」

誠はその場にしゃがみこむと、茜は誠の首にネックレスを取り付けた。

「ありがとう、茜ちゃん。大事にするよ」

「うん」

茜は満面の笑顔を見せた。

「よし。じゃあ、俺も何か買ってやるよ」

「え、私はいいよ。プレゼント意味がなくなるし」

「そうか？　じゃあ、いつかお礼はするよ」

「うん」

誠はそつと十字架に触れた。

綺麗に光っている。貰ったことよりも心が伝わる。

誠はそつと笑みを浮かべた。

家に着いたとき、すでに湊は帰っていた。

「おかえりなさい。あ、買い物してきたの？」

「ああ、必要なものは一通り買ったんだ」

「お疲れ様。あれ、そのネックレスは？」

「ああ、茜ちゃんが買ってくれたんだよ。プレゼントだって」

「はい。湊お姉ちゃんの」

茜は湊の分のネックレスを取り出すと、湊の首に着けてあげた。

「ありがとう、茜ちゃん」

「うん」

「あ、兄さん。お風呂沸いてるから入ってきたら？」

「ああ、そうするかな」

誠は風呂場に足を進めた。

風呂場に入る前に、鏡の前でネックレスを着けている自分を見た。

「茜ちゃんはこのいうのにもう興味あるんだな」

誠はネックレスを外すと風呂に入り、3人で楽しい夕食を済ませ、疲れを取るために眠りに着いた。

第三章 part 4：学校

茜と一緒に住むようになってから数日が経った。

茜は今では当たり前前のようにここにいる。

いつしか誠もそれが当たり前になっていった。

二人目の妹。

そんな感じがする。

茜を見るたびに幼いころの湊を思い出す。

本当によく似ていた。家事や炊事はできなくても、元気の良さとおの嬉しそうな笑顔。

そこは十分に似ていた。

そして、自分に対する接し方も。

誠は未だに寝ていた。

時刻はもうすぐ正午を回ろうとしていた。

しかし、起きる気配は少しもない。

すると、ドアが勢いよく開かれ、茜が布団に勢いよくダイブしてきた。

「誠お兄ちゃん。湊お姉ちゃんが起きてって。もうお昼だよ」

誠は茜の体重がもろに腹に来たので、一瞬で目が覚めてしまった。

「た、頼むからもう少し優しく起こしてくれ」

「だったら誠お兄ちゃんが早く起きればいいじゃない。ほら、湊お姉ちゃん部活行っちゃうよ。お見送りしなきゃ」

そう言って茜は楽しそうに笑みを浮かべながら出て行った。

誠は頭を掻きながら起き上がると、ベッドから降りて部屋を出た。

誠の首にはネックレスが光っていた。

「いってらっしゃい。湊お姉ちゃん」

「いってらっしゃい……」

茜は元気よく、誠は眠たそうな声で湊を見送った。

「うん。いってきます」

湊は笑みを浮かべながら手を振ると部活に行ってしまった。

「さてと、俺はもう一眠りするかな」

誠は欠伸をしながら方向転換する。

すると部屋に戻ろうとする誠の服を茜が掴んだ。

「ちょっと待ってよ。その間私は何をしたらいいの？」

「うーん、子供は子供らしく外で遊んできなさい」

「えー、こんな可愛く小さな女の子を一人で行かせるの？」

「なんだよ。俺も来いって言うのか？」

その質問に茜ははつきりとうなずいた。

「だって、いつも誠お兄ちゃん私にかまってくれないじゃない。たまには一緒に遊ぼうよ」

誠はため息を吐くとしぶしぶ了解した。

こういうところは子供だ。いくらしっかりしていようと甘えたい年頃なのかもしれない。

茜は嬉しそうに鼻歌をさえりながら喜んでいた。

二人は昼食を終え、さつそく外に出た。

今は誠の通学路を通っている。

桜並木の道沿いを歩き、目の前には学校が見えていた。

「あつ、桜楼学園……」

茜が突然呟いた。

「ん？ 茜ちゃん、桜楼学園を知ってるの？」

「え、えと、いや知らない。まったく知らない」

茜は強く否定した。

しかし、顔は学園の方を向いており、その場から動こうとしなかった。

「……中に入ってみるか？」

誠の問いかけに茜は強くうなずいた。

二人は中に入ると、校庭で部活をしている姿が目に入った。

見た感じ陸上部だ。

ということはあいつがいるはず。

「あつ、お兄さん！」

陸上部専用の青い練習着を来た瞳が、こっちに向かって手を振りながら近づいてきた。

やっぱりいた。

「あ、この子が茜ちゃんね。湊から聞いてるよ。こんにちは」

瞳は茜に気づくと、その場にしゃがみ込んだ。

「かわいいね。お兄さんはとうとう罪を犯したんですね」

「だからなんでそうなるんだよ」

「あ、あの、どちらさまですか？」

茜は首をかしげながら瞳に問い掛けた。

「あ、ごめんね。私は麻生瞳。この誠お兄さんと湊の友達だよ」

瞳は茜の手を握ると笑みを浮かべながら軽く握手をした。

「それで、お前は練習に戻らなくていいのか？」

「あつ、そうだった。じゃ、またね」

瞳は校内一番の足で練習に戻った。

本当に速く、茜は心底びっくりしていた。

二人は校舎の中に入り、茜が行きたいところを回っていった。

「わあ」

茜ははしゃぐようにして見ていた。まるで懐かしんでいるようだった。

「おい、茜ちゃん。そんなに走り回ったら……」

「あつ！」

注意したときだった。

茜はバランスを崩して勢いよく廊下に転んでしまった。

「ああ、まったく。おい、大丈夫か？」

誠はそつと茜を立たせた。

茜は痛みに耐えながら涙をこぼしていた。こんなところも子供だった。

「大丈夫か？ 痛くないから心配するな」

誠は優しく声をかけた。

「う、うん……」

茜は素直にうなずいた。

誠は小さく笑みを浮かべると軽く頭を撫でた。

「さて、あいつのところにも行くか」

二人は音楽室に向かった。

もちろん湊に会いに行くためだ。

湊はフルートの練習をしており、誠たちに気づくと練習を抜け出てきた。

「兄さん、茜ちゃん、来てたの」

「ああ、茜ちゃんが来たいからって」

「湊お姉ちゃん、フルート上手だね。とってもうまい」

茜は無邪気に拍手を贈った。

「ありがとう、茜ちゃん」

「湊はな、中学のころ県大会で最優秀賞を受賞したんだぜ」

誠は自分のことのように自慢した。

そのときの写真が誠の携帯の中に眠っている。

「ほんとに？　すごい！」

「たまたま運がよかったただだよ。そのせいでみんな期待してるけど」

湊は少し苦笑いを浮かべた。

二人はこれ以上邪魔をしては悪いので、湊に別れを告げて音楽室から出て行った。

「さて、もう学校はいいだろ。他のところに行こうぜ」

誠は茜に問い掛けた。

しかし、茜は最後に行きたいところがあるといい誠の前をあるいてある場所にむかった。

茜は二年生の階に着くと、ある教室の中に入った。

二年C組のクラス。

誠はA組のクラスなのでそんなに関わりのないクラスである。

茜は教室に入ると一つの席に座った。

ちょうど真ん中に位置する座席。

そこに茜はちょこんと座った。そしてゆっくりと辺りを見渡す。

目の前の黒板、天井、後ろの棚、窓、廊下、あらゆるところを見渡す。

誠はその様子をじっと見ていた。

茜はそつと目を閉じると、ゆっくりと息を吐き、心を落ち着かせた。

そして目を開くと、席から立ち誠のもとに戻った。

「もういいのか？」

「うん。ありがとう」

「でも、何してたんだ？」

「うん。ちょっとね。高校ってどんなものかと思って」

茜は一目教室を見ると階段のある方へと足を進めた。

誠も一目教室の中を覗いた。

そしてあの席を見る。

なぜ茜はあの席に座ったのだろう。

それに、茜は何年かすれば高校生になる。

焦らなくても時が何とかしてくれるはず。

なのに、茜はもう高校生活を味わうことができないような素振りだった。

誠はじつと教室を見渡した。

何も無いごく平凡な教室。

しかし、何か違和感があった。

この教室だけ、他とは違う何かがあった。

「誠お兄ちゃん」

茜が階段の手前で誠を呼んだ。

誠は軽く返事をすると思いの元にむかった。

誠の記憶の中には、茜が座った席の場所が鮮明に刻まれていた。

第三章 part 5：事件

今日の誠は珍しく午前中に起きた。

すでに余所行きの服に着替え、出かける準備をしていた。

大きく背伸びをし、眠気と気たるさを吹っ飛ばした。

居間に足を踏み入れた誠は、ソファに座って自分で作った朝食を食べ始めた。

後から居間に入ってきた湊と茜は、誠に気づき心底驚いた表情になった。

「に、兄さん？ な、何で起きてるの？ 今日は何の日？ 何かあったかな？」

「きつとあれだよ。湊お姉ちゃん。誠お兄ちゃん、頭がおかしくなったんだよ」

それを聞いた誠は多少怒りを込めながら二人を睨みつけた。

「俺が起きてるのがそんなに悪いか」

誠の恐ろしい顔を見て二人はすぐに黙り込んだ。

「い、いえ、なんでもありません」

湊はすぐに謝った。

「でもさ、誠お兄ちゃん。今日はいつになく早いね。何かあるの？」

茜は誠の隣に座ると問い掛けた。

「ああ、今日は友達と遊びに行くんだよ。だから早く起きたんだ」

昨日の夜携帯に連絡があり、そういうことになった。

茜は何か思いついた顔になると、誠に向かって笑みを浮かべた。

「じゃあ」

「ダメだ」

茜が何か言おうとしたときに誠はすぐに口を開いた。

「何だよ。まだ何も言ってないじゃん」

「お前、今私も行くとか言おうとしなかったか？」

「え？　そうだけど」

「そんなのダメに決まってるだろ。お前は大人しく家にいろ」

「え」

茜は少し涙目になった。

誠は無視して食事続ける。

別に連れて行ってもいいのだが、自分の友達が何いうかわからない。おそらく、いろいろとからかってくるだろう。それが嫌なのだ。

「茜ちゃん、今日は私と遊ぼう。今日は部活ないし」

湊が自分たちの分の朝食を作りながら茜に問いかけた。

「本当？ やった」

茜は無邪気に喜んだ。

それを見た誠は一安心し、テーブルに置いてあったリモコンに手を伸ばすとスイッチを入れた。

「只今入ったニュースです」

たまたまつけた番組がニュースだった。

誠はそのニュースを聞くことにした。

「先ほど情報が入り、今人気アイドルの秋野茜さん十七歳が行方不明になっていることがわかりました。詳しい情報はまだですが、いなくなったのは二週間前。マネージャーや警備員と一緒に居ながらも、どこかに消えてしまったとのこと。今でも搜索は続いております」

そう言ってニュースは終わった。

誠はそこであることに気づいた。

そういえば、茜と出会ったのも二週間前だった。

誠はそつと茜を見た。

茜は少し怯えた表情が入り混じっているように見えた。

しかしすぐに元に戻った。

少し疑問を抱いたが誠は気にしなかった。

歳だつてすぐ離れている。茜とは何も関係ない。

誠はソファから立ち上がると、湊と茜に一言告げ家を出た。

夏休みということで、久しぶりに大いにはしゃぎ回った。

いい気分転換にもなったし、ストレス解消することもできた。

その友達と遊びに行った帰り道、誠は家に向かって歩いていると後ろから声をかけられた。

「あ、あの、すみません」

誠はそつと後ろを振り返る。

そこには一人の女性が立っていた。

こちらでは見ない高そうな服にハンドバッグ、髪は肩まであり茶色に染めており、赤いフレームの眼鏡が印象的だった。

「何か？」

誠はその女性に問いかけた。

「その、この写真の子を見かけませんでしたか？」

その女性はバッグの中から一枚の写真を出してきた。

誠はその写真をそつと受け取った。

そこには前にも見せてもらったアイドルの写真だった。

茜と出会った商店街で、あの黒尽くめのスーツを着た人たちが見せたものと同じ。

それに、それは朝ニュースで行方不明になっている秋野茜だった。

誠はその写真を見て不思議に思った。

やはり茜に似ている。どこことなく、顔つきや目などは似ている感じがした。

誠はしばらく考えたが、関係ないと思い写真を女性に返した。

「すみません。わかりませんね」

「そうですか……」

女性はしょんぼりと落ち込んでしまった。

「あ、あの、何か合ったんですか？ 実は前にも同じ写真を見せられたことがあるんです。今日もニュースで見ましたし」

それを聞いた女性は、少し躊躇ったが話してくれた。

「はい……。ニュースで御察しの通り、その子は今行方不明になっています。詳しいことは私もわかりませんが、突然……」

そう言っただけでその女性は口を閉ざしてしまった。

本当に心配しているようで、顔色も悪そうである。

おそらく、何時間も歩きまわったのだろう。

「誘拐か何かですか？」

誠は思ったことを口にした。

女性はそれに対し首を振った。

「いえ、そういうことは無いと思います。誘拐なら犯人からの電話がありますし。この子が行方不明になってから二週間は経っていますので」

女性はうつむいてしまった。

そのとき、あるものに目が止まった。

「そのアクセサリ……」

女性は誠の首に掛けてある茜から貰った銀の十字架のネックレスに気づいた。

「ああ、これは貰ったものです」

女性はそのネックレスに触れるとそつと呟いた。

「あの子も十字架が好きでした。特にネックレスは十字架のものばかりでした」

女性は懐かしんでいる様子だった。

頭の中ではその子のことを考えているのだろうか。早く見つかって欲しいものである。

「では、見かけたらお知らせします」

「はい。ありがとうございます。お願いしますね」

誠は女性から連絡先を教えてもらうと小さく頭を下げて別れた。

家に着くと、湊と茜が待っていた。

「お帰り、兄さん」

「お帰り、誠お兄ちゃん」

二人は優しく笑みを浮かべて出迎えてくれた。

誠も自然と笑みを返した。

「ああ、ただいま」

「ねえ、兄さん。ちょっとお願いがあるんだけど」

湊が前で手を合わせてかしまった。

「ん？　なんだよ」

それを茜が答えた。

「今日ね、私も夕食作ったんだ。どっちがおいしいか比べてよ」

茜は誠の手を引っ張ると、居間に入れ、椅子に座らせた。

誠の目の前にはおいしそうな料理とよく分からない料理が並べてあった。

「なんか、おいしそうなやつもあればあまり口にしないようなやつもあるな……」

誠は一つの料理をじっと見た。

おそらくチャーハンだと思う。

しかし、野菜の大きさはバラバラ、米の色も白いのもあれば真っ黒なものもある。

そして、なぜか上には辛そうな塩こしょうの量が多く見える。

「さ、食べて食べて」

茜は誠にスプーンを渡した。

そしてその得度も知れない物体を口に運ぶ。

口に入れた瞬間、誠は大きくむせてしまった。

それを見た湊はすぐに水を持ってきた。

「大丈夫？ 兄さん」

「ああ、大丈夫。ありがとう」

その様子を見て茜はしょんぼりとした表情になった。

「ごめん、誠お兄ちゃん。やっぱり……おいしくなかったよね」

茜はがっかりした顔でお皿を下げようとする。

誠は茜より早くお皿を取ると、再び口に入れた。

「ま、誠お兄ちゃん。そんな無理して食べなくていいよ。お腹でもこわしたら……」

しかし、誠は一度も手を休めることなく、一つ残らず綺麗に食べてしまった。

そして、茜に向き直ると優しく頭を撫でた。

「見た目はあれだったけど、おいしかったぜ。愛情がいっぱいつま
つてたよ。ありがと」

それを聞いた茜は満面の笑顔を浮かべると嬉しそうにうなずいた。

「うん」

「さ、私たちも食べましょう」

湊と茜も席に着き、3人で楽しい食事を始めた。

まるで、その光景は一つの家族のようだった。

小さな子どもを囲む二人。

茜はこの時間が永遠に続けばいいと思っていた。

誠と湊もそう思っていた。

その次の日、誠はお腹を壊してしまい、1日中布団の中につずくまっていた。

茜は面目なさそうにずっと誠を看病していた。

湊はその様子を見て、小さくクスクスと笑った。

第三章 part 6：涙腺

月が変わり、八月に入った。

気温が上がり、蒸し暑い日が続く。

蝉の声が耳障りである。太陽の陽射しもうつとうしい。

おかげで満足に寝ることもできない。

誠は今では朝9時ごろには起きるようになっていた。

そのかわり、家にいるときは常にエアコンを点けるようになった。

「兄さん。エアコンの点けっぱなしは体に悪いよ」

湊は部活に行く準備をしながら言った。

「でも暑いだろ。これのほうが涼しくて快適だし。な、茜ちゃん」

「うん」

茜は元気よくうなずいた。

湊はあきれたようなため息を吐いた。

「私明日から部活ないから、今日は最後という事で遅くなると思う」

「ああ、わかった」

「湊お姉ちゃん、いつてらっしゃい。頑張っ
てね」

「うん」

湊は鞆を持つと、部活に出かけてしまった。

部屋の中は誠と茜の2人になった。

「なあ、茜ちゃん」

「うん？」

「今日は、ずっとこうしてよう」

「……え？」

茜は少し困った表情になった。

「なんで？ どこか遊びにいかないの？」

「外暑いだろ？ ずっとこのままでいいじゃん」

「嫌だよ。どこかに遊びに行きたい」

茜は誠の体を揺すり始めた。まるで、親子の仕草のようだった。

「じゃあ、どこに行きたいんだ？ 暑くてだるいところは嫌だぜ」

茜は少し考えると、ある場所を指名した。

ということで、2人はその場所に向かうことになった。

少し歩くこと10分。

2人の目の前には、大きな施設が建っていた。

ここはプールがあるのだ。

たくさんの遊具のあり、何より暑さふつとばすことができる。

「それで、茜ちゃんは水着持ってるの？」

「あつ、忘れてた……」

「しょうがないな」

2人は受付で水着を購入し、それぞれ着替え始めた。

準備ができ、二人は合流した。

誠はごく普通の短パンの水着。

茜は学校で使うようなスクール水着に似ているようなやつだった。

「この水着ださい。もっと可愛いのがいい」

茜は自分が着ている水着に文句ばかり呟いていた。

「しょうがないだろ。それしかないんだし。子供はそれで十分だ」

「でも……」

茜は満足できないようだった。

「それより、お前泳げるのか？」

その質問に、茜は首をかしげた。

「え？ 別に泳ぐ気ないよ。浸かるだけでいいし」

それを聞いて誠はこけそうになった。

「浸かるだけって、ここはお風呂じゃないんだぞ。こんなに広いんだから、自由に泳ごうぜ。……まさか、泳げないの？」

「お、泳げるもん！」

茜は少し怒ったような口の聞き方で答えた。

「じゃあ、泳いでみるよ」

そして、2人はプールの中に入り、茜は泳ぐ体勢をとった。

「い、いくよ……」

茜は床を蹴ると前に出た。

しかし、すぐに体が沈んでしまい、まったく前に進まなかった。

誠はすぐに茜の元に向かい体を起こした。

「おい、大丈夫か？」

茜は息を乱しながらしっかりと誠に捕まっていた。

「やっぱり泳げなかったな。しょうがない、俺が教えてやるよ」

「……うん」

茜は素直にうなずいた。

それを見て、誠は小さく笑みを浮かべた。

そして数時間して、茜は10メートルくらい泳げるようになった。

「やったよ。泳げた」

茜は両手を挙げて嬉しそうに喜んだ。

誠は笑みを浮かべながら拍手した。

「よくやった。なかなか上手かったぞ」

「へへへ。ありがとう」

茜は照れ笑いを浮かべた。

疲れたので、2人はこれで家に帰ることにした。

途中、ご褒美として誠は茜にアイスを奢り、手を繋いで家路を歩いているとき、2人は公園で親子が遊んでいる光景が目に入った。

楽しそうに子供はブランコに乗り、その子のお母さんは、後ろを押していた。

誠はそっと茜を見た。

茜の表情はうらやましそうに見えているようだった。

親子は少しして帰っていった。公園には誰もいない。

それでも、茜はずっとブランコを見ていた。

「……押してやろうか？」

誠の声に、茜は最初は少し驚いたがすぐに嬉しそうになぜいた。

「うん」

茜はブランコに座ると誠を待った。

誠は優しく後ろから茜を押した。

茜は楽しそうに笑っていた。

誠もそれを見て、自分も楽しくなった。

妹、いや自分の子のような感じがする。

親になるってこういう感じなのだろうか。

子供が喜べば自分も嬉しくなる。

親子は不思議なものである。

「誠お兄ちゃん、もっと強く押して」

「よし。行くぞ！」

誠はさっきよりも強く押した。

ブランコは高く上がる。

茜は声を上げて楽しんだ。

誠も笑みを浮かべる。

そのとき、顔に何か当たった。冷たい何かが。

雨だろうか？ でも、空は晴れ渡っている。

しかし、さっきから小さな滴が顔に当たる。

そして、ようやくその正体がわかった。

茜は泣いていた。

ブランコに乗りながら、涙を流していた。

誠は自分の目を疑ったが間違いなかった。横に涙の跡が見える。

誠はゆっくりとブランコを止めた。

茜はブランコから下りると誠に向き直った。

「ああ、おもしろかった。またお願いね、誠お兄ちゃん」

茜の目は少し潤っていた。そして赤くなっている。

なのに、何事もなかったかのように笑みを浮かべている。

誠はその表情を見て、茜が心配になってきた。

「おい、あ、茜ちゃん……」

「ん？ 何？」

前に進んでいた茜は、後ろにいる誠に振り返った。

その目はいつもの目に戻っていた。

「あ、い、嫌。……なんでもない」

「変な誠お兄ちゃん」

茜は少し首をかしげると、家にむかって歩き出した。

誠は思い違いだと思い、その後ろを歩いていった。

家に着くと、湊はまだ帰っておらず、二人で夕食を作った。

そして、湊が帰って来ると一緒に夕食を食べた。

「すごいね。2人が作ったの？　すごくおいしいよ」

誠と茜は笑みを浮かべた。

そして、それぞれ眠りに着こうと部屋に入ってしまった。

誠も自分の部屋に戻りベッドに潜り込んだ。

少しして、ドアがノックされた。

「どうぞ」

ドアの前には茜が立っていた。

ピンクの寝間着を着た茜は、静かに部屋の中に入ってきた。

「誠お兄ちゃん……」

茜は元気がない声を出した。

誠は電気を点けると茜に向き直った。

「どうしたんだよ。眠れないのか？」

茜は首を振ると、誠をお願いしてきた。

「今晚、一緒に寝て欲しいの」

「え？」

茜の目は冗談ではなかった。本当にそうして欲しいようだ。

誠は掛け布団を上げると茜を招き入れた。

「おいで」

その言葉で、茜は嬉しそうに表情になるとうなずいた。

「うん」

茜は誠に背を向けながら、誠は天井を見ながら眠りに着こうとした。

電気を消して辺りは真っ暗。窓から来る涼しい風と月の光が部屋に入ってくる。

誠はもう少しで眠りに着こうというときに、ある音が耳に入ってきた。

誠はそっと茜を見た。

茜は嗚咽を漏らしながら泣いていた。

小刻みに体も震えている。

そして小さく呟いた。

「お父さん……。お母さん……」

茜に何があったのだろうか。

最初会ったときはあんなにすっかりしていたのに、ここでの暮らしに慣れて、つい弱音を吐いてしまったのかもしれない。

誠は茜の方に体を向けると、優しく頭を撫でた。

さらさらとした髪に、ゆっくりと滑らかに手を動かす。

それを続けていくうちに、茜の声も収まり、安心したのか眠りに着いていた。

誠も少し安心すると、小さく口元を緩るませて眠りに着いた。

第三章 part 7：旅行

誠はあの夜から茜に対して心配するようになった。

あの涙の訳。

それは何だろうか。

本人に直接聞いてもいいのだろうか。

いや、それはよしたほうがいいのかもしれない。

誰も知られたくない過去や秘密はある。

誠もそうである。

このことは、自分の心の奥底に沈めることにした。

「明日、旅行に行くぞ！」

昼間、3人で昼食を食べているときに誠は大きな声で発表した。

「に、兄さん。いきなりどうしたの？」

「また頭がおかしくなった？」

湊と茜の2人は心配した表情で誠を見ていた。

誠は少しムツとした。

「ちゃんと正常な頭です。それよりも、明日旅行に行くから今日の内に準備しておけよ」

「でも、何でそんなにいきなり？」

湊は茶碗を持ちながら問い掛けた。

「いや、前から考えてたぞ。夏休みは旅行に行こうって」

それを聞いて茜は笑みを浮かべた。

「いいね、旅行。楽しんできてね」

それを聞いて、誠は疑問を抱いた。

「何言ってるんだよ。お前も行くんだぞ」

「え？」

茜は少し驚きの表情になった。

「い、いいの？」

「もちろんだよ。いつからお前は遠慮するようになったんだ？ お前も一緒に旅行に行こうぜ」

それを聞いて茜は元気良くうなずいた。

「うん」

ということで、今日一日旅行へ行く準備をすることになった。

そして今日は旅行当日。

晴々として絶好の旅行日和だった。

気温が高く蒸し暑いが、これからの楽しみと比べたら平気である。

すでに準備の出来ている湊や茜は居間で誠を待っていた。

「兄さん、まだ？ 早く行こうよ」

「誰よ。昨日の内に準備しておけって言った人は」

2人は不満そうな表情でソファに座って待っていた。

脇には大きなバッグがある。

湊は背中まである髪をポニーテールに結びながら、茜は大きな麦わら帽子を持ちながら誠をじっと見ていた。

「悪い。もう少しで終わるから」

誠は自分のバッグの中に服や遊び道具などをめちゃくちやに入れ、慌てて準備が整った。

「さて、行くとするか。ん？ 茜ちゃんもネックレス着けてるんだな」

誠と湊は茜から貰った十字架のネックレスをつけていた。

同じように、茜の首にも十字架が下がっていた。

「うん。私、十字架好きなんだ」

そこであの女性の言葉が頭の中で甦った。

『あの子も十字架が好きでした。特にネックレスは十字架のものばかりでした』

たしかにあの女性もそう言っていた。

もしかして、茜は……。

誠は一瞬一つの考えが浮かんだ。

あまりにもばかげている考え。しかし、スカイを使えば可能な考え。

しかし、すぐにその考えを否定し、頭から消した。

だからと言っても関係ない。

このままでいいはずだ。

「よし、出発するぞ！」

「おお！」

3人は家を後にすると、そこから駅まで10分くらい歩いた。

太陽の陽射しが容赦なく照りつける。

雲一つない空は吸い込まれそうなくらい綺麗だった。

ちょっとした涼しい風が吹き、木々などがざわめいていた。

そして駅に着くと、電車に乗り目的の駅まで一時間ほど費やした。

しかし、電車の中ではそんなに退屈しなかった。

トランプなどをしたりして暇をなくし、時間が経つに連れて変わる外の景色は心が躍った。

茜はその景色を見て立ち上がるほどだ。

町の中を走った景色、農家が汗を流しながら耕した田畑、大きな山、そして海も見ることができた。

その絶景は飽きることがなかった。

そして目的地に着き、そこからまた歩いてようやくお目当ての旅館に着いた。

「わあ、けっこういいところね」

湊はその旅館を見上げ歓声を上げた。

誠たちが泊まる旅館は和風の感じがし、小さな建物だが見ためは綺麗だった。

木造建築の旅館の入り口には『ひまわり旅館』という看板が立てられていた。

誠たちは中に入り手続きを済ませると、一つの部屋に入った。

「わあ、広い」

茜は部屋の中を見てはしゃぎ回った。

外から見れば小さかったが、中はけっこう広かった。

外には縁側も着いており、景色を眺望できる。

床は畳になっており、茶色の木造のテーブルやテレビ、押入れには布団があった。

ちゃんと三着浴衣もある。

「さて、夕食までにはまだ時間があるな。それまで何する？」

誠は床に座り込みながら2人に問い掛けた。

「せっかくだし、ここら辺を少し歩いてみない？」

「私も賛成！」

湊の意見により、誠たちは散歩することにした。

誠たちは旅館から少し離れ、ゆったりとしたペースで歩いて行く。ここは少し山の中にあるので、周りは木で囲まれているように見え、少し歩いても見えるのは田畑ばかり。

田舎というよりも、自然的な感じがする。

都会の空気よりも新鮮な空気が肺の中に入ってくる。

「いいところね。来てよかった」

湊はご機嫌だった。大きく背伸びをして、胸いっぱい空気を吸った。

「でも、お金は大丈夫なの？ あそこの旅館少し高そうだけど」

茜が誠に少し心配した表情で問い掛けた。

誠は笑みを浮かべると茜の頭に手を置いた。

「子供がお金のことなんか気にするな。今はおもいっきり楽しめ」

「うん」

そしてしばらく歩いていく内に、ある場所に着いた。

「わあ」

湊は今日一番の歡喜の声を上げた。

そこには大きなひまわり畑が広がっていた。

黄色い大きな花が同じ方向に向き、見渡すかぎりずっと先まで広がっていた。

少し感動を覚えるくらいすばらしい景色だった。

上は薄い青、真ん中が明るい黄色、下は少し濃い緑。

一度目にしたらなかなか忘れることができないくらいの価値があった。

「すごいな」

「……うん」

誠と湊はじつとその景色を見ていた。

そのとき、茜は小さな声で呟いた。

「……来たことがある」

「え？」

2人は茜を見た。

茜は呆然とした表情でひまわり畑を眺めていた。

「うう、前に来たことがある。たしか、お母さんと一緒に」

そのとき、茜の目が少しずつ潤い始めた。

綺麗な瞳に涙が溜まる。

「茜ちゃん？」

湊はしゃがみこむと、茜の目じりをハンカチで拭いてあげた。

「あつ、ごめんね。湊お姉ちゃん。もう大丈夫だよ」

そう言つて茜は無理に笑みを浮かべた。

誠は茜から視線を外すと再びひまわり畑を眺めた。

誠たちは旅館に帰つて来ると、自分達の部屋で夕食を食べた。

豪華な食事が運び込まれ、味も文句なしだった。

夕食のメインはすき焼きだった。他にも刺身や茶碗蒸などもあり、贅沢な時間をすごした。

そして日が落ち暗くなると、それぞれ温泉に入ることにした。

すでに灰色の浴衣に着替えてある湊と茜は一緒に入りに行き、誠は帰ってくるまで待っていた。

テレビをつけながら肩肘を頭に寄せ、今日のことを考えていた。
嫌な考えが頭を過ぎる。

いや、別に嫌なことではない。

誠が勝手に思っていることだ。

他の人から見ればいいことなのかもしれない。

しかし、誠にとっては嫌なこと。

誠はテレビを消すと縁側に出て外を眺めた。

そこからは綺麗な星と月が見えた。

数え切れないほどの星は、あのひまわり畑のようだった。

その中にある月。それは茜のようだった。

満月に近い月が異様に眩しく感じられた。

誠はふっと息を吐いた。

「この状況はいつまで持つのかな……」

すると、ドアが開いて湊と茜が帰ってきた。

「ただいま、兄さん。気持ち良かったよ」

「誠お兄ちゃんも入ってきたら？」

2人はタオルでまだ塗れている髪を拭いていた。

風呂上りなので石鹸の匂いが鼻に漂ってくる。

「そうだな、俺も入ってくるか」

誠は温泉に行く準備をすると部屋を後にした。

「ふう。さっぱりした」

誠は温泉から上がり、部屋に戻っていた。

この旅館は、部屋と温泉までが少し距離があった。

しかし、露天風呂は最高によかった。

湯気立つ湯船に入りながら満面に輝く星を見るのは格別に良かった。

すると、目の前に一人の女性がこっちに向かって歩いているのに気づいた。

その正体は以前に誠に話し掛け、行方不明になったアイドルを捜している女性だった。

手には今から温泉に入りに行くのか、洗面用具などを持っていた。

誠の存在に気づいた女性は、軽く会釈をすると誠も返した。

「奇遇ですね。あなたもあの旅館に？」

「はい。家族で来ました」

「そう。それはいいわね。あ、そういえば自己紹介がまだだったわね。私は秋野時雨あきのしぐれといいます。よろしく」

「俺は清水誠です。こちらこそ」

「それじゃ、旅行楽しんでね」

そう言って、時雨さんは行ってしまった。

そこで気づいたのだが、あの人の名字は秋野と言っていた。

もしや、あの秋野茜と関係があるのだろうか。

誠は時雨の背中が見えなくなるまで視線を向けていた。

あの状況ではまだ見つからないだろう。

だが、さっきから考えていたことはさらに悪い方向にむかって深くなった。

自分の部屋に戻ると、誠たちは押入れにある布団を敷いて寝る準備をした。

真ん中に茜、その左が湊で右が誠。

電気を消すと右にある窓からの月の光だけが照らしていた。

その光が部屋の中に入り、3人に当たる。

茜は疲れたのか、すでに眠っていた。

湊はその様子を見ながら優しく頭を撫でていた。

誠もその様子を見ている。

すると、茜が寝言を言った。

「お父さん……。お母さん……」

それを聞いて湊はクスクスと笑った。

「今茜ちゃんは、お父さんとお母さんの夢を見てるのかな？」

「そうだろうな。きっと楽しい夢だろうな」

誠もそつと茜の髪を撫でた。

湊はそれを見て小さく笑った。

「こうしていると、何だか家族みたいに見えるね。兄さんがお父さんで、私がお母さん。茜ちゃんが私たちの子供。ふふ、何だかおかしいね」

誠もクスツと笑った。

本当にそんな感じだった。他人が見ればそう見えるかもしれない。

「さて、俺たちも寝るか」

「うん」

誠も湊も仰向けに寝ると、静かに流れる風の音を聞きながら眠りに着いた。

第三章 part 8：情報

旅行に着てから二日目の朝が訪れた。眩しい光が部屋いっぱいに差し込んでくる。

誠はその眩しさのせいで起き上がった。

眠たい目をこすりながら隣を見ると、湊や茜はまだ寝ていた。未だにぐっすりと横になっている。

いつもよりずっと早く起きたようだ。湊よりも早く起きたのはそうとう珍しい。

時間を確認すると8時を回ろうとしていた。

「まだ、8時かよ。もう目が覚めちゃったな」

誠は立ち上がると大きく背伸びし、せっかくなので朝の温泉を満喫することにした。

朝の温泉も格別だった。

明るい内からお湯に浸かることがこんなにも贅沢なことだとは知らなかった。やはり来て良かった。

誠はふくと息を吐いて空を見上げた。

青い空が広がっていた。雲一つない空間。昇っている太陽が眩しい。しかし、この景色を独り占めできるのは満足感があつた。

温泉を後にし、自分の部屋に戻る途中、またもや時雨さんと出会った。

「あら、おはようございます」

「おはようございます」

時雨さんも同じ灰色の浴衣を着ており、髪が塗れていることに気づくとさっきまで温泉に浸かっていたようだ。

「清水さん……でしたね。あなたも朝風呂ですか？」

「はい」

「そう。やっぱり温泉はいいわね。疲れが取れるわ」

時雨さんはふつと息を吐いた。

いろんなことがありすぎて困っているだろう。

誠は時雨さんにある疑問をぶつけた。

「あ、あの時雨さん。ちょっとお尋ねしていいですか？」

「ええ、どうぞ」

「もしかして、時雨さんは秋野茜の母親ですか？」

その質問に、時雨さんはすぐに返答し、首を縦に振った。

「その通りです。私の娘が行方不明になっているのです」

そう言って時雨さんはうつむいてしまった。

「まだ、見つかっていないんですか？」

「ええ。もう考え付くところを探し回ってるんですけど、なかなか見当たらなくて……。ここも、最後の賭けでした」

そこで誠はある言葉に気づいた。

「時雨さんは、前に秋野茜とここに来たことがあるんですか？」

「ええ」

そう言って時雨さんはある方向に指を指した。

「あつちに大きなひまわり畑を見ませんでしたか？」

「はい。見ました。すごく綺麗でした」

「その景色を、あの子と前に見に行ったことがあるんです。あの子、もう忘れていられるかもしれませんけど。ずっと幼いときのことですか」

誠はそれを聞いて茜の言葉も思い出した。

『ここ……前に来たことがある』

茜も確かにそう言っていた。なら、茜は……。

誠は生唾をごくつと飲み込むと恐る恐る口を開いた。

「あ、あの……」

「なにか？」

「もし、よろしければ、秋野茜について話してくださいませんか？ 何でもいいです。幼いときのことや、学校生活とか」

その頼みに、時雨さんはゆっくりとうなずいた。

「いいですよ。いくらでも話してあげます」

そう言って、二人は歩き出した。

2人は旅館の入り口にあるソファに座った。

向かい合いながら座り、時雨さんは飲み物を持ってきて座った。

「それじゃ話すわね。……そうね、あの子は小さいころからレッスンをさせてたわ」

「レッスン？」

「そう。アイドルになるために。毎日、ダンスや歌、演技やいろいろなスクールに通わせたわ。そして、中学生からアイドルとしてデビューしたわ」

誠はそれを聞いて感心した。努力は報われると思った。

「茜も喜んでいました。アイドルになれた。やっと夢が叶ったって。でも、少しずつ時が経つに連れてあの子に異変が生じ始めたの」

「異変？」

時雨さんはそつとうなずいた。

「最初はやっぱり新人だから、CMか小さな雑誌に出るくらいで、そんなに忙しくなかった。けど、少しずつ人気が出始めて仕事の量も増えていってしまったの。それでも、茜は苦もなくこなしていたわ。でも、茜は当時16歳。高校生になったばかりのときだったわ。そのときはごく普通の高校に通っていたの。あなたも知ってるかもね。茜は『桜楼学園』に通っていたの」

「桜楼？」

誠はその言葉で違和感を覚えた。

たしか茜は以前、桜楼学園を知っているかのような素振りを見せたことがあった。

「やっぱり、仕事と学校の両立は難しいから、ちょっと勝手だけど辞めさせたの。高校を中退して、仕事に専念しなさいって。それから茜は、仕事に専念したんだけど、前のようにいきいきとした表情ではなかったわ」

時雨さんは一息を吐いた。そして目の前にある飲み物に手を伸ばした。冷たいコーヒーを一口含んだ。

時雨さんは多少うつむきながら口を開いた。

「あの子、突然アイドルを辞めたいって言い出したの」

「え？」

「初めてだったわ。あんなに真剣に話す茜は。いつも言つとおりにしてくれて、ずっと頑張ってきたのに」

「それで、辞めたんですか？」

時雨さんは首を振った。

「そのときは、仕事が忙しくなったから、一時的な気の迷いと思っただの。でも」

「でも？」

「……ある日、この島でドラマの撮影を行つていうときに、突然姿を消したの」

おそらく、それから茜が行方不明になった始まりに繋がるのだろ

う。

それにしても、茜はなぜ姿を消したんだろうか？　やはり、アイドルの仕事がきつくなっただから？　いや、まだ何かあるはずだ。何か……。

誠は時雨さんが買ってくれた飲み物を飲み干すと席を立った。

「ありがとうございます。いろいろと話してくれて」

「いえ、こちらこそ、こんな退屈な話しに付き合ってもらって」

時雨さんも席を立った。誠は背を向けると入り口目指して歩きながら口を開いた。

「お子さん、きっと見つかりますよ。……近いうちに」

その言葉を、時雨さんは呆然とした表情で聞き、誠の背中を見送った。

誠は部屋に戻ると、すでに湊と茜は起きており朝食を食べていた。

「あ、兄さん。遅いよ。何してたの？　もうご飯食べてるよ」

湊は少し怒っていた。それを見て茜は笑みを浮かべてフォローした。

「まあまあ、湊お姉ちゃん。誠お兄ちゃんも用事があったんだよ。

ね」

茜がこつちに顔を向ける。誠は笑みを浮かべると湊と茜の反対側の席に着いた。

「まあ、ちよつと人と会ってたんだ。湊も知ってるだろ？ 秋野茜っていうアイドルが行方不明になったニュース。そのアイドルの母親と会ってたんだ」

それを聞いた瞬間、茜の箸の動きが止まった。それを誠は見逃さなかった。

「でも、兄さん。いつからその母親と知り合いになったの？」

「ああ、この前、その人に行方不明になったアイドルは見えていないか聞かれたことがあるんだ。もちろん俺は知らないって言ったけど、それからちよくちよく会うようになってな。ここにも、捜しに来たらしいんだ」

「へ」

湊は食事を取りながら誠の話しに耳を傾けていた。

しかし、茜の箸はさつきから止まっていた。

「おい、茜ちゃん。どうしたの？ 食べないの？」

「え？ あ、た、食べるよ」

誠の言葉に我に帰った茜は無理に作ったと思われる笑顔で食事を

進めた。

誠は少しずつだが、自分の考えが確信に繋がっているように感じていた。

食事を終え、湊と茜と一緒に遊んでいるとき、誠は一人縁側に出て携帯を取り出した。

「やっぱり情報力のあるあいつに聞いたほうが、何かと知れるからな」

誠はある人の番号を入力すると耳に持って行った。そしてすぐに繋がった。

すると、突然大きな声が耳に響いた。

「何で！ 何で！ 何で私は誘わなかったの！」

誠は咄嗟に携帯を耳から外した。しかし、耳の中はキーンという音がまとわりついている。

その声に湊も茜も気づいた。

「兄さん、どうかしたの？」

「い、いや、なんでもない……」

誠はもう一度携帯を恐る恐る耳に近づけ話し始めた。

「わ、悪かったよ。瞳。今度誘うから」

携帯の先の人物とは瞳のことである。

瞳は本当に泣いているのかわからないすすり泣く声を出していた。

「絶対だよ。もし破ったら湊は私のものだからね」

「どついう意味だよ……」

「それで、私に何か用？ 旅行の自慢でもしに来たの？」

ここからが本題である。

誠は茜を一目見た。湊と無邪気に遊んでいる茜を見て再び携帯に戻った。

「ちょっと聞きたいことがあるんだ。うちの学園に、アイドルになった生徒いるだろ？」

「アイドルになった生徒？ ああ、秋野茜ですね。それがどうかしましたか？」

さすが瞳だと思った。その情報力は学園ナンバーワンだろう。

「その秋野茜について教えて欲しいんだ」

「ええ、いいですよ」

そして秋野茜の話が始まった。

話し終えると、誠は礼を言って携帯を切った。

やはりそうだった。誠の考えは合っていた。

誠は茜に目をやった。

楽しそうに笑っている茜が目映った。誠はそれを悲しげな目で見ていた。

これで9割はわかった。あとは、茜本人に聞くだけだった。

第三章 part 9：理由

誠が秋野茜の母親、時雨さんと会っていることを2人に話してから、茜はいやに考えごとをするようになった。

せつかくの旅行なのだから、もっと楽しめばいいものの。

しかし、そうなった理由はうすうす感じていた。

だから、誠はわざとあんなことを言ったのだ。

もう迷う必要はない。全てをはっきりさせようと思う。

今の時刻は午後5時、誠は茜に問いかけた。

「茜ちゃん、ちょっと散歩しに行かない？」

「うん。いいよ」

茜は元気よく素直にうなずいた。

しかし、どこかに弱冠の恐れがあるように感じられる。いつものような仕草を保っているように見えるが動揺は隠しきれていないようだ。

「兄さん、何だか雲行きが怪しいよ。何だか雨降りそう」

湊は縁側に出て空を見上げた。

たしかに、黒いどろどろとした雲が空を覆い尽くしている。おかげで青い空はまったく見えない。

「大丈夫だよ。夕食までには戻ってくるさ」

そう言って誠と茜は手を繋いで部屋を後にした。

湊は濡れるのが嫌だから残ると言った。

2人は曇り空の中、ある場所まで歩いて行った。

周りに人は誰もいない。今世界は2人だけのようだった。それほど静かな通りだった。

「ねえ、どこまで行くの？」

「ん？ ちょっとあそこまで」

2人は無言のまま、ある場所まで目指して歩いて行く。

誠はその間、考えごとをしていた。

もう後戻りは出来ない。引き返すことはできない。茜に全てを聞き、答えを導き出す。

それしか、頭になかった。

数十分歩くことにより、2人はある場所に着いた。

それはあの大きなひまわり畑である。

以前見たときと比べたら、空が嫌な雰囲気を漂わせているせいであまり感動を覚えなかったが、あいかわらず立派なひまわりだった。

それを茜はじっと見ていた。

「茜ちゃん。前にここに来たことがあるんだよね？」

誠が優しく口を開く。

とうとう始まった。答えを探すために。

「うん。前に一度来たことがある。でも、あまりはつきりとは覚えてないね」

誠はその場に座り込んだ。同じように茜も隣に座った。

「茜ちゃんは、スカイって知ってる？」

少し間を置いて、茜はうなずいた。

「うん。知ってる。……お母さんに教えてもらった」

「それを、使ったことは……ある？」

それを聞いて茜は黙り込んでしまった。

誠の不安は積もっていく。その先が、どうしても知りたかった。

「ねえ、茜ちゃ——」

「使ってない」

突然茜は口を開き、誠はしゃべるのを途中で辞めた。

「私、使ってない。まだ、使ってない。だって、一度しか使えないんだよ。まだ何があるのか分からないのに、使っわけないじゃない」

茜はうつむきながら顔を伏せた。その口調も冷たく感じられた。

誠はそつと口を開いた。

「覚えてる？　茜ちゃん」

茜はそつと恐る恐る誠のほうを見た。

「前に一度、学校の中に入ったよね。そして、2年C組のある席に座った。そこは今は違うけど、以前はある人の席だった。その人の名前は、……秋野茜」

それを聞いた瞬間、茜は驚きの表情を隠せずにした。体も小刻みに震えているのが分かる。

この情報は、瞳から聞いたのだ。

瞳の情報によると、秋野茜は以前あの席に座っており、仕事が忙し

くてあまり学校には来ていなかったようだ。

いつしか、周りの生徒たちもその存在は忘れていたようだ。

そのせいか、たまに学校に来てても秋野茜はいつも一人だったようだ。

親しい友達も、話す友達もない。まるで、グループから外れた子供のようなだったそうだ。

誠は一息吐いて話しを続けた。

「茜ちゃんの本名は、秋野茜だね？　今まで名字を言わなかったのはばれるのが怖かったから。それに、これまでの行動を思い返すと、茜ちゃんは小学生とは思えないことをしていた。高校生が行くようなお店に入ったり、アクセサリーをつけたり。自分なりに子供とは何かを考えて振舞っていたんだろうね」

誠は茜の表情をうかがった。茜がどういう反応を示すか、それが気になった。

「ねえ、茜ちゃん」

すると、茜は突然立ち上がった。

「あ、茜ちゃん？」

「……さようなら」

そう言って茜は突然走り出した。

「茜ちゃん！」

誠もすぐに立ち上がるとその後ろを追いかけた。

茜はがむしゃらに走っていた。

もうあそこには戻れない。もうあの幸せな時間を過ごすことはできない。

そう思うだけで涙が出てきた。瞳から熱が生じるのがわかる。

茜は森の中に入った。周りの木のざわめきが聞こえる。

空が曇りのせいで、森の中はより一層暗く、夜のように感じられた。

そのとき、大きな根に足を取られ転倒してしまった。

「あっ！」

茜は勢いよくその場に倒れた。手足に痛みが走る。どこか怪我したようだ。

「うつ……」

茜は拳に力を入れた。そして大粒の涙を流す。

その涙は落ちて自分の手の甲に落ちた。

どうしてこんなことになったのだろうか。どうしてこんな気持ちになったのだろうか。悔しさと哀れさでいっぱいだった。

茜は最後の力を振り絞って大きな木に背をつけてもたれかかった。

そのとき、冷たい滴が頬に当たった。少しずつそれは勢いをつけ本格的に振り出した。

雨だ。

その雨は森の中にいるのにも関わらず、容赦なく襲いかかってきた。

茜はそっと笑みを浮かべた。

「もう、終わりなんだね……」

茜は全身の力を抜いた。

これからどうしようか。一人で生きて行くしかない。

もう、誠に世話になるわけにはいかない。

そのとき、茂みから足音が聞こえた。

茜はそっとその方向に力のない目を向けた。

そこには誠がいた。

しかし、茜は驚かなかった。自然とわかった気がした。

いつもそうだった。自分のそばにはいつも誠がいた。

誠はゆっくりと茜に近づくと、正面で立ち止まった。

「お前、怪我したのか？」

茜の手足を見た。擦り傷が多く血が出そうだった。

「ふふ、良いざまよね。これが、他人に迷惑かけた罰かしら」

いつのまにか、茜の口調は子供のような話し方ではなくなっていた。

「ねえ、誠。……いつから気づいたの？」

「……最初から違和感があった。でも、完全に確信したのは、時雨さんの話を聞いたときからだ」

そこで茜はある言葉に反応した。

「時雨って、私の母親の名前を知ってるっていうことは本当に来ているのね」

誠はコクツとうなずいた。

「ああ。すごく心配してたぞ」

茜は力のない笑みを浮かべた。

「それで、誠の狙いは何なの？ 私の正体を知って、何が目的なの？」

誠はその質問に答えられなかった。

たしかに、こんなことを暴いて何になるというのだろうか。別にこのままで良かったのではないだろうか。

「……わからない。ただ、知りたいっていうよりも、お前から言うて欲しかったのかもしれない」

「え？ どういうこと……」

茜は少し驚きの表情で誠を見た。

「隠して欲しくなかった。言うて欲しかった。悩みがあるなら力になりたかった。茜が何かしたいなら、望んでいることがあれば、自分にできることがあれば助けてやりたかった。ただ、それだけ」

誠はうつむきながら話し終えた。

それを見て、茜はふつと息を吐くと口を開いた。

「……話してあげる。誠にはお世話になったからね。もう知ってることもあると思うけど、全て話してあげる」

誠はそつと小さくうなずいた。そして、茜は話し始めた。

「私は、幼いころからアイドルになるためにレッスンをしてきたの。別に私はなる気も何もなかったのに、親が勝手にさせてたの。この子は将来トップアイドルになるって、私の気持ちは無視して勝手に決めてね。まあ、親も元アイドルだからね、娘にもなってほしかったのかも。でもね、それから私の望んでいたものはことごとく崩れ

去った」

誠は生唾をぐくつと飲み込んだ。

それは知っていた。時雨さんに聞いたから。ここから、茜の気持ち
がわかる。

「レッスンのせいで、私は友達と遊ぶことも、自由に過ごすことも
できなくなっていた。毎日朝から晩までがレッスンの日々。学校が
終われば親が迎えに来てるのよ。あきれるくらいにね。そのせいで、
私は今の流行とか人気とかが疎くなったわ。多少の芸能のことなら
わかるけど、小学生とかがそんなのに興味あるわけないし。おかげ
で私は、みんなの話しの輪に入らず孤立の時間を送った。いつも一
人だった。そして、中学の上がったときには、とうとう学校をちょ
くちよく休むようにもなった。完全の孤独。ついにはいじめられる
ようになった……。これも、全部あいつのせいよ……。全部親のせ
いでこうなったのよ！」

茜は悔しそうに拳に力を入れていた。

「そのいじめはずっと続いたわ。そして、高校は桜楼学園に入った。
私は変わろうとした。ここで、たくさん友達を作って楽しい時間
を過ごそうって。でも、その望みは叶わなかった。親が勝手に中退
させたの。2年生のときにね。私は愕然としたわ。そこまでするの
って。本当に憎んだ」

話を聞いて行くうちに、だんだんと茜が可哀想に思ってきた。

「そして、私は決心した。もう一度思い出を作りたい。学生生活を
楽しく満喫したいって。誠の言うとおり、私はスカイを使った。す

ごく迷ったけど、決心して使った。そう、誠と最初に会った日に。そして、うまく逃げる事ができた。これから私の第二の人生が始まるんだって。心が躍ってわくわくしたわ。でもね、そう簡単にはいかなかった。現実は一筋きりだった。体が小さくなったからって、すぐに学校に通えることはできない。だから、誰かの養子になりたかったけど、それも怖かった。自分の無力さを知ったわ。一人でさまよって、行く当てもなくて。なかなか決心できなかった……」

茜はそつと誠を見た。弱々しい目を向ける。雨が降っていてもわかる涙を流していた。

「私は、ただ思い出を作りたいかった。それだけだった。……ごめんね、誠……」

「茜……」

茜は顔をうつむくと嗚咽を漏らしながら涙を流していた。

誠は茜に近づくと、そつと抱きしめ包んであげた。

「誠……?」

「ありがとう。話してくれて。辛かったよな。いろいろあって。でも、大丈夫だよ。これからは、もっと楽しく過ごせる。茜ちゃんの人生は、これから続く。まだまだずつとね」

誠は茜を離すと優しい笑みを浮かべた。それを見て茜は安心した表情になった。

「誠……」

そのとき、後ろから足音が聞こえた。

2人はその方向に目を向ける。茜は驚きの表情になりながらそつと
呟いた。

「お母さん……」

第三章 part 10：準備

2人の目の前には茜のお母さん、時雨さんがいた。

黒い傘を持ち、2人を哀れな目で見てくる。

そして、視線はじつとある人物を捉えていた。

「し、時雨さん。どうしてここに？」

誠は無意識に立ち上がり口を開いた。

「いつまでもここにいてもしょうがないから、他の場所を探そうと思ったの。でも……、その必要は無くなったわね」

そう言っ、時雨さんはゆっくりと歩き出した。そして一人の人物の目の前で止まる。

その人物とは、茜だった。

茜は驚きと恐れ表情で時雨さんを見ていた。

そんな茜を見て、時雨さんはそつと呟いた。

「……茜」

そこで誠は驚いた。

どうして？ どうして茜だとすぐにわかったのだろうか。

今の茜は小学生。姿はまったく違う。なのに、なぜ……？

時雨さんは一息吐いた。

「まったく、どおりで見つかからないわけね。こんな姿じゃ、どんなに大勢で探してもわかるわけないわ」

「時雨さん。どうして茜って……」

「簡単よ。自分の娘の幼いころの顔を忘れる親がいる？　ほんと、不思議だけどここにいるのは幼いころの茜にそっくりね」

それを聞いて茜は呆然と時雨さんを見ていた。

「……お、お母さん」

時雨さんはその場に傘を置いた。

そして、手をそつと上げると茜の頬を叩いた。

パンツという音が響く。茜の首が横を向く。

そつと顔を戻して時雨さんの表情をうかがった。右頬は赤くなっていた。

時雨は睨みつけるような目でじつと見ていた。

「茜、あんたはどれだけ人に迷惑をかけたか分かってるの。取り返しつかないことをして、これからの人生どうするつもり？」

時雨の言葉に、茜は力が抜けたようにぐったりとした状態で聞いていた。

「時雨さん、ちょっと待ってください。茜は、ただ思い出を作りたかっただけなんです。それなのに」

「……わかってます。さっきの話を聞いていました」

「なら、なぜ叩いたりなんか」

時雨はゆっくりと茜の頬に触れた。そして、そのまま優しく抱きしめた。

「なら、どうして親の私に相談しなかったの？」

「え？」

茜はそつと顔を上げた。

「悩んでるのなら、親に相談するのが当たり前でしょ。一人で思い込まずに話してくればよかったのに」

「……お母さん」

茜は再び涙を流しながら腕を上げると時雨を抱きしめた。小さな体で力強く。

その光景を、誠はじっと見ていた。

3人は旅館に戻ると、汚れた体を綺麗にし、茜の怪我を治療した。そして、湊に茜のことを全て話した。もちろん、時雨さんも一緒になつて。

「この度は、大変ご迷惑をお掛けしました。このお礼はいつか必ず……」

そう言つて茜と時雨が深く丁寧に頭を下げた。

「い、いえ、いいですよ。どうか頭を上げてください」

誠がそう促すと、2人はゆっくりと頭を上げた。

「それで、茜ちゃんはそつちに戻るの？」

湊は寂しいという感じを出して問い掛けた。茜はうつむきながらそつとうなずいた。

「だって、これ以上迷惑かけられないから……」

茜の表情は明らかに未練が残っていた。そんな茜を見て、誠は時雨さんに問い掛けた。

「あの、時雨さん。もう少しだけ、茜を家に泊めたらだめですか？」

「え？」

時雨は少し驚嘆の表情になった。茜はそれ以上だった。

「まだ茜の願いは叶っていません。それが実現するまで、どうかここに居させて上げてください。お願いします」

そう言って誠は頭を下げた。

「誠……」

茜は誠を見てうつすらと涙を浮かばせていた。時雨さんはすぐに返答した。

「かまいませんよ。清水さんがそうしたいなら」

誠は頭を上げると笑みを浮かべながら礼を言った。

「あ、ありがとうございます」

「しかし、条件があります」

「え？」

時雨さんは笑みを浮かべながら言った。

「茜を、この時間だけ幸せにしてください」

それを聞いて、誠は力強く返事をした。

「はい」

誠たちは旅行から帰ると、家に戻ってきた。

「ああ、疲れた」

誠はそうやってすぐさまソファに倒れた。

「もう、兄さん。寝る前にバッグ片付けてよ」

湊はあきれながら誠のバッグを脇にどかした。

「わかったわかった」

そこで気づいたのだが、茜の姿が見当たらない。誠は起き上がって探すと、茜は玄関で立ち往生していた。

「なにやってんだよ、茜ちゃん。そんなところにいないで早く入れよ」

「でも……」

「いつからお前は遠慮するようになったんだ。それに、ここはお前の家だろ」

「え？」

茜は吃驚した表情をして誠を見た。

誠は笑みを浮かべながら茜を待っている。

茜も自然と笑みを浮かべると元気よくうなずいて中に入った。

「うん！」

3人は居間に居合わせると夕食を食べることにした。疲れたので簡単にお茶漬けにした。

「それで、茜ちゃん。明日から何しようか。何かしたいことがある？」

「うん。……この姿になって、いろいろ楽しい想いはしてきたけど、したいことはあれかな」

「なんだよ。言ってみるよ」

茜は少し戸惑いながらもそつと口を開いた。

「学校で授業受けたい」

「……え？」

「だから、勉強したいの」

「茜ちゃん偉いね。あつ、ごめん。茜さん」

「いいよ、茜ちゃん。私も変わらず湊お姉ちゃんって言っから」

「うん」

「それで、本当にそれでいいのか？ もっと他に——」

「これでいいの。私そんなに授業受けてないからね。一度でいいから、楽しく授業受けたいの」

すると、いきなり誠が立ち上がった。

「よし、俺にまかせろ。最高の授業を体験させてやる」

誠は居間を飛び出すとすぐさま準備に取り掛かった。

次の日。

誠は珍しく早起きをし、ある準備をしていた。

そして、とうとう計画が開始された。

「茜ちゃん！ 起きろ！」

誠は茜の部屋である床の間に入ると無理矢理起こした。

「な、何、朝から？ どうかしたの？」

茜は眠たそうな目を擦って起き上がった。

「今から学校行くぞ！」

「は？ え？ 学校？」

「そ。ほら、早くしないと遅刻するぞ」

「う、うん」

茜は誠の言っていることがよく理解できなかったが、言われるままにした。

朝食を食べ、身支度をし、制服は湊が中等部の時に使っていた物を着た。そして鞆を持たされ、3人は学校へ向かった。

「ねえ、今から何するの？」

「昨日言っただろ？ 授業受けたいって。だから、今から学校行つて勉強するんだよ」

「でも、そんなことできるの？」

「それができるんだよ。なぜなら俺は悪な友人が多いからな」

誠は桜楼学園の制服を着てにやにやとにやついた。隣では、湊も一緒になって笑みを浮かべている。

「なんだか夏休みに学校行くなんて変な感じ。補習行くみたい」

すると、後ろから声が聞こえた。

「おーい、湊」

そこには瞳がいた。大きく手を振ってこっちに向かってきている。ちゃんと桜楼学園の制服も着ていた。

実は、昨日瞳にも学校に来るように連絡したのだ。茜の正体ことは話していない。

「おはよう、瞳」

「おはよう、湊。それに、茜ちゃんも」

「お、おはようございます……」

茜はぎこちなさそうな挨拶をした。

「さて、学校行きますか。早くしないと遅刻するし」

「おいおい、ちょっと。俺に挨拶無しか」

「あれ？ お兄さんいたんですか？」

「ふん。先輩を敬わないとは態度の悪い後輩だ。あとで罰を与えてやる」

「はいはい。それより、今日の授業は何なの？」

「ま、それは着いてから決める」

「計画性ないね」

「なんだと！」

こうして楽しい登校を過ごし、茜も笑っていた。

そして、とうとう学校に着いた。

茜の一日学校体験の始まりである。

第三章 part 11：決心

桜楼学校に着いた誠、茜、湊、瞳の4人は、さっそく中に入った。

本来、校舎は全て鍵がかかっていて入れないのだが、誠のある一人の友人から聞いて一箇所だけ鍵が壊れている窓を教えてもらいそこから入った。

そして、ある教室にむかった。そこは2年C組。かつて、茜がいたクラスだ。

夏休みだからもちろん誰もいない。中は蒸し暑く、すぐに窓を開けて換気をした。

「私、2年生のクラスに入ったの初めてかも。なんか雰囲気が違う感じがする」

瞳は物珍しそうな目で辺りを見渡していた。

「瞳も窓開けるの手伝ってよ」

湊に言われ、瞳も窓開けを手伝った。

そのころ、茜はある席をじっと見ていた。ちょうど真ん中に位置する机。そう、茜の席だ。

誠は後ろから肩に手をぽんと置いた。

「今日は最高の日にするからな」

「……うん」

誠は笑みを浮かべると手をパンと鳴らした。

「よし、一時間目の授業の始まりだ」

3人は並んで席に着いた。真ん中に茜。右には湊。左には瞳だ。誠は一人教壇の上に立っていた。

「さて、今から社会の授業を始めます。教科書はいらないから、黒板を見てください」

「え、誠お兄ちゃんが先生なの？」

茜は驚嘆な声を上げた。明らかに不満がっている。

「な、なんだよ。俺じゃダメなのかよ。日本史なら少しはできるぞ」

「でも」

「茜ちゃん。一時間目だけだから。ね」

湊に言われ、茜はしぶしぶうなずいた。

「まず、この問題を解いてもらおう。戦国時代。織田信長と武田軍が合戦した戦いを何と言うか。これを、茜ちゃん」

「え、えと、……長篠の戦い？」

「正解」

「やった！」

茜は大いに喜んだ。それを見て湊と瞳は拍手を送った。

「よく小学生なのにわかったね」

瞳は心底感心するような目で見た。

「次は、江戸幕府を開いた人物の名前。これを、湊」

「はい。徳川家康です」

「残念。正解は豊臣秀吉だ」

「え？」

「ちょっと、お兄さん。今の答え合ってますよ。お兄さんが間違えてどうするんですか」

「え？ あれ？ 豊臣秀吉じゃなかったっけ？」

「先生がそんなことでどうするんですか」

そのときみんな笑い合った。

茜もみんな可笑しそうに、そして楽しく教室の中は賑わっていた。

次の二時間目は湊が先生役をした。

「では、次は数学をします。次の問題を前に出て解いてください」

「湊お姉ちゃんが先生なら大丈夫だね」

「うん。安心して受けられるね」

茜と瞳はお互いにうなずき合った。それを聞いて誠はふんとそっぽを向いた。

「じゃあ、この因数分解を、茜ちゃん」

「はい」

茜は前に出ると問題をすらすらと解いていった。

「うん。正解です」

「やった！」

「おお〜」

瞳は笑みを浮かべながら、誠は本当に感心するかのようにして拍手を送った。

「じゃ、次は瞳ね」

「うん」

瞳も同じように解いていった。それを見て湊はうなずいた。

「うん。合ってるね。じゃ、次は兄さん」

指名された誠はすでに机に屈服して寝てしまっていた。

「ちょ、ちょっと兄さん。なんでこんなときに寝てられるの？」

「う、うん？　だって授業って全部催眠術みたいだもん。眠くなる……」

「よく遊びの授業でも寝れるわね」

瞳は苦笑いを浮かべて誠を見ていた。

授業が終わると、湊が持ってきた弁当を広げて昼食を摂った。

「茜ちゃん。授業はどうだった？」

湊はお弁当の中身を紙皿に乗せ、それを渡しながら問い掛けた。
茜はそれを受け取った。

「うん。すつごく楽しかった。やっぱり良いね、高校生活って。
…誰かさんはずっと寝てたけど」

「……ん？」

誠はお弁当のおかずを紙皿に盛っていった。

「まったく、お兄さんは何があるうと変わりませんね」

瞳はあきれてため息を吐いた。

午後からは部活である。運良く誰もいないグラウンドに出た。

「さて、放課後と言ったら部活だ。何する？」

誠は茜に問い掛けた。

「うん。そしたら、……バスケットしたい」

「バスケね。いいぞ」

誠は体育館からこっそりとバスケットボールを取って来ると、外にあるコートでバスケを行った。

チームは、誠と茜。湊と瞳チームである。

誠はボールを貰うと、その場でドリブルをし、すぐさま茜にパスした。それを受け取った茜はシュートすると入った。

「やった！」

「ナイスシュート」

誠と茜は喜びながらハイタッチした。

それからバスケを続け、これで茜の望みは終わった。

「茜ちゃん。本当にこれで良かった？　こんなことしかできなかったけど」

誠はバスケットでドリブルをしている茜に問い掛けた。湊と茜は飲み物を買いに行った。

「うん。すごく楽しかったよ。十分に高校生活を満喫した。もう思い残すことはないよ」

茜はシュートをすると、ボールはリングの中に収まり落ちて転がった。

「これで、……お別れだね」

誠は黙ったままだった。茜の小さな後ろ姿をじっと見ていた。

これで茜の望みは叶った。時雨さんとの約束は茜の願いを叶えること。それが達成したのなら、茜はここに居る理由はない。

「茜ちゃん。まだ家に居ていいんだぞ。夏休みはまだ何日か残っているんだ。それまで今までどおり」

「いいよ、誠お兄ちゃん。もう……いいよ」

茜はうつむいてしまった。拳をぎゅっと握っている。

「そろそろ戻らないといけないもん。ごめんね。そして、ありがとう」

茜は笑みを浮かべながらこっちを振り返った。その目には、うつすらと涙が浮かんでいた。

「あ、茜ちゃん！」

「お兄ちゃん！ 茜ちゃん！ 飲み物買ってきたよ！」

校門の方から飲み物を持ってきた湊と瞳がいた。茜は大きく手を振って返事をする。湊たちの元にかけて行った。

その姿を見て、誠は悲しげな目を送っていた。

「また、お別れなんだな……」

誠は目じりを拭くと自分も湊たちの元にかけていった。

その帰り道、途中で瞳と別れ、3人で帰っているときに茜が言った。

「ねえ、誠お兄ちゃん。ちょっと寄りたところがあるから付き合っ
つてよ」

「え？ ああ、いいぞ」

「じゃあ、私は先に帰ってご飯作って待ってるね」

湊はそう言っていると、一人先に帰ってしまっていた。

「さて、暗くならないうちにさっさと用事を済ませてくるか。行く
うぜ」

「……うん」

茜は元氣のない返事をする、誠の元に行き手を握りながら歩いた。

そしてそつと目を瞑った。

もう、決心しよう。これで、自分の第二の人生は終わり……。

第三章 part 12：歌詞

誠と茜は無言のまま歩いていた。

沈黙の中、茜前に出てその後ろを誠が着いていく形がたんと続く。

最初は手を繋いでいたが、途中から離れた。

すでに陽は傾き始め、もうすぐ夕暮れだ。空も、周りの景色も、少しずつ色が変わっていつている。

そして2人は一つの公園に着いた。

そこは、茜と出合ったときに訪れたところであり、ブランコに乗って遊んだこともある公園。

その広場の真ん中で、茜は背を向けたまま立ち止まった。

誠はその背を見つめ、足を止めた。

「ねえ、誠……」

もうお兄ちゃんを着けていない。おそらく、これは茜ちゃんではなく、秋野茜の気持ちで話しているのだろう。

「今まで私のわがままに付き合ってくれてありがとう。本当に、言葉では表すことができないほど感謝してる……」

誠は黙ったまま聞いていた。口を閉じ、じっと話を聞いていた。

「いろいろ楽しめたのも、私の願いが叶うことができたのも誠のおかげ。ありがとうね、誠」

「ああ。こんなことでいいなら、いくらでも力を貸すよ」

誠は口を閉じると考えごとをしていた。

少し気がかりなことがあったのだ。誠はそつと聞いてみた。

「なあ、茜ちゃん。前から思ってたんだけど、もしかして、時雨さんやお父さんと遊びたかったんじゃないの？」

「え？」

茜は背を向けたまま少し驚嘆な声を上げた。

「茜ちゃん、ここでブランコで遊んでる親子を見たよね。すごく羨ましそうに。それは、自分もそうしたかったから。子供のとき親と遊んだ思い出がない。だから、もう一度子供になってお母さんやお父さんと遊びたかったっていう願いもあったんじゃないかな。それに、寝言でも言ってた。寂しそうに呟いてたよ。実は、それも含まれていたんだろ？」

誠は思っていたことを全てはいた。茜は観念するかのようにそつとうなずいた。

「うん。たしかにその願いもあった。ずっとレッスンしてたから、お母さんやお父さんと遊んだ思い出はない。だから、出来れば思い

出を作りたかった。この、私が生まれた島で。でも、もういいんだ。その埋め合わせは十分にしてくれた。誠がね」

「俺が？」

「うん。一緒に居てくれて、遊んでくれて、旅行にまで連れて言ってくれて、まるでお父さんのようだった。それだけで、良かったよ。……ありがとう」

誠はそつと口元を緩めた。茜がそういうなら、何も言うことはない。

「それで茜ちゃんが幸せだったなら、俺も嬉しいよ」

茜はそつとうなずいた。

「うん。……やっぱり、誠は優しいね」

「え？」

茜は振り返った。笑みを浮かべ、誠に見せ付けた。

「誠一回も怒ったことないもんね。本当に優しい。もし誠が私のお兄ちゃんなら、ずっと好きでいられるよ。優しくて、想ってくれて、大切にしてくれて。お父さんのような感じもしたけど、それよりも理想のお兄ちゃんって感じだね」

誠は頭をかきながら照れ笑いを浮かべた。

「ありがと。茜ちゃんも、元気があってすごく可愛い妹に思えたよ。」

本当に、そのまま自分の妹にしたいくらい」

「でも、すでに妹はいるよね」

「まあ、そうだな」

茜はくすぐすと笑うと、そつと空を見上げた。

すでに空と浮かんでいる雲は茜色に染まっていた。日が傾き始め、2人を眩しく照らしていた。

「ねえ、誠。……誠は好きな人いる？」

「え？　なんだよ、いきなり」

「いいから答えて」

茜の表情は笑っているが、内心本気だった。誠は少し考え込むと答えた。

「好きなのかどうかはわからないけど、大切な人はいる」

「大切な人？」

「ああ。とても、すごく大切な人。俺は、そいつのことを忘れたことは一度もない。それほど、大切な人だ」

「……ふん。そっか」

茜は歩き始めると、誠に近寄った。そして顔を上げ見上げた。

「ごめんね、誠。ここでお別れだよ」

「え？ ……なんで？」

「今日で終わりって決めたの。だから、これで帰るの」

「で、でも、ちょっと待てよ。そんな、急に」

茜はゆっくりと首を振った。

「これ以上迷惑かけることはできないよ。お母さんだって待ってるし」

「でも……」

「二度と会えなくなるわけじゃないんだよ。少しのお別れ」

すると、茜がうつむきだした。そして体が小刻みに震え、地面に黒い点が出来始めた。

「あ、茜ちゃん？」

「…………ごめんね。泣かないつもりだったのに、我慢できなかった。最後まで笑顔で別れようと思ったのに」

「茜……」

誠は少し戸惑いながら茜を見ていた。

「誠……」

茜は突然誠に抱きついてきた。強く、小さな体で誠の胸にうずくまっていた。

「誠……。ありがとう。本当に、ごめんね……。何もしてあげられないけど、恩返しできないけど……。絶対忘れないし、また会いに来るからね……」

「ああ……。待ってるよ」

誠はそっとしゃがみ込むと茜を優しく抱き返した。

華奢な体を包む。体温が伝わってきた。茜に想いも一緒に伝わる。

「あとね、誠……」

「ん？　なんだよ。どうかしたのか？」

茜はそっと誠と離れた。少し頬を赤く染め、他所を向いていた。

「え、えと、あのね、その……」

「なんだよ。最後までいはいっきり言えよ」

「う、うん。その……」

そのとき、とうとう陽が沈み、闇が訪れた。辺りは薄暗く、外灯も点灯し始めた。

それを見た茜は誠に向き直った。

「もう行かなきゃ。……さよなら、誠」

すると、茜は突然顔を近づけ誠と口付けを交わしてきた。

誠は少し驚いた表情になった。

茜は1秒とたたずすぐに離すと、顔を真っ赤にしながらうつむいた。

「じゃあね、誠……。ありがとう」

そう言って、茜は公園を走り去って行ってしまった。

誠はその姿をその場でじっと見ていた。そしてそつと唇に触れた。

茜とのキスした感触がまだ残っていた。とても熱く、潤いのある甘い唇だった。

誠はそつと空を見上げた。

これで、もう終わった……。

茜と別れてから数日が経った。

何もする気が起きず、時間が過ぎるだけの毎日。夏休みも残り数日となった。

未だに誠はぼーとしている。湊も少し落ち込んでいたが、今では切り替えしっかりとしていた。

「兄さん。もう少ししっかりしてよ。そんなんじゃ、茜ちゃん怒るよ」

しかし、誠は返事もせずぼーとテレビを眺めていた。それを見て湊はため息を吐くと、夕食の仕度を始めた。

誠は考えごとをしていた。

あの別れの日、茜は最後に何かを伝えようとしていた。それが気がかりだった。

茜はいつたい何を言おうとしたのか。最後に未練が残ってしまった。

夕食の準備が終わり、湊が誠の前に持って来ると、突然驚嘆な声を上げた。

「あ！ に、兄さん。テレビ見て！」

誠は言われたとおりテレビを見た。そして誠も驚いた。

そこには茜がいたのだ。

見た目はそのまま、名前はあかねとひらがなでアイドルとしてデビューしていたのだ。

「すごいね。茜ちゃんまたテレビに出てるよ」

誠は呆然とした表情で見ている。

「今日はゲストであるあかねさんのデビュー曲を聴いて貰います。それでは、どうぞ」

司会者の言葉と同時に画面が変わると、ステージに立っている茜が映し出された。

茜はお辞儀をすると、マイクを口に持ってきて語り出した。

「この曲は、自分で作詞しました。ある一人のことを想い、私の気持ちを含めて作った詩です。……今、その人がこの番組を見ているかわかりません。それでも、私はその人のことを想い、心に届くように歌います。聴いて下さい。……ひまわり」

「私は手を伸ばす 小さな手だけど 掴みたいものがそこにあるから

ねえ気付いてよ 私はいつでもあなたを見ていることを

空に向かって伸び続ける 癒してくれるその笑顔まで

もし私が届かなくても 風に乗ってそこまで行く いつか会うと誓う

安心する輝く手 その大きな手で 私をまた包んでほしいから

茜色に染まった花を見て あなたは今何を思うの

降り注ぐ光を浴びさせ あなたは今何を考えるの

ねえ行かないでよ 私だけを見てよ 一人にしないでよ

それだけで私は強くなれる　強い風が吹いても　冷酷な雨が降っても
あなたに届くまでは　諦めないよ

私は支え続ける　繋がった心で　包みたいものがそこにあるから
ねえ気付いてる　私はずっとあなただけを見つめていることを

悲しみの空から　冷たい雫が零れ落ちても　その涙を残らず受け止
めてあげる

私はずっと離れない　いつかそんな日が来ることを知っているから
儚き弱みを覚えた瞳　その潤んだ瞳を　拭ってあげたい

私の心にはいつもあなたの優しさが　私の隣にはいつもあなたの微
笑みが

あなたがいるだけですごく安心できた　一緒にいるだけで幸せだった

苦しい想い　叶えたい夢　愛情の言葉　溢れ出すこの想い

誰にも止められない　止めることができない

だから私はこの歌で届けたい　あなたに対するこの想いを

逢いたい　あなたに逢いたい　もう一度逢いたいよ

ずっとずっと閉じ込めてた　私の本当の気持ち

伝えることが出来なくて 届かせることができてなくて

でも今なら言える あなただけに贈る言葉を 大好きだよ」

茜の目からは涙で溢れていた。それでも最後まで歌い続け、自分の想いを必死になって届けようとしていた。

歌い終わると、周りから満場の拍手が送られた。

それに答えるかのように、茜は丁寧に頭を下げた。

頬を伝う涙を何度も拭き、そして最後には満面の笑顔を見せ、茜はステージを降りた。

「茜ちゃんの歌良かったね。すごくうまいし、歌詞も良かったよ。ね、兄さん」

湊は隣にいる誠に向き直った。その誠を見て、湊は少し驚いてしまった。

「に、兄さん……」

誠は泣いていた。瞳から溢れる涙を流し、じっとテレビを見つめていた。

誠は目を瞑ると一息吐いた。

今わかった。茜が言いたかったこと。最後に伝えたかったことを。

その想いは、たしかに自分の心に届いた。

誠は立ち上がると、自分の部屋に向かった。

部屋に着くと、誠は窓を開け外を眺めた。

最初に目に入ったのは茜色の空だった。

綺麗な夕日が少しずつ沈んでいく。

「茜。そして、茜ちゃん。想いは届いたよ。……ありがとう」

誠は首にかけてあった茜からのプレゼントである、銀色の十字架のネックレスを外すと窓側に大切に置き、部屋から出た。

誠の部屋からは、そのネックレスだけが光輝いていた。

第四章 part 1：願望

茜との夏休みが終わり、変わりようのない月日が続くと、月はあつという間に十月に入った。

茜は今ではちびっこアイドルとして人気が上昇しておりうまくいっているようだ。

少しずつ暑さは収まって涼しい風が送られるようになった。秋に近づいてきたということだろうか。

それに、十月は誠に取って大事な日があるのだ。それが唯一の楽しみだった。

十月十日。

この日学校は休み。しかし、誠は珍しくいつもより早く起きた。

台所で湊は食器を洗っていた。

「あれ？ 兄さん、今日は早いんだね。いつもならまだ寝てるのに」

誠はソファに座ると笑みを浮かべながら言った。

「何言っているのだ、妹よ。一日は短い。この短い日の中でどれだけ有効に使うかが重要なのだ」

「それを毎日言ってくれたら苦労せず、朝起こしに行かなくて済むんだけど」

湊はふつと息を吐いた。

「ところで湊。今日何の日か憶えてるか？」

「え？ 今日十月十日。日曜日だね」

「それだけじゃないだろ。もっと大事な日なのだ」

「うゝん、何かな？ ごめん、降参。正解教えて」

「お前、それ本気で言っているのか……？」

誠はあまりにもショックで落ち込んでしまった。

「冗談だよ、兄さん。今日は兄さんの誕生日でしょ。ちゃんと憶えてるよ」

それを聞いて誠はすぐに元気を取り戻した。

「おお！ さすが我が妹。よく憶えていた」

「兄さんの誕生日くらい憶えてるよ。今から買い物行くけど、兄さんは？」

「俺はちよつと散歩に行くかな。今はそついう気分」

「わかった。夕方までには帰ってきてね。ご馳走たくさん作るから」

「ああ、ありがとう」

誠は上機嫌に鼻歌まじりでさっそく外へ足を向けた。

やっぱり自分の日だと気分が違う。変わらない空も今日は一段と綺麗に見えてしまう。

「いや、いい天気だな」

空も誠の誕生日を祝うかのように晴れ渡っていた。

綺麗な青空が広がっている。流れる雲が軽やかに動いていた。

「さてと、どこに行くかな」

誠は空を見ながら適当に歩いて行くと、いつしか学校に着いていた。今は校門の前にいる。

習慣だろうか、つい行きたくもない場所に着いてしまった。

「学校に来ても何もないしな。他のところに行こ」

誠は方向転換した。

すると、どこからか音が聞こえた。リズムに乗った軽快な旋律。これはピアノの音だった。

誠はそのピアノの出所を探った。どうやら音楽室から聞こえるようだ。

確か、今日は吹奏楽部の練習はないはず。だから、湊は家にいたのだ。なら誰だろうか？

誠は興味本意で学校の中に入った。

誠はまっすぐに音楽室にむかった。たしかにそこからピアノの音が聞こえた。

近づくに連れ、その音はだんだんと大きく耳に届く。ドアも開いていた。

誠はそつと中に入った。そこには、一人の女子生徒がピアノを弾いていた。

髪が長く、整った可愛い顔、気品のある大人の雰囲気を感じを出していた。

そして演奏が終わると、静かに鍵盤から手を離し、小さく息を吐いた。

パチパチパチ

誠は思わず拍手した。それほどすばらしい演奏だったのだ。

その音で、女子生徒は誠の存在に気づいた。

「あ、ありがとうございます」

女子生徒は照れ笑いを浮かべた。笑顔も素敵なものだった。

「ピアノ上手だね。すごく良かったからつい聞き入っちゃったよ」

「ありがとう。ええと、あなたは？」

「俺は清水誠。2年生」

「私は汐風^{しおかぜしずく}雫。同じ2年生です。よろしくね」

そう言つて雫は満面の笑顔を見せた。

良く見れば、雫はとてもそこらへんでは見ないような美少女だった。

「音楽部が何かやってるの？」

「いえ、私は趣味で弾いているだけです。小さいころからやってましたから」

誠はなるほど感心した。雫は笑みを浮かべると誠に問い掛けた。

「あの、あなたは どうしてここに？ 今日学校は休みなのに」

「いや、ちよつと気分が良かったから散歩してて、気づいたら学校に着いたんだ。そしたら、いきなりピアノの音が聞こえたから。実は俺、今日誕生日で」

「まあ、それはおめでとつございます。何もあげられないけれど、言葉で祝つね」

「ありがとう」

誠は嬉しそうに笑みを浮かべた。それを見て、雫はある質問をした。

「ねえ、清水くん？　だよね」

「ああ、誠でいいですよ」

「誠くんね。誠くんは願いが叶うなら何を願う？」

「え？」

いきなりそんなこと言われて戸惑ってしまった。しかし、雫の表情は遊び半分でもなく真剣だった。

誠は少し考えると一つのことが頭に浮かんだ。

「一日中寝ること……かな？」

「ね、寝ること？」

雫は思わず聞き返した。

「やっぱり寝てるときって幸せな気分になるんだよね。それで一日中寝てられたらもう最高だな」

「そ、そう……」

予想していた答えと違うのか、雫は苦笑いを浮かべていた。

そして、笑みを消すとそつと口を開いた。

「人の願望はそれぞれ違う。自分の願いが叶うときが一番の幸せを感じられる。そのために、人は努力をする」

「幸せ？」

雫はそつとうなずいた。

「誠くんはまだ幸せを知らないのかもね。それを探すのも、ちょっとおもしろいよ。それに……。もしわからなかったら私に相談にきてもいいよ。きっといいアドバイスをするから」

雫は満面の笑みを浮かべた。そして時間を確認した。

「あ、そろそろ帰らなくちゃ。またね、誠くん。明日学校で会おうね」

そう言つて雫は音楽室から出て行つた。

誠は雫が言つた幸せのことを考えてみた。

さつきはあんなこと言つたが、実はもう自分の幸せを知っているかもしれない。

なぜなら、それを望んだから自分は……。

誠はそつと窓から空を眺めた。

あの雫は何を求めているのだろうか。もしかしたら、また会つ日が来るかもしれない。

誠はそつと音楽室を後にした。

料理などの準備が整い、誠の誕生日パーティーが開かれた。

「兄さん、誕生日おめでとう」

「ありがとう、湊」

「これで、お兄さんも１７歳。また一つ歳が増えたね。大人に近づいてるよ」

「いつかはそれが嫌になるけどな。嬉しいのは今だけ」

「そうだよな。ということで、はい。プレゼント」

湊は一つの包み袋を取り出した。

「おお！ さすが、湊。ありがとう！」

「さっそく開けてみて」

誠はすぐに中を開けた。中には腕時計が入っていた。

「いいな、これ。かつこいい。ありがとう、湊。大切にするぜ」

「うん」

誠も湊も嬉しそうに笑みを浮かび合った。そして2人は楽しく誠の誕生日を祝った。

そのとき、誠は湊にある質問をした。

「なあ、湊。湊は、何か願い事はある？」

「え？ スカイのこと？」

「いや、スカイは関係なく単なる願望」

湊は少し考え始めた。そして思いつくと口を開いた。

「私の願いは、兄さんと一緒にいることかな。ただ一人の家族だし、これからもよろしくね、兄さん」

それを聞いて、誠は嬉しそうに涙ぐんだ。

「そうかそうか。兄さんはすごく嬉しいぞ。うん。うん」

「でも、本当の願いは好きな人と一緒にいることかな」

「な、なんだよそれー！」

それから、2人は楽しく過ごした。

そしてこの日から、誠の新しい物語が始まった。

第四章 part 2：会長

晴れて、誕生日を迎え１７歳となった誠は、相も変わらず普段と同じような毎日を過ごしていた。

そして、この日は新しい生徒会長が決まったので、その引継ぎ式を行うのだ。

生徒たちは皆体育館へと移動する。

ただ一人、誠は大きな欠伸をして眠たそうにしていた。重たい瞼を閉じ、顔をうつむいて眠りに着いた。

そして準備が整い、引継ぎ式が始まった。

その瞬間、生徒たち、ほとんどが男子だが、突然立ち上がり歓声を上げた。

そのせいで寝ていた誠は目を覚まし、一気に眠気が吹っ飛んでしまった。

「な、なんだ？」

誠はみんなが注目しているステージの方を見た。

一人の生徒が登壇し、ステージの真ん中に立つと生徒たちに向き直った。

そこで誠は気づいた。その生徒とは、あの汐風雫だった。

「この度、新しく生徒会長に選ばれました、2年B組の汐風雫と申します。みんなのトップに立った以上、生徒全員のことを考え、この桜楼学園に貢献できるよう精一杯努めたいと思います。皆さん、これからよろしくお願いします」

雫が丁寧に頭を下げた瞬間、一斉に満場の拍手が送られた。

雫は嬉しそうに笑みを浮かべると、軽く手を振りながらステージを降りた。

誠は呆然としていた。

まさか、あの汐風雫がこんなにも人気のある生徒だったとは……。

そんなことを知らないのは、誠一人だけだったようだ。

昼休み。

屋上でいつものように湊と瞳と一緒に昼食を食べているとき、誠は2人にある質問をした。

「なあ、今日の生徒会長に選ばれた、あの汐風雫ってそんなにすごい人なのか？」

それを聞いた2人は箸を止めると、心底驚いた表情で誠を見ていた。

「うそ……。兄さん、それ本気で言ってるの?」

「冗談ですよ。いくらお兄さんでも、汐風雫さんくらい知ってますよね?」

誠はだんだんと自分が恥ずかしくなってきた。それほど有名そのなのに知らない自分は……。

「ごめん。本当に知らない……」

湊と瞳は絶望を知ったかのような表情になった。

「信じられない。兄さんがそこまでバカだったなんて。私だって知ってたのに……」

「だったら教えてくれよ」

それを瞳が教えてくれた。

「いいですか。汐風雫さんは、桜楼学園のアイドル的存在です。容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能。おまけにピアノが弾けて、歌も上手い。今回生徒会長に選ばれたことで、責任感と行動力があることが証明された。それほど、完璧で有名な生徒なんです。それに、密かにファンクラブもあるみたいです」

「兄さん、本当に知らなかったの?」

「まったく知らなかった」

それを聞いた2人はため息を吐いた。

誠は改めてあの汐風雫のことを考えた。

それほどすごい人とは知らなかった。最初に会ったときも、恐らくだが汐風雫は多少驚いていただろう。

誠にとって雫の印象など、あまり見ない美少女でピアノが弾けるくらいだった。

「まあ、兄さんらしいかな。そういう噂とか疎いもんね。そういえば、今雫さん生徒会役員を探しているらしいね。副会長、書記、会計とか勧誘してるみたい」

「うん。みんなその話で持ちきりだからね。選ばれた人はすごいよね。あの汐風雫さんに信頼されてるってことだし。なにより、仲良くなるチャンスだから、男子のほとんどは狙っているみたいですよ」

湊と瞳はそれから雫の話ばかりしていた。

聞けば聞くほどどれだけすごいか見えてくる。誠は少し雫が神に思えてきた。

放課後。

さっさと帰ろうと、誠は教室を出て廊下を歩いていると一つの人だかりが目に入った。

一人の生徒を中心に生徒達が群がっている。その中心の人物は雫だ

った。

「雫さん、おれを生徒会役員に」

「いや、おれがいいですよ。何でもできますから」

「おれのほうができますよ」

「わたしも」

回りから口々に言われ、雫は困り果てていた。愛想笑いを浮かべようか悩んでいる。

すると、雫は誠の存在に気づき目が合ってしまった。

誠は何も考えず、その状況を端から見ていた。

雫はちらちらと誠のほうを見て助けてほしそうにしていた。

誠は雫の心情を悟ると、仕方なく助けることにした。

「あれ？ あそこにいるのは、あの有名なアーティストじゃないか。おい、みんな！ あそこ見てみるよ。今角曲がったぞ！」

「なに？」

「マジかよ！」

生徒たちはありえない嘘話を信じ、騙されていくバカは次々に走り出した。

その間に、誠は雫の手を掴むとそこから立ち去った。

2人は誰もいない教室の中に入った。たしかここは空き室だったはず。

「ここまでくれば大丈夫だろ。それにしても、何であれで引つかかるんだ？」

雫は膝に手を当て、息を整えると誠に礼を言った。

「ありがとう。助けてくれて」

「ああ、いいよ。困ってたからな」

「うん……」

雫は誠に改めて向き直るとそつと口を開いた。

「……また、会ったね。幸せは見つかった？」

「ん？ ああ……、いや、多分まだ」

「そつか。いつでもいいから相談に来てね。生徒のことを考えるのが会長だから」

「ああ、ありがとう。でも、何でそんなに俺の幸せが知りたいんだ？」

雫は黒板に足を進めるとチョークを取って書き始めた。

黒板には『スカイ』と書かれていた。

「誠くんは考えたことある？　なぜスカイがあるのか」

「……いや、ないかも」

「私は何度もあるよ。スカイって、人を幸せにするためにあるんじゃないかな。だから、他人の願いも叶えることができるし、自分のことも叶うことができる。スカイは、何かを私たちに教えようとしてるんだよ」

雫は自分が言ったことを黒板に書いていく。

誠は一つの文字を見ていた。

『スカイ』。

それは、確かに人の望みを叶える。だが、それは良い願いもあれば悪い願いもある。

自分に取って叶えたい願いでも、他人に取っては迷惑な願いかもしれない。

それは、少なからず怖いものだと思っただ。

だが、さすが生徒会長だった。いろんなことを考えている。

誠は書き終わった雫に話し掛けた。

「それにしても、生徒会長だったなんて知らなかったぜ。すごいな」

「え？ この前選挙したよね？ そのときから決まってたんだけど……」

「……忘れた」

雫はそれを聞いて可笑しそうに笑った。

「そういえば、生徒会役員集めてるんだって？ 大変だな」

「うん。それが会長の最初の仕事だって」

「なんかファンクラブもあるみたいだし」

「ちょっと困るけどね。おかげであんなことになるし」

雫は重いため息を吐いた。

「でもファンクラブの奴らから選べばすぐに終わるんじゃないの？」

「あまりそういう人たちから選びたくないな。ちゃんと仕事してくれる人じゃないと後先困るし。だから、なかなか決まらないの」

「まあ、頑張ってくれよ。密かに応援してるぜ」

「うん。ありがとう」

そこで雫はある疑問を誠にぶつけた。

「そういえば、誠くんって役員に入れてくれとか、私を追っかけた

りしないね。ファンクラブにも入ってないみたいだし」

「いや、俺昨日まで会長のこと知らなかったし。そんなのもあることも知らなかった」

「そ、そうなんだ……」

雫は苦笑いを浮かべた。

「じゃ、俺帰るぜ。また明日な」

「うん。またね」

雫は軽く手を振って見送った。誠は鞆を持つと教室から出て行った。

雫はその後ろ姿を見て、小さく口元を緩ませた。

第四章 part 3：勧誘

新生徒会長が決まり、改めてその挨拶も済み、クラスで誰が生徒会役員に選ばれるかという話題ばかりが持ち上がった。

皆その話で盛り上がり、どうやって自分が役員になれるか作戦を練っている。

そんなことはお構い無しに、誠は面倒な授業も暇な休み時間も睡眠に使って体を休めていた。

部活も生徒会も忙しいことはしたくない。自分には関係ないこと。

しかし、そうも言っていられないようになった。

今日もさつさと帰ってゲームの続きをしようと少し早足で廊下を歩いていると、後ろから声をかけられた。

「誠くん」

誠は呼ばれた方向に振り向いた。

そこには雫が立っていた。

周りの生徒たちがこつちを見ているのが気になったが。

「よう、会長じゃないか。頑張ってるか？」

「うん。それで、ちょっといい？　話しがあるの」

「ん？　ああ」

雫に誘われ、2人は生徒会室目指して歩き出した。

校舎の奥の方に位置する生徒会室は、以前までは誰も近寄らなかったが今では数多くの生徒が訪れるようになり、随分と目の前の廊下は賑やかになったそうだ。

基本、生徒会室は関係者以外立ち入り禁止だそうなので、中には入れないから来るだけだそうだ。

「ささ、入って」

雫は生徒会室の鍵を開け、扉を開くと中に促した。

中は教室と同じくらいの広さで、真ん中に各役員の席が四角形を作って位置しており、その周りにはあらゆる行事の資料や道具、連絡事項のための黒板や棚、パソコンやテレビまであった。おまけにポットなどもある。なにより、他の室とは違う独特の雰囲気漂わせていた。

「さ、ここに座って。今紅茶持って来るね」

誠は支持されたところに座り、雫はポットから熱いお湯を出すと紅茶をカップに注いだ。そしてお菓子も用意し、それを誠の前に置くと隣の席に座った。

「はい、どうぞ。遠慮なくていいからね」

「おお、ありがとう。さっそくいただくぜ」

誠はおいしそうにお菓子を食べ、紅茶を啜った。そして一息吐くと話を戻した。

「それで、話ってなんだよ。俺に何の用？」

「うん。私が今生徒会役員を探していることは知ってるよね？」

「ああ、知ってる」

誠は紅茶を飲んでいるときにある予感が頭の中を過ぎった。

「ま、まさか……」

「うん。誠くん、生徒会役員にならない？」

「はあ！？ 無理無理！ 俺そんなことできないぜ！」

誠はカップを置くと思わず立ち上がってしまうほど驚いてしまった。

「お願い。誠くんしかないの」

雫も立ち上がり、手を握り合わせてお願いしてきた。

「だいたい何で俺なんだよ。他の人に頼んだほうがずっとましだぜ」

「そこが他の人とは違うの」

「……え？」

「今誠くんは私の誘いを断ったよね？」

「あ、ああ……」

「大抵の人はすぐに承諾するの。私と仲良くなれると思って。でも、誠くんは違う。私目的じゃなく、生徒のことを考えているから断っている。仕事ができなくても、生徒のことを考える心がないとダメなの」

「そ、そんなこと言われても……」

「ね、お願い」

そう言つて雫は誠の手をぎゅっと握つてきた。

綺麗な瞳を誠に向け、真剣に訴えている。そんなことされたら断るに断れない。

誠の心は少し揺らぎ始めた。

「でも俺、本当に何もできないぜ。取り得も得意なこともないし。役立つかどうか……」

「それでも必要なの」

雫の手がさつきよりも強くなった。熱が手に伝わる。それよりも、女子にこんなにも強く手を握られたのは初めてかもしれない。

そのせいで誠の心は折れてしまった。

「……じゃ、じゃあ、役職は？」

「生徒会副会長」

「副会長！？」

「大丈夫だよ。副会長と言っても私のサポート役だから。手助けするだけ。そんなに仕事もないし。ね？」

雫は上目遣いで見てきた。可愛い顔が誠を捉える。

少し涙目になって訴えてくるその表情は反則ものだった。

誠は目を反らして耐えようとしたが最後にはしぶしぶうなずいてしまった。

「わかったよ。俺でよかったら何でもするよ……」

「本当に？　ありがとう！」

雫は飛び跳ねるほど嬉しそうに喜んだ。

誠もそれを見て、少しは入ってもよかったと思い出した。

夕食の時間。誠は今日のことを湊に話した。

「え？ に、兄さんが生徒会役員？ 嘘でしょ。いつ雫さんと仲良くなったの？」

「嘘じゃないぞ。ちゃんと誘われたんだ。お菓子も紅茶もおいしかった」

「でも、兄さん雫さんのこと知らなかったじゃない」

「実はな、誕生日の日に会ったんだ。それから知り合って。まあ、人生何が起きるかわからないってことだな」

「でも、ちゃんと仕事できるの？」

「ああ、まずはこのプリントを渡せられて、明日までに仕上げて来いって言われた」

誠は鞆から一枚のプリントを取り出すと湊に渡した。

「生徒会役員契約書？」

「そう。それを書いて、改めて正式に生徒会役員に任命される。自己紹介のところもあるからな。けっこう面倒な仕事だぜ」

「へー。兄さんができるなら私も入りたかったな。でも、部活あるし」

「ま、たまに遊びに来ていいぞ。俺の権限で入れてやる。一応生徒会ナンバーツーだからな」

「うん。それじゃ、たまにね」

誠は湊からプリントを貰うと、さっさと食事を終わらせ、部屋にこもると書き始めた。

次の日から、誠は放課後生徒会室に行き、雫に与えられた仕事をこなしていった。

授業の合間の休み時間とかでは、友達にうらやましいや、お前にできるのかなどと言われた。

たしかに、こんな不真面目な生徒が生徒会に入るのはおかしいかもしれない。その噂は広まっていた。

それはまだいいのだが、なにより怖いのは、副会長という職は会長である雫と一緒にいることが多い。

おかげでファンクラブの人たちに目をつけられ、痛いような冷たいような視線を送られるようになった。

「誠くん、この資料を棚に直して」

「了解」

雫も誠のことをわかっているのか、無理な仕事は与えず簡単なことをさせる。なんとかこなすことができるので安心していた。

他にも生徒会役員はいる。主に各専門部の部長もいるのだが、そ

の人たちは生徒会役員の中には入らず、先生たちの推薦によって決まる。この人たちは何か合ったときに使うくらい。

本物の生徒会役員は、会長の雫が選んだ全6人である。会長、副会長、書記、会計、体育委員長、文化委員長がいる。すでに何人が紹介してもらっている。

今日来ているのは、会長の雫と副会長の誠。そして、書記で雫の親友である古池霞。ふるいけかすみ雫と負けず劣らず可愛く、とても優しい生徒だ。よく気が利いて頼りになる。

「はい。どうぞ」

霞はニコツと笑って紅茶を誠の前に持ってきた。

「ありがとう」

誠は嬉しそうに紅茶を啜った。こんなに良い思いをするなら生徒会も悪くない。

そうやって、誠の生徒会としての仕事は進んでいった。

第四章 part 4：魔女

以前までは屋上で昼食を摂っていたが、さすがに今の季節は外では冷たい風が吹いて凍えてしまう。

そこで、屋上の入り口の扉前で食べるようになった。そこでも十分に温かく、さすが私立なのか、暖房はどこにでも行き届いていた。

そんなときに、突然瞳が口を開いた。

「ねえ、2人は知ってる？ 学校に出る魔女の話」

「魔女？ 何だそれ。聞いたこともない」

誠はいつも通りの反応を示した。

「私知ってる。何でも願いを叶えてくれる魔女の話でしょ」

湊は元気よく手を上げると少し誠に自慢げに言った。

「うん。夜午前0時。学園の音楽室へ行き、ピアノの音が聞こえればいる証拠。そこで、ドアを開けずに願うの。『魔女さん、魔女さん。私の願いを叶えてください。それは、〴〵です。叶うと私は幸せになります』って。その願いが通じれば、ピアノの音が止み、中から丸い光が輝きだすの。そしたら願いが叶うんだって」

「すごいよね。私も叶えて貰おうかな」

湊はにこにこ笑みを浮かべながら食事を進めていた。

「そんなの嘘に決まってるだろ。そんなので叶ったらスカイのある意味なくなるぜ」

それを聞いて瞳は少しむっとなった。

「だったらお兄さん。今夜行つて確かめてくださいよ」

「ああ、いいぜ。確かめてやるよ」

誠は胸を張つて自身ありげに言った。

「あつ。言い忘れてましたけど、近くにトイレがあつて、そこには昔いじめられて自殺した幽霊が出るとかいう噂もありました。気を付けてくださいね」

「へん。そんなの怖くねーよ。行つてやろうじゃねーか」

ということで、誠は今夜学園に行くことになった。

そのことを、放課後雫にも話した。

「え？ あの噂信じて行くの？」

「もちろん。ああまで言われたら行くしかない。嘘か本当か確かめてやる。会長も楽しみにしとけよ」

誠は紅茶を飲みながらそつと雫を見た。

雫は考えごとをしているのか、あごに手をやりぼーとしていた。

「あーい、会長。聞いてるのか？」

「え？ ああ、うん。楽しみにしてるよ」

そして夜になり、誠は約束通り学園に来た。今の時刻は11時50分である。

「さて、そろそろ中に入るかな」

誠は懐中電灯を片手に音楽室へと足を進めていった。

夜の学園は不気味だった。いつも何気なく来ているのだが、少なからず恐怖心があるのか嫌に緊張してしまう。

廊下にはカッソカッソと自分の足音しか聞こえない。辺りは静けさに包まれていた。窓から差し込む月の光が廊下を照らしている。

「ええと、ここを曲がれば音楽室だな」

誠は角を曲がり、とうとう音楽室へ着いた。

時刻は11時58分。予定の時刻まであと2分である。

「ここで待つてるか。あつ、そういえば願い事はどうするかな。やっぱり一日中寝ることかな」

誠がぶつぶつと考えている瞬間、後ろからいきなり音が聞こえた。

その音を聞き、誠は一瞬体をびくつかせた。

そして今日瞳が言っていたことを思い出した。

『言い忘れてましたけど、近くにトイレがあつて、そこには昔いじめられて自殺した幽霊が出るとかいう噂もありました。気をつけてくださいね』

「ま、まさかな……」

誠は強張った表情でゆっくりと後ろを振り返った。

そこで誠は自分の目を疑った。女子トイレのドアが開いているのだ。なぜか電気は点いていない。

すると、突然丸い光が現れた。ゆらゆらと動き壁に張り付いている。

「う、うそだろ……。あれ、本当だったのか……」

そのとき、ドアからにゅっと手が出てきた。それを見て誠は思わず叫び声を上げると床に倒れてしまった。

「ご、ごめんなさい！　ごめんなさい！　もう学校サボったり、授業中寝たりしません！　生徒会の仕事もちやんとします！　だから許してください！」

誠は手を合わせて必死になって固く目を瞑り願っていた。

そのときだった。

「誠くん？」

「え？」

誠は目を開くとそつと顔を上げた。

目の前には懐中電灯を手に持っている雫が立っていた。

「何してるの？」

誠は雫だと確認すると、安心し大きく安堵の息を吐いた。

「な、なんだよ、会長かよ。びつくりした」

雫は誠を見てよく理解できず首をかしげていた。

「私を幽霊か何かと勘違いしたの？」

「そ、それより、何で会長がここにいるんだよ」

「え？ あ、う、うん。ちょっとね」

「つーか何でトイレの電気点けないんだよ」

「だって、電気点けたら係員の人に見つかるでしょ。夜学園に入るのは禁止なんだから。あつ、そういえば誠あの噂確かめるって言うてたね。だからいるんだ」

そこで誠は今日来た目的を思い出した。

「そついえば時間」

今の時刻はすでに0時を回っており、3分も過ぎていた。

「ああ、あ、0時過ぎちゃったよ。ピアノの音も聞こえなかったし、やっぱり嘘だったんだな。来て損したぜ」

それを聞いて、雫はぼそつと呟いた。

「……うそじゃないよ」

「え？」

雫は懐中電灯を照らし、音楽室へと足を進め始めた。

「そこにいてね」

誠にそう言うと雫は中に入ってしまった。

誠は言われたとおり、その場にいてじっとしていた。

そして少ししてから突然ピアノの音が聞こえ出した。

「ま、まさか……」

誠は少し考え始め、自分の考えを信じた。そしてそつと目を閉じると口を開いた。

「魔女さん、魔女さん。俺の願いを叶えてください。それは……」

誠が願った瞬間、音楽室からピアノの音が止み、丸い光がガラス越しに輝き始めた。そしてその光はゆっくりと収まっていった。

少しして、中から雫が出てきた。

「願いは叶った？」

「ああ。今叶ったよ」

それを聞いて雫は小さく笑みを浮かべた。

「確かに叶ったね。誠くんの願いはこうだったかな。『俺の願いは、今から最初に会う人が魔女の正体でありますように』」

「ああ。その通り。……魔女の正体は会長、お前だな」

雫は拒むことなく素直にうなずいた。

「うん。……知ってたの？」

「あんなことすれば誰だってわかるだろ」

たしかに、いきなり音楽室入ってピアノが鳴り出したら入った本人が弾いていると思えない。

雫はくすつと笑った。

「そっか。そうだよな」

「それで、そうやって人の願いを叶えて幸せを探しているのか？」

「うん。私はスカイを使って人の願いを叶えるようになっていたいってお願いしたの。これが私の力」

「でもなんでこんなまどろっこしいことするんだ？ 普通に願いがあるなら私のところに来てって言えばいいのに」

「だって、自分の願いを言う相手が分かると少しは言いづらくなるでしょ。自分の願いを打ち明けるのって一人のほうがいいもん。ピアノは私がいるっていう意味。その場で願いを言えば良いってこと」

「なるほどね」

誠は納得してうなずいた。

「それで、誠くんはさっきの願いで本当に良かったの？ あれで幸せになれた？」

「ああ、十分幸せだよ。誰も知らないことを知ってちょっと得した気分」

「……それじゃ」

雫は片手を前に差し出すと拳を握った。そして雫の手が光り始め、そっと開くと小さな光の球があった。それはふわふわと浮かぶと誠の胸の中に入っていた。

「会長。何だよ、今の」

「願い球。って私は言ってるの。願いを叶える源のようなもの。誠

が本当に願いを叶えたいって思ったとき使って」

誠はそつと胸をさすった。そして笑みを浮かべると礼を言った。

「ありがとう」

「うん。大切にしてね」

雫は満面の笑顔を見せた。

2人は校舎から出ると校門に行き着いた。

「なあ、会長。その噂を信じて来るやつってどのくらいいるの?」

「うん。今のところ100人くらい来たかな」

「へー。けっこう来てるんだな。それで、みんなどんな願いを叶えて欲しいって言うんだ?」

「それは内緒だよ。プライバシーの侵害だし。そういうことは口に出さないことにしてるの。まあ、だいたい同じような願いだし」

「ふーん、そっか。じゃ、また明日な」

「うん。また明日」

雫はそう言うとき大きく手を振って行ってしまった。

誠は雫を見届けるとそつと胸に手を添えた。

今自分は2つ目のスカイの力を手に入れたということになる。これを使うべきか。

たしかに叶えた願いはあるにはある。しかし、それは叶えていい願いのかわからない。

この願いは自分で解決しなければいけない気がする。

誠はそつと息を吐くと夜空を見上げた。

「ま、今はいいか」

誠は冷えた体を擦りながら家に帰っていた。

第四章 part 5：神社

誠が生徒会役員となって数日が経った。

すでに仕事にも慣れ、雫も少しずつだが難しい仕事を押し付ける。だが、誠は着実にこなしていった。

雫はよく人を見ている。前にできなかったことがいつのまにかできるようになっているのだ。

簡単なことからステップするように少しずつレベルを上げることによりできていく。

雫はやはりすごい生徒だった。

この日も放課後は生徒会室にこもって仕事をした。

会長の雫は書類を、書記の霞はパソコンを使って進めていく。

誠は一人、道具の片付けをしていた。

そんなときに、ある人物が来た。

トントン

ドアがノックされた。

「どうぞ」

雫が声をかけると、ドアがゆっくりと開かれた。

「こんにちは」

ドアの前には湊と瞳がいた。雫は立ち上がると二人に近づいた。

「ええと、何か用かな？」

「え、えと、私たち清水誠の知り合いで」

「誠くんの？」

誠は雫に2人を紹介した。それから2人を中に招き入れ席に座らせた。

「そっか」。湊ちゃんは誠くんの妹なんだ」

雫は肘を立ててその上に顔を乗せながら湊を見た。

「は、はい。兄がお世話になってます」

「ううん、そんなこと。いつも頑張ってるから助かってるよ」

「す、すごい。本当に本物の汐風雫さんだ」

瞳はまるで別人のように慌てふためいていた。

「ふふ。そんなに珍しいような目で見ないで。同じ人間なんだから」

3人の女子たちは楽しそうに話していた。誠は霞の仕事を手伝っ

ていた。

「霞さんも話に加わったらどうですか？」

「そうね。この仕事が終わったらそうするわ。それにしても、可愛い妹ね」

「いや、いつもうるさいんだけど」

「ふふ。でも、こうやってわざわざ来たってことは心配してるんじゃないかな」

「……そうかも。俺ってそんなに頼りないかな」

「そんなことないと思うよ。けっこう役立ってるし。やっぱり男がないと重い荷物とか持てないからね。雫は大助かりって言ったよ」

誠はちらつと3人の方を見た。

心配している湊。頼りにしてる雫。どちらでもなくバカにしてる瞳。いったい自分は役立つ人間なのかそうでないのかわからないやつだと思った。

休日は生徒会の仕事は基本ない。そこが部活動とは違うところだ。部活動は休日でもある。案外生徒会は楽なものだ。

湊は部活があるからさっさと昼食を食べて行ってしまった。誠は外に出かけてレストランに向かうことにした。

レストランで適当な物を食べ、腹を満たすと、帰り道の途中で雫を見かけた。

「あれ？ 会長じゃん。何してるの？」

「あ、誠くん。こんにちは。今買物してるの」

「へー、偉いね」

「ちょうど良かった。ちょっと買い物に付き合ってくれない？ 荷物が多くて困ってたの」

「え？」

誠はなぜか荷物持ちとして一緒に行動することになった。

雫は事前にメモした内容を確認し、いろんな店を回る。どうやら今日はあらゆるところで安売りをしているらしく、今の内に買いだめをしたいそうだ。

そして2時間くらいしてようやく買い物が終わった。

「けっこう買ったな。……重い」

大きなビニール袋が誠の手に2つずつ提げられてある。雫は1つずつ持っていた。

「うん。買いたいものが全部買えて良かったよ。誠くんのおかげだね。私一人じゃこんなに持てなかったもん。ありがとう」

「まあ、これも会長のサポートだと思えば苦にならないかな」

「あ、あのさ、前から思ってたんだけど、何で私のこと会長って呼ぶの？」

「え？ そりゃ、会長は会長だからだろ？」

「普通に雫でいいよ」

「そうか。じゃあ、雫で」

「うん」

雫は満足そうに笑みを浮かべた。

2人は商店街から少し離れ、あまり人気のない道を歩いていく。そして長い階段の前に着き、雫はその階段を登って行く。

誠はこっちにはあまり来たことがなく、この階段の上の何があるのか知らない。

重い荷物を運びながら階段を登って行く。そしてようやく一番上に辿り着いた。

二人の目の前には大きな神社があった。

「なんで神社？ 雫の家って、ここの近くなの？」

「ううん。ここが私の家だよ」

「え？　だってここ神社だろ？」

「実はね、私の家系は代々この神社を引き継いでいるの。母屋はこっちだよ」

雫の後に続き、誠は母屋に向かった。母屋は神社から少し離れた隅のほうにあった。

母屋はごく普通の家と変わらなかった。ただ違うのは、隣に根が張られた井戸があるくらいだった。

「さ、どうぞ」

雫は玄関を開けると誠を中に入れた。

中も普通の家と変わらなかった。奥のほうに進み、居間に入ると荷物を置いた。

「本当にありがとね。何かお礼しなくちゃね」

「いいよ、別にこれくらい」

「そうね。じゃ、ちょっと待ってて」

雫はお茶を誠に渡すといそいで二階の方へとかけて行った。そして数分して現れた。

「おまたせ」

誠は雫を見た。そこで思わず飲んでいたお茶を吐き出しそうになるほど驚いてしまった。

「な、なんだよ、その格好」

雫はあの巫女の姿になっていた。白い服に赤い袴。手には白い紙とお札が張られた棒らしきものを持っている。

「どう？ この姿。可愛い？」

「可愛いも何も、何でそんな格好？」

「今からお払いしてあげる。お礼の代わりに」

「できるの？」

「まかせてよ。じゃ、そこに座ってじっとしててね」

誠は言われたとおりにした。じっと座り、目を瞑って心を落ち着かせた。

後ろで雫はぶつぶつ何かを唱えながら持っていた棒を左右に振り回した。そして最後に誠の頭を軽くぽんぽんと紙を当て終えた。

「終わり？」

「うん。これで何か良いことあるよ」

「本当かな？ 俺そついうのあまり実感しないんだよな」

「実感しなくても良いことあるよ。せつかくだし、何か食べる？」

「いや、いいよ。さっき食べてきたし」

「そつ。じゃあ、ゆつくりしていつてね」

雫は買ったものを整理し、食事の準備を始めた。

「なあ。雫は一人暮らしなの？」

「うん。そうだよ。お父さんもお母さんもないの。でも、よく霞ちゃんが来るから寂しくないよ。たまに泊りにも来るし」

「そつなのか。俺と同じだな」

「え？」

「俺も両親いないんだ。俺が小さいころに交通事故で。それで、湊と二人暮らし」

「そつなんだ。寂しくない？」

「大丈夫だよ。湊がいるし。毎日楽しくしてるよ」

「そつか」

雫はそつと笑みを浮かべた。

日が傾き始めると、誠は家に帰ることにした。雫は満面の笑顔を浮かべ、誠を見送った。

そんな光景を、一人の男がじっと見ていた。

この男が、幸せな日々を崩れ去せることを知らずに。

最悪の事件が、今襲いかかり起ころうとしている。

第四章 part 6：傷痕

今日も誠は生徒会室を訪れた。

しかし、中にはいつも先にいるはずの姿が無い。

生徒会長の机に雫がいなかった。いるのは霞だけ。

「霞さん。今日雫は？」

「うん。何だか用事があるって言って先に帰ったよ」

「そうですか……」

このときは、単なる用事だと思って気にもしなかった。

だが、知らないところで恐ろしいことが起きていたのだ。

それから、雫は少しずつだが生徒会室にいない日が続いた。

以前は毎日来ていたが、日が経つに連れて来ない日が多くなっていく。それほど用事が大変なのだろうか。

「どうしたんだ。雫のやつ」

誠は仕方なくこの日、霞の仕事や自分ができることをして帰った。

いつしか雫はちよくちよく学校まで休むようになった。

噂では、雫は皆勤を目指していたらしく、来ないのは珍しいのとのことだ。

霞も少なからず心配していた。

「おかしいわね。雫が学校を休むなんて。前まではそうそうなかったのに」

「連絡は取ったんですか？」

「それがいくら携帯にかけても繋がらないの」

2人は首をかしげることしかできなかった。

この日、誠は生徒会室を訪れずぐに帰った。

霞にも一言伝えてある。生徒会長がいらない以上、仕事は何もできない。

湊に頼まれたので買い出しのために商店街を訪れた。

買いたい物を全て買い、家に帰ろうと足を進めると一人の姿が目についた。

雫だった。

たくさんのビニール袋を提げ、重たそうなビールの箱詰めと焼酎などのビンを持っていた。

「おい、雫」

誠は声をかけた。その声を聞いて、雫は一瞬体をびくつかせると恐る恐る誠のほうを振り向いた。

「ま、誠くん……」

「何してんだよ、こんなところで。今日学校休んだんだろ？」

「え、ああ、うん……。ちょっと気分が悪くて」

「それなら無理すんなよ。あつ、俺持つてやるよ。重そうだし」

「う、うん。ありがとう……」

誠が一番重いであろうビールの箱詰めを持ち、雫の負担を減らした。そして雫の家へと歩いていく。

2人は黙ったまま足を進めていた。一言も口を開かず、目的地目指して歩いて行く。

いつもなら雫はよく話し掛けるのだが。誠は自分から話し掛けることにした。

「雫、最近学校来ない日があるけど大丈夫か？ そんなに悪いなら看病くらいするぜ」

「う、うん。ありがと。大丈夫だよ。本当に……」

本人はそう言っているが、元気が無さそうである。

「今あまり生徒会の仕事はないけど、たまには顔出せよ。霞さん心配してたぞ」

「うん。ごめんね。できるだけ顔出すね……」

それからまた沈黙。あきらかに雫の様子はおかしかった。

そして神社の階段まで着いた。

「ありがと。ここまででいいよ。あとは自分でやるから」

「大丈夫か？ 無理しなくていいぞ。上まで持って行ってやるよ」

「いいから貸して！」

雫が突然叫んだ。そんな雫を見るのは初めてだった。

誠は驚いた表情になって雫を見ていた。

「し、雫……」

「い、ごめん。本当に大丈夫だから。……本当に」

誠はそつと荷物を渡した。雫は受け取ると、重たいにも関わらず急いでいるかのように階段を登っていった。

誠はその後ろ姿を見ていた。

雫の様子はあきらかに変だった。一目見れば誰でもわかる。いったい何があったのだろうか。

誠は踵を返すと家に帰ろうとした。

そこである疑問が浮かんだ。

そういえば、今自分は重たいビールの箱詰めを持っていた。

雫は一人暮らし。なぜお酒なんて買ったのだろうか。

誠はさつと階段を見上げた。

あの先に何があるのだろうか。雫はいったい何を考えているのだろうか。

誠はごくつと生唾を飲み込むとそこから去っていった。

誠は一人生徒会室にいた。今は霞も誰いない。

窓際に椅子を置き、じつと空を眺めていた。

今にも雨が降りそうなどす黒い雲が空を覆い尽くしている。こういう天気は気分が滅入ってしまう。

しかし、誠は最初から気分が良くなかった。

ずっと雫のことを考えていた。

なぜ学校を休むようになったのだろうか。なぜあんなにもお酒を買っていたのだろうか。

携帯に連絡しても繋がらない。あの買い物以来、雫は学校をずっと休んでいる。

「なにしてんだよ、あいつ……」

誠は携帯を握り締めながら呟いた。

そのとき、生徒会室のドアが開かれた。

そこで誠は驚きつい呟いてしまった。

「し、雫……」

ドアの前には雫が立っていた。

いつもの明るさは見ただけでないことはすぐにわかる。目は死人同様に曇っているようだった。

そんな目でじつと誠を見ていた。

「誠くん……いたんだ……」

誠は椅子から立ち上がると恐る恐る雫に話し掛けた。

「久しぶりだな。心配したんだぞ。あの買い物以来会ってないからな。今日はどうしたんだ？」

「うん。ちょっと忘れ物取りに……」

雫は中に入り、会長の机の引き出しから書類を取るとそそくさと出て行こうとした。

それを見て誠は声をかけた。

「ちょ、ちょっと待てよ、雫。前みたいに少しここでのんびりしながら話そうぜ」

「……ごめん。急いで帰らないといけないの。用事あって……」

「そ、そうか……。でも、お前けっこう学校休んでるぞ。明日からはちゃんと来いよ」

「うん。……来れたらね。あと……」

「ん？」

「……もう、私にかまわないで」

「え？」

そう言って雫は生徒会室を後にした。

誠はその場に立ち尽くし、頭の中でさっきの言葉が何度も繰り返されていた。

『……もう、私にかまわないで』

これはどういう意味なんだ？ かまうなって、どういふことなんだ？

我に返った誠は雫がいないことに気づくとすぐに追いかけた。

雫はそんなに遠くに行っておらず、すぐに見つけることができた。

「待てよ、雫！ さっきのどういふことだよ！」

誠は走りながら叫んだ。

雫は誠に気づくと後ろを振り向き、力のない瞳を向け、ゆっくりと口を開いた。

「……言っただでしょ。私に近寄らないでってことよ」

「言ってる意味がわかんねーよ！ ちゃんと説明しろ！」

誠は雫に追いつくと即座に腕を握った。

そのとき、誠ははっと気づいた。

雫の腕には青い痣があった。大きく痛々しい傷痕。まだできて間もないものだった。

雫はそれを見られていることに気付くと、すぐに誠の腕を振り解き片方の手で覆った。

「雫……その痣」

「……何でもない。何でも……」

そのとき、雫の目から一筋の涙が流れた。

「お、おい、雫……?」

雫は涙を拭うと口を開いた。

「もう……、もう、私にかまわないで。本当に……。私のことはほっといてよ……」

そう言つて雫は走って行つてしまった。誠はその後ろ姿を見て腕を伸ばしたが立ち尽くしていた。

あの痣は何だろうか。よく見れば、足や首周りにもあつた。あれはいつたい……。

そのとき、空からぽつぽつと雨が降り出した。冷たい滴が離れていく二人を容赦なく襲いかかる。

誠はそつと空を見上げた。

この雨は、まるで雫の心の涙のように感じた。

第四章 part 7：虐待

誠は朝から一人生徒会室にいた。

窓側に席を置き、さつきから降っている雨を呆然とした表情で眺めていた。雲から落ちる滴が地面や水溜りに当たり跳ねる音が耳にざわめく。

生徒会室の中はしんとした雰囲気にも包まれていた。電気も点けず、薄暗い中、静かな空間ができあがっていた。

「雫……」

誠はぼそつと呟いた。

あれから雫とは会っていない。携帯に連絡してもコールが鳴るだけで繋がらない。今日も学校を休んでいる。

誠の頭の中ではあのとき見た傷が映し出されていた。

痛々しい傷痕。それが腕や足にまであった。

あれはどうやってできたのだろうか。何かあるはず。雫は何か隠している。

誠は決心した。

今から雫に会いにいく。あの、元気な笑顔を取り戻すために。

誠は立ち上がると生徒会室を後にした。

傘をさし、降ってくる雨から逃れようとするが、それでもしぶとい水しぶきは足元に降り注ぐ。

おかげで靴や中はすでに濡れてしまっている。湿った嫌な感触を味わう。

商店街を通り、雫の家である神社を目指す。商店街は雨でも人の数は変わらず活気づいていた。車が通るたびに水溜りから水が飛んでくるのは腹が立った。

そしてようやく目的地の階段のところまで来た。ここを登れば雫に会える。

誠は意を決し、登ろうと足を上げた。

そのとき、上のほうから誰かが降りてきた。

「雫？」

その姿は雫ではなかった。

見た目はいかにも悪い人といっているように、紫のシャツに黒いジーンズ。派手なネックレスや指輪、耳にはイヤリングとピアス。口にはタバコをくわえていた。

そしてなにより怒っているのか厳しい顔をしている。まさにヤクザ

とい感じを出していた。

誠とその人は目が合った。しかし、お互い何も言わず通り過ぎた。誠は一番上まで上り終えると、そつと後ろを振り返り、階段を見下ろした。

さっきの人は誠の来た道を行ってしまい姿を消した。

「何しに来たんだ、あの人。ヤクザが神社にお参りかな？」

誠はどうでもいいと思い、さつそく母屋の方に足を向けインターフォンを押した。

「……はい」

中から元気のない声が聞こえるとゆっくりとドアを開き雫が現れた。

雫は目の前にいる誠に気づくと目を開いて驚いた。

「ま、誠くん……。どうしてここに……」

「いや、やっぱり心配したから」

そのとき、雫は勢いよく玄関の戸を閉めると鍵をかけた。

誠は突然の行為で戸惑ってしまった。

「え？　ちょ、ちょっと雫！　なんで閉めるんだよ！」

「……なんで。なんで来たのよ。言ったでしょ。もう、私にかまわないでって……。私のことはほっというてよ……」

中から冷たい声が聞こえた。雫がそんなこと言うとは思わなかった。

誠は少し怖気づいたがくらいついた。

「なんだよ、その言い方。人がせつかく心配してやって来てんだぞ。なのにそんな態度取るのかよ！」

「……そうよ！ だから早く帰って。もう二度とここには来ないで！」

雫は吐き捨てるように言った。

誠は少し黙っていたが、ふっと息を吐くと口を開いた。

「そうかよ。だったら、俺はここから動かない。お前が戸を開けるまで帰らないからな！」

「え？　ちょ、ちょっとやめてよ……。さっさと帰ってよ！」

「なら今からドアを開けて、俺の話を聞け」

「……嫌よ。お願いだから帰って！　お願いだから！」

誠ははあく重いため息を吐いた。

そこまで言うなら仕方ない。正直言えば、あまり迷惑もかけたくはない。

「わかったよ、雫。でも、このままでいいから話を聞いてくれ。……悩みがあるなら言え。一人で抱え込むな」

「え？」

「俺は生徒会副会長。お前のサポート役だ。サポートは助けるのが仕事だ。なにより、俺は友達が悩んでいるのをほっとけないからな」

雫は拳をぎゅっと握った。

「誠くん……」

誠の言葉が温かく感じた。

たしかに今ある悩みを抱えている。どうしようもできない、恐ろしい悩みを。

それは、一人でどうにかしなければならぬ。他人を巻き込むことはできない。

でも、誠になら……。

一瞬だが、そんな甘さを出してしまった。

「じゃあな。ちゃんと学校来いよ」

誠は明日も行くかと思って帰ろうとした。

雫は玄関の前に誠の影がないことに気付くと咄嗟に戸を開けてしまった。

「誠くん！」

誠は振り返ると雫を見た。雫は少しの間誠を見ると口を開いた。

「……入って。そのかわり、これからはもう私にかまわないって誓って」

「……ああ」

誠は曖昧に返事をする中に入った。

中に入ると居間には行かず、すぐに雫の部屋にむかった。居間は使えないらしい。

雫の部屋は綺麗に整頓され、机には参考書や教科書、大きなベッドにふかふかのソファ。壁には制服と巫女の服がかけられてあった。

雫は紅茶を持ってくると床に座り、誠も同じように座った。

「ありがと、誠くん。……心配してくれて」

「ああ、いいよ。人が困ってたら助けないといられない性分だから」

「……うん」

誠は紅茶を飲みながらそつと雫を見た。

あらためて雫を見ると、その姿は痩せており、身体的にも精神的にも疲れているようでやつれていた

。元気がなく、活力が見えない瞳。服装は全身を覆い尽くすように、長袖を着ていた。

「誠くんは、何を知りたいの？」

雫がそつと口を開き、誠は我にかえると答えた。

「……何かあったんだろ？ そのわけを知りたい」

雫は観念するかのように息を吐いた。

「今から話すこと、信じる？ いや、驚くと思っけど、できるだけ冷静にいてね」

「あ、ああ」

すると、雫は誠に背を向けた。そして、いきなり上着を脱ぎ始めた。

「え、ちょ、ちょっと雫？ な、何してんだよ」

そしてとうとう上半身を全て脱いだ。誠はさっと目を閉じ、さつと手で顔を覆った。

「誠くん、目を開けて。……真実を知りたいなら」

誠は緊張しながらも恐る恐る目を開けた、そして雫の姿を見て驚いた。

「し、雫、……なんだよ、その傷……」

雫の体にはいたるところに傷痕があった。腕や足だけではない。背中にも、肩や首元にも赤く腫れていたり、青い痣、重度の火傷の痕もあった。

「これを、全てやったのは……私のお父さん」

「え？」

誠は雫の言葉が信じられなかった。

もしかして、これは虐待？ いや、これはあきらかに虐待だ。親の暴行で雫は苦しんでいたのだ。

そのせいで、学校も来られなかった。しかし、

「雫。たしか、お前の親っていないんじゃない？」

「うん。たしかに私は一人暮らし。でもね、お父さんが帰ってきたの。いや、見つけ出されたっていうべきかな」

「どういうことだ？」

雫は上着を着ると語り始めた。

「実はね、私の両親は離婚したの。数年前に。それで、私はお母さんとこの神社に来た。お母さんはこの神社で子供の頃は住んでいたからね。でも、去年死んじゃった。疲労で倒れて。それから私は一人になったの。でも、寂しくなかった。霞もいるし、神社の仕事で忙しくて。生徒会の仕事は大変だけど、誠くんと出会えたし。でもね、この前来たの。お母さんを最後まで苦しめた鬼が」

「鬼？」

雫はうなずいた。

「私のお父さんは毎日お酒やギャンブルに明け暮れて、好き勝手していったの。機嫌が悪いときはお母さんに当たって、毎日のように暴力を振るった。その様子を、私は幼いころからずっと見てた」

「その標的が次は……雫ってこと？」

雫は小さくうなずいた。

「そんな……」

誠は信じられなかった。親が子供にこんなことをするなんて。

誠はぎゅっと拳を握った。

「雫、お前これからもこうして生きていくつもりか？」

「……うん」

「そんな。じゃ、俺の家に来いよ。ここから逃げたそう。そしたら――」

雫はすぐさま首を振った。

「だめだよ。そんなことしてもすぐに見つかる。それに、お父さん一人ほっとけないよ」

「あ、あんな悪いやつをかばうのかよ。いくら自分の父親でも、そんな酷いことして」

「それでも、仕方がないよ。これが運命なんだよ。私とお母さんは、あの鬼から逃れることはできない。それに、このことに他人を巻き込みたくない。だから、自分一人ですぐにかしように……」

「それで、見つけ出した答えが我慢することかよ」

雫はそつとうなずいた。震える体で、怯えた表情でうなずく。

誠は悔しかった。

事実を知ってもなににもできないなんて。いや、それでも助けてやりたい。そこで誠はある案が思い浮かんだ。

「そうだ。雫、スカイを使え」

「え？」

「お前のスカイは願いを叶えること。だったら、自分の願いを叶え

るよ」

我ながら名案だと思った。しかし、それは無意味だった。

「だめだよ。あれは相手の願いを叶えるの。自分の願いは叶えられないよ」

「そ、そんな……」

誠は愕然とした。もう他に方法はないのだろうか。助けることはできないのだろうか。

「それでも、雫、ここから逃げ出そう。それがいいって」

誠は雫の手首を掴んだ。もうこうするしかない。

しかし、雫は力ずくで誠の手を振り解くと大きな声で言った。

「言ったでしょ。もう、私にはかまわないでって。そういう約束で教えたんだから。……もう、無理なんだよ。……私には、この地獄から出られないの!」

そのとき、玄関の戸が開く音がし、2人は声を出すのを抑え、さっと静まりかえった。

第四章 part 8：追求

玄関から戸が開く音がした。その瞬間、二人はすぐに緊張が走るのがわかった。

人の家の戸を、身内の者以外が勝手に開けるはずがない。

つまり、雫が言っていた鬼、お父さんが帰って来たのだ。

すると、下の方から大きな声が響いた。

「おい、雫！ どこにいるんだ！ 出て来い！」

その声が耳に届くだけで恐怖が生まれた。

誠はきつと真剣な目にした。雫のお父さんと立ち向かうためだ。

しかし、雫はそうさせなかった。

雫は立ち上がると、誠の手を引っ張ってすぐに押入れの中に強引に入れた。

「し、雫？」

「いい。絶対にここから出ないでね。いいというまで。私に何があっても。……約束してね」

そう言って雫は誠の返事を聞かずさつと戸を閉めてしまった。

そのとき、雫の部屋のドアが開かれる音がした。

誠は戸を少し開けて隙間を作った。

「おい！ さっさと返事しねーか！ このバカタレが！」

「う、ごめんなさい……」

雫は怯えながら、びくびくとした感じで謝った。

誠はあらためて雫のお父さんを見た。

雫のお父さんは、さっき階段のところですれ違ったあのヤクザのような人だった。

「ここで何してたんだ。さっさと飯作れって言ったじゃねーか。この役立たず！」

雫のお父さんは手を振りかざした。そこで誠は咄嗟に目を瞑った。

少しして痛々しい音が耳に響く。それと一緒に雫の声も届く。

「う、ごめんなさい……。うめんなさい……」

雫が怖がるように頭を腕で覆いうずくまっていた。

誠はすぐに押入れから出ようと戸に手を触れた。そこで力を入れようとしたが入らなかった。

雫が涙目になってこっちを見ているのだ。

眼で訴えている。そこから出てくるなど。

誠はぎゅっと唇を噛んだ。どうすればいいのかわからなくなった。雫の言う事をきくべきなのだろうか。

「ちっ！　すぐにしろ！」

雫のお父さんは最後に雫を蹴ると部屋から出て行った。

誠は下に降りていく音を確認すると、押入れから出てきた。

そして未だにうずくまっている雫の元に寄った。

「だ、大丈夫か、雫？」

誠は優しく雫の背中を撫でてやった。

「う、うん。大丈夫。今日はまだ、軽いほうだから。……。ごめんね、私ごはん作らなきゃ。しばらくここで待ってて」

そう言っただけはゆらゆらとした足取りで立ち上がると部屋から出て行った。

誠はその場に取り残されると歯を力強く噛みしめ、雫のベッドに拳を振り落とした。

「くそっ！」

どうして早く気づいてやれなかったのだろうか。どうして早く助

けようとしなかったのだろうか。

いや、過ぎたことは仕方ない。ならば、もう遅くならないようにしなければ。

今から始めればいい。今から助け出せば。

助けたい。雫を、この地獄から、鬼の手から助けてやりたい。絶対に……。

それしか、今は考えられなかった。

しばらくして、雫は再び部屋に戻ってきた。

どうやらお父さんはお酒を飲んで眠ってしまったらしい。

「誠くん。今のうちに外に……」

誠は雫の言葉に同意し、立ち上がると、二人は外に出ていった。

外はまだ雨が降っていた。気分を損ねる冷たい雨。その雨が容赦なく二人に襲いかかる。

母屋から離れ、先を歩いていた誠は神社の前で立ち止まると雫に向き直った。

うつむいていた雫はそっと口を開いた。

「わかったでしょ。今の私の家庭状況。こんなんじゃ学校にもいけない。……お金も無くなっちゃうし」

「でも、それはあいつが全部悪いんだろ。だったら、あいつを追い出せばいいじゃないか。雫、警察に言おう」

「え？」

「警察に言えば、雫は助かるんだ。それで、全て解決だ」

誠はすぐに雫も承諾すると思った。

しかし、雫はうつむいてしまい、口を閉ざしていた。

「どうしたんだよ、雫」

「……ごめん、誠くん。私、そんなことできないや」

「な、なんで？ どうしてだよ。これで雫は助かるんだぞ」

「だって、自分のお父さんを捕まえてくださいって言ってるんだよ。そんな酷いことできないよ」

「酷いのは雫のお父さんだろ！ こんなこと許されるかよ！ あのクソ野郎を、ここから何としても追い出すんだ！ それで、あの鬼は」

「もうやめてよ！」

突然雫が叫んだ。そこで誠は口を閉ざした。

「……やめてよ。これ以上、お父さんの悪口を言うのは。……あれでも、私のお父さんなんだよ。助けあって、協力しあって、少しでも幸せを望む。それが、家族でしょ？」

雫はうつむくと体が小刻みに震えてきた。

そして目から涙が溢れ出て、一筋の滴が頬を伝った。その量が増え、何度も流れていく。

誠はその様子を見て口を閉ざしていた。

たしかに雫が言ったことは正しい。でも、それは正解なのだろうか。

今の雫の言葉は、まるで自分に言い聞かせているようで。

「雫。お前は、幸せを知りたいって言ってたな。人の幸せを探してたよな？」

誠の質問に、雫はうつむきながらそつとうなずいた。

「うん……」

「雫のお父さんは、今のままで幸せそうか？ あんなことして、幸せに見えるのか？」

雫はゆつくりと首を振った。

「わからない。でもね」

雫は顔を上げると無理に笑みを浮かべた。

「きっと、今のお父さんはこれが幸せなんだよ」

誠は反論できなくなった。

もう、覚悟をしている。雫は、すでにこれから何があるかと耐えるという覚悟を持っていた。

「ごめん。今日はもう帰ってくれない？」

誠は口を閉ざしたまま、逃げるようにしてその場から去って行った。

家に着くと、すでに湊は帰ってきており夕食の仕度をしていた。

「あつ、兄さんお帰り。もう少しでできるから、ちょっと待っててね」

そう言っただけ調理を始める。誠はそんな湊をじっと見ていた。

夕食の準備ができ、2人は席に着いて進めていく。今日の夕食はオムライスだった。

「ね、兄さん。今日のオムライスはどうか？　おいしい？」

「ああ、すっごくうまいよ」

それを聞いて湊は嬉しそうに笑みを浮かべた。

誠はオムライスを食べながら考えていた。

やはり家族はこういうものだ。お互いに一緒に過ごし、ご飯を食べ笑い合う。

楽しく、仲良く、温かな空間に包まれる。それが家族だ。

いや、そのはずだ。雫が言っているのは家族のはずがない。

「なあ、湊」

「うん？」

湊は誠の顔を見た。

「なに、兄さん？」

「湊はさ、もし俺が暴力を振るったり、怒ったりしたらどうする？」

「え？」

湊は少し怯えた表情になった。

「そ、そんなこと、兄さんはしないでしょ。今までだって、そんなこと一度もなかったし」

そう言って無理に笑みを作る。

「いや、もしもの話だよ。もし、そうしたらどうする？」

湊は少し考え答えを言った。

「どうにかして、助けようとするかな」

「え？」

「だって、そんなに怒るってことは何かあったんでしょ？ 人が怒るのは何かあったからだよ。嫌なことがあって、どうしようもなくなった気持ちを晴らしたい。だから、暴力にあたる。それで、兄さんが満足するなら耐えるかな」

湊はにこつと笑った。誠も笑みを浮かべる。

そんなこと、絶対しないのに……。

「じゃあ、友達が親からそんな虐待を受けて苦しんでいるとき、前ははどうする？ その親は昔から酷いやつで、暴力ばかりするんだ」

「うーん、そうね……。その虐待を受けている人が嫌がって、助けを求めるなら手をかすかな。やっぱりそこまですたら助けたいし」

誠は今わかった気がした。今自分がすべきことを。湊のおかげで導き出せた。

「ありがとう、湊」

誠はオムライスをいそいで腹の中に入れてと部屋に戻った。

第四章 part 9：理解

誠は学校に行かず、部屋にこもるとあるところに電話をしていた。
その相手とは警察である。

雫には悪いが、一晩考えてこうするしかないと思った。

もしかしたら雫は誠のことを一生怨むかもしれない。勝手なことをして、許してはくれないだろう。

しかし、それでもかまわなかった。それで雫が助かるなら、魔の手から救い出せるなら、誠はたとえどんなに憎まれようと我慢できた。

誠は決心して、電話をした。

直接話したほうがいいということで、誠は警察署に訪れた。

制服を着て、いつもより礼儀正しく振舞う。

中に入ると独特な雰囲気のでいで緊張してしまう。

受付で名前を名乗ると奥の待合室に案内され、少しして一人の男性が入ってきた。

警察官の服は着ておらず、普通のスーツ姿で若い人だった。

「君が清水誠くんだね。私は守山もりやまと言います。さて、さっそく詳しく話してくれないかい？」

誠は雫のことを知っている限り全て話した。

虐待を受けていること、雫の今の現状や生活、学校でのことなども話した。

それを聞いて、守山はうなずいた。

「なるほど、汐風さんは、お父さんに虐待を受けているんだね。たしかに、君の言うことが本当なら酷い話だ。……それで、君はその汐風さんの友達なんだね？」

「は、はい。お願いします。雫を助けてください」

すると、守山は口を閉じて黙ってしまった。そして考え込んで険しい顔をする。

「あ、あの、雫は助かるんですね？ 虐待を受けているんだから、それは可能なんですよね？」

「あ、ああ、たしかにそのとおりだ。でもね……」

守山はため息を吐くと重い口を開いた。

「私もね、君の話を聞いてすぐにも助けたいと思う。これは本当だ。でもね、だからといって、その……今のままでは助けにいくことはできないんだ」

「え？」

誠は衝撃を受けた。

雫が助からない？ なぜ？ 雫は助かるはずだ。虐待を受けているんだ。ならそれを止めるために動くはずではないのか。

「ど、どうしてですか？ 早く助けないと雫はもっと傷ついてしまう。それでもほっとけというんですか？」

誠は椅子から立ち上がり、声を荒げて室内に響くくらいの怒声を上げた。

「ちよ、ちよっと、誠くん。落ち着いて。たしかに君の言うとおりだ。ほっとくなんてことはできない。でもね、君の力だけでは無理なんだ。汐風さんを助けるには、一つの重要なものが必要なんだ」

「なんですか、それは？」

守山はそつと口を開いて言った。

「汐風雫、彼女自身の意思だ」

「意思……？」

「そう。彼女の意味。つまり、虐待を受けている。親が暴力を振るう。助けて欲しい。そう言った彼女自身の助かりたいという意思がないと、こちらは動くことも協力することもできないんだ」

「そ、そんな……」

誠は力尽きたかのように椅子に座った。

「雫の助け……」

誠はうずくまると頭を抱えた。

無理だ。雫がそんなことというはずない。

今の雫は、自分が虐待を受けていると他人に言うことは絶対にありえない。どんなに説得しても、首を縦に振ることはない。

それほど雫の決意と耐えるという意志は固い。

なにより、家族を大切に思っている雫が自分から父親を警察に渡すようなことはしない。

誠は目の奥から熱がこもるがわかった。目から涙が溢れ、ぽたぽたと下に落ちていく。

誠は悔しくて歯を噛み締めた。自分の力では、何もできないのだろうか。

こんなに想っても、人一人を救うことは、できないのだろうか。

「だ、大丈夫かい？ 誠くん」

守山は立ち上がると誠を慰めようとした。誠は涙を拭くと顔を上げた。

「す、すみません。ちょっと……」

「何があつたんだい？　しょうじきに話してごらん」

誠は顔をうつむきながらもしょうじきに話した。

雫の決心は固いことを。絶対に自分が虐待を受けていることを認めないことを。

それを聞いた守山は悲しい顔になった。

「そうか……。そうだったのか。だから誠くんが、わざわざここに来たのか……」

誠は小さくうなずいた。それを見て守山は優しそうな笑みを浮かべた。

「誠くん。君の気持ちはよくわかる。その助けたいという気持ちは痛いほどね。だけど、諦めないで欲しい。なんとかして、汐風さんを説得してほしい。僕は君を見てどうしても助けたいと思った。我々は全力で助けるだろう。何も怖がることはない。法律でそうなっているんだ。頑張ってくれ、誠くん」

誠はそつとうつむきながらうなずいた。守山の言葉が温かく、力を与えてくれる。

今雫を助けることができるのは自分しかない。何とかして、助けなければ。

誠は涙を袖で乱暴に拭うとすつと立ち上がった。

「俺、絶対に雫を助けます。だから、そのときはご協力お願いします！」

誠は丁寧な頭を下げた。守山はしかと、その熱意を受け止めうなずいた。

誠は警察署を後にすると、街中をぶらぶらと歩いていた。

これからどうするか対策を練っているのだ。

雫が認めないなら、警察も動くことはできない。今の雫に何を言っても無駄だろうし、自分を見ればすぐに追い出そうとして話にならないだろう。

ならば、自然と対象が変わるだろう。

誠はぐっと手に力を入れた。

やはりこれしかない。頼むならあの人だ。雫のお父さんに。

誠はそっと空を見上げた。今にも雨が降り出しそうな曇り空だった。

誠は家に帰らず、そのまま神社へと向かっていた。

やると決めたなら早いほうがいい。一刻も早く雫をあいつから離し

てあげたい。

果たして上手くいくだろうか。いや、確率は限りなく低いだろう。

しかし、それでも微かに望むがあるなら賭けたい。ダメならまたその後考える。

誠は少し早足で歩いていった。

とうとう神社へと続く階段の下へと着いた。これを登れば雫のお父さんがいるはず。

誠は意を決し、登ろうと足を上げたときだった。

上から人影が見えた。誠は咄嗟に方向を変え、周りの木の陰に隠れた。そこからそっと覗いた。

降りてきたのは雫だった。前と変わらず元気のない瞳とやつれたような表情をしている。傷は顔にまでできていた。

それを見て誠は怒りを覚えた。そして心から誓った。絶対に助けてやると。

雫は誠に気づくことなく先を進んでしまった。

誠はそっと出てきてその後ろ姿を見送った。温かく優しい目でじっと見る。

そしてきびすを返して階段をゆっくりと登って行った。

誠は母屋の前に立った。そして目つきを鋭く変える。

玄關の扉を激しく開け、中に土足で上がりこむと居間に向かった。

やはり雫のお父さんは居間にいた。寝転がってお酒を飲みながらテレビに映る競馬を見ている。

誠の存在に気づいた雫のお父さんは睨みつけると怒声を上げた。

「ああ、誰だ、お前は！ どこから入ってきた！」

迫力のある声で怖気づきそうになる。

それでも誠の目は雫のお父さんの目を捉え、外すことなくじつと見ていた。

「ちょっと話があるんです。表に出てくれませんか？」

「はあ？ お前なんか知るか。さっさと出てけ！」

今にも襲い掛かろうとする。それでも誠は立ち向かった。

負けるわけにはいかに。逃げるわけにはいかない。じつと耐えるんだ。

「大事な話があるんです！ お願いします！」

誠も負けられないような大声を出して対抗する。少し動揺した雫のお父さんはうなずいた。

「ちっ！　少しだけだぞ」

そういつてタバコを掴むと一本取り出し火を点けた。

「ありがとうございます」

誠と雫のお父さんは外に出た。

これから、誠の真剣勝負が始まる。

第四章 part 10：守護

誠と雫のお父さんは外に出た。そして神社の前で向かい会う。

あのときの、雫のときと同じように。

空は今にも雨が降りそうだ。霧のような滴が頬に当たるのを感じる。

「おい、話つてのは何だ！ さつさと言え！」

雫のお父さんがタバコの煙を吐きながら怒声を上げる。

それに怯むことなく、誠は立ち向かっている。

「僕は雫の友達の誠と言います。今回は、あるお願いがあり参りました」

「お願い？ なんだ、そのお願いってのは」

すると、誠は軽く息を吐いて意を決すと前に進み出た。

そして、雫のお父さんに近づいていく。その距離が数十センチになると、誠は地面に膝を着いた。

「ああ？」

雫のお父さんは誠の行動が理解できず見下していた。

誠は膝の次は手を着き、最後に頭を下げた。

誠は土下座をしたのだ。

「お願いします。この家から出て行ってください。雫とは、もう会わないでください。それが、お願いします」

「はあ？」

雫のお父さんは怒り狂った声を上げた。

「何勝手なこと言ってるんじゃないボケ！ 関係ないだろうが！」

「関係なくても、お願いします！ どうか、雫から離れてください」

「そんなことできるか！ あれは俺の家だ！ 身内と一緒に住むのは当たり前だろ！」

たしかにその通りだ。それでも、誠は立ち向かう。

「お父さんは雫に暴力を振るってますよね。虐待をしている。それがわかれば、雫とは一緒に住めないんだ！」

そこで雫のお父さんの眉がぴくつと動いた。

「お前、なんでそのこと知ってやがる。まさか、あいつが教えたのか？」

そこで誠は間違いを犯したことに気づいた。このままでは、雫が危なくなる。

「ち、違います。自分で知ったんです。この前、こっそり部屋に入
って、それで……」

「ちっ！」

雫のお父さんはタバコの吸い殻を落とすと靴で踏みつけた。

「知ってるなら、痛い目にあわせないと」

すると、雫のお父さんは足を上げて、誠の頭の上に力強く落と
した。

「うぐっ！」

誠の顔が地面に埋まる。硬く目を瞑ってこみ上げてくる痛み能耐
えた。

鼻が痛く、穴の中で液体が通るのを感じる。おそらく鼻血が出たの
だろう。

「くそ……」

誠は顔を横に動かし、足から逃れた。そのとき、目の前に足が出
てきておもしろい顔で顔を蹴飛ばされた。

「うわっ！」

誠は転げ回るとぐったりと横たわった。

「おい、まだ終わりじゃねーぞ。起きろよ」

そういつて雫のお父さんは軽く笑みを浮かべ近づいてくる。誠はよろよると立ち上がると血が溢れ出てくる鼻を抑え、じっと雫のお父さんを見た。

「……お、お願いします。俺は何されてもかまいません。……だから、どうか雫の家から……」

「うるせえんだよ！」

雫のお父さんは誠の腹をおもいつきり殴った。

「ぐふっ」

誠は腹を抑えるとその場にうずくまった。

「まったく。ガキが大人に楯突くんじゃね！ 今のままでいいんだよ。あいつが俺に食い物と酒、お金を持つてくる。これがうちのルールだ！ 女は男の言うこと聞けばいいんだよ！ あんなバカな女、それしか使い道ねーからな」

そこで誠は怒りを覚えた。

それがうちのルール？ 女は男のことを聞く？ バカな女？ 雫がバカ？

この言葉が頭の中で繰り返され、どうしようもない怒りが込み上げてくる。

歯を食いしばり、拳を硬く握る。そしてうずくまったまま、顔を上

げて雫のお父さんを睨みつけた。

「それでも……、それでも、あんたは雫の親なのかよ。それでも、あいつの父親かよ！ あいつは、あいつは一度だってあんたのことをそんな風に言わなかった。バカにせず、言うことを聞いてきた！ あいつは今でもあんたのことを家族と思って接しているんだ！ あんたを父親だと思っているんだ！ なのに、なのに……、あんたは自分の娘を傷つける気かよ！」

誠は迫力のある大声で訴えた。それを聞いて雫のお父さんは鼻でふんと笑った。

「知るかよ。あいつが親の言うこと聞かないから悪いんだ。あの母親みたいにな、こき使ってやるよ」

そこで誠は鋭い目つきで睨みつけると、勢い欲襲いかかった。拳を握りおもしろいきり顔面めがけて振るう。

それを雫のお父さんは苦もなく手で掴むと膝で誠の腹を蹴った。

「うっ」

誠はその場に崩れ落ちた。

「くそ……。こんなやつ、雫のそばにはおけない……。こんなやつが雫の父親なんて認めない……」

誠はゆっくりと足に力を入れて立ち上がる。

「うるせー。死ね！」

雫のお父さんは拳を握ると誠の顔を殴ろうとした。

そのときだった。

「やめて！」

雫のお父さんは手を止めて声のした方向を見た。そこには買い物袋を提げた雫が立っていた。

「し、雫……」

誠はうつすらと見える雫を捉える。そして力が抜けて仰向けになつてその場に倒れた。

それを見て雫が駆け寄る。

「誠くん。大丈夫？　しっかりして！」

雫は誠の体を揺すつて声をかけた。

誠は力を入れて体を起こすと、中腰になつて雫の肩に手を置いた。

「ま、待つてろよ。今、……お前を助けてやるから」

「誠くん……」

そのとき雨が降り出した。大粒の冷たい雫がその場にいる3人に襲い掛かる。ゴロゴロと雷鳴も聞こえてきた。

誠はふらふらと立ち上がると雫のお父さんに声を上げながら立ち向かった。

しかし、簡単にやられ、その場に倒れる。それでも、誠は何度も立ち上がり襲いかかる。

殴られようと、痛かろうと、ボロボロになろうと、誠は何度も立ち上がった。

「止めてよ……」

雫がうつむきながら小さな声で呟いた。目には涙を浮かべ、ふるふると震えていた。

そして顔を上げると大きな声で言った。

「もう止めてよ！ 誠くん！」

そのとき、誠は力強く吹っ飛ばされ、雫の前に倒れた。

「ま、誠くん！」

雫は誠に駆け寄ると、誠の顔を上げて自分の太ももの上に置いた。

誠はボロボロだった。制服は泥だらけで、顔や体は腫れている。ところどころ怪我もしていた。

「誠くん、もう止めて。もう……」

雫が涙を落としながら訴える。

すると、誠は手の平で自分の顔を抑えた。

雫はその隙間から滴が落ちるのに気づいた。

誠は小さく口を動かした。

「ごめん……」

「え？」

雫はそつと誠を見た。

誠は悔しそうに涙を流し、片手はぎゅっと拳を握りしめ、体は震えていた。

「……雫、ごめん。俺、勝てなかった。俺、……雫を助けられなかった。……助けることができなかった。……俺、俺、もう一度、お前の笑った顔が見たかった。幸せそうな顔、見たかった。……でも、俺、弱いから。……何も、できないから」

誠は両手で顔を覆った。そして悔しそうに歯を食いしばり、大粒の涙を流した。

「誠くん……」

「ごめん。……ごめん。……俺、絶対、助けるから……。お前を安心させて、……元どおりにするから」

「誠くん、もういいよ……」

雫は誠の体を起こすときゅっと抱きしめた。

「もう、いいよ。十分だよ。その気持ちだけで、私は嬉しいよ。……それよりも、誠くんが傷つくほうが見たくないよ。……私は、今のままで幸せだよ」

雫も目から涙を流し、頬を伝わせながら力いっぱい誠を抱きしめた。

誠は、さっきの言葉が脳裏に焼きついた。

幸せという言葉が。

「雫……。お前の幸せって、何だ？」

「え？」

誠と雫はそつと離れると、誠は雫の肩を掴みながら問い掛けた。

「お前にとって、幸せって何だ？　いつも人の幸せを考えているけど、お前の幸せはどこにあるんだ？」

「え……？」

「雫、正直に言ってくれ。お前は今幸せか？　今、お前は幸せなのか？　人のことは考えず、自分の幸せを考えるんだ！」

「私の幸せ……」

雫は考えた。自分の幸せは何だろうか。今の生活で幸せだろうか。虐待を受け、暴力に耐える毎日。学校にも行けず、友達にも会えない生活。

言うまでもない。そんなの、幸せではない。

私にとっての、幸せは……。

雫は誠の顔を見つめるとはっきり言った。

「私は、今の自分は、……幸せじゃない!」

雫が言った瞬間、誠はそつと雫を優しく抱いた。

「よく言った。雫……」

誠はそつと自分の胸に手を添えた。

「雫、お前がくれたスカイ、今使うよ。最初から、これで助けようと思った。でも、気づいたんだ。簡単に使って解決していいのかなって。やっぱり、スカイに頼らず、自分の力で解決しないといけないんだ。雫もそう思うだろ?」

雫はそつとうなずいた。

「だから、これは雫が意思を見せたとき、使おうと思ったんだ」

誠は目を閉じると願いごとを言った。

「雫が、誰からも傷つきませんように」

その瞬間、青白い光が生まれ、雫の体を包んだ。そしてゆっくりと収まる。

それを見届けた誠は笑みを浮かべると携帯を取り出した。そしてある人物にかけた。

「あ、守山さん。今すぐ来てください。雫は、……意思を見せましたよ」

「誠くん……」

誠は雫の頭に手を置いた。

「……これで、助かるから」

「おい！」

後ろで雫のお父さんが声を上げた。

「お前、今何した？ 誰を呼んだ！」

誠は立ち上がると雫をかばうようにして手を広げた。

「これで終わりだ。お前は、時期捕まる」

「何？」

すると、遠くのほうから音が聞こえた。パトカーの警報の音だ。

「警察？ お前！」

「さようなら」

誠は笑みを浮かべながら手を振った。

「くそ！」

雫のお父さんは慌てるようにその場から逃げようとした。だが、すぐに警察たちがきて、雫のお父さんは捕まった。

それを見た誠は安心したのか、その場に倒れてしまった。

「ま、誠くん！」

雫は慌てて誠に駆け寄った。誠は仰向けになりながら、大の字になつて空を見上げた。

いつのまにか、空は黒い雲が掻き消え、青い空が広がっていた。

誠は安堵の息を吐くと呟いた。

「雫、生徒会の仕事、ちょっと休むわ」

雫はそれが可笑しく、くすくすと笑みを浮かべてうなずいた。

「うん」

そこで誠は目を閉じた。

すると、目から一筋の涙が流れた。

やっと、笑顔が見れた……。

第四章 part 11：運勢

雫の事件は無事解決し、今では前のように学校に来て楽しく過ごしている。

雫のお父さんは守山さんたちによって捕まった。雫は最後まで心配そうな目を向けていた。

久しぶりに学校に来た雫は、いろんな生徒に歓迎の言葉をもらい、嬉しそうに笑みを浮かべて接していた。

霞が一番心配していたらしく、会った瞬間涙を流しながら抱きついた。意外な一面を見た気がした。

生徒会長としての仕事も復帰し、また放課後は忙しくなった。

「あゝ、だるい。もう帰らない？」

誠は机に屈服しながら言った。

「まだ仕事あるよ。早く終わらせないと、次の仕事ができなくなるよ」

雫は今までしていなかった分の仕事を必死にこなしていく。けっこう溜まっていたようだ。

少しは霞さんがしていたが、難しくあまりできなかったようだ。

「ねえ、雫。何でけっこう休んだの？ 連絡もつかないし」

霞はパソコンで資料の整理をしながら言った。

「う、うん。ごめんね。ちょっと親戚のおじいちゃんが倒れて……」

雫は苦笑いを浮かべてごまかした。あのことは、誠と雫だけの秘密にすることにしたのだ。

「そっか。まあ、これからはずっと一緒だもんね」

そこで雫はうつむいてしまった。

「う、うん……」

なぜか雫は悲しみの表情をしている。それを誠は見逃さなかった。

放課後。一緒に帰っているとき、雫が口を開いた。

「ねえ、ちょっと寄り道していかない？」

「ん？　なんだよ、生徒会長がそんなことしていいのか？」

雫は可愛らしい笑みを浮かべて言った。

「いいの。学校から出ればただの人間だもん」

それを聞いて誠も笑う。

「じゃ、遊んでくるか」

「うん」

雫は嬉しそうにうなずき、元気よく走り出した。

2人は商店街に来た。そこで買い物や、ゲームセンターなどに行き、楽しく過ごした。

時間が過ぎるのを忘れ、ずっとこのまま続けばいいと思うくらいに。

「ねえ、誠くん。あれ、取って」

雫が指したのはユーフォーキャッチャーの中にあるぬいぐるみだった。なんのキャラクターなのか、へびのような、かえるのようなぬいぐるみだ。

「おいおい、あんなのどこがいいんだ？」

「何言ってるの、かわいいよ」

「それはお前だけだ」

誠は財布からお金を取り出すとゲームを始めた。

「頑張れ、誠くん」

誠は集中して進める。そして上手くお目当ての商品を手に入れることができた。

「やった！　すごいね、誠くん」

「ま、あれくらい簡単だぜ」

誠は自慢げに言った。そして雫は嬉しそうにぬいぐるみを抱きしめた。

「やっぱりかわいい。この目なんて誠くんそっくり」

「なんだよそれ、バカにしてんの？」

「ふふ、誠くんもかわいってことだよ」

そこで誠の顔が赤くなった。

「あれ？　誠くん照れてるの？」

「うっ、うるさい。ほら、次行こつぜ」

誠は先にずかずかと外に出る。雫は可笑しそうに笑うと後ろを追いかけた。

2人は雫の家の神社に着いた。階段を登り、目の前にお寺が見える。

誠は立ち止まるとその光景を改めて見た。

ここで自分は雫を助けた。あの地獄から救うことができた。そう思うだけで心底安心してしまう。

もう、誰も雫を痛めつける者はいない。

誠の瞳はうつすらと潤っていた。

「誠くん、どうしたの？」

雫が誠の顔を覗き込む。誠は袖で乱暴に拭くと笑みを浮かべた。

「いや、何でもない。そうだ。おみくじ引いてみようぜ。ここのおみくじ、引いたことないんだ」

「うん。いいよ」

雫はおみくじの箱を持ってきた。

「はい。この中から引いて。言っとくけど、ここのおみくじ、けっこう当たるって評判なんだよ」

「へえ、そりゃすごいな。よし、だったら俺を幸せにしてくれ」

誠は箱の中に手をつ込むと一枚引いた。

「じゃ、私も」

雫も同じように引く。

「一緒に開くぞ。せーの！」

2人は同時に紙を開いた。なんと、2人とも大凶だった。

「え？……うそ」

誠は呆然とした表情でその紙を見ていた。

「ははは、2人とも大凶なんてすごい偶然だね。ある意味大当たり」

雫は誠と違って余裕の表情で笑っていた。

「で、でも、大凶はないだろ。俺、どうなっちゃうの？」

「大丈夫だよ。ちゃんとお払いしてあげるから」

誠はため息を吐くとあらためて大凶を見た。

そこで気づいた。誠の運勢は、近々そばにあるものが無くなると書いてあった。

「何がなくなるんだ？」

誠は気にせず、近くにあった樹木の枝に結びつけた。

「おーい、誠くん。ご飯作ってあげるから中においで」

雫は母屋のほうに歩きながら手招きしていた。

「おっ」

誠は笑みを浮かべてかけていった。

雫の手料理を食べ終えると、誠は寝転がった。

「あゝ、けっこううまかったな。雫は料理うまいな」

「まあね。これでも一人暮らししてるし」

誠は時間を確認した。今の時刻は夜八時。そろそろ帰らなければ。

「雫。俺、そろそろ帰るわ。湊が心配するし」

誠が帰ろうと立ち上がったときだった。

「待って！」

雫が誠の手を取って止めた。

「雫？」

「え、えと、もう遅いし、今日は泊まっていきなよ」

「え？ でも、悪いだろ」

「い、いいの。だって、私一人だと寂しいし」

「でも……」

「ね、お願い」

雫は誠の目をじっと見つめ訴えてくる。誠は困った表情になり、

最後はしぶしぶ了解した。

「わかったよ。今日は泊まらせてもらっわ」

雫は嬉しそうに笑みを浮かべてうなずいた。

「うん。ありがとう」

2人は雫の部屋で寝ることになった。

誠は別々の部屋にしろと言ったが雫がそうさせなかった。

雫は自分のベッドで、誠は床に布団を敷きそこで寝る。

電気を消し、暗くした。窓から注がれるつきの光が部屋を照らす。

「ねえ、誠くん。なんで、私を助けてくれたの？」

「うん？ そりゃ、あんなことになってるなんて知ったら、誰だつて助けようと思うだろ」

「そう……」

雫は笑みを浮かべると誠のほうを向いた。

「ね、一緒に寝る？」

「ば、バカか！ 俺はもう寝る！」

誠は顔を真っ赤にして雫に背を向けた。

雫は可笑しそうに笑みを浮かべ、今日引いたおみくじを見た。

「誠くん、……ごめんね。私、幸せにはなれないかも」

雫は目を擦ると眠りについた。雫のおみくじにはこう書かれてあった。

大切な人との別れの日が来るでしょう、と。

第四章 part 12：幸福

今日も誠は生徒会室にいた。副会長として、雫に与えられた仕事をしている。簡単な書類記入だ。

今霞さんはいない。用事があるらしい。

雫は一度生徒会室に訪れ、先生に用があると言って出て行った。

誠は少し嫌な予感がしていた。書類に記入しながら悪いことを考えてしまう。

すると、雫が戻ってきた。

「誠くん、そろそろ帰ろうか」

元気よく笑顔で言う。誠はうなずいた。

「あ、ああ……」

誠は書類を引き出しに入れると立ち上がった。

そのとき、誠は気づいた。

雫が泣いていたことを。目が赤く、涙が頬を伝ったあとがあった。

「雫……」

「ん、なに？」

雫は笑みをうかべて誠を見る。誠は首を振った。

「いや、なんでもない……」

「そう」

雫は前を向くと先を歩いていった。

2人は公園に着いた。

陽が傾き始め、周りの景色の色を変えていく。茜色の光を注ぎ、誠たちを照らしていた。

2人は背もたれのない木造ベンチに座った。

「ねえ、誠くん。……今日はね、大事な話があるの」

誠の心臓はさっきから激しく動揺していた。嫌な汗をかき、悪い予感が緊張させる。

「そ、その、私ね、……行くことになったの。……おばあちゃんの家」

誠は生唾を飲み込んで黙って聞いていた。さっきの言葉が重くのしかかる。

もう分かっていたかもしれない。自分の周りは、こうやっていなく

なるんだということを。

だから、ずっと嫌な予感がしていた。自然と、それが敏感になって
いた。

「そ、それでね、さっき先生に言ってきたの。転校しますって。だ
から、誠くんとうして会うのも、……今日が最後」

誠は震える唇をそつと開いた。

「生徒会の仕事は、……会長はどうするんだよ」

「……辞める」

「神社は、……あの神社はどうなるんだよ」

「……あのまま。誰もいなくなる」

「霞さんとか、他のみんなはどうするんだよ」

「……ごめん」

誠は歯を食いしばり、拳をぎゅっと握った。

また、俺は一人になるのか。またあんな寂しい想いをするのか。

「雫、……それで、いいのか？」

雫はそつとうなずいた。

「うん。仕方ないよ。あんなことがあって、おばあちゃん心配してるみたい。大丈夫だよ。おばあちゃん、お父さんと違ってすごく優しいから。お母さんも、つらいときはおばあちゃんの家に行ってたって」

「そっか……」

誠は額に手を着いた。そのとき、誠の背中が何かに触れた。

後ろには雫がおり、背中をつけてもたれていた。お互い背中をつけた状態になった。

「雫？」

「誠くんにだけ教えてあげるね。……みんなの幸せの願い」

「え？」

雫はそつと空を見上げて話し始めた。

「私がああ音楽室でみんなの願いを叶えているとき、いろんな願いを知った。テストで百点取りたい。大会で優勝したい。お金持ちになりたい。中には背が高くなりたいていうのもあった。ふふ、私我慢できず笑いそうになったもん」

雫は可笑しそうに笑う。誠も小さく笑った。

「私ね、できることは叶えた。簡単な願いだけ。でもね、一番多い願いだったのに、叶えることができなかったことがあったの」

「つまり、一番多かった願いなのに、叶えなかったってこと？」

「うん……。その願いはね、……好きな人と結ばれますようにって」

誠はそつとうつむいていた顔を上げた。雫は話を続ける。

「だんとつで多かったよ。週に4回は聞いたかな。みんな好きな人の名前言って、付き合えますようにって。私困っちゃったよ。どうしたらいいのかわかって。でもね、やっぱりできなかった。人の心を勝手に操っちゃだめだし、それに……」

雫はその言葉をはつきり言った。

「人は、努力しないといけないから」

「努力？」

「誠くん、あのとき言ったよね。スカイに頼らず、自分の力で解決しないとイケないんだって。私もそう思った。だから、応援だけしてた。頑張れって」

雫は大きく背伸びした。

「誠くん」

「ん？」

「私、今幸せだよ。願い、叶ってるもん」

「え？」

誠はそつと振り向いた。

そのとき、雫が唇を重ねてきた。柔らかい感触を感じる。

誠はあまりに突然で驚きの表情をしている。雫は頬を赤くしながらそつと離れた。

「誠くん……」

そのとき、雫の目から涙が零れた。一滴の滴が頬を伝い地面に落ちた。

「雫……」

雫は満面の笑みを浮かべた。

「さようなら」

そついつて雫は走って公園から出て行った。

「雫……」

誠は手を伸ばした。だが、雫を捕まえることはできなかった。そこで重いため息を吐く。

「あいつ、本当に幸せなのかよ……」

次の日、誠は部屋で寝ていた。

仰向けになり、呆然とした表情で天井を見つめる。

「雫……」

そのとき、携帯の着信が鳴った。

相手は雫からだ。

誠は起き上がると慌てて出た。

「も、もしもし」

「あ、誠くん？ ……わ、私だけど」

「あ、ああ、なんだよ」

「あのね、今から電車に乗るの。それで、最後に話したくて」

「ああ……」

2人は黙った。通話時間だけが流れ、人の話し声が聞こえる。

沈黙を破ったのは雫だった。

「あ、あのね、誠くん」

「ああ」

「私、……好きだよ」

「え？」

「私、誠くんのこと好きだよ。本当に、好きだよ。それだけ、……
伝えたかったから」

「し、雫……」

そのとき、電話の向こうで泣き声が聞こえた。嗚咽の音。雫は泣いていた。

「本当はね、会って言いたかった。でも、……そんなことしたら別
れが惜しむと思うから。私、……また会いにくるから」

誠は壁にもたれると手で目を抑えた。目じりが熱く、涙が溢れる。

いつもそうだ。こうやって別れてしまう。神様は、俺から全て奪お
うとしている。

大切な人を奪い、孤独を味合わせようと。

誠は涙を流しながら問い掛けた。

「雫、お前、……それで幸せかよ」

「え？」

「俺、お前に幸せになってほしい。だからスカイを使ったんだ。苦
しい想いをしてきたから、今度は幸せになってほしいんだ。お前は、

幸せか？ 俺、お前を傷つけていないか？」

雫は涙を拭いてはつきり言った。

「大丈夫だよ。だって、また会えるもん。……きっと、会えるよね」

「ああ、きっとまた会えるよ。いや、絶対会いに行く」

「うん。ありがとう」

そのとき、電車が来る音が聞こえた。

「またね。……ありがとう」

そして電話が切れた。

誠はふつと息を吐き、立ち上がると外に出かけた。

誠は神社に来た。雫との思い出の場所。

誠はそこにあるおみくじの箱を見つけた。そして一枚のおみくじを引いた。

それを見て誠は笑みを浮かべた。

「雫、幸せにな」

誠はおみくじを木に結びつけた。

その紙には、大吉で運命の再会が来ると書いてあった。

第五章 part 1：家族

季節は秋から冬に変わり、12月中旬へと入った。

寒い風が常に吹くようになり、朝は顔が痛いほどになった。

制服も最初の紺のブレザーに戻り、皆体を丸めて登校している。

誠は寒いのは苦手なので、朝はなかなか起きられなかった。

「兄さん。起きて、朝だよ。学校遅刻しちゃうよ」

湊が掛け布団を掴んで剥がそうとする。誠は取られないようにガツチリと掴んでいた。

「さ、寒い。もうちょっと寝かせてくれ」

「冬なんだから寒いのは当たり前だよ。ほら、早く朝ごはん食べよ」

今日も結局湊に叩き起こされ、寒い空気に身を震わせながら、しぶしぶ起き上がった。

「おはよう、湊。お兄さんは今日も寝ぼけた顔してますね」

寒い中、瞳は暖かそうなマフラーを巻いて玄関に立ち、二人が来るのを待っていた。

「おはよう、瞳。冬はいつもこうだから困るんだよね」

湊はあきれながら小さく笑った。

「……うるさいな。それにしても寒いな。こんな日は学校なんて行きたくないな」

誠は息をはぁと吐き、白い空気が流れるのを見ていた。

「何言ってるの。もうすぐテストなんだから、勉強しないと冬休みなくなっちゃうよ」

「いつもぎりぎりですもんね」

二人の言葉に、誠はふんと鼻を鳴らして無視した。

休み時間。瞳は湊の机の前まで行くと話し掛けた。

「ねえ、湊。今年のクリスマスはどう過ごすの？」

テストが終われば冬休みが始まると同時にクリスマスが訪れる。皆テストよりこっちのほうが気になるのだ。

「うん。今年も去年と同じかな。兄さんと一緒に過ごすと思う」

湊は少し照れ笑いを浮かべながら答えた。

「あんたも暇ね。あのバカ兄のどこがいいの？」

「そんなバカ兄って。……兄さんは優しいもん。いつも私のこと気づかって……」

「でもね、今どきこんな兄想いの妹はいないよ。湊は彼氏とか作らないの？」

それを聞いた湊は一瞬で顔が真っ赤になった。

「か、彼氏なんて、私作れないよ。それにそんなにモテないし……」

「あれ？ あんた知らないの？ 湊はけっこう人気あるんだよ」

それを聞いた湊は少しキョトンとした表情になった。

「そつなの？……知らなかった」

「まあ、でも湊らしいかな。それで、あのバカにプレゼントは渡すの？」

「うん。それなんだけど、何をあげたらいいのかわからなくて。いつも困るんだよね。兄さんの趣味って寝ることだし」

瞳はなるほどとわずくと、一つアドバイスした。

「今は手作りが流行っているみたいよ」

「手作り？ マフラーとか手袋とか？」

「うん。やっぱりお金で買ったものよりも、愛情込めて作ったもの」

は喜ぶんだって」

湊は少し考え込んだ。

「手作りか……」

「それより、あんたにはもう一つ大事なことがあるでしょ」

瞳は笑みを浮かべて言った。湊は頬を染め小さく照れ笑いを浮かべる。

「何が欲しい？ なんでもあげるよ」

瞳は何でも来いという感じに胸を張った。

「え？ い、いや、いいよ。そんな、悪いし」

湊は遠慮したように手を両手の前で振った。

「そう？ そこまで遠慮しなくてもいいのに。さて、私は一人寂しくどう過ごすか考えるかな」

そう言っで瞳は席に戻っていった。そのとき湊は決心した。

「プレゼントはこれにしよう」

放課後。

誠は体を丸めながら一人寂しく帰っていた。

そのときの帰り道、湊の姿を見かけた。

「あ。おい、湊。一緒に帰らないか？」

「あつ、兄さん。ごめん、ちょっと寄るところがあるんだ。先に帰ってて」

そう言つて湊は先に行つてしまった。

「どこにいくんだ、あいつ？」

誠はしぶしぶ一人で寂しく家に帰つていった。

「ごちそうさま」

湊は夕食を早く食べ終わるとさっさと食器を片付け、そそくさと居間を後にした。

「早いな。何かあるのか？」

誠は深くは気にせず一人夕食を食べていった。

湊は自分の部屋に戻ると、ベッドの下に隠していた袋を取り出した。

中には青色の毛糸が三個と編み物の本が入つてあつた。

「クリスマスまであと三週間もないもんね。急がなくちゃ」

湊は本を見ながら、せっせと取り掛かった。

それから、湊は時間があれば編み物に費やしていった。もちろん誠はこのことを知らない。

湊は毎晩のように睡眠時間を削って進めていった。刻一刻とクリスマスは近づいてくる。

しかし、それはテストも近づくということでもある。勉強と両方をするのはきつかった。

「湊はよくやるね」

湊は授業の合間の休み時間まで使っていた。少しずつ形になってきている。

「うん。時間ないしね。やってみたらけっこうおもしろいよ。瞳もやってみれば？」

「作ってもあげる人がいないからね。私も誰か好きな人がいたらな」

「瞳はかわいいからすぐに彼氏作れるよ」

「ありがとう。湊も頑張ってね」

「うん」

そしてとうとうテストも明日に迫っていた。

誠は夏と同じように徹夜で勉強していった。ごちゃごちゃした机にむかって頭に詰め込んでいく。

「うゝ、眠い……。つかテスト範囲多すぎるんだよ。ああゝ、意味わかんねゝ」

誠は時計に目をやった。時刻は午前二時を過ぎている。

「二時過ぎてるよゝ。いつもならゲームしてるかもう寝てるぜ」

誠は椅子から立ち上がると部屋から出て居間に足を進めた。

その途中、湊の部屋から光が漏れていることに気づいた。

「あれ？ 湊も徹夜で勉強か？」

誠は湊の部屋をノックした。

「おい、湊。起きてんのか？」

「に、兄さん？ もう寝たんじゃ」

湊は急いで編み物をベッドの下に隠した。

「入るぞ。……なんだ、お前も勉強してんのか？」

湊は机に向かって座っていた。

「うん。明日からテストだからね。兄さんも?」

「ああ、まったく勉強してなかったからな。湊も無理すんなよ」

「うん。ありがとう。……ね、ねえ、兄さん。クリスマスなんだけど、兄さんは何か予定とかあるの?」

「クリスマス? いや、別にないな。……湊忘れてないだろ? クリスマスは——」

「うん、覚えてるよ。私はそのあつのことを聞いたんだよ。じゃあ、今年も一緒に過ごそうね」

「ああ、もちろん。クリスマスも大事だけど、湊にとっては一番大切な日だろ」

湊は少し頬を染めながらうなずいた。

「う、うん……」

「じゃあ、おやすみ」

「うん。おやすみなさい」

誠は軽く手を上げて部屋を後にした。

湊はしゃがみ込むと再び編み物を取り出した。

「頑張らないとね。兄さんのために……」

湊は気合を入れなおすと、再び取り掛かった。

「終わった」

誠は大きく背伸びをした。

三日間続いたテストは無事に終わった。思い返すが赤点を取りそうな教科は見当たらない。今回も逃れた。

これで冬休みを楽しく過ごせる。みんなテストが終わればそのことばかり話している。

しかし、誠はクリスマスよりも大事なことがあった。

クリスマスが近づくことはあれも近づくことになる。誠にとってそちのほうが必要なのだ。

毎年緊張してしまう。それは隠しことがあるからだ。

いつばれるか怖い。ばれたときどうしたらいいのかもわからない。

今回も何事もなく過ぎるのを願うばかりだ。

一週間のうちにテストが全て帰ってきた。

誠は全て赤点ぎりぎりで免れた。毎度冷や冷やさせられる。

しかし、明日から冬休みに入る。とうとう明日に迫ると思うと恐怖心を隠せなかった。

どうか、今年も無事に終わってくれ……。

誠たちは久しぶりに三人で帰った。

湊は今回いつもより点数は下がっていたが余裕で赤点は免れていた。瞳も取っていない。

「湊、明日クリスマスだけど、あれは完成したの？」

瞳は誠に聞こえないように小声で囁きかけた。

「大丈夫。あと少しだから今日で完成する」

「やったじゃん。頑張ったね」

「うん。ありがとう」

「二人とも何話してんだ？」

「バカ兄には内緒よ。それより、お兄さんは何かプレゼントは用意したんですか？」

「プレゼント？ あっ、まだ買ってない……」

「わあ、最低な兄ね。お兄さんのために湊は毎日――」

「ちょ、ちょっと瞳。それ以上言っちゃだめ！」

湊は慌てて瞳の口を抑えてそれ以上言わないようにした。

「毎日……なんだ？」

「い、いや、なんでもない。なんでも」

湊は苦笑いを浮かべてごまかした。瞳は湊の手から逃れると口を開いた。

「それより、お兄さんはさっさと湊のプレゼント買いに行きなさい」

瞳は真剣な眼差しで言った。その威圧感に負け、誠はうなずいた。

「わ、わかったよ。じゃあ、今から買いに行くか。湊は何が欲しいんだ？」

「え、い、いや、いいよ。プレゼントなんて。一緒にクリスマス過ごすだけで十分だし」

「そうもいかねーだろ。ほら、行こうぜ」

誠は二人を連れて商店街にむかった。クリスマス間近なので、この店も活気づいていた。

「それで、何が欲しいんだ？ 何でも言ってみろ」

「いいの？ 無理しなくていいんだよ」

「バカ。プレゼントの一つや二つくらい楽勝だぜ。瞳にも買ってやるよ」

「えっ？……本当？」

「ああ、湊がお世話になってるしな」

「さすが優しいお兄さん。ありがとう」

こういうときだけ調子いいやつだ。誠たちは瞳の要望でアクセサリー店に入った。

「わゝ、いろいろあるね」

瞳はいろいろなものを試着していった。

誠は瞳が試着していった物の値段を見ていった。どれも軽く五千円は超えている。

すごい出費だ。今月のお小遣いがすぐなくなりそう。

「ねえ、バカ兄」

バカでない。

「プレゼントはいくつまでいいの？」

「一つに決まっているだろ！ そんなに買えるか！」

「なんだ、残念。じゃあ、これでいいや」

瞳が選んだのは綺麗な腕輪だった。値段は千円くらい。

「なんだ、これでいいのか？ もっと高くてもいいぞ」

「そんなに高いのは求めませんよ。お金なくなってしまうですよ。それに、こっちとしては貰うだけで嬉しいですし。それと――」

瞳は誠の耳元に小声で囁いた。

「湊には良い物を買ってあげてください。楽しみにしているんですから」

そう言って瞳は腕輪をレジに持っていった。そのあとは用事があるとかで先に帰っていった。

「次は湊のだな。なにがいい？」

「え、えと、私は……」

湊はしばらく考えていた。

「え、えと、その、あの……物じゃなくても……いい？」

「物じゃない？」

「うん。その……私、兄さんの時間が欲しい」

「時間？」

「うん。一日だけでいいから、兄さんの時間を、私にちょうだい」

湊は頬を赤くしてもじもじしながら言った。

誠は別にかまわなかった。別に一日くらいいい。それに、湊が自分の要望を言うのは滅多になかった。

「いいぜ。一日くらい。じゃあ、明後日でもいいか？ クリスマスのあと」

「うん。ありがとう」

そのあとは、必要なものを買い、2人は楽しそうに家に帰った。

第五章 part 2：聖夜

とうとうクリスマスがやってきた。今日から冬休みである。

大勢の人たちは浮かれ気分で楽しみ、子供達はもらった新しいおもちゃで遊んでいるだろう。

今日の天気は今まで以上の冷え込みで夜には雪が降り積もるらしい。

誠は珍しくいつものように布団の中にうずまることなく起きていた。

「湊、準備できたか？」

「うん、できたよ」

「じゃあ、行くぞ」

二人は掃除道具やお線香、綺麗な花を持って玄関を出た。

寒い風の中、二人はある場所に向かっていった。

誠は一步步歩きたびにあのときのことを思い出していた。

おそらく、今までの人生の中で一番悲しかったときだろう。

孤独を感じ、寂しさに溺れ、自分の人生を呪った。未来が見えなかった。明日が怖かった。このまま自分もあなるのかと思った。

しかし、自分は救われた。あの一言を呟いたときから。

家族が温かく、どんなに大切にかけがえのないものか。

誠はそつと隣を歩いている湊を見た。

湊はどう思っているだろうか。少なからず気になる。

今までこのことには触れないようにしてきた。話すのも嫌だったし、なにより聞かれなくなかった。

あのときのことを……。

目的地に着くと、二人は一つの墓の前に立った。

墓石には清水家の墓と書かれてある。

枯葉が回りに落ちており、墓石も少し汚れていた。

「さつそく掃除するか」

「うん」

誠は雑巾で墓石を、湊は箒で回りの枯葉を掃除していった。

綺麗になると、お線香をあげ、綺麗な花に取り替えた。そして手を合わせるとそつと目を閉じた。

そつ、今日は誠の両親の命日なのだ。

湊は閉じていた目をそつと開けた。そして隣にいる自分の兄を一目見る。誠はまだ目を閉じていた。

湊はそつと墓石に視線を戻して考えた。

実は、前から疑問に思っていることがあるのだ。

自分には両親が死んだときの記憶がない。

誠からいろいろ聞かされてはいるが、両親の顔すら思い出せないのだ。深く考えなかったが、この墓の前に立つたびに思う。

湊はもう一度誠を見た。そこで気づいた。誠の目から一筋の涙が流れていたのだ。

「兄さん……」

誠は目を開けると呟いた。

「帰るか……」

「……う、うん」

家に戻ると誠と湊はクリスマスの準備に入った。

誠はクリスマスツリーを、湊は豪華な料理を作った。

瞳も呼んだのだが、久しぶりに家族と過ごすということで断った。

本当かはわからない。もしかしたら遠慮したかもしれない。今年も二人で過ごすことになった。

誠は準備をしながら思い出していた。

あれから9年経っている。時間が経つのは早いものだ。誠にとってクリスマスは一番忙しい日なのだ。

一つはクリスマス。二つ目に両親の墓参り。そしてもう一つある。それは、湊の誕生日だ。

「誕生日おめでとう、湊」

「ありがとう、兄さん」

二人はグラスを持ち上げると軽く音を鳴らした。テーブルには湊が作った料理が並べてあった。クリームシチューやケーキ、七面鳥まであった。

「あと、メリークリスマス。兄さん」

「ああ、メリークリスマス」

すると、湊は赤い袋を取り出し誠に渡した。

「はい、プレゼントだよ」

湊は満面の笑みを浮かべて誠の前に出す。

「え？ お、俺に？」

「うん。開けてみて」

誠は期待を胸に袋を開けた。中にはマフラーが入ってあった。青色で、下の方に大きくMと黄色で書かれてある。おそらく誠のインシャルのMだ。

「ど、どうかな？ うまくできてるかわかんないけど、一生懸命作っただよ」

誠は笑みを浮かべて嬉しそうに礼を言った。

「ありがとう、湊。大事にするよ」

「うん！」

湊も嬉しそうになずいた。すると、誠も湊に袋を渡した。

「え？ これ……」

「俺からのプレゼントだよ。受け取ってくれ」

「でも、プレゼントは時間って……」

「あれはクリスマスの分。これは誕生日の分だよ」

「兄さん……」

湊は礼を言って受け取った。中には手袋が入ってあった。赤い暖

かそんな手袋。

「兄さん、ありがとう。大切にするね」

湊は嬉しそうに笑みを浮かべると大切に手袋を抱きしめた。

「ごめんな、湊。俺は手作りじゃなくて買ったからな」

「ううん。いいよ、兄さん。貰えるだけで嬉しいよ」

湊は手袋を見ると思い出した。

そういえば、誠は誕生日やクリスマスプレゼントはいつも欠かさず渡してくれた。一日も忘れず何かを渡す。

たまに忘れても、すぐに何か買いに行く。いつも自分のことを考えてくれて。

両親がいなくても、憶えていなくても、それを補うかのように幸せな気分になさしてくれる。

だから少しも寂しくなかった。誠がいるだけで、自分は暖かい空間の中に包まれていたのだ。

「兄さん」

「ん？」

湊は聞こうと思った。なぜ自分には両親の記憶が無いのか。なぜ1つも覚えていないのか。

だが、すぐに口を閉ざした。

「ううん。やっぱりいい……」

「ん？ そうか」

誠は気にすることなく再び夕食に手を着け、2人は楽しいクリスマススを過ごした。

クリスマスパーティーは無事終わり、誠たちは明日に備えて寝ることにした。

「じゃあ、兄さん。明日の9時から24時間ね。寝坊しないでよ」

「ああ、わかってるよ。寝坊したら延長していいから」

「寝坊しないようにしてよ。じゃあ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

湊は笑顔で手を振ると自分の部屋に向かった。

誠はため息を吐くとソファに深く座った。

今回も何事もなく終わった。毎年神経を強張らせて何事もないように祈っている。

やはり怖い。ばれたくない。このことを知った湊はどんな顔をするだろうか。

誠はふっと笑みを浮かべた。

「俺のことなんて嫌いになるよな。あんなこと……」

誠はそっと目を閉じた。

湊は部屋の中で一つの写真を見ていた。

誠と二人で一緒に映っている写真。二人は家の前で笑顔になって並んでいる。

これを撮ったのは誠が小学4年生。湊が3年生のとき。湊は額に入れて大切に保管していた。

しかし、写真はこれ一枚しかない。他に見たことなかった。

一度小さいころの写真を見たいと言ったが、誠はどこにしまったか忘れたと言って見る事ができなかった。

それに、自分には小さいころの記憶がなかった。

なぜだろうか。誰でも、幼いころの楽しかったことやつらかったことなど憶えているはず。でも自分にはない。

覚えているのは3年生のときのことから。それ以前は覚えていない。忘れているのだろうか。いや、そんなはずない。ましてや、両親と

の思い出もない。

仕事が忙しく一緒に遊びに行ったことがないと言ってもなにか憶えているはずだ。でもない。

湊はため息を吐いた。

「なんで、私には記憶がないの？」

第五章 part 3：時間

湊は早く起きた。

9時から誠と一緒に出かける。それまでに家の掃除をしなければ。

湊は大きく背伸びをすると階段を降りていった。

居間に降りると誠がソファに横たわって寝てることに気づいた。

「もう。兄さん風邪引いちゃうよ」

湊は毛布を持ってくると誠にそっとかけてあげた。

「そうだ。兄さんの部屋掃除したことなかったな。今のうちにして
おこつ」

今まで誠は自分の部屋の掃除だけは自分でしていた。湊には決してさせなかった。

「最近してなかったと思うし、気合いれてやらないとね」

湊は掃除機を持っていくと、さっそく誠の部屋に入った。

「わあ、汚い……」

誠の部屋は想像以上だった。

床はゲームやマンガだらけ、制服まで脱ぎ捨てられている。机は教

科書をめちゃめちゃに置かれていた。とても勉強のできる環境ではない。

「まったく、少しは掃除しないと」

誠はかたっぱしから掃除していった。

服はハンガーにかけ、ゲームやマンガも定位置に置き、床も掃除していった。

「あ、ベッドの下もしないとね」

そこで湊はじーっと誠のベッドを見た。

「……ベッドの下にエッチな本が……。あるわけないよね」

湊はしゃがみ込むとベッドの下に手を伸ばした。すると、手に何か固いものがあたった。

「え？ ま、まさか……」

湊は恐る恐る得体の知れない物体を引っ張った。湊は目をこらして見る。

それはアルバムだった。

一つのケースに五冊入っている。

湊は安堵の息を吐いた。

「なんだ、兄さん。どこにやったかわかんないって言っていたのにこんなところにあるじゃない」

湊はアルバムについた埃を払うとそつと中を覗いた。

そこには誠の小さいころの写真があつた。幼稚園のころのものやどこかに旅行したときのものなどあつた。

「兄さんかわいい。小さいころはこんな顔してたんだ」

そのとき、湊は一つの写真に目がいった。二人の夫婦が寄り添つて映っている写真。両親の写真だ。

「へー、お父さんとお母さんの顔ってこんな感じなのか」

初めて見た両親の顔。湊は見る事ができてよかったと心から思った。

「さて、私の写真はどこかな？」

湊は期待を胸に次々にアルバムを開いていった。しかし、捲っていくたびに焦りが積もっていく。

どれを見ても自分の写真がなかった。どれもこれも誠や両親の写真ばかり。

いつしか、アルバムは残り一冊になった。

「もう。私のは一つにまとめてあるのかな」

湊は笑みを作っているが心の奥底では緊張しながらアルバムを開いていった。

湊は見落としないように一枚一枚見ていった。そして、最後まで見終わるとそつとアルバムを閉じ、ベッドの下に戻すと掃除を再開した。

「ふあゝ」

誠は大きなあくびをすると起き上がった。そして自分が置かれている状況に気づいた。

いつのまにかソファの上で寝ていたようだ。上には毛布が被せられている。おそらく湊だ。

誠は辺りを見渡すと湊が朝食を作っているのに気づいた。

「おはよう、湊。今日も早いな」

「あつ、おはよう、兄さん。やっと起きたね。朝ごはんできてるか早く食べよ」

湊に言われ、朝食を消費すると、誠はでかける準備をした。

もうすぐ午前9時になる。湊に自分の時間をあげる時間だ。9時から明日の午前9時、つまり二十四時間誠は湊の言うことをきかなければならない。

誠はじつと時間が来るのを待った。秒針が音を立てて動いていく。そして、約束の9時になった。

「さて、今から何でも言うこと聞くぞ。なんなりとおもうつしつけ下さい。湊様」

「では、今から買物に行きましょう」

「おう」

二人はさっそく玄関を出た。

「……それ、着けて行くの？」

湊は恥ずかしそうに少し頬を赤く染めて訊いてきた。誠の首には湊の手作りのマフラーが巻かれてあった。

「着けないと意味ないだろ。けっこう暖かいぜ」

誠はマフラーに触れると嬉しそうに笑みを浮かべた。

「でも、恥ずかしいな」

湊はずっと頬を赤く染めていた。

二人は商店街に着くと湊の行きたい店にかたっぱしから見回った。もちろん、誠は荷物持ちである。

そのあとはレストランで食事をした。

「料金は兄さんが払ってくれるんだよね？」

湊はメニューを開いて満面の笑みを浮かべていた。

「ま、まあ、そうだな。俺が払うよ……」

誠は少しがっかりしていた。欲しいものは時間と言っても、けっこうお金も体力も消費していく。案外きつかった。でも、

「兄さん、このハンバーグおいしいよ」

湊は楽しそうに、そして幸せそうに笑っていた。この笑顔が見えるだけで、誠は満足だった。

食事を終わると、2人は最後に映画館に行った。

「兄さんと行くの久しぶりだね」

「そうだな。最後に行ったのは小学生のときだったかな。中学から部活入って遊ぶ暇なかったし」

2人は中に入ると今人気の恋愛映画を選び、席に座って始まるのを待った。

映画の内容は、1人の男子高校生が、自分のある噂のせいで恋人を傷つけてしまい、みんなから人気があり明るかった彼女は周りから悪口を言われるようになった。そこで彼女を助けようとする話だ。

主人公は人気俳優が演じているから一目見ようとするだけで、内容はおもしろくないようだ。

湊は待っている間、隣りに座っている誠の顔をチラッと見た。

湊は思い出した。誠はいつでも自分を守ってくれることを。

小学生のころは、男子生徒からよくからかわられていた。スカートを捲られたり、物を投げてきたり、頭を叩かれたり。時には親がないことをバカされた。

今考えれば、何てことのない表現方法だったのかもしれない。だが、当時は嫌だった。いじめをうけているようで、毎日つらい思いをしていた。

そんなとき、誠が助けてくれた。上級生なのに、わざわざ湊のクラスまで行っていじめる男子生徒を呼び出してケンカをした。

もちろん、上級生の誠に敵うはずない。ほとんど誠の一方的なケンカだった。

そのあとは職員室に呼ばれ、誠は担任に叩かれるほど説教を受けた。だが、誠は泣かなかった。むしろ、自分は正しいことをしたと言い張っていた。

そんな自分の兄の姿を見て、湊は誠がかっこいいと、憧れと少なからずの好意を抱き始めた。

自分にはこんなにも頼りになり、常に自分の味方である兄がいる。

それだけで安心でき、親がいなくても、何をされようと落ち込むことはなかった。

今だってそうだ。いつもはだらしないかもしれないが、やる時はやってくれる。自慢の兄だと心から言えるだろう。

湊はそつと小さく笑みを浮かべると、誠に寄り添って体を預けた。

「ん？　どうかしたか？」

「ううん。別に」

湊は目を瞑ってそのままの体勢をとった。

こうしていると温かく、安心していられる。誠の体温が伝わり、自分の中に入っていくようだ。

「ありがとう、兄さん……」

湊は小さく呟いて誠の腕を握った。誠はやれやれといった感じに息を吐くとそのままにしてあげた。

「ふっ、疲れた」

誠は家につくと荷物を降ろしソファに深く座った。

「ありがとう、兄さん。楽しかったよ」

湊も隣りに座って笑みを浮かべた。

「まだ十二時間以上残っているけどな。夕飯はどうする？」

「うーん。たまには兄さんの料理が食べたいな」

「お、俺の？ いいのか？ めっちゃまずいぞ」

「なんでもいいから作ってよ。ちゃんと愛情込めてね」

「はいはい」

誠は立ち上がると台所に立った。

湊はその間に自室に戻って買ったものを整理した。

そのあとは疲れてベッドに倒れた。今日は本当に楽しかった。久々に誠と買い物できて。

湊は体を起こすと机の上に立ててある写真に手を伸ばした。

そしてまた思い出した。記憶のない真実。親の顔を覚えていない事実。そして、あのアルバム。

「私は、兄さんの妹なんだよね……」

第五章 part 4：正体

時刻は午後9時を過ぎた。

誠が湊の言うことを聞くのも残り十二時間となった。今は居間で一緒にテレビを見ている。

外は雪が降っており、結露がすごかった。中は暖房で温かく、寒さは感じられなかった。

「湊、もう何かして欲しいことはないのか？」

誠はソファに座りながら、隣に座っている湊に問い掛けた。

「うーん、今のところはないかな。あつ、そうだ。お風呂沸かしてきてよ」

「それがあつたか。わかった」

誠は立ち上がると風呂場にむかった。そして、沸かし終わると居間に戻ってきた。

「沸いたぞ。先に入れよ」

「うん」

湊は立ち上がると風呂場にむかった。そのとき、居間から出ようとする立ち止まって誠を見た。

「一緒に入る？」

それを聞いて誠は一瞬で顔が赤くなった。

「バ、バカか！ さつさと入って来い！」

「そんなに怒らなくてもいいのに。じゃあ、お先に」

湊は可笑しそくに笑いながら風呂場にむかった。

時刻は11時。二人とも風呂に入り終わり、何もすることなくテーブルを囲む木造の椅子に座っていた。

湊はチラッと誠を見た。

誠には聞きたいことがある。しかし、それを聞いてもいいのか迷った。もし、これを聞いて信じられないことになったら。

……少し怖い。でも、自分のことは知りたい。

湊はそっと口を開いた。

「ねえ、兄さん。私の言うことなんでも聞いてくれるんだよね？」

誠はテーブルに肘をつき、眠たい目を擦りながら曖昧に返事した。

「ああ……、そういう約束だからな」

「じゃあ、聞きたいことがあるんだけどしょうじきに話して。いい？」

「ん？　なんだよ」

このとき、誠は何も思わなかった。自分が一番恐れていたことが聞かれるとは思いもしなかった。

「あのね、へんなこと聞かかもしれないけど……いい？」

「なんだよ。言ってみろよ」

誠はテレビを見ながら聞く。湊は少し緊張した面でそつと言った。

「うん。あのね、……私の幼いころの写真は、どこにあるの？」

「え？」

誠はそつと湊の顔を見た。

湊の顔は真剣そのものだった。冗談ではなく、本当に知りがっている。

誠は生唾を飲み込むと答えた。

「いや、ごめん。アルバムどこにしまったか忘れたんだ。それにもうないかもしれないし」

「そのアルバムって、どんなやつなの？」

湊は少しうつむきながら言った。

「ああ、たしか一つのケースの中に五冊くらい入っているやつだったかな。それがどうかしたか？」

そのときは何も思わなかった。しかし、話したあとに一つの仮説が浮かんた。

もしかして……。

「湊……、お前……」

誠は強張った表情になっていた。湊は誠を見るとはつきりとうなずいた。

「うん。見つけたよ。兄さんのベッドの下から」

誠は心臓が激しく脈打つのがわかった。とうとう来てしまったのだろうか。

恐怖が甦る。汗がこめかみを流れるのがわかる。今自分を見るから動揺しているだろう。どうにかしなければ。

誠は無理に笑みを作った。

「そうか……。見たのか……。お、お前の写真はあったか？」

「その答えは、兄さんが知ってるよね？」

湊は今までに見たことがない冷たい目を誠に向けていた。

冷酷な目。それは真実を求めている。

誠は拳を固く握り、再び無理に笑みを浮かべた。

「な、懐かしかったろ？ 自分の幼いころの写真を見るのもたまには良いもんだな」

「ごまかさないでよ！」

湊が突然声を上げた。誠は体をびくつかせると口を閉ざし湊を見た。

「湊……」

「一枚も……、一枚も私の写真は……なかった。あるのは兄さんとお父さんとお母さんの写真ばかり。私は……どこにも映ってなかった」

湊の瞳から一滴の涙が流れた。テーブルの上にある手はふるふる震えている。

誠は考えた。

壊したくない。今の状態を、今の関係を壊したくない。どうにかしないと。

そう思うだけでいい案は思い浮かばない。焦りが募るばかりだ。

「ねえ、……本当のこと言ってよ。私は……いったい誰なの？」

湊は涙目で問い掛けてくる。誠は硬く目を閉じたあと口を開いた。

「いや、親父自分の娘にべた惚れだったからな。もしかしたら、別にしまつてあるのかも。今度探してみようぜ」

「だからごまかさないで！」

湊は拳でテーブルを叩いた。その音で誠は黙った。もう、打つ手がない。

「お願いだから、……本当のこと言つて。私は、……私はいつたい……いつたい誰なの……」

涙を流しながら真剣な目つきで湊は誠を見た。

誠はうつむいたまま答えない。

迷つていた。言うべきか、言わないべきか。いや、言わないほうがいい。こんなこと言えば、湊はきつと驚いてしまふ。自分を信じられなくなるかもしれない。それに誠の言葉を信じてくれるかもわからない。

誠はただ黙ることしかできなかった。

「もういいよ！」

湊は椅子から立ち上がると居間から出て行き家を飛び出した。

「湊！」

誠は急いで後を追つた。今自分にできることは追いかけることし

かできなかった。

外は大雪が降っていた。さっきまで暖かった体温をどんどん奪われていく。

湊は目に涙を浮かべながら走っていた。行く当てもない。ただがむしゃらに走っていく。

わけがわからなかった。何もかもわからない。自分の居場所はどこのか。自分の家族は誰なのか。自分はいたい何者なのか。

湊のあとを誠は必死になって追っていた。

湊に何度も大きな声で呼んでいるが聞こえないのか反応はない。それなら追いつくしかない。誠は寒さに耐えながら力の限り走っていた。

湊は商店街にむかっていた。無意識に走っていると身近なところに行ってしまう。

誠も必死になって後を追っている。残り数メートル。あと少しである。

しかし、湊はペースを緩めようとはしない。誠は逃さないように走った。

そして湊は横断歩道を渡った。

そのとき誠は目を疑った。信号は赤だ。それに気づかず湊は渡っていく。

そのとき横から光が目に入った。大きなトラックが走っていく。

誠は息を止めて横断歩道むかって激走した。

湊は横断歩道の真ん中のところでクラクションの音が耳に入るのがわかった。

はっとした湊は横を向いた。そこで今の自分の状況を理解した。目の前に大きなトラックがある。しかもそれが刻一刻と近づいてくる。運転手は慌ててブレーキを踏んでいる。しかし、雪のせいでタイヤが滑って止まらない。

湊は慌てて逃げようとした。しかし、恐怖のせいか力を入れても体が動かない。

もうだめだ……。

自分の命を諦めたそのときだった。

後ろから強い力が加わったのがわかった。背中に力が加わり、そのまま前に飛んでいく。

そして横断歩道から外れると雪で道の上を滑り、起き上がるとさつと後ろを振り返った。

そこには手を伸ばして自分を押している誠の姿があった。誠は湊の無事を確認するとそっと微笑んだ。

「……兄さん」

その瞬間、視界が誠からトラックに変わった。それと一緒に聞きたくない音が耳に入る。誠の姿が見えない。

「に、兄さん……」

湊は恐る恐るトラックの進んだ方向を見た。いつのまにか人だかりができている。

「兄さん……」

湊は重たい体を上げるとその人だかりめがけ、ふらついた足取りで歩いていった。

人だかりの何人かが湊の存在に気づく。それが少しずつ増え、一つの道ができた。

その先には求めていたもの、そして認めたくない真実があった。

一人の男が横たわっている。息があるのかわからない。ぐったりとしており、生気が見当たらない。

真っ白だった雪が赤い血だらけだった。頭のほうからじわっと広がっていく。

湊は横に膝をつくと顔を覗いた。それは確かに誠だった。ところどころ傷だらけだが、自分の兄に間違いなかった。

湊は信じられなく、目から溢れてくる涙を流しながら叫んだ。

「兄さん！」

誠は目を開けた。頭がぼーとする。目の前が白い。ここがどこかわからなかった。

誠はそつと横を向いた。そこには顔を手で抑えて泣いている湊の姿があった。腕や足に包帯が巻かれてある。

「湊……」

誠がそつと呟くと、湊は覆っていた手を離し誠を見た。

「兄さん……。兄さん！」

「湊……、大丈夫か？」

「私のことよりも自分の心配してよ。先生！ 先生！」

湊は医者呼びに病室から出て行った。

誠はそこで気づいた。ここは病室だったのか。

それよりも、湊が無事でよかった。もう大切な人を失いたくなかった……。

少しして担当医である先生がきた。先生が言うには、雪がクツシヨンになって大事にはいたらなかったが腕と両足を骨折し、頭を軽

く打ったようだ。

「しばらく入院してもらいます。お大事に」

そう言つて先生は出て行つた、湊は丁寧に頭を下げた。そして、誠のほうに向き直ると椅子に座つた。

「兄さん……、ごめんね。私のせいで……」

湊はうつむきながら目にうつすらと涙を浮かべて謝つた。誠はかろうじて動く腕を上げて湊の頭をなでた。

「いいんだよ、湊。お前が無事でよかった」

「でも……、でも……、私があんなことしなければ……、ごめんなさい」

湊はシーツをぎゅっと掴むと顔を布団にうずめた。誠はただ無言で頭をなでることしかできなかった。

すると、湊は突然顔を上げた。

「そうだ……。私、スカイを使う」

「は？ お前何を言つて……」

「だって、こうなったのも私のせいなんだよ。だったら、兄さんのために使いたい！」

「待て、湊！ いいよ。そんなことに使うな！」

「いいの！ 私は使いたいの！ 兄さんの怪我を治したい」

湊は椅子から立ち上がると、手を握り合わせて目を閉じた。誠は寝たまま必死に腕を伸ばして止めようとした。

「止めろ、湊！ 止めろ！」

「お願い！ 兄さんの怪我を治して！」

願ってしまった。誠は腕を下ろすとがくつと諦めた。

叶うはずのない願いを。できるはずないことをしてしまった。もう、隠せない……。

湊はそつと目を開けた。何も変わっていない誠の姿が目映る。青白く光ったわけでもない。

たしかに今スカイを使った。でも、変わったところは何一つない。

「どうして……。どうして叶わないの。こんなに願っているのに……。お願い！ お願いだから、兄さんの怪我を治して！」

しかし、どんなに願っても湊の願いは叶わず、誠の怪我は治らなかった。湊は再び椅子に座ると肩を落とすと頭を抱えた。

「どうして……。どうしてなの……。どうしてスカイが使えないの。こんなに……。こんなに、願っているのに。……。どうして……」

誠はそんな湊の姿を見て呟いた。

「湊……」

「ねえ、どうして！ 教えてよ！ どうして私はスカイが使えないの？ 今まで使ったことないのに。私はこの島で生まれたんじゃないの？」

湊は誠に問いかける。誠は目を硬く閉じて決心した。

もう言うしかない。もう全てを話さなければ。

「湊、今から言うことをよく聞いてくれ。全て話すよ。お前の写真がない理由も。両親の記憶がないことも。そして、スカイが使えない理由も」

第五章 part 5：真実

誠は決心した。

すべて話そう。いや、話すしかない。

一番恐れていたことがとうとう訪れた。いつかは来ると思っていた。逃れない事実から。怖くて何度も避けてきた。だが、とうとう捕まってしまった。

湊が望んでいるなら仕方ない。これは知らなければならぬことだ。誠は重い口をそつと開いた。

「……湊。今から言うことはすべてお前のことだ。お前が知りたいことを全て話す。……いいか？」

湊は少し怖気づいているが、ゆっくりとうなずいた。誠は少し震える腕を抑えながら話した。

「まずは、親父とお袋のことを話そう。2人は死んだのは知ってるな。交通事故で2人は亡くなった。俺が小学2年生のときの……クリスマスの日だ」

誠はそのときのことを思い出しながら湊に話した。

あれは、寒いクリスマスの夜だった。

外では白い粉雪が舞っており、行きいく人たちは体を丸めながら歩いていた。どこの家も、家族と一緒にケーキやご馳走を食し、楽しい一時を過ごしていた。

誠は一人暖房の点いた温かい家の中で楽しそうにクリスマスの飾りつけをしていた。

ツリーを飾ったり、本を見ながら料理を作ったり。

今日は親2人ともいつもより早く帰って来る。同じ職場である2人は、クリスマスには早く帰ると約束してくれた。

誠は久しぶりに家族で楽しめると想い、嬉しい気持ちが隠せなかった。

この日は最高のパーティーになる。きっとみんなのように楽しく過ごせる。

……そのはずだった。

誠は病院に来ていた。病室の中で、誠は二つ並んでいるベッドの中に膝をつき、2人の手を泣きながら握っていた。

「……お父さん、……お母さん」

何度も声をかけているが、二人からの返事はない。

最初は酸素マスクを着けられていたが、今は外されている。

白いベッドの上で、2人は安らかに眠っていた。

「ねえ、起きてよ……。僕を一人にしないでよ……」

誠は2人の手をぎゅっと握った。握り返してくれない冷たい手。生気を感じられず、これがさっきまで人の手だとは思えなかった。

それでも、誠は起き上がってくれることを信じた。

「誠くん……」

後ろでは担当医の医師と看護婦が哀れな目で見ていた。隣りにいた若い看護婦はそつと誠に近寄ると頭を撫でて慰めてきた。

「……誠くん。誠くんのお父さんとお母さんは天国にいったんだよ。2人の分まで、誠くんは一生懸命生きなきゃ。いつまでも泣いてたらお父さんとお母さんは悲しむよ」

誠は首を振って否定した。

信じたくない。2人はまだ死んでなどいない。それを認めたら、暗い空間に閉じ込められそうで怖かった。何もなく、自分一人の無の世界に。

「誠くん」

担当医の先生が誠に近寄ると一枚の紙を渡した。

「君のお父さんとお母さんから。最後に力を振り絞って書いたん

だよ」

誠は目から溢れる涙を袖で拭くと、手紙を受け取った。

『誠。お父さんとお母さんは死ぬかもしれない。何もできなくて本当にごめん。一緒に遊ぶことも、一緒にご飯を食べるのも、他と比べたら少ない。いつも一人にして悪かったな。』

誠はスカイを知ってるか？ この島で生まれたものにしか使えない魔法だ。皆それぞれ持っており、一生に一度だけどんな願いでも叶えることができる。お前の望みは何だ、誠。本当に必要なときに使いなさい。遊び半分や、おもしろ半分で使うのはダメだ。お前が困ったとき、きつと助けてくれるはずだ」

そこで手紙は終わった。ところどころ血がついており、字も汚く震えているようだった。

誠はその手紙をぎゅっとい握り、くしゃくしゃになったが、その場にうずくまり声を上げて泣いた。

自宅に着いた誠は、誰もいない部屋を見渡し、自分は一人になったんだとあらためて感じた。

病院に急いで駆け込んだから、クリスマスのお祝いの準備をしたままだった。それが何もかも無駄になってしまった。

誠はソファに座ると空腹を告げる音が腹から鳴ったことに気づいた。そういえば、何も食べていなかった。

誠はテーブルの上に置いてある料理をレンジで温め、一人静かに食

事を始めた。

大好きなからあげを口に運んでいく。そして、白く炊けたお米も一緒に食べる。味が舌に感じると、虚しい気持ちが溢れていく。

一人で食べるのは慣れていた。毎日のように忙しい両親と夕飯を一緒に食べたことなどそうそうなかった。もう慣れていた。

しかし、それはいつか一緒に食べることができると信じていたからだ。自分の料理を食べて、褒めてくれると信じていたからだ。

だが、その二人はもういない。もう逢えない。

誠は食べながら涙を流した。悲しいというものを、寂しいというものを嫌というほど実感した。何度涙を拭いても止まらなかった。

とうとう誠は、持っていた箸を投げ捨て、大声を上げて泣いた。

こらえていた気持ちを思う存分吐き出した。この感情を抑え切れなかった。

そのとき、ふとある言葉を思い出した。

『お前の望みはなんだ……』

「俺の……望み……」

誠はその場に膝を着くと、手を握り合わせ、目を瞑り、天に向けて心から願った。

「お願いです。俺の望みを叶えてください。それは……」

「そのときに、俺は願った。家族が欲しいって。……俺は孤独に耐えられなかった。家族、安心できる俺の身内が欲しかった。そこで俺の目の前に現れたのが湊、お前だ」

湊はそこで驚きの表情を隠せず、恐る恐る口を開いた。

「私……、スカイで生まれたの？」

誠はうなずいた。

「ああ、俺そのとき妹が欲しくてな。だから妹が現れたと思う。スカイは、俺の願いを叶えてくれた。湊は、この島でちゃんと生まれただけじゃないからスカイは使えないんだ。だから、湊の誕生日はクリスマスだし、幼いころの写真も、親父やお袋の思い出もない。……これで……わかったか？」

誠はそつと湊の表情をうかがった。湊は口を閉ざしたままだった。

それはそうであろう。今まで信じていたことが全て間違っていたのだから。受け入れるのも時間がかかる。

誠は湊の反応が気になった。そのとき、湊の口が小さく動いた。

「……ねえ、私はどうしたらいいの？ ……私はいったい誰の子なの？」

「湊？」

湊はすつと顔を上げ、怒りの込められた表情に誠を睨んだ。

「私に家族はないの？ 私の居場所はいつたいどこなの？」

「ま、待て、湊」

湊は誠の言葉も聞かず、声を張り上げた。

「私はいつたい何なの？ スカイで生まれたって、人間じゃないっていうの？ 私はこれからどうしたらいいの？ 私の家族は誰？ 私の居場所はどこ？ 私は……兄さんの何なの！」

湊は泣きながら出て行ってしまった。誠は追いかけることができなかった。

誠は拳に力を入れると布団に振り落とした。何度も叩きつけた。

こうなることを恐れていたのに。何もできない。あのときの願いは間違いだったのだろうか。

でも、人は決して孤独には勝てない。

ああするしかなかったんだ……。

湊は一人歩いていた。

誠からの聞かされた真実が頭の中で繰り返されていく。これからどうすればいいのだろうか。自分の居場所はどこだろうか。

怖い。知りたかったことは知ることができた。でも、その結果は恐怖心が芽生えただけだ。

自分は普通の人ではない。スカイで生まれた人。他の人とは違う。自分はいつたい、誰なのだろうか……。

「湊？」

湊はそつと下を見て落ち込んでいた顔を上げた。

目の前には瞳がいた。買い物をしていたのだろうか、手には買い物袋が提げられている。

「どうしたの？ ひどい顔してるよ」

瞳は湊の顔を覗きこんだ。

「瞳、……瞳！」

湊は瞳に抱き着くとおもいつきり泣いた。

「え？ ちょ、ちょっと、湊？」

瞳は湊を自分の家に招きいれた。

湊は今では落ち着いており、肩を落しながらソファに座っていた。

瞳は奥から出てくると紅茶を持ってテーブルに置いた。

「はい、湊」

「……ありがとう」

湊は紅茶を一口啜った。

「それで、どうしたの？ 何かあった？」

「……うん」

湊は迷った。話してもいいのだろうか。話したら瞳はどんな反応するだろうか。

きつと自分を避けるだろう。普通の人間ではないのだから。

「湊」

湊はそつと顔を上げた。瞳は一心に湊を見つめていた。

「しょうじきに話してよ。私たち親友でしょ？ 何があっても私は湊の味方だよ」

瞳はそつと微笑んだ。その笑顔を見て湊は安心した。

「うん」

湊は全て話した。誠に何があったのかも。そして、自分のことも全て。

「そんなことがあったんだ。あのバカ兄の考えそんなことね。でも」

瞳は湊の頬を引っ張ったり、髪の毛を持ち上げたりといろいろなじくつてみた。

「どう見ても普通の人間よね」

「瞳……」

湊は瞳を放すため息を吐いた。

「私……これからどうしたらいいのかな？　今まで信じていたことが違って……、本当のこと知って……」

湊は顔を手で覆ってうずくまった。

「もう、どうしたらいいのかわかんないよ……。私……どうしたらいいの？　これからどうすればいいの……？」

瞳はやれやれといった感じでため息を吐くと答えた。

「湊、あんたこういうことには頭悪いのね」

「え？」

湊は手を顔から離し、呆然とした表情で瞳を見た。瞳は湊に人差し指を立てて言った。

「あのバカは何て言っただけなの？」

「え、それは、家族が欲しいって……」

「その願いで出てきたのは誰？」

湊はそつと指を立てると自分を指した。

「わ、私……」

「スカイの願いは絶対。だったら、あんたはあいつの家族、湊はあいつの妹でしょ」

「瞳……」

「あんたは真正正銘のあいつの家族だよ。家族が苦しんでいるときにその家族は何をするの？ 助けるでしょ。湊が今しなければならぬのは、あのバカの手助けをすることですよ」

「瞳……、うん」

湊は涙を拭くと笑みを浮かべてうなずいた。

そうだ。このままでいいはずだ。自分がスカイで生まれようと、スカイが使えなくても、誠の家族であることは変わらない。私は、誠の家族なんだ。

「それでこそ、湊ね。今日は泊まっていつて。明日一緒に病院に行きましょう」

「うん。ありがとう、瞳」

湊は心から瞳が親友で良かったと思った。

そして、明日自分の兄に謝って、もう一度家族でありたいと願った。

第五章 part 6：意味

誠はベッドの上で震える体を両腕で抑え、込み上げてくる孤独感に耐えていた。

どんなに強く抑えてもいうことをきかない体がうずき、心臓の鼓動が早まっていく。

静寂な空気に包まれた病室内にその音だけが耳に届いていた。

もう、湊とは一緒にいられないのだろうか。そう思うと、走馬灯のように楽しかった日々が甦ってきた。

自分がスカイを使って二人の生活が始まった。

最初は戸惑った。家族ができたのは嬉しかったが、何をしたらいいのかわからない。

目の前には可愛い女の子。きょんとしており、じっと自分を見つめる。

誠はまず名前をつけた。

湊。

意味は別がない。ぱっと思いついたのがこれだった。

それから一緒にご飯を食べた。お風呂にも入った。そのあとは一緒に寝て。

それから誠もできるだけ考えられることを湊としてきた。

しかし、湊はなかなか感情を表に出さず、何を考えているのかわからなかった。

嬉しいのか、怒っているのか。それとも戸惑っているのだろうか。

だから、できるだけ誠は優しく、そして温かく接した。

それから少しずつ湊は口数が多くなった。いつしか家事や掃除をするようになった。

そして満面の笑顔でこう呼んだ。

「兄さん」

自分のことを呼んでくれたときが一番嬉しかった。

そのときやつと近づけた気がした。家族になったと実感した。誠は涙が溢れるほど感激した。

それから学校にも通わせ、いろいろなお祭りなどの行事も一緒に参加した。

自分が親になった感じがした。それから孤独の怖さがなくなった。

もう自分は一人ではない。自分には家族がいる。自分には湊がいる。もう失いたくない。もう味わいたくない。

一生守ってやると心に誓った。

でも、今自分のそばには誰もいない。また一人になってしまった。いつも一緒にいた湊は……もういない。

誠はふつと息を吐き、天井を見上げた。そのとき目から一筋の涙が流れた。

「あゝあ、また俺は一人か……」

いろいろあった。湊が現れて9年間いろいろあった。

でも、最後は一人。寂しい。それしか思えなかった。

「俺、もう孤独には耐えられそうにないな……」

誠は何かを決心すると、書置きをして車椅子に乗り病室から出て行った。

「ほら、湊。行くよ」

「う、うん……」

湊と瞳は病院の前にいた。

瞳はフルーツの盛った籠を持っている。湊は綺麗な花を持っていた。

湊は入り口の前で複雑な気持ちになりうつむいていた。

瞳と一緒に見舞いに来たのはいいが、どんな顔して会えばいいのかわからない。

自分の兄に何て言えばいいのだろうか。あんなことがあり、どう接すれば……。

そんな湊を見て瞳が声をかけた。

「湊。そんなしょぼくれた顔しない。あのバカがまた心配するよ」

「う、うん……」

それでも湊は緊張しているのか、なかなか顔を上げようとしない。

二人は誠の病室に向かい、中に入った。

「お兄さん、見舞いに来てあげたよ。ほら、湊」

瞳は病室のドアを元気に開け、未だ廊下で立っている湊を前に出した。

「に、兄さん……」

湊は少しドキドキしながらそつと中に入った。しかし、そこに誠の姿はなかった。

「あれ？ どこいったのかな。トイレかな？ ん？ これなにかな」

瞳はベッドの上に置かれた紙を拾い、湊に渡した。

湊は受け取ると中を開いて読み始めた。

『湊へ いろいろ黙っててごめん。でも、俺はどうしても家族が欲しかった。どんな形であろうと欲しかった。一緒に笑って、泣いてケンカもして、それでも最後は一緒にいる。そんな家族が欲しかった。でも、お前は俺のそばから消えてしまった。俺はまた一人になった。もうこの孤独に耐えられない。お前が俺と一緒にいたくないのなら、それは仕方ない。もう会えないかもしれない。でも、これだけは言っておく。お前はどんな形であろうと、スカイが使えるなくとも、俺の妹、家族であり、一人の人間だ。今までありがとう。…さようなら』

「兄さん……」

湊の手は震えていた。

もう会えない？ もう一緒にいられない？

嫌だ。会いたい。また一緒にあの家で暮らしたい。

湊は手紙を強く握ると病室を飛び出した。

「み、湊！」

湊は病室から出ると誠を探し始めた。

「兄さん、どこ……。どこ……」

誠は足を怪我している。おそらく移動手段は車椅子。そう遠くには言っていないはず。

「兄さん……会えないなんて嫌だよ」

誠は車椅子をこぎ、ある場所に向かっていった。

それは病院の屋上。一番空を近くで見上げられる場所。その場所へ車椅子を進めていく。

こつそり病室を抜け出し、エレベーターに乗ってばれずに済んだ。

しかし、エレベーターは屋上の直前で止まり、行くには階段を使うしかない。そのあとどうやって車椅子に乗れば。

いや、そんなことはどうでもいい。再び病室に戻ることはもうない。少しずつ自分の親のもとに向かっていると思えば苦にならなかった。

「親父、お袋、もうすぐそっちに行くよ……」

そのころ湊は廊下を走っていた。息が切れようと、体が悲鳴を上げて疲れていようと、湊は我慢して走り続けた。

誠が行きそうなところを考えるがまったく思いつかない。ただがむしやらに走っていく。看護婦に注意されようと無視し、辺りを見渡していく。

「兄さん……。どこなの……」

誠は階段を一段一段腰を降ろし片腕を使って登って行く。

今まで何気なく登っていた階段が天高くまで伸びているように感じた。痛く動かせない足を補い、屋上目指して行く。

そして、とうとう屋上へと辿り着いた。青空が広がり、輝く太陽が照らしていた。何もないコンクリートが目の前に現れ、先の景色は街中が見渡せた。

「こんな景色を見るのも今日で最後か……」

誠はふつと笑みを浮かべると、膝をつきギプスで固定している部分をつけないようにし、片手を前に出し支えにしてゆっくりと前に進んでいった。

湊は壁に手をついて切れた息を整え考えた。

どこにもいない。いったいどこにいるのだろうか。こんなに逢いたいと思ったのは初めてだ。それほど誠の存在は自分にとって大きかった。

「兄さん、どこにいったの……」

湊の目から光り輝く涙を落した。そのときぱっと思い浮かんだ。

「屋上……」

湊はいそいで屋上へと走り出した。

ようやく奥までに着くと誠は止まった。目の前は盛大な景色でいっぱい、手の前は何十メートルの高さに自分はいるとわからせる。落ちれば一回で命を落とすような白い絶壁。寒い風がなびき、誠の体を揺らしていた。

「俺の人生もここまでか……」

誠はそつと目を閉じた。思い浮かぶのは湊ばかり。

世話もかけたし、迷惑もかけた。でも、一緒に過ごせてよかった。

楽しかった。嬉しかった。本当に、幸せだった。もう悔いはない。これでよかったんだ……。

誠は溢れ出てくる涙を拭い、空を見上げて呟いた。

「さようなら、湊。……ありがとう」

誠はそつと体を前に傾けた。上半身が屋上から出て行く。少しずつ下へと落ちていく。

これで……家族に会える。

そのときだ。

「兄さん！」

後ろから湊が誠に抱きついた。

「湊？」

湊は体重を後ろに傾けた。誠はぎりぎり落ちず、湊によって屋上のコンクリートの上に寝そべった。

顔を上げると湊を見た。

「……湊？」

湊は再び誠に抱きついた。

「バカ！ どうしてそんなことするの？ 自殺なんて、……バカがすることだよ！」

湊は涙をこぼしながらぎゅっと抱きついた。

「湊、お前、どうしてここに……」

誠はいるはずない湊を見て混乱していた。自分を嫌っているはずなのになぜ……。

湊は肩を震わせながら口を開いた。

「……嫌だよ。私、嫌だよ……。私を、一人にしないでよ。私の家族は兄さん一人なんだよ。私の家族は……兄さんだけなんだよ……」

「湊……」

湊は腕の力を抜くと、そのまま誠の胸の中にうずくまった。

「私……寂しいよ。一人なんて、寂しすぎるよ……。兄さん、孤独が嫌だから私を願ったんでしょ？……だったら、……私を一人にしないでよ……」

湊は声を上げて泣き出した。誠は呆然とした表情で湊を見、そしてそつと呟いた。

「……俺、……いてもいいのかな。……これから、……湊と一緒にいても……いいのかな……？」

誠の目から何粒もの滴が出てくる。誠は唇を噛み締め、片手で顔を抑えた。

「俺……、こんなダメな兄だけど……。迷惑ばっかかけて……。だらしくて……。わがままで……。それでも……。俺、湊の家族でいいのかな……？」

湊はぎゅっと誠の服を掴むと首を縦に振った。

「うん……うん……」

「そっか……」

誠はそつと目を閉じ、湊を抱きしめた。

今自分が包んでいるのは大事な家族。ただ一人の、かけがえのない存在。

帰ってきた。戻ってきてくれた。そう思うと、すごくほっとする。

湊がどれほど自分の心の支えか。

もう、離したくない……。二度と、そばから離すことはしない……。

「湊、……ごめん」

湊はそつと顔を上げた。

「ううん。私のほうこそ、ごめんね。本当に、……ごめんね」

「いや、俺が悪かったんだ。俺、自分のことばかり考えてたから……」

「いいんだよ。助け合うのが家族でしょ？ だったら、私は兄さんのためなら何でもするよ。だから、……私、戻ってきてもいいかな？」

「……ああ」

誠は再び湊を抱きしめた。

きつく、強く、ぎゅっと締め付けた。この温もりを、この感触を、忘れないために……。

「ありがとう、……湊」

第五章 part 7：新年

誠は病室のベッドに横になり入院生活を過ごしていた。

湊は毎日お見舞いに来てくれて退屈しない。

瞳もたまに湊と一緒に来る。ギプスに落書きしたりとやりたい放題だった。

湊とは仲直りし、元の関係に戻ることができた。

やはり家族はいい。孤独を味合わなくてすむ。なにより温かい。心を癒し、寂しさを感じさせない。

誠は湊が隣で椅子に座りながらフルーツをナイフで皮を剥いているときに言った。

「そういえば、明日は大晦日だな。まさか今年の最後を病院で過ごすとな」

「大丈夫だよ。私も大晦日はここにいるから」

「え？ いいのか？」

「うん。騒がなければいいって先生が言ってた」

「そうか。ありがとう、湊」

「当たり前じゃない。私たちは家族なんだから」

湊は満面の笑みを浮かべる。誠もそつと笑みを返した。

「ああ。そうだな」

大晦日。二人はテレビで紅白を見ていた。

そして、午後11時55分。今年もあとわずかとなった。

「今年もあと少しで終わりだな」

「うん。いろいろあったね」

「ああ。本当に……」

誠はそつと今年の出来事を振り返っていた。

湊はそつと口を開いた。

「初詣はどうする？」

「行けたら行きたいな。でも、この状態じゃあな」

誠はあらためて自分の状態を見た。左腕と両足の膝下を骨折している。

「じゃあ、私もここにいる。……ずっとね」

そして、時計の針は0のところで合わさった。新年の始まりである。

「明けましておめでとう、兄さん」

「おめでとう、湊」

誠は大きく背伸びをすると欠伸をした。

「さて、もう寝るか。なんか眠いし」

「ねえ、兄さん」

「ん？」

誠は眠たい目をこすりながら湊を見た。湊は少し頬を赤く染めながらもじもじしていた。

「その……一緒に寝ちゃ、ダメかな？」

「え？ でも、このベッド小さいぜ」

「くつつけば入るよ。お願い」

湊は照れながらも手を合わせてお願いした。誠はふと笑みを浮かべてうなずいた。

「ああ、いいよ。こっちこい」

湊は嬉しそうにうなずき、電気とテレビを消すと、笑顔で誠のべ

ツドの中に入った。

「こうすると暖かいね」

「ああ。でも、何年ぶりかな。一緒に寝るのは」

「うん。私が小学5年生のころからは寝なくなってたかな」

「けっこう一緒に寝てなかったんだな」

「うん。でも、今はずっと一緒に寝てもいいかな」

湊は誠の体に顔をうずめた。

「ふふ。兄さんの匂いがする。本当に落ち着くよ」

湊は目を閉じ、気持ち良さそうに笑みを浮かべて寝ていた。

誠はそっと湊の髪を撫でた。本当によかった。家族がいてくれて、湊がいてくれて。

少しして、湊が小さく呟いた。

「兄さん」

「うん？」

「……好きだよ」

「え？　そ、それってどういこと？」

「ふふ。家族だからに決まってるでしょ」

「そ、そうだよな。……ははは」

「恋人としての好きが良かった?」

「え? えと、ああ、その、……早く寝よう」

「もう。ちゃんと答えてよ」

「ノーコメント」

「じゃあ、兄さんは私のこと嫌いなの?」

「そ、そんなわけないだろ!」

「じゃあ、言ってよ。私が言ってみたいに」

「……す、好きだよ」

「それはどっちの意味で?」

「か、家族に決まってるだろ!」

「ふゝん」

「な、なんだよ」

「いや、兄さんかわいいなって」

「……お前のほうがかわいいよ……」

「え？ 今なんて言った？」

「何も言ってない」

「なんか言っただしょ。ねえ、もう一回言ってよ」

「もういいだろ。ほら、明日起きられなくなるぞ。早く寝よう」

「もう」

湊は一人小さく笑みを浮かべて呟いた。

「……ありがとう、兄さん」

「明けてましておめでとう！」

元気良く大きな声で瞳が病室に入ってきた。

「瞳、ここは病院だよ。静かにしなきゃ」

「ごめんごめん。湊に会えると思ったら嬉しくて」

「ありがとう。大晦日は何してたの？」

「もちろん、紅白見たり、年越しそば食べたりしたよ」

「楽しそうだね」

「それで、湊。大晦日はここに泊まったんでしょ。何もなかった？」

「な、何もないよ」

「ふん」

瞳は疑いの目じつと湊を見た。湊は苦笑いを浮かべた。

「瞳、俺には一言もないのかよ」

「あれ？ いたんですか？」

「俺がいなくてここにくる意味があるのか」

「そうですね。おめでとうございます、お兄さん」

「おめでとう。今日は何しに来たんだ？」

「決まってるじゃない。湊と初詣に行くんですよ」

「え、えと、瞳。初詣はちよつと……」

「え？ どうして？ 一緒に行こうよ」

「でも、兄さんが……」

湊はちらつと誠を見た。

誠は湊の表情を見て、自分を気づかっているんだと悟ると笑みを浮かべた。

「いいよ、湊。行つてこいよ。俺は大人しくここにいるから」

「え？ でも、……いいの？」

「いいから行つてこい。あつ、あと、ほら」

誠は小さな袋を取り出すと湊に渡した。それはお年玉だ。

「楽しんでこいよ」

「兄さん、ありがとう」

「あと、これは瞳のな」

「え？ 私にも？」

「ああ。その代わり、ずっと湊の親友でいろよ」

「うん。約束します」

「じゃあ、行つてくるね。ありがとう、兄さん」

「行つてきまゝす」

二人は手を振って病室を後にした。

誠は二人が出て行くとベッドに横になった。

「ああ、俺も初詣行きて。この足じゃ行けないし。早く治らね
かな」

誠は吊り下げられてある足をぶらぶらした。

湊と瞳は楽しそうに近くの神社に足を進めていた。

「ふふふ。まさかお兄さんから貰えるとは思わなかったな」

「あれ？ バカ兄じゃないの？」

「湊なんてこと言うの！ あんな優しいお兄さんにむかってバカな
んて」

「瞳が言ってたんじゃない……」

「それより、おいしいものたくさん食べよ。さ、行こう！」

二人は桜楼町にある桜神社に着いた。神社はいつも以上に人が多
く、屋台もたくさん出ていた。

「けっこう多いわね。さっそくお参りしましょう」

瞳に引つ張られながら二人は本堂の前に立つと5円玉を放り投げ
手を叩いた。

湊は願いごとを唱えた。

兄さんの怪我が早く治りますように。お願い事と言えばこれしかなかった。

湊はチラッと瞳を見た。

「お金がたくさん貰えますように。おいしいものをたくさん食べられますように。素敵な彼氏ができますように。それから、それから……」

瞳は口に出しながらいくつものお願い事をしていった。

「瞳欲張り……」

そのあとは、恒例のおみくじを引いた。

「やった〜。大吉だよ！」

瞳は見事に大吉を引いた。

「ええ〜と、学業は毎日積もれば上がる。病は何事もない。恋愛はあと一步。願い事は努力すれば叶うだって。なんか頑張れば大丈夫って感じね。湊は？」

「うん」

湊はそっとおみくじを開いた。

「あ、私も大吉だ。学業は今までどおり。病は何もない。恋愛は自

分のことを一番に考えてくれる人が見つかる。願い事はきつと叶う
だって」

「いいことばかりね、湊は。私の恋愛はあと一歩ってなによ!」

「はは。あつ、ついでに兄さんのも引いてみようか」

「そうね。せつかくだし。湊引いてみてよ」

「うん」

湊は念入りに奥の紙を引いた。

「これは帰ってから明けよう。兄さんに渡してから」

「そうね。それじゃあ、次は屋台に行きましょう!」

二人は屋台でいろいろ買うつと、再び病院に帰っていった。

「兄さん、ただいま」

「お兄さん、生きてますか?」

「生きてるよ。おかえり。初詣はどうだった?」

「うん。楽しかったよ。私も瞳もおみくじは大吉だったよ」

「へえ、よかったじゃん」

「これは兄さんの分ね」

湊はポケットからおみくじを取り出すと誠に渡した。

「俺に？ でも、自分で引かないと意味ないだろ」

「いいじゃない。ほらほら、開けてみて」

瞳にあおられ、誠はおみくじを開いた。

「あっ」

「どうだった？」

「俺は末吉だ」

「末吉ってどのくらいなの？」

瞳が言つと、湊は考えながら言つた。

「えっと、上から、大吉、中吉、小吉、吉、末吉、凶、大凶だったかな」

「下から三番目なんだ。あんまり良くないですね」

「なになに、学業は散々な目にあう。病は遅いが治る。恋愛は努力すればなる。お願い事は叶うものは叶う。なんか微妙だな」

「でも、怪我は治りそうだね。よかったね、兄さん」

「まあな」

そのあとは、二人が買ってきた屋台のものを食べ、元旦は終わった。

第五章 part 8：約束

誠が入院してしばらく経った。すでに学校は新学期が始まっている。

誠は未だ入院中なので、学校には通えない。

その変わり、湊が毎日病室に来て、学校から課題プリントを持ってくるそうだ。余計なことをする。

そして、誠の体も治りつつあった。

「やっと取り外されたか」

誠の両足に取り付けられていたギプスがようやく外された。安堵の息を漏れた。

「これで退院ですか？」

「いや、まだまだよ。これからリハビリをしなければ」

「リハビリ？」

「足を動かしてみなさい」

誠は言われたとおり足を上げようとした。しかし、力が少し入るくらいでまったく動かない。

「人の体は長いこと動かさなかったら神経が麻痺して動かなくなる

んだ。これからリハビリして少しずつ動くようにしなければなら
ない」

「そうですか……。でも、頑張れば早く治るんですね？」

「そうだが、頑張りすぎは良くないよ。毎日少しずつするのが一番
だ」

「……わかりました」

「あとで、担当の人が来るから詳しいことはその人に聞いてくれ。
では、頑張ってね」

先生は出て行くと、誠はベッドに深く横たわった。

「ああ、リハビリか。早く治して帰りたいな」

すると、ドアが開かれ湊が入ってきた。

「兄さん、気分はどう？ あれ、ギプス外れたの？」

湊は嬉しそうに誠の足を見た。

「ああ、さっき外されたんだ。でも、これからリハビリだって」

「そうか。でも、よかった。私もできるだけのことは手伝うからね」

「ありがとう、湊」

それからは湊の学校の話聞いた。ついでに知らない学校の宿題

プリントももらった。

しばらくして、リハビリの担当の看護婦が来た。

「清水くん。今からリハビリをしますよ」

誠は看護婦に言われたとおりにした。

ベッドの上に座り、足を宙に浮くようにした。もちろん、力が入らないのでぶらぶらしている。

「では、これからリハビリに入りますね。リハビリと言っても、清水くんは何もする必要はありません。するのは私です」

すると、看護婦は近くのパイプ椅子を持ってきて誠の前に座ると、誠の足首を掴み交互に上げ下げを繰り返した。

「毎日少しずつこれを繰り返します。こうすることによって少しずつ感覚が戻ってきます」

看護婦は優しい手つきでリハビリをしていった。誠はただ座ってされるだけである。

すると、湊が恐る恐る口を開いた。

「あ、あの、私にさせてもらえませんか？」

「え？」

誠は湊がいきなりよくわからないことを言って驚いてしまった。

「私にやらせてください。私も、兄さんの力になりたい」

「湊……」

それを聞いた看護婦は笑顔でうなずいた。

「いいですよ。やってみてください」

「はい」

湊は元気よく返事をする、看護婦と入れ替わりに誠の前に座り、誠の足首を掴んで看護婦がやったようにした。

「そう。そんな感じにゆっくりしてください。焦らず一回一回確実に」

「はい」

湊は集中してそれを繰り返した。

誠はつい笑みを浮かべてしまった。自分のためにここまでしてくれる妹がいる。こんな兄思いの妹はいないだろう。そう考えると嬉しく思えた。

そのあと、看護婦にいろいろ説明を受けた湊は、特別に誠のリハビリ担当となった。

普通は素人にさせないだろう。寛大な病院である。

誠は湊にリハビリを受けること数週間。少し足が動くようになった。前と比べれば、全体に力が入っていることがわかる。

それでも、ちょっとしか動かないが。どれもこれも湊のおかげである。

誠のリハビリをしながら、湊はそつと口を開いた。

「ねえ、兄さん。歩けるようになったら、まずどこに行きたい？」

「そつだな。……まずはお気に入りの場所かな」

「それって、兄さんがよく行ってる、あの学校の反対側の山のこと？」

「ああ。あそこに、またいきたい」

湊はそつと笑みを浮かべた。

「そ、その、……そときは、私も一緒じゃ、ダメかな？」

「もちろん、いいぜ。歩けるようになったら、一緒に行こう」

「うん」

湊は元気良くうなずき、嬉しそうに笑顔を見せた。

「よく頑張りましたね。この調子だと、予想以上に早く治るかもし

れませんね」

湊の協力もあり、第一段階のリハビリは予定よりも早く終わった。

「ありがとうございます」

湊は丁寧に頭を下げた。

「それでは次の段階に入ります。次はリハビリ室で行います」

誠は車椅子に乗り、その後ろを湊が押した。

看護婦の後ろを着いていって、リハビリ室の中に入った。

中にはいろいろなリハビリマシンがあった。誠のほかにもリハビリをしているのは多く、子供から大人まで、老若男女たくさんいた。

「清水くんは、今から自分の力でリハビリをしてもらいます」

「自分の力か。やっとリハビリらしくなってきたな」

「あまり無理しないようにね。それじゃあ、まずはこの台に座って」

誠の目の前には一人が座れるくらいの台とお湯の入った小さな湯船があった。

誠は言われたとおりに台に座った。すると、台は序々に高くなっていき、湯船のほうに向き直った。

看護婦は誠の足を持ち上げると湯船の中に足を入れた。そのとき足

がビリッと感じた。お湯の中では電気が通っているようだ。

「清水くんは、お湯の中に足を入れてゆっくりと足を持ち上げてください。これが次のリハビリです。お湯の中であると効果があるんですよ」

「なるほど。よし、やってやるぞ！」

誠はさっそく足に力を入れた。足はゆっくりと少しずつ足を持ち上げると、またお湯の中に戻した。その繰り返しである。

湊はその様子をじっと見守っていた。

「それを交互に十回繰り返し返してください。そのあとは休憩です。それを三回行ってください」

「はい」

誠は一回一回集中して行った。見た目は簡単かもしれないが、意外に大変な作業だった。

うまく力が入らない足を動かし、抵抗のある水の中で行う。これはきつかった。

だが、歩けるようになるためには、これを繰り返すしかない。

誠は集中し、ゆっくりと行った。

誠は頑張った結果、とうとうお湯の中でなくベッドの上でも足が動くようになった。

誠は前みたいに簡単に足を動かした。

「やったぜ。俺の足が戻ってきてるぞ」

「よかったね、兄さん」

「ああ」

「よく頑張りましたね。でも、まだリハビリは終わってませんよ」

「まだあるの？」

「次が最後の段階です。次は実際に歩く練習をします」

誠は言われたとおり、看護婦の後ろを着いていき、再びリハビリ室の中に入った。

次は、湯船ではなく、学校で見るとな太い鉄棒が二本並べてあった。下には倒れても大丈夫そうにマットが敷かれてある。

「清水くんは、この鉄棒の間に立って歩く練習をします。すぐに歩けるようになるわけではありません。一步一步焦らずゆっくりと歩いてください」

「わかりました」

誠は湊と看護婦に支えられながらその場に立つと、鉄棒を両方の

手で握った。そして、ゆっくりと足を前に進めた。

すると、片足に体重が乗った瞬間、力が入らなくなりその場に倒れてしまった。

「兄さん！」

「大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫です。もう一度……」

誠は二人に支えながら再び立ち上がると同じように行った。しかし、今回は歩こうとするたびに倒れるばかりであった。

「兄さん、大丈夫？」

湊が心配した表情で覗き込む。

「だ、大丈夫だ。ここまで来たんだ。さっさと歩けるようになって、退院してやる」

誠は体が小刻みに震えながらゆっくりと歩いた。しかし、片方の足に体重をかけるたびに転倒してしまう。

「ぐっ。……くそ……」

「に、兄さん、もうやめてよ。そんな無茶しても、早く治らないよ」

「そうですよ。焦らずゆっくりするのが1番ですから」

湊と看護婦は誠を支えると、床に座らせた。しかし、誠は鉄棒に手を伸ばすと再び歩き出そうとした。

「兄さん、やめてよ！」

湊は後ろから誠を抱きしめた。

「湊……」

「兄さん、無茶ばかりだよ。そんなことしても、意味ないよ」

それでも、誠はやめようとしないう。焦っているのか。それともただ歩きたいだけなのか。

湊には理解できなかった。

「ねえ、兄さん。どうしてそこまでするの？ 少しずつすればいいじゃない」

誠は出てきた汗を拭い、隣りで体を支えている湊を見ると口を開いた。

「……約束したから」

「え？」

「早く歩けるようになって、あの場所に一緒にいこうって……」

「兄さん……」

「俺、早く行きたいんだ。湊と一緒に、あそこに行きたいんだ。…話したいことも、見せたいものも、したいこともたくさんある。…だから、俺は、歩けるようになりたいんだ」

湊はにじみ出てくる涙を拭くと、誠の体をしっかりと抑えた。

「湊？」

「私も手伝うよ。だって、私たちは家族だもん。助け合っのは当たり前でしょ。…一緒にいこうね、兄さん」

誠はコクツとわずくと、湊と一緒にゆっくりと歩き始めた。

第五章 part 9：好意

誠のリハビリが始まり、その間、湊は毎日手伝いに来た。

誠の体を支え、ゆっくりと歩いていく。

「頑張つて、兄さん」

「ああ」

前と比べたら随分歩けるようになった。最初は転倒ばかりだったが、今では数メートルは自力で歩ける。

誠は治っていることを自覚し、嬉しさがこみ上げてくる。

少しずつでも、歩けるようになることは湊との約束も近づくことになるのだ。

「一緒にいこうな、湊」

リハビリをしない間は病室でゆっくりと過ごす。たまに学校からの面倒なプリントもする。

誠はベッドで横になっていた。隣には、椅子に座って誠を看病する湊がいる。

湊は本当によくやってくれた。家から退屈しないものを持ってきた

り、果物を切って食べさせてくれたり。

そんなことを毎日のようにするのは大変だろう。大好きな部活も休んでいるようだ。

「湊、吹奏楽部のほうはいいのか？ 大会とか近いんじゃないの？」

「大丈夫だよ。今のところ大会はないし」

「そうか。それならいいんだけど」

「うん。だから、兄さんは怪我を早く治すことだけを考えて。私も協力するから」

「ああ、ありがとう」

湊はニコツと笑顔を見せた。

誠はこのとき、信じられないことを聞かされるとは思いもしなかった。

学校にいるとき、湊は大いに頭を悩まされていた。

誠に大会はないと言ったが、近いうちに大事な大会がある。

湊は先輩たちに部活に来るように言われているが無視して休んでいた。

しょうじき、今は大会よりも誠の体のほうが優先である。でも、今自分が抜けると、フルートは一人かけてしまう。

人数はぎりぎりなのだ。それに、自分は中学のときに最優秀賞を獲得しているので、みんなから期待されている。

でも、誠のことを気にながら楽器は吹けない。

やはり大会は諦めるしかない。

湊は決心した。

「今度の大会は諦めよう……」

湊は放課後、顧問のもとに向かうと、そのことを告げた。

そしてそれを、瞳にも話した。

「そ、それ本当なの？」

教室で一緒にお弁当を食べているときに、瞳は驚嘆な声を上げた。

「うん。仕方ないよ。だから、このことは兄さんには内緒にしてね」

「でも、湊頑張ってきたじゃない。この大会のために今まで頑張ってきたんでしょ？」

「うん。1番大きな大会だからね。でもね、もういいの。今は、ずっと兄さんのもとにいたい。兄さん今すごく頑張ってるんだよ。けっこう歩けるようになってるんだから。先生も驚いてたよ。それ

でね」

「湊！」

瞳は立ち上がって大きな声を出した。その場にいる生徒たちが何事かと思い見ている。

「湊はそれでいいの？　いくら兄妹だからって、普通そこまでしないよ。お兄さんだって、絶対喜ばないよ」

湊は箸を置くとうつむいた。

「……私だって、大会には出たいよ。中学みたいに、また賞を取りたい。でも、兄さんがあなっただのは私のせいなんだよ？　なのに、ほったらかして自分だけ好きなことなんてできないよ……」

「湊……」

「だから、いいの。私は、兄さんがよければそれで……」

湊は立ち上がると教室から出て行った。瞳はその後ろ姿をじっと見ていた。

「湊……。私、そんなことしても、お兄さんは怒るだけだと思うよ」

瞳は知っていた。湊がどれだけ努力してきたか。毎日口が痛くなっても拭き続ける湊は、誰よりも頑張ってきた。ずっと瞳はそばで見えていたから。

その努力を、無駄にさせたくない。

「じゅめんね、湊」

誠は何もせず、ゆつたりと寝ていた。

すると、ドアが開かれる音がした。

「おつ、湊か」

しかし、そこにいたのは湊ではなく、瞳だった。

「あれ？ 湊は一緒じゃないのか。珍しいな、お前が一人で来るなんて。何もあげられないぞ」

瞳はいつもの元気はなく、落ち込んでいるのか、肩が下がっていた。そんな状態でそつと口を開いた。

「ねえ、お兄さんは知ってるんですか？」

「え？ 何が？」

「湊が大会を欠場したことです」

「は？ 何言ってるんだよ。大会は今のところないって湊言ってたぞ」

「そんなのウソに決まってるます。湊優しいもん。お兄さんのこと気遣って大会は欠場するみたいなんです」

「そ、そんなこと知らないぞ」

「だったら欠場しないように言ってくださいよ。湊、この大会のために頑張ってきたんです。今度は一番大きな大会で、また最優秀賞取るんだって毎日遅くまで練習してたんですから」

「そ、そうだったのか……」

「……私が言いたいのとはそれだけです。それじゃ、お大事に」

瞳は部屋から出ようとした。そしてドアを閉める直前で誠に向き直った。

「お兄さん。悪いけど、私、約束守れそうにないです……。ごめんなさい……」

「え？」

瞳は最後にそう言い残し、ドアを閉めてしまった。

「どういうことだ？ それよりも、湊のやつ……」

「具合はどう？ 兄さん」

今日も湊はいつものように来た。可愛らしい笑みを浮かべ、元気に振舞っている。

その心の奥では何を考えているのだろうか。

「湊。ちょっと話があるんだけど」

「ん？　なに、兄さん」

湊はカバンを置くと椅子に座った。

「お前、……大会欠場するのか？」

「え？」

湊は予想外の言葉に動揺を隠せなかった。

「……そ、それ、誰から聞いたの？」

「……瞳」

湊はぎゅっと拳を握った。心の奥では怒りで煮えたぎっていた。

瞳……、どうしてそんな余計なことを……。

「湊。もうここには来なくていい。大会があるなら、今からでも練習して出るんだ」

湊はぎゅっと唇を噛んだ。

予想した通りだった。言えばそんなことをいうだろうと思っていた。誠は優しいから。

「大丈夫だよ、兄さん。気にしないで。私は兄さんの看病がしたい

の。大会だって、まだ来年あるんだし」

「そういうことじゃないだろ！」

誠のいきなりの怒声に、湊は口を閉ざした。

「に、兄さん……」

「お前が休むことによってみんなが迷惑してるんだ。部活はみんなでするもんだ。自分勝手な行動がどれほど困らせるのか分かってい
るのか」

誠の言葉で湊は肩を落としてうつむいた。

「……ごめん。兄さん」

誠は小さく笑みを浮かべると、湊の頭を優しく撫でた。

「頑張れ、湊。お前なら、きっといい演奏ができるから」

湊は顔を上げると、嬉しそうにうなずいた。

「うん」

次の日から、湊は毎日吹奏楽部の練習に顔を出し、フルートの向上に励んだ。昼休みまでも使い、遅れた分を取り戻そうと必死だった。

あれから瞳とは一言も話してはいない。瞳は湊を避けていた。

湊はそれで構わなかった。心の奥では、瞳に多少の怒りを覚えていたから。

瞳が言わなければ、今ごろは誠のそばにいたはず。大好きな兄のもとに。

湊は昼休み、屋上で練習をしていた。ちょっと肌寒いが、一番の練習場所だ。

綺麗な音を奏で、風に乗って校庭に響き渡る。その音を、近くにいたものは耳を傾き聞いていた。

その中に瞳もいた。瞳は屋上の入り口で見つからないように隠れ、その様子を見ていた。

「ごめん、湊……」

大会当日。

湊たち、桜楼学園吹奏楽部の生徒は、ステージに立ち準備を始めた。

湊は椅子と楽譜の準備を終えると、フルートを取り出してチューニングを始めた。

少し緊張していた。この大会を目指していたことは事実。しょうじき、また賞を取りたい。

しかし、それには練習量が少なすぎた。もっと頑張れば良かったかもしれない。

そうすれば、今こんなに緊張もせず、リラックスして望めただろう。

湊はふつと息を吐いた。今回は諦めよう……。

そのときだ。

「湊！　頑張れ！」

湊ははつと顔を上げて観客席のほうを見た。

「兄さん……」

一番後ろには、松葉杖を持って立っている誠の姿があった。

「頑張れ、湊！　お前なら絶対できるぞ！」

その様子を見て、周りの人たちはクスクスと笑い始めた。すぐに警備員がきて、誠は注意された。

湊はぎゅっとフルートを握むと小さく笑みを浮かべた。

「来てくれたんだ……。ありがとう、兄さん」

「これより、桜楼学園吹奏楽部の演奏を始めます」

湊は一つ深呼吸をしてフルートを構えた。

もう、緊張はしていなかった。

「最優秀賞は、桜楼学園吹奏楽部、清水湊さん」

「はい」

そのとき満場の拍手が湊に送られた。湊はステージの中央に立つと賞状とタテを貰った。

湊は観客席に振り向くと、大きく手を振った。

「兄さん！」

誠も大きく手を振り返した。

「よくやったぞ！ 湊！」

大会も終わり、誠と湊は一緒に病院にむかって帰っていた。

「わざわざ来てくれてありがとね、兄さん。外出許可は下りたの？」

「いや、抜け出した」

「え！ そんなことしていいの？」

「いいんだよ。湊の大事な大会に、のん気に寝てられるか」

「ふふ、ありがとう」

「あつ、そうだ。写真撮らせてくれよ。せっかく賞を取ったんだからな」

「うん」

誠は携帯を取り出し、湊は少し離れて賞状とタテを持ってピースした。

「いくぞ」

誠は満面の笑みを浮かべ、嬉しそうにしている湊を撮った。

そのとき、誠はドキッとした。

心臓？ いや、心がぎゅっと締め付けられ、鼓動が激しく高鳴っている。

「綺麗に撮れた？ ……兄さん、どうしたの？」

「あ、いや、なんでもない」

「そう」

湊は軽く笑い、誠の手を取って歩き始めた。

そこで誠ははっきりとわかった。

やっぱり俺は、湊が好きだ……。

第五章 part 10：告白

誠はベッドの上で自分の胸を抑えていた。

さつきから激しく脈打ち、緊張したように締め付けられている感じがする。息苦しさを覚えるほどだ。

頭の中では湊のことばかり考えていた。

可愛らしい笑顔、幸せそうな表情、名前を呼ぶ姿、思い浮かべるたびに自分の鼓動は高鳴っていく。

誠は自分のこの想いに確信めいていた。

やはり自分は、湊が好きだ。

もちろん家族としても、だが、一人の女としても好きだ。

どうしてもなく込み上げてくるこの想い。どうやっても抑えることができない。

湊が兄妹だということはわかっている。だが、それは世間から見た話だ。

実際、誠と湊は血も繋がりも何もない。だから、自分が湊のことを好きになってもいいはずだ。

いや、たとえ兄妹だったとしても、好きになっっていたかもしれない……。

誠はぐつと両手を握り締めるとうずくまった。

「湊……」

湊は教室で席につきながらぼーっと外を眺めていた。

考えているのは誠のことばかり。大会が終わり、当分は時間ができる。

これからは十分に誠の世話ができるはずだ。少しでも早くケガが治り、退院してまた一緒に住みたい。

そこで湊はふと思った。

なぜそこまでしているのだろうか。なぜそこまで誠のことを考え、協力しようとしているのだろうか。わからなかった。

もしかして、まだ責任を感じているのだろうか。いや、それはもうないはず。

誠は優しいから許してくれた。それに、少なからず責任を感じていようと、あのときのことはすでに振り切っている。

ではこの気持ちはなんだろうか。ふと思えば誠のことを考えている。考えようと思えば、一日中考えられるだろう。

それに、誠の笑顔や優しさに包まれるたびにドキドキしてしまう。

もしかして、この感情は……。

「私、兄さんのこと……」

湊は首を振って否定した。

「そんなことないよね。私たち兄妹だもん」

湊は軽く息を吐いて授業に集中した。

湊が病院に来るとリハビリが始まる。リハビリ室に向かい、ゆっくりと歩く練習をする。

「頑張って、兄さん」

そのとき、湊の手が、鉄棒を掴んでいる誠の手に触れた。温かく、すべすべした感触が伝わる。

それだけで誠はドキドキしていた。そしてばつと湊の手から逃れた。

「どうしたの？ 兄さん」

「あ、いや、なんでもない」

誠は再び何事もないように歩き出した。そこで湊は気づいた。

「あ、手……触れないほうが良かった？」

湊は少し頬を染めながら謝ってくる。誠は手を振って否定した。

「い、いや、そんなことないよ。ちょ、ちょっと驚いただけだ」

そう言って誠は再び歩き出した。

そんな姿を、湊はそっと見ていた。そして自分の手に触れた。

湊も誠の手に触れ、ドキドキしていた。兄の手に触れると抑えきれないほど激しく鼓動が脈打つ。

湊は自分の気持ちに気づいた。

もしかしたら……。

2人は病室に戻り、誠はベッドの上で横になっていた。

誠はベッドの上でそわそわしていた。

しょうじきやばい。こんなにもドキドキするとは思わなかった。

前はそんなことなかったのだが。やはり、自分の本当の気持ちに気づいたからだろう。つい意識してしまう。

「兄さん、タオル持って来たよ。汗拭いてあげるから服脱いで」

「はあ？　そ、そんなことできるわけないだろ！」

「え？ いつも体拭いてたじゃない。ほら、早くしないと風邪引くよ」

湊は無理に誠の服を脱がすと、お湯で濡らしたタオルで体を拭き始めた。

「兄さん、気持ちいい？」

「あ、ああ……」

しょうじきいえば気持ち良すぎる。優しい手触りが心地良く、程よい感触に包まれ吐息がつい漏れてしまう。

なにより自分の好きな人にしてもらうとその効果は何倍にも倍増されてしまう。

「痒いところはない？」

「ああ、大丈夫だよ」

そして誠の上半身や足を拭き終え、一段落した。

「さっき先生に聞いたんだけど、近いうちに退院できるって言ってたよ。十分歩けるようになったし、自宅からの通院に変わるかもって」

「そうか。よかった。これで元に戻るのか」

「うん。本当に良かった」

湊の目にはうつすらと涙が浮かんでいた。それを手で軽く拭き取る。

「なんだよ、泣くことないだろ」

誠は湊の頭を軽く撫でた。

「う、うん。そうだね。ごめんね。退院するときは来るから一緒に帰ろうね」

「ああ」

そしてとうとう退院日が来た。入院してから一ヶ月以上お世話になった。

誠と湊は病院から一緒に帰り、自宅へと着いた。

「ああ、久しぶりの我が家だ。懐かしいな」

「うん。兄さんがいない間ちゃんと掃除してたから汚くはないよ。まずはご飯にしようか」

テーブルの上にはたくさんのごちそうが並べてあった。

「今日は兄さんの好きなものばかり作ったからね。たくさん食べてね」

「おお！ ありがとう、湊。いただきます」

誠は片っ端からどんどん自分の口へと運んでいく。

「どう？ おいしい？」

「おう。めっちゃうまいぞ」

「よかった」

湊は嬉しそうに笑みを浮かべた。その表情を見て、誠はまたドキツとした。

「どうしたの？ 兄さん」

「ああ、いや、別に」

誠は食べることはかり考えることにした。

誠は自室のベッドに横になった。久しぶりの自分ベッドはやはりいい。

病院のベッドと違い、自分のは寝やすい。今日はいつもよりぐっすり寝れそうだ。

そのとき、ゆっくりとドアが開かれた。

「に、兄さん。……まだ、起きてる？」

「ん？ なんだよ、湊」

湊の顔は赤くなっており、恥ずかしそうに口を開いた。

「え、えと、その、ね、……また一緒に寝ちゃダメかな……？」

「え？」

「い、いやならいいんだよ。その……、前みたいに一緒に寝たくて……。兄さんが入院してる間、私ずっと一人で、寂しくて。けど今は、兄さんが帰ってきて、それで……、その……」

湊はうつむきながら突っ立っていた。誠は笑みを浮かべると、掛け布団を上げた。

「おいで、湊」

湊は嬉しそうに顔を上げ、誠の布団の中に潜り込んだ。

「へへ、あったかい。兄さんの温もり感じるよ」

「そうか」

2人はクスクスと笑い合った。

「明日から学校一緒に行こうね。ずっと楽しみにしてたんだから」

「ああ。一緒に行こう。湊」

湊はそっと目を閉じると、誠の胸の中にうずくまり眠りについた。

誠は湊を優しく包むと、そっと髪を撫でた。

今自分の中に湊がいる。しょうじき、ずっとドキドキしていた。愛しき人が、そばにいる。

誠はそれだけで幸せだった……。

今日から誠は学校に復帰である。手には松葉杖が握られてあるが、いつものように家を出た。

「あれ？ 瞳は来ないのか？」

誠は背伸びをしながら湊に訊く。

「え、えと、瞳は用事があるから先に行くって」

湊はへらへらと笑って誤魔化した。誠は納得してくれた。

瞳とはまだ口もきいておらず、会ってもいなかった。おそらくケンカ中ということになるだろう。

だが、湊はそのほうがよかった。大好きな兄と、2人だけになれるのだから。

放課後になると、湊とリハビリついでに商店街で買い物をして家に帰っていく。

誰もいない通学路を、2人の足音だけが響き渡り、凍てつくような風が吹き乱れていた。

周りの桜の木々は花を咲かずに、寂しい枝だけの格好をしていた。すでに日は暮れ、薄暗い色に包まれていた。

「桜はまだ咲かないかな。春になると、ここは桜で埋め尽くされるんだけどね」

湊は重いであろう誠のカバンと自分のカバン、そしてさっき買った買い物袋を提げ歩いていく。

誠は松葉杖を持って隣を歩いていく。

だんだんと情けなくなってきた。兄のくせに、男のくせに、何も出来ず世話になりっぱなしの自分。

早く治って、湊に恩返しをしたい。この感謝と嬉しさを、いっぱい表現したかった。

「兄さん、来年も一緒に学校行こうね」

湊は誠のほうを振り向き、満面の笑顔で言ってきた。そこで誠はまたドキッとした。

まただ。また心臓が高鳴り、苦しいほど締め付けてきた。

誠はごくつと唾を飲み込むと、その場に立ち止まった。

「湊」

数歩先を歩いていた湊は振り返った。

「なに？ 兄さん」

誠は松葉杖ごしからぎゅっと拳に力を込めた。

そして想いをしょじきにぶつけた。

「……湊。……俺、お前が好きだ」

「え？」

誠の突然の告白に、湊の表情が一瞬で変わった。

いつもの明るい表情から一遍、驚きと呆然の表情へと変わる。

誠は続けた。

「俺、湊のことが好きだ。兄妹として、家族としてではなく、純粹にお前のことが好きなんだ。だから、だから……」

誠の言葉は震えていた。しっかりと言えたかわからないが、通じたとは思う。

ただ、どうしてもこの想いを伝えなかった。伝えなければ後悔しそうで。

すると、湊の目から一筋の涙が流れたのに気づいた。その量が増え、ぱたぱたと地面に落ちていく。

「み、湊……？」

誠は少し焦った。もしかして、困らせたのだろうか。湊は袖で溢れる涙を拭いて顔を上げた。

「……ほんとに？ 今の言葉、本当なの？」

「湊？」

「嘘じゃないよね？ 冗談なんかじゃないんだよね？」

湊は嬉しそうな顔をしており、目から溢れる涙が頬を伝っていた。声もかすれ、必死に訊いて来る。

そこで誠は気づいた。もしかして、湊も……。

誠は湊を見つめ、はっきりとうなずいた。

「ああ、本気だ」

「わかってるの？ 私たち兄妹だよ？ それでも、本気って言えるの？」

誠は一つ息を吐いた。そして自信に満ち溢れた心で言った。

「俺は、湊が好きだ」

そのとき、湊がカバンと袋をその場に捨て、勢いよく抱きついてきた。

「兄さん！」

小さな体が誠にぶつかる。湊は力強く、そして温かく優しく誠を抱きしめた。

「私も、私も……兄さんが好きだよ。ずっと、ずっと好きだった。……一番、好きだったんだよ」

涙で汚れた顔を誠の制服に押しつけながら、湊は自分の想いを打ち明けた。

誠は松葉杖をその場に放り投げると、華奢な体を包み、優しく抱きしめた。

誠の目にも、止めることができない歓喜の涙が溢れていた。

「湊……ありがとう。……俺、絶対幸せにするから。……守ってあげるから」

「うん……うん……」

「俺、これからも、湊を好きでいていいんだよね？　ずっと、好きでいいんだよね？」

「うん。……私も、ずっと兄さんを好きでいるから」

「ああ……」

2人は離れようとせず、少しでもそばにいようとぎっく抱き合った。

誠は安堵した。本当に良かった。きつかった心がやっと解放された気分で、なによりこうなったから嬉しかった。

自分の想いを伝えるのがこんなに難しく、そして怖かったことを初めて知った。

湊はふるふると小刻みに体が震えていた。

嬉しかった。本当に嬉しかった。好きだって言われたとき、刹那のように、体が反応して過敏に歓喜がこみ上げてきた。

そのときやっと証明された。自分は兄が好きだと。この想いに、嘘はないと。

溢れ出てくる涙が止まらない。これを望んでいたから。こうなることを、ずっと夢みていたから。

誠の温もりを感じ、その温かさに、今の自分の心は癒されていた。

「兄さん……」

湊はそつと顔を上げた。自分の一番好きな人を見つめる。

「湊……」

2人はそつと目を閉じた。そして暗い中、月の光だけが2人を照らし、その中で、そつと顔を近づけ唇を重ねり合わせた。

この幸せが一生続くと思っていた。これから、2人の人生が歩み始めた心から思った。

だが、2人には思いもしない出来事が待っていた……。。

第五章 part 11：努力

あの告白した夜以来、2人は付き合い始めた。

今では兄妹としてではなく、恋人そして一緒にいる。

何をするにも一緒に、最高の日々を送っていた。

「はい、兄さん」

昼休みになると、湊は自分が作ったお弁当を誠に食べさせようとした。

おいしそうな焦げ目のついた卵焼きを摘んだ箸が、誠の口に近づく。

誠は口を開けて中に含んだ。

「おいしい？ 兄さん」

「うん。うまい。さすが湊だな」

「へへ、ありがと」

2人は笑顔を浮かべ、楽しそうにしていた。

だが、この幸せは、呆気なく崩れ落ちてしまうのだった。

誠は教室に戻ると、一瞬でみんなの様子がおかしいことに気づいた。

引き戸を開けた瞬間、騒がしかった雰囲気が一気に冷め、友達と話すのをやめるとじつと何人かの生徒が誠を見ていた。

「なんだ？」

誠は気にせず自分の机に向かった。

そのとき、自分の目を疑い、その場に立ち止まった。

机の上にはペンで落書きしてあった。ロリコン。キモイ。変態兄妹。バカ。死ね。

誠の体は震えていた。力を込めて抑えようとするが言うことをきかず激しさを増していく。

心の奥底から恐怖がこみ上げてきた。嫌な汗が、こめかみを流れるのがわかった。

「妹と付き合うとかおかしいよな……」

誰かがそつと陰口を叩いた。誠は信じられないような気持ちでみんなを見渡す。

みんなの目が怖かった。人の目、心はここまで変わるものなのだろうか。

そこではつと嫌な予感がした。妙な胸騒ぎがする。

「湊……」

湊は教室で自分の机に座りながらじっとしていた。耐えるようにぐっと我慢し、拳を握っている。

その周りには誰もおらず、みなわざとらしく数メートル離れていた。

「兄妹で付き合つとどうかしてるよね」

「ありえないでしょ。キモすぎない？」

「つーか兄妹で付き合っているの？ 法律違反じゃない？」

「頭おかしいんだぜ。近づいたら絶対バカになる」

「学校来んなよな。家で大好きな兄といちゃいちゃしてろよ」

「やりすぎて子供産むなよ」

そこでみんなが笑い始めた。その笑い声が耳に届き、そして心に響いてくる。

湊は拳を握り締め、じっと耐えていた。

みんなの声が耳にはっきりと聞こえてくる。苦しく、つらく、重く心に押し掛かってくる。

好きな人と一緒にいるのがこんなにもいけないことなのだろうか。

湊は涙が出るのを必死に抑えていた。

その様子をただ一人、瞳は口を塞いだままじっと見ていた。

「湊……」

放課後、誠と湊は一緒に帰っていた。

それを見た生徒たちは聞こえないように小さな声で囁く。内容は聞こえなくても容易に理解できる。

2人はうつむきながら無言で歩いていた。いつのまにか学校中に広まっているようだ。

ただ兄妹というだけでこんなにも世間は許さない。その怖さを身に染みるほどわかった。

2人はできるだけ早歩きで学校を去り、みんながいないところまで来ると足を止めた。

「クソ！」

誠は松葉杖を投げ捨てその場に座りこんだ。

「なんでこうなるんだよ！ 何か悪いことしたかよ！」

「兄さん……」

湊は悲しげな瞳で誠を見つめる。

「俺たちがいったい何したっていうんだ。みんなに迷惑かけることしたかよ。好きな人と一緒にいちゃいけないのかよ。恋愛は自由だ。誰かが縛るもんじゃない。定めるもんじゃない。……そのはずなのに……」

湊はそつと悲しげな表情で誠を見た。

誠の体は震えていた。悔しそうに、苦しそうに。

世間の声は想像以上に強く、そして冷酷なものだった。自分たちの力ではどうしようもできない。立ちほだかる敵は大きかった。

湊は一つため息を吐いた。

思い始めていたことを言おうと思った。そしてそつと重い口を開き、震える声で言った。

「兄さん……別れよ」

「え？」

誠ははつと顔を上げて湊を見た。

湊の目はじつと誠の目を捉えていた。その表情は真剣そのものである。

湊はそつと前のほうを歩き、周りの木々を見つめながら言った。

「私たち、もう別れたほうがいいよ。このままじゃ、ずっと苦しむことになるよ」

「で、でも、湊……」

2人が付き合ってまだ一週間も経っていない。あの幸せがこんなにも早くなくなるなんて。

どう考えても早すぎる。ようやくスタートに立ったのに、たどり着いたのはゴールではなく落とし穴だ。

まだ、まだ2人は何もしていない。

湊は誠に背を向けながら言った。

「仕方がないよ。これは、仕方がないこと。このまま一生苦しむよりマシでしょ？ それなら、別れたほうがいいよ」

「ま、待てよ、湊。お前、俺のこと嫌いなのか？ もう俺のこと、好きでなくなったのか？」

「そんなことない！」

湊が大きな声を上げた。誠の体が一瞬びくつく。

「……そんなことない。私……兄さんのこと、大好きだよ。すごく好きだよ。だけど、だけど……」

湊はうつみき、口を閉ざした。誠は立ち上がると、湊に近づこうとした。

「来ないで！」

湊の声で誠は立ち止まる。

「み、湊……」

「……もう、終わりにしよう。こうなるのが運命だったんだよ。もう……」

湊はそつと振り返った。そして目から涙を流し、いつもの可愛らしい笑顔で言った。

「兄さんが苦しむとこ、見たくないもん」

そのとき、誠の目からも涙が溢れてきた。熱い滴が頬を伝い流れていく。

これは心の涙なのだろうか。湊のことが好きなように、締め付けられるような痛みより、恐怖で縛られている痛みが込み上げてくる。激しくなる動揺が抑えきれない。

もう、終わり？ 幸せだった日々は、一生続けたと思った幸福は、ここで途絶えるのか？

「湊……湊！」

「ごめんね、兄さん。……さようなら」

湊はカバンを持つと、走って行ってしまった。

誠は手を伸ばした。だが、湊は待ってくれず、自分の前から姿を消してしまった。

まるで、長く、暗いトンネルの中、誠を置き、湊はその中に入り、さまよい続けるように……。

「う、うそだろ……。こんなのとてありかよ……。こんなのとて……。うああああ！」

誠はその場に崩れ落ちると、心の動揺をかき消すために泣き叫んだ。

湊と別れ数日経った。

誠はあの日から学校行かず、病院のリハビリ室にいた。そこで一日ぼーとして過ごす。それが日課になった。

湊とはあれから一度も話していない。食事も別々で、湊は大半部屋で閉じこもっていた。

ときどきその部屋からすすり泣く声も聞こえてくる。

誠は今スカイが欲しいと心から思った。スカイがあれば、どんなに幸せになるだろうか。

こんな世間の声なんか、簡単に消すことができるはず。そしてすぐに湊と再び幸せな時間が過ごせるはず。

だが、そんなことはもうできない。スカイは一回。どうあがいても、無理なのだ。

「父さん、母さん……。俺、これからどうしたらいいんだ？」

誠はうつむき、手を握り締め、その上に頭を置いて考え込んだ。

そのとき、前の方で声が聞こえた。

「もう、嫌だ！ こんなことしても歩けないんだ！ スカイを使ったほうがいいよ！」

誠は声がしたほうを顔を上げそっと見た。

そこには一人の男の子が場に座り込みわめいていた。隣りでは若い看護婦が困った表情をしている。

男の子の足も、誠と同じように歩けないようで、リハビリをしているようだ。

「もう少しだから頑張ってみようよ。きっと歩けるようになるよ」

看護婦が優しく声をかける。だが、男の子にはきかなかった。

「全然歩けないじゃん。こんなきつい思いするならスカイを使ったほうがいいよ」

「でも、そんなことで使っているの？　これからもっと大切なことがあるかもしれないのよ」

「いいんだよ。僕のスカイなんだから。これで簡単に歩けるようにするよ」

男の子は手を握ると願いごとを唱えようとした。そこで誠は慌てて男の子の前に倒れ、止めようとした。

「ちょっとストップ！　スカイを使うのはまだ早いぞ！」

男の子と看護婦は呆然とした表情で誠を見ていた。

「お前誰？」

「俺の名前は誠だ。君は？」

「……晃あかり」

「晃くんね。君はスカイを使うには早すぎるぞ。これから何が起るかわからないんだからな」

「余計なお世話だ！　僕のスカイなんだから好きに使うのは僕の勝手だろ！」

「よく考える。今こんなことに使えばお前は絶対に後悔する。これからたくさんの苦難が待っているはずだ。学校のテスト、高校受験、大会、他にもたくさん。スカイは一回しか使えない。なのに、こんなところで使っちゃっていいの？」

晃は少しうつむき、黙り込んでしまった。誠は晃の頭を軽く掴んだ。

「いいか。スカイは簡単に願いを叶える便利なものだ。でもな、願いごとは簡単には叶えてはいけないんだ。願いごとは努力して手に入れることに意味があるんだ。歩けないなら頑張つてリハビリする。したいことがあるならそれにむかって努力する。夢があるならそれにむかって対策を考える。人は無限の可能性がある。努力するから意味があるんだ」

晃は顔を上げると、こくつとうなずいた。

「わかった。僕、頑張つて努力する」

晃は立ち上がると鉄棒を掴みリハビリを行った。

誠はそつと笑みを浮かべた。そしてそこではつと気づいた。

もしかして、スカイつてそのためにあるんじゃないだろうか。

スカイはこの島で生まれた人しか使えない神秘の力。一生に一度使える魔法。

なぜそんなものがあるのか。それには隠された意味があるのかもしれない。

誠はそつと立ち上がるともう一つある鉄棒を掴んだ。

あんなこと言ったが、自分に言い聞かせているようにも感じた。

歩きたいならリハビリをする。やりたいこと、望みたいことがある
ば、それにむかって努力する。

誠には湊との約束がある。

歩けるようになったら一緒に誠のお気に入り場所であるあの山を
登ること。

それが今の誠の叶えたい願いである。

そして、再び元に戻りたい。

この好きだという感情は簡単には消すことができない。

誠は松葉杖を放り投げ、ぎゅっと鉄棒を掴むと、リハビリを始め
た。

「待ってる、湊……」

第五章 part 12：恋愛

誠は学校をサボり、松葉杖を掴み、ある場所へと歩いていった。

肌寒い風が吹いているが、雲一つない空から照らす太陽の光が暖かく、程よい気候だった。

誠は小さな山を登り、泉の脇を通る。そして、雑木林の奥へと歩いていった。

荒れ果てた道らしき道を進み、ある場所へと辿り着いた。

目の前には木の枝で作られた墓がある。

誠は泉の墓に来たのだ。

「久しぶりだな、泉……」

誠はそつと手を合わせ、目を閉じた。そして、そのまま呟いた。

「泉、お前の想いが込められた手紙、どんな気分で書いたんだ？
そのときの俺は、よくわからなかったけど、今ならわかる」

誠は目を開けると、泉の墓に触れた。

「泉。お前はずっと俺を支えてくれたな。俺が面倒見てたけど、逆に見られてたかもな。……ありがと、泉」

誠は泉の墓をしばらく見て、その場を去っていった。

次に向かったのは学校の屋上である。

授業中の生徒たちにはれないよう忍び込み、ゆっくりと階段を登っていつて着いた。

鉄格子のドアを開けた途端、ふわつとした風が襲いかかり、目の前の景色を輝かせた。

スカイブルーが広がり、街を一望できるこの場所は最高だ。

誠は真ん中に立つと、そつと顔を上げて空を眺めた。

「香。お前は、今何してるんだ？ 頑張つて獣医を目指してるのかな。お前は誰よりも友達を大切にしてきたよな。心が読めるつても、ちよつと考えもんだな。……お前は俺の秘密を知った。あの別れるとき、俺の心を読んで……。でも、お前は悲しい顔も、悔しい顔もせず笑つてた。俺もその強い心を、見習わないとな。……。ありがと」

誠は空を見て軽く笑みを浮かべるとその場を後にした。

次は公園である。

茜と出会い、そして別れた公園。

今人は誰もいない。いるのは誠だけだった。誠はブランコに座った。

「茜。お前は大変だったな。小さな体になって、それでもまたアイドルになって。ま、お前がただのガキじゃないことは薄々わかってたけどな。でも、楽しい夏休みだったぜ」

そのとき、小さな女の子と母親が公園に入ってきた。女の子はお母さんの手を引っ張り、遊ぼうと言っている。

そんな様子を見て、誠は優しく笑みを浮かべた。

「茜。お前は歌で想いを伝えたな。伝えたかったことを、お前はちゃんと伝えた。……ありがとう」

誠はブランコから立ち上がると、次へと向かった。

最後に来たのは神社である。

雫が住んでいた神社。今では誰もおらず、人気のない場所となった。いるのは白い鳩だけである。

誠は本堂の前に歩き、手を叩いてお参りした。

「雫。お前は今幸せか？ あっちで幸せに過ごしてるか？ 俺は今から幸せになる。いや、なつてほしいの間違いかな。お前は電話で伝えた。あのとき、お前は幸せそうな顔してたのかな」

誠は目を開けるとそつと本堂を見上げた。

「雫……ありがとう」

誠はゆっくりとその場から出て行った。

誠は家に帰り着いた。時刻は午後5時を回った。

もうすぐ湊が帰って来る。誠はソファに深く座って待っていた。

みんなの思い出の場所を訪れ、今わかった気がした。

自分の想いを伝えるのは簡単なことではない。怖く、苦しく、そして勇気がいる。

でも、それを乗り越えれば、知りたかった答えが見えてくる。

それは努力したから。スカイに頼らず、自分の力で乗り越えた。

誠はふっと息を吐いて天井を見上げた。

「みんなから勇気、貰ったよ……。俺も、手に入れたのなら努力しないとな」

そのとき、玄関が開く音がした。

「ただいま……」

元気のない声が耳に届く。湊が帰ってきた。

「お帰り、湊」

「うん……。ちょっと待ってね。今ご飯作るから」

湊はカバンを置き、エプロンを着けると台所に立とうとした。

「待て、湊」

誠は湊の手を掴んだ。

「兄さん……？」

「湊、話があるんだ」

湊は何か言いたそうな表情をしていたが、濁った瞳でそつとうなずいた。

2人は外に出ると、桜並木の中を歩いた。

今桜は咲いていないが、小さな蕾だけが生っていた。陽は暮れかけており、辺りは暗くなっていた。

前を誠が歩き、その後ろを湊が着いて行っていた。

「兄さん、話ってなに？」

湊の元気ない声が届く。誠は立ち止まると振り返った。

「湊は忘れたと思うけど、ここは俺たちの思い出の場所なんだ」

「思い出の場所？」

誠はうなずいた。そして一つの古びたベンチを指した。ペンキがはがれ、今にも壊れそうなベンチである。

「俺たちがまだ小学生のころ、そのベンチでお前は泣いてたんだぜ。迷子になって、家がわからずな」

「え、うそ」

「本当だよ。家はすぐ近くなのに、わーわー泣いて。俺は必死で探してたのに、こんなところにいるからな」

「私、そんなこと覚えてないよ」

「それでな、俺がお前を見つけたとき、お前はこう言っただぜ。

『私、兄さんのお嫁さんになる』って」

「私、そんなこと言ったの？」

湊は可笑しそうに小さく笑った。

「ま、そのときは子供のいうことだからな。俺も気にしなかったけど、お前は本気だったぞ。毎日好きって言って」

「へへ、そんなこと言ってたんだ。ちよつと恥ずかしいな」

「最初に告白したのは湊、お前からだった。でも、俺も告白した」

湊は少し頬を染め小さくうなずいた。

「うん。……嬉しかったよ。本当に。でも、私たちは一緒になれないよ。だって、兄妹だもん。……どうしようもできない繋がりなんだから」

「それは、世間が言っていることだ。本当のことを言えば、俺とお前は何の繋がりもないもない」

「そう思ってるのは兄さんだけだよ。みんな知ってる。私たちは……結ばれない運命なんだよ」

湊は顔を手で抑えて泣き始めた。

誠はぐつと拳に力を込めた。そして腹に力を込め、響き渡るように叫んだ。

「俺は、湊が好きだ！」

湊は顔から手を離すとそつと誠を見た。

「誰がなんと言おうと、俺のこの気持ちは変わらない！ 兄妹だから何だっていうんだ！ そんなの関係ないだろ！ 周りがなんと言おうと、世間がなんと言おうと、一生俺は湊を愛し続ける！」

「兄さん……」

誠は落ち着くと、そつと問い掛けた。

「湊。お前はどんなんだ。俺のことをどう思ってる？ 周りのこと

は気にせず、自分の気持ちを教えて欲しい。どうなんだ、湊！」

「わ、私は……」

湊はぎゅっと制服を掴んだ。そしてうつむき、小さな声で呟いた。

「私も……好きだよ……」

「聞こえない。もう一度言ってくれ！」

湊は顔を上げると、さっきの誠と負けなくらい大きな声で言った。

「私だって、兄さんが好きだよ！」

そこで誠は勢いよく湊に抱きついた。

「ありがと、湊。……それが聞きたかった」

「兄さん……。ふっ……。うっ……」

湊の目から涙が溢れ、頬を流れていく。

2人はぎゅっと抱き合った。その温もりを、愛情を逃さないように。

そのときだ。

「相変わらずお熱いですね。お2人さん」

誠と湊はそっと離れると声がしたほうを見た。

「ひ、瞳！」

そこには瞳が立っていた。制服姿で、ニコニコ笑みを浮かべて手を振っていた。

「お久しぶり、2人とも」

湊は驚きながら瞳を見、戸惑っていた。

「ひ、瞳、どうして……」

「どうしてって、何が？」

「だって、私、私……」

「もうそんなの気にしてないよ。私は体は小さいけど、心は大きいからね。あと、そんな大声出していると、近所迷惑だよ」

「瞳、お前こそここで何してるんだ？」

誠の質問に、瞳はふふと笑うと指を立てた。

「2人を助けにきたんだよ」

「助けに？」

「ま、助ける前に、ちょっと訊くことがあるけど」

すると、瞳はコホンと咳払いして言った。

「清水誠殿。あなたはこの清水湊を恋人とし、一生愛し、守り通すことを誓いますか？」

「え？ いきなり何言っただ？」

「誓いますか？」

瞳が迫り寄って訊いて来る。誠はコクツとうなずいた。

「ち、誓います」

「清水湊殿。あなたはこの清水誠を恋人とし、一生愛し、支えることを誓いますか？」

「……誓います」

そこで瞳はにやつと笑みを浮かべた。

「では、誓いのキスを」

「え？ こ、ここで？」

「そ。ほら、早くしてよ」

誠はそつと湊を見た。湊は頬を赤く染めながら、チラッと誠を見る。

「兄さん……」

「瞳、せめて、お前はあっち向いてろ」

「ダメ。私が見ないとちゃんとしたかわかんないもん」

そして意地悪そうにクスクス笑った。

「じゃあ、せめて何でこんなことするのか教えてくれ」

「それはもちろん、私が本当に2人は愛し合っているか確かめるためだよ」

「確かめる？ そんなことしてどうするの？」

「いいからいいから。2人は幸せになりたいんでしょ？ だったら、早くしてよ」

瞳に言われ、誠と湊は見つめ合った。

「湊……」

「兄さん……」

2人はそつと顔を近づけた。そしてそつと目を瞑り、口を近づけていく。

二人の顔は合わさり、誓いのキスを果たした。

そつと離すと、2人は恥ずかしそうに顔を赤くしながら瞳に向き直った。

「ほ、ほらやったぞ」

すると、瞳はパチパチと拍手した。

「よくできました。さすがはお二人さん。お熱いキスでしたね。きやつ。ちよつと恥ずかしい」

「それで、お前の目的は果たしたんだろ」

「うん。それじゃ、今日のメインイベントに移りますか」

瞳はその場に膝を着くと、手を握り合わせた。

「お兄さん、湊。幸せになってね」

「え？」

瞳はそつと目を閉じた。そこで誠はある予感が頭をかすめた。

「ま、待て、瞳。お前、スカイを使つつもりか？」

「え？ 瞳！」

だが、遅かった。そんなことを言っている間に、瞳は願いごとを言っていた。

「清水誠と清水湊が、誰からも批判や悪事をされず、幸せになりますように」

そのとき、瞳の体が青白く光り始めた。そしてその光は空中に広

がり、街を、いや世界を包み込んだように一瞬光、元に戻った。

瞳は立ち上がるとニコツと笑った。

「これで幸せだね」

「瞳……」

「瞳、お前……」

「私は後悔してないよ。いつか人のために使おうと思ってたんだ。それに、2人には約束守れなかったし」

「約束？」

「お兄さんには、ずっと湊と親友でいるって約束したけど、守れなかった。私、親友を傷つけたもん」

「瞳……」

「湊にはね、吹奏楽の大会のこと、お兄さんには言わないでって約束したのに言っちゃったし。これで、私のこと許してね」

「瞳！」

湊は瞳に抱きついた。

「湊……」

「ありがと、瞳。ありがと……。瞳は、最高の親友だよ……」

そのとき瞳の目から涙が流れた。いつも元気で、笑って、相手を
楽しませて。そんな瞳が泣くところを、今初めて見た。

「だって、私、恩返しがしたかった。2人にはいつもお世話になっ
て、迷惑かけて……いつかお礼がしたかった。だから、2人には幸
せにしたかった。こんなことしか、私できないから。……私は、私
は……」

瞳は湊の腕の中に顔をうずめ、声を上げて泣いた。

瞳の願いどおり、次の日から誠たちを批判するものをいなくなっ
た。

それどころか、ベストカップルとして称えられるほどだ。誰よりも
お似合いで、羨ましい二人だと。

ちょっと前より大変だが、悪い気はしなかった。

昼食は瞳を加えた3人で食べ、楽しく、そしていつものように過
ごした。

瞳は元気良くしている。湊と仲直りし、最高の親友だと言い張って
いる。

誠も負けずと、湊を最高の恋人と言い張った。

誠は一人、屋上で空を眺めていた。

面倒な授業をサボり、涼しい風を感じている。

誠の足は、リハビリの成果でとうとう完治した。今では松葉杖はない。元に戻った。

「兄さん」

湊が後ろから声をかけてきた。そして誠の隣に立ち、同じように空を眺めた。

「また空を眺めてるの？」

「ああ。綺麗な空だよな」

綺麗に晴わたった空は雲一つない。永遠と続きそうな青が広がり、いつまで見ても飽きそうになかった。

「兄さん。約束覚えてる？」

誠はそつとうなずいた。

「ああ。覚えてるよ。一緒にいこう。湊」

2人はそつと顔を向かい合わせ、静かに唇を重ねり合わせた。

そのとき、空に青白い光の球が現れ、ふわふわと浮かんでいた。

その光の球は、輝きながら、雲の中へと飛んで、消えてしまった…。

エピソード

誠は学校の反対側にそびえ立つ山を登っていた。

横には恋人であり、妹の湊がいる。

約束どおり今誠のお気に入り場所に向かっているのだ。

今思えば始まりはここからだった。

この頂上で泉と出会い、小屋に住んで守ることと愛情を知った。

暗くなつた気持ちを助けてくれたのは香だった。そして、動物の気持ちや人の心を教わった。

寂しい気持ちを和らげ、楽しい日々とスカイの怖さを教えてくれた茜。

本当の幸せとは何なのかを教えてくれた雫。

そして、湊の真実。

全てここから始まった。

頂上に着くと、誠は辺りを見回した。

今も残っている綺麗な泉、木造ベンチ、周りに生えてある雑木林、さらさらとした芝生。そして、思い出の小屋。

すべてそのままだった。変わりようのない風景。何も変わっていない。あのときのままだ。

「兄さん、いつもここに来て学校サボってたんだね」

湊が口を開き、誠はうなずいた。

「ああ。俺の一番好きな場所。ここに来ると落ち着くんだ」

誠はそつと空を見上げた。

青い空が広がっていた。白い雲が自由に泳いでいる。全てを照らす太陽が輝いていた。今日もいい天気である。

「綺麗な空だな」

「うん。ほんとうに吸い込まれそうに綺麗」

湊も空を見上げた。

誠は再び歩き出した。そして、前みたいにふかふかの芝生に座った。

その横に湊も座った。

「いいところね」

芝生からは街全体が見渡せた。

学校も、商店街も、病院も、神社も、そして、自分たちの家も。

「湊」

「ん？」

「俺、わかったんだ。なぜ、この島にスカイがあるのか」

誠は空を眺めながら話した。

「スカイって、努力させるためにあるんじゃないのかな」

「努力？」

誠はうなずいた。

「スカイは何でも願いが叶う。でも、人って簡単に自分の願いが叶うと努力しなくなる。どうせスカイで叶うんだから、頑張らなくてもいいと思ってね。そして、そのスカイがなくなるとどうすることもできない。だから、そのことに気づいてもらうためにスカイは存在し、一回しか使えないと思うんだ」

すると、湊はそっと誠の肩に寄り添った。

「私もそう思う。兄さんが努力しなかったら、私たちはこうしていなかったもんね」

「ま、瞳のおかげだけど、俺が諦めてたら、こうならなかったかもしれない」

湊は誠の手を握るとそっと口を開いた。

「スカイって、もしかしたら、空からの贈り物じゃないかな」

「空からの？」

「うん。空が頑張れって言ってるんだよ。努力して、自分の力で勝ち取れって」

「そうかもな」

誠はふっと笑みを浮かべると決意した。

話そう。全てを。この一年間にあったこと全て。

「湊。これから話すことを一つ残らず聞いてくれ。俺の、最高の一年を」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5024/>

空からの贈り物

2011年4月13日13時53分発行